

# スワヒリ語文法

稗田乃

アジア・アフリカ言語文化研究所

## 目次

1 はじめに	・・・ 5
1. 1 分布・話し手の数	・・・ 5
1. 2 分類・方言・歴史	・・・ 6
1. 3 標準化の歴史	・・・ 9
1. 4 なにを学ぶか	・・・ 10
1. 5 名詞クラス・照応・動詞複合体	・・・ 10
2 母音・子音・文字	・・・ 15
2. 1 母音	・・・ 15
2. 2 子音	・・・ 16
2. 3 アクセント	・・・ 19
2. 4 イントネーション	・・・ 21
3 発音練習	・・・ 21
参考文献	・・・ 25
スワヒリ語 [文法]	
4 名詞	・・・ 27
4. 1 名詞クラス	・・・ 27
4. 2 照応	・・・ 29
4. 3 M/Wa クラス (クラス1・2)	・・・ 30
4. 4 「親族名称」「職業の名称」「侮蔑をこめた人間・ 動物の名前」「動物の名前」	・・・ 38
4. 5 M/Mi クラス (クラス3・4)	・・・ 54
4. 6 Ji/Ma クラス (クラス5・6)	・・・ 60
4. 7 Ki/Vi クラス (クラス7・8)	・・・ 68
4. 8 Nクラス (クラス9・10)	・・・ 75
4. 9 U/N クラス (クラス11・10)	・・・ 85
4. 10 Ku クラス (クラス15) (動詞の不定詞)	・・・ 94
4. 11 Pa/Ku/Mu クラス (クラス16・17・18) (場所の名詞)	・・・ 98
5 形容詞と形容詞の役割をはたす修飾語	・・・ 106
5. 1 形容詞	・・・ 106
5. 2 形容詞の役割をはたす修飾語	・・・ 114
[形容詞の比較表現と最上級表現]	・・・ 119
[序数詞]	・・・ 121
[名詞修飾語-ote 『全ての』 名詞修飾語-o -ote 『どの、どんな』	・・・ 122

5. 3	数詞	・ ・ ・	1 2 3
5. 4	指示詞	・ ・ ・	1 2 7
5. 5	所有代名詞	・ ・ ・	1 3 0
5. 6	独立人称代名詞	・ ・ ・	1 3 7
5. 7	疑問詞	・ ・ ・	1 3 8
6	副詞と副詞的要素	・ ・ ・	1 4 8
7	前置詞	・ ・ ・	1 5 3
8	接続詞	・ ・ ・	1 5 5
9	動詞	・ ・ ・	1 5 7
9. 1	主語接辞	・ ・ ・	1 5 7
9. 2	時制	・ ・ ・	1 6 1
[1]	肯定現在継続時制	・ ・ ・	1 6 2
[3]	肯定現在時制	・ ・ ・	1 6 5
[2] = [4]	否定現在時制	・ ・ ・	1 6 8
[5]	肯定現在完了時制	・ ・ ・	1 7 0
[6]	否定現在完了時制	・ ・ ・	1 7 3
[7]	肯定過去時制	・ ・ ・	1 7 5
[8]	否定過去時制	・ ・ ・	1 7 8
[9]	肯定未来時制	・ ・ ・	1 8 0
[10]	否定未来時制	・ ・ ・	1 8 2
[11]	進行アスペクトと条件節をつくる時制標識	・ ・ ・	1 8 5
[12]	進行アスペクトの否定 = [2] [4]	・ ・ ・	1 9 1
[13]	否定条件節をつくる時制標識	・ ・ ・	1 9 2
[14]	肯定「語り」過去時制	・ ・ ・	1 9 5
[15]	「語り」過去時制の否定 = 9. 5	・ ・ ・	1 9 8
[16]	肯定仮定法現在時制	・ ・ ・	1 9 8
[17]	否定仮定法現在時制	・ ・ ・	2 0 2
[18]	肯定仮定法過去時制	・ ・ ・	2 0 6
[19]	否定仮定法過去時制	・ ・ ・	2 0 9
[20]	讓歩時制	・ ・ ・	2 1 2
[21]	讓歩時制の否定	・ ・ ・	2 1 8
[22]	肯定完結時制、近接未来時制、「なる」時制	・ ・ ・	2 1 8
[23]	完結時制の否定 = [6]	・ ・ ・	2 2 1
[24]	肯定習慣時制	・ ・ ・	2 2 1
[25]	肯定習慣時制の否定 = [2] [4]	・ ・ ・	2 2 4
[26]	複合時制	・ ・ ・	2 2 4

9. 3 動詞-wa『である』と動詞-wa na『もつ』	・ ・ ・ 2 2 7
[動詞-wa『である』]	・ ・ ・ 2 2 7
[動詞-wa na『もつ』]	・ ・ ・ 2 3 4
[存在表現]	・ ・ ・ 2 3 8
[場所表現]	・ ・ ・ 2 4 2
9. 4 目的語接辞	・ ・ ・ 2 4 6
[目的語接辞の働き]	・ ・ ・ 2 5 0
9. 5 命令法と接続法	・ ・ ・ 2 5 4
9. 6 関係節	・ ・ ・ 2 7 6
[アンバ関係節]	・ ・ ・ 2 7 8
[時制関係節]	・ ・ ・ 2 8 2
[一般関係節]	・ ・ ・ 2 9 0
[動詞-wa『である』の関係節]	・ ・ ・ 2 9 2
[動詞-wa na『もつ』の関係節]	・ ・ ・ 2 9 6
[指示関係標識]	・ ・ ・ 3 0 5
[分裂文]	・ ・ ・ 3 0 7
9. 7 動詞の拡張	・ ・ ・ 3 0 9
「相互形」(拡張接尾辞: -an)	・ ・ ・ 3 0 9
「状態形」(拡張接尾辞: -ik/-ek)	・ ・ ・ 3 1 1
「受動形」(拡張接尾辞: -w)	・ ・ ・ 3 1 6
「適用形」(拡張接尾辞: -i/-e)	・ ・ ・ 3 2 2
「使役形」(拡張接尾辞: -ish/-esh, -iz/-ez, 音変化)	・ ・ ・ 3 3 1
[周辺の動詞拡張]	・ ・ ・ 3 3 7
[動詞の拡張と焦点化]	・ ・ ・ 3 3 9
[焦点化と場所クラス主語文]	・ ・ ・ 3 4 2
10 名詞の派生	・ ・ ・ 3 4 5
11 文のなりたち	・ ・ ・ 3 5 1
[繫辞節]	・ ・ ・ 3 5 1
[自動詞節]	・ ・ ・ 3 5 4
[他動詞節]	・ ・ ・ 3 5 6
[話題(トピック)]	・ ・ ・ 3 6 0
[肯定文]	・ ・ ・ 3 6 1
[否定文]	・ ・ ・ 3 6 2
[疑問文]	・ ・ ・ 3 6 2
[命令文]	・ ・ ・ 3 6 4

[重文]	・ ・ ・ 3 6 5
[複文・從屬節]	・ ・ ・ 3 6 5
[名詞句]	・ ・ ・ 3 7 2
付録	・ ・ ・ 3 7 4

# スワヒリ語文法

稗田乃

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

## 1 はじめに

スワヒリ語は、東アフリカ3国(ケニア、ウガンダ、タンザニア)と、それらの国々と国境を接する国々、たとえば、コンゴ、ブルンディ、マラウィ、モザンビークなどにおいても、広く話されている。なかでもケニアとタンザニアにおいて、スワヒリ語は、憲法により国家語(National Language: 憲法により教育、行政、法治など公的な領域において使用される言語)に制定されている。また、アフリカ連合における使用言語として定められているほか、国連においても使用言語の1つになっている。東アフリカ共同体の復活とともに、ウガンダ、ケニア、タンザニアにおいてスワヒリ語の重要性が高まりつつある。

### 1. 1 分布・話し手の数

スワヒリ語を第1言語として話す人々のほかに、スワヒリ語を第2言語として話す人々が存在する。第1言語とは生まれて初めて自然に身につける言語のことであり、人間の言語能力は、基本的には第1言語の能力がもっとも高いと考えられる。第2言語とは人間が第1言語を獲得した後に成長の過程において社会の交わりの中で、あるいは、教育によって習得する言語のことである。

スワヒリ語を第1言語として話す人々よりむしろ第2言語として話す人々が、分布においても数においても圧倒的に広くかつ多数を占めている。スワヒリ語を第2言語として話す人々は、たとえば、タンザニアに126言語、ケニアに60言語、ウガンダに43言語が存在すると言われる民族語を第1言語として獲得したあとで、スワヒリ語を習得した人々である。

分布: 第1言語としてスワヒリ語が話されている地域は、東アフリカ海岸部とインド洋に浮かぶ島々に限られる。具体的には、北はソマリア南部のケニアと国境に近い地域バラワ Barawa からケニア海岸部やタンザニア海岸部、さらにタンザニアの国境をこえたモザンビーク、ザンベジ川河口のソファラ Sofala まで、南北約2000キロに広がり、しかし、内陸部はたかだか数十キロの細長い帯状の地域である。また、インド洋上に浮かぶ島々、パテ島、ラム島、ペンバ島、ザンジバル島、マフィア島、コモロ諸島、マダガスカル島の一部でもスワヒリ語は話されている。内陸部にあっても歴史的に交易の中心地として発達した町、たとえば、タボラ、ウジジ、ブジュンブラなどではスワヒリ語を第1言語として話す人々が存在する。また、歴史的な経緯からアラビア半島にあるオマーンにスワヒリ語を話

す人々が存在する。さらに、アラブ首長国や南アフリカやアメリカ合衆国に移住したスワヒリ語の話し手の存在が確認される。

第2言語としてスワヒリ語が話されている地域は、タンザニア、ケニア、ウガンダの東アフリカ3国とそれらの国々に国境を接するコンゴ、モザンビーク、ルワンダ、ブルンディ、ザンビア、ソマリア、マダガスカルである。ただし、スワヒリ語の第2言語としての使われ方は、地域により様々である。

タンザニアでは、民族語を第1言語として獲得した人々がスワヒリ語を第2言語として生活の広い範囲で使用している。現在ではタンザニアにおけるスワヒリ語の普及率は、100%と考えてよい。ケニアにおいてはスワヒリ語の第2言語としての使用は、話し手や使用される生活領域の点で限られる。ウガンダではスワヒリ語の第2言語としての使用はさらに限られている。これら東アフリカ3国に接する地域でのスワヒリ語の第2言語としての使用は、ますます限られたものとなる。

話し手の数：Ethnologue 2005（世界で話されている言語の分布・話し手の数など基礎的データを掲載している）によれば、スワヒリ語がもっとも普及し話されているタンザニアにおいて、第1言語としてスワヒリ語を話す話し手の数は、540,837人、第2言語としてスワヒリ語を話す話し手の数は、約30,000,000人（国民の全人口）である。ケニアにおけるスワヒリ語の第1言語として話す話し手の数は、131,000人である。ウガンダにおけるスワヒリ語の第1言語話者の数は、2,330人である。国籍を無視してスワヒリ語を第1言語として話す話し手の総数は、772,642人と記録されている。タンザニア以外におけるスワヒリ語を第2言語として話す人々の数は、正確にはわかっていない。ただタンザニアを含むスワヒリ語を第2言語として話す人々の総数は、5000万人とも7000万人とも言われている。

Gordon, Raymond (2005) *Ethnologue (15<sup>th</sup> edition)*. Dallas: SIL International.

## 1. 2 分類・方言・歴史

分類：スワヒリ語の系統分類は、ニジェール・コンゴ言語ファイラムを構成する下位グループであるベヌエ・コンゴ言語群のなかのバントゥ諸語に所属する。バントゥ言語学による分類番号G.40が与えられている。スワヒリ語の系統分類については、あるいは、スワヒリ語の成立については、はっきりしたことがわかっていない。現在最も刺激的な考え方は、Nurse & Spear(1985)によるサバキ祖語説であろう。Nurse & Spear(1985)は、スワヒリ祖語がサバキ祖語から分かれたと主張する。

アフリカ大陸で話されている2000以上と言われる言語は、Greenberg(1963)によれば4つの言語ファイラム（系統関係をもつと想定される言語群）に系統分類されている。北からアフレイジアン言語ファイラム、ナイル・サハラ言語ファイラム、ニジェール・コンゴ言語ファイラム、コイサン言語ファイラムである。スワヒリ語は、ニジェール・コンゴ言

語ファミリーに所属する。ニジェール・コンゴ言語ファミリーは、所属する言語の数が 1650 であり、アフリカの4つの言語ファミリーのなかで最大の言語ファミリーであり、しかも、スワヒリ語が所属するニジェール・コンゴ言語ファミリーのなかの下位言語グループであるバントゥ諸語には 400 以上の言語が所属し、アフリカ大陸における巨大な言語グループを構成する。

方言：第1言語としてのスワヒリ語にはもちろん地域変種（方言）が存在する。Bryan(1959)には17の地域変種が認められる（Mbalazi, Bajuni, Pate, Siu, Amu, Mvita, Chifundi, Vimba, Mtang'ata, Pemba, Tumbatu, Hadimu, Unguja, Mrima, Ngazija, Nzwani, Ki-Ngwana）。さらに、特定の社会領域で使用される社会的変種とも言えるもの7種を認めている（Ki-Vita, Ki-Settla, Ki-Shamba, Ki-Hindi, Ki-Bara, Ki-Gavamenti, Ki-Serikali）。Nurse & Spear (1985)においてはさらに多くの地域変種が認められている（Miini, Makunduchi, Northern Pemba, Southern Pemba, etc.）。地域変種間の相違はかなり大きく、たとえば、ソマリアで話されている Chi-Miini とザンジバルで話されている Hadimu 方言とのあいだではコミュニケーションが不能である。

近年、ナイロビなどの都市部においてスワヒリ語と英語、民族語の濃厚な接触により新言語とも言える言語が生まれている。それらは、シェン語（Sheng'）、エンシュ語（Eng'sh）と呼ばれている。

歴史：スワヒリ語の名前 Swahili は、アラビア語の sahl 『海岸の』の複数形 SAWAḤIL に由来する。1357年、イブン・バットゥータ「都市の不思議と旅の驚異を見る者への贈り物」のなかに初出する。現在のペンバ島かザンジバル島の対岸、あるいは、モンバサからモガデシュにかけての海岸を指していたと考えられる。

東アフリカ東岸は、石器時代直後には小さな交易町が存在したらしい。5世紀から12世紀にかけてすでにインド、中国の影響があったことは考古学の証拠がある。だが歴史が分かるのは12世紀から16世紀はじめにイスラム教徒がインド洋交易の主導権を握ったあとのことである。16世紀から17世紀はじめはポルトガルの征服の時代である。1637年から1810年は、スルタンの支配する小国家の成立とポルトガルへの反乱につづき、小さな町々が復活した時代である。イスラームを奉じ、スワヒリ語を話す人々がそれらの町に居住した。1840年にオマーンの君主であるサイイド・サイードがザンジバルに首都を移してから、ザンジバルが経済と対外関係の主権を握った。

最も古い東アフリカ海岸についての記述は、紀元100年頃に書かれた「エリュトラ海周航記」である。アザニア海岸最後の市場町ラプタ(Rhapta)と書かれている。それは、現在のタンザニアのキルワ、あるいは、北のパンガニ河口付近を指したものらしい。しかし、当時話されていたであろう言語は、スワヒリ語の先祖ではありえない。スワヒリ語が所属するバントゥ諸語を話す人々が民族移動により東アフリカへ到達するのは紀元6世紀のこ



とと考えられている。また、史実として確認できる最初のアラブ人による東アフリカ海岸、おそらく、パテ島への植民は、684年、あるいは、680年とされる。

8世紀にアラブ人は、ラム、マリンディ、モンバサ、キルワに進出したと考えられる。

1498年4月15日にバスコ・ダ・ガマがマリンディに到着した。また、1505年にはインド総督ダルメイダがキルワとソファラとモンバサの略奪を企て、キルワは放たれた火のなかに陥落し、モンバサは最後まで抵抗した。当時、キルワは、人口4000人、モンバサは、1万人以上の人口を有したと言われる。しかし、ポルトガルの海上覇権は、17世紀のはじめには失われる。

スワヒリ人の成立：スワヒリ人の成立に関しては通説はない。2つの説がある。1つは、マインホフやレールが主張する単一の民族説である。キルワとバガモヨのあいだに現在のザラモ人の祖先にあたるスワヒリ人がいたと考える説である。彼らは商人でアラビア、ペルシャ、マレー、インド、ポルトガルなどと取引をした。

2つ目の説は、スワヒリ人は単一の民族を形成していたのではなく、海岸地方のバントゥ語を話す諸民族とアラブ人の混合から生まれたと考える説である。イスラム教を奉じて他の諸民族とは異なるアイデンティティをもったことからスワヒリ人となったと考える。

スワヒリ語の成立：スワヒリ語はいくらアラビア語などからの借用語が多くとも、明らかにバントゥ諸語に共通する言語構造をもつバントゥ諸語に所属する言語の1つである。バントゥ諸語に所属する言語を話す人々で最初に海岸地方へ到達したのは、バントゥ諸語のなかでもングニ言語グループに属する言語を話す人々であったと考えられる。Nurse & Spear (1985)が再構成したサバキ祖語がそれにあたると考えられる。サバキ祖語からわかれたスワヒリ祖語を話す人々は、アラビア語、ペルシャ語などとの接触により成立した言語をともなって、海岸地域、まずは、キルワを中心とした地域に、さらに、モンバサ、マリンディ、バラワ、モガデシュへと大小の民族的、言語的な「島」を形成していった。14世紀から15世紀に沿岸地方に帯のようにスワヒリ語を話す人々の地域が形成され、16世紀にはおおよそ現在スワヒリ語を話す地域が完成したと考えられる。

18世紀前半にはアラビア文字で書かれたスワヒリ詩があらわれた。その中心は、ケニア北部、ラム島であった。19世紀はじめ、スワヒリ文学の伝統は、南のモンバサへ、さらに、ペンバ島へと拡大した。

数世紀にわたるアラブ、ポルトガル、インド、イギリス、ドイツの交易者や植民者との接触により、スワヒリ語は、現在話されているスワヒリ語の姿に発展した。現在話されているスワヒリ語には語彙全体の約40%がアラビア語からの借用語が占める。ポルトガル語からの借用語は、わずかにすぎない(meza『テーブル』、parafujo『ねじ回し』、karata『トランプ』、gereza『刑務所』、nanasi『パイナップル』)。インド諸語からの借用語もわずかである(pesa『お金』、gari『車』、embe『マンゴー』、limau『ライム』、bangi『大麻』)。

Bryan, Margaret (1959) *The Bantu Languages of Africa*. London: Oxford University Press.  
Greenberg, Joseph H. (1963) *The Languages of Africa*. Bloomington: Indiana University Press.  
Nurse, Derek & Thomas Spear (1985) *The Swahili: Reconstructing the History and Language of an African Society, 800-1500*. Philadelphia: University of California Press.

### 1. 3 標準化の歴史

スワヒリ語は、現在、タンザニアとケニアの国家語になっている。しかし、すでに解説したようにスワヒリ語には多くの地域変種や社会的変種が存在する。そのため、国家語として使用するための言語として、スワヒリ標準語が用意される必要があった。

1928年にスワヒリ語標準化を議論するため、領土間会議がモンバサにおいて開催された。中央アフリカ・諸大学ミッションが主張するザンジバル方言をスワヒリ標準語とすることが決定された。チャーチ・ミッションナリ協会が推すモンバサ方言を標準語とすることは認められなかった。実は、パティ島、ラム島、マリンディ、モンバサ島、タンガの諸方言のほうのスワヒリ語の本来の形式をよく保存していた。ザンジバル方言は、アラビア語やポルトガル語、インド諸語や、内陸部から集められた奴隷たちの言語に強く影響をうけていた。19世紀以後のザンジバルがアラブ人、インド人、ヨーロッパ人、アメリカ人などとの奴隷取引の集散地として商業活動の中心であったからである。

ともかく、当時ザンジバルで話されていたザンジバル方言が、スワヒリ標準語の基盤となる言語とされた。1930年に領土間言語（スワヒリ語）委員会が発足した。メンバーは、すべてヨーロッパ人であった。領土間言語委員会が行なったことは以下のことである。

- 1) 正書法を制定する
- 2) 教科書ほか出版物を検定し、語彙の使用を統一する
- 3) 出版を通じて文法の統一をはかる
- 4) スワヒリ語作家を援助する
- 5) 既存の出版物をスワヒリ標準語に改訂する
- 6) 教科書、文学作品を出版する
- 7) イギリスの教科書類をスワヒリ語に翻訳する

領土間言語委員会がおこなったスワヒリ語標準化の結果、スワヒリ語本来の語彙がさらにアラビア語起源の語彙で置き換えられたり、名詞が本来所属するクラスから別のクラスへと変更されたり、複雑な時制の区別が単純化されたりした。スワヒリ標準語は、ある種人工的に改変された言語といえる。

スワヒリ語振興の結果、たとえば、タンザニアでは、1870年に全人口400万人のうちスワヒリ語話者は8万人に過ぎなかったのが、2000年には全人口約3000万人のすべてがスワヒリ語を話すことになった。それは、1961年にタンガニーカがイギリスから独立し(1964

年にザンジバルと合併してタンザニア連合共和国となる)、ニエレレ大統領自らがシェークスピア作品をスワヒリ語翻訳をするなど、スワヒリ語振興策をとった結果である。

#### 1. 4 なにを学ぶか

標準スワヒリ語の文法を解説する。はじめて標準スワヒリ語を学ぶ人が学ばなければならないことは、名詞のクラスとその照応現象、動詞複合体である。

#### 1. 5 名詞クラス・照応・動詞複合体

名詞クラス：名詞はその意味にもとづいてクラスに分類される。このことは、本を1冊、鉛筆を1本と数える日本人にとって、簡単に理解できる。日本語の話し手は、名詞の意味にもとづいてモノの数の数え方を正確に使い分けることができる。日本語の話し手は、名詞を名詞の意味にもとづいて分類している。それと同じようにスワヒリ語の話し手は、名詞の意味にもとづいて名詞を分類するのである。例えば、『子供』や『先生』などの名詞は、「人間の名詞クラス」を形成する。『バナナの木』や『オレンジの木』は、「木の名詞クラス」を形成する。これらのほかに「果物の名詞クラス」や「道具の名詞クラス」など、スワヒリ語には全部で15の名詞クラスが存在する。ただし、それらの15の名詞クラスのたいていは、単数のクラスと複数のクラスが対になっているので、実際の意味にもとづく名詞クラスの数は、もっと少ない数になる。日本語の名詞の数え方の多いことにくらべると、スワヒリ語の名詞分類はさほど複雑ではない。

	単数	複数	
「人間の名詞クラス」	m-toto	wa-toto	『子供』
	mw-alimu	w-alimu	『先生』
	m-sichana	wa-sichana	『女の子』
「木の名詞クラス」	m-gomba	mi-gomba	『バナナの木』
	m-chungwa	mi-chungwa	『オレンジの木』
	m-ti	mi-ti	『木』
「果物の名詞クラス」	chungwa	ma-chungwa	『オレンジ』
	nanasi	ma-nanasi	『パイナップル』
	embe	ma-embe	『マンゴー』
「道具の名詞クラス」	ki-kombe	vi-kombe	『コップ』
	ki-su	vi-su	『ナイフ』
	ki-jiko	vi-jiko	『スプーン』

名詞のクラスを表示する接頭辞を、クラス接頭辞と呼ぶ。上記の例において、クラス接頭辞 m-は、「人間の名詞クラス」[単数]を表示し、クラス接頭辞 m-は、「木の名詞クラス」

〔単数〕を表示するが、これらのクラス接頭辞は、偶然に同じ形式をしている。クラス接頭辞 wa-は、「人間の名詞クラス」〔複数〕を表示する。クラス接頭辞 mi-は、「木の名詞クラス」〔複数〕を表示する。「果物の名詞クラス」〔単数〕を表示する接頭辞は、ゼロ形態素である。クラス接頭辞 ma-は、「果物の名詞クラス」〔複数〕を表示する。クラス接頭辞 ki-は、「道具の名詞クラス」〔単数〕を表示する。クラス接頭辞 vi-は、「道具の名詞クラス」〔複数〕を表示する。

照応：スワヒリ語と日本語の名詞分類で異なるところは、日本語において意味にもとづく名詞分類が言語形式として現れるのは、モノの数を数えるときだけに限られるのに対して、スワヒリ語ではかなり広い範囲で名詞分類が言語形式として出現する。上の例から見て取れるように、名詞そのものに名詞クラスを表現する接頭辞（接頭辞：意味を表す中心をなす部分のまえに付加される形式）が付加される。また、日本語と同じように、モノを数えるときに、数詞が修飾する名詞の名詞クラスにしたがって接頭辞が数詞に付加される。たとえば、『1 人の子供』と『1 本のバナナの木』と言うとき、『1』という数詞に付加される接頭辞は、それぞれ名詞クラスにあわせて『人間の名詞クラス』と『木の名詞クラス』に用いられる接頭辞になる。名詞クラスにあわせて接頭辞が変わるこのような現象を照応と呼ぶ。照応の現象が生じるのは、数えるときだけではない。名詞に『大きい』や『小さい』などの形容詞が修飾するときにも照応の現象が生じる。それだけではなく、名詞にあらゆる種類の修飾語が修飾するとき照応という現象が生じる。

「人間の名詞クラス」	m-toto m-moja m-dogo wa-toto wa-wili wa-dogo	『1 人の小さな子供』 『2 人の小さな子供』
「木の名詞クラス」	m-gomba m-moja m-dogo mi-gomba mi-wili mi-dogo	『1 本の小さなバナナの木』 『2 本の小さなバナナの木』
「果物の名詞クラス」	chungwa moja dogo ma-chungwa ma-wili ma-dogo	『1 個の小さなオレンジ』 『2 個の小さなオレンジ』
「道具の名詞クラス」	ki-kombe ki-moja ki-dogo vi-kombe vi-wili vi-dogo	『1 本の小さなスプーン』 『2 本の小さなスプーン』

数詞『1』に名詞のクラスにしたがって接頭辞が選択され、付加される。また、形容詞『小さい』にも名詞のクラスにしたがって接頭辞が選ばれて付加されなければならない。たとえば、名詞が「人間の名詞クラス」であれば、数詞『1』や形容詞『小さい』に付加される接頭辞は、形容詞につく接頭辞 m-である。名詞が『人間の名詞クラス』だが複数であれば、数詞『2』や形容詞『小さい』に付加される接頭辞は、形容詞につく接頭辞 wa-である。

名詞が「木の名詞クラス」の単数であれば、たとえば、名詞『バナナの木』を修飾する数詞『1』と形容詞『小さい』に付加される接頭辞は、ともに形容詞につく接頭辞 **m-**である。名詞が「木の名詞クラス」の複数であれば、たとえば、名詞『バナナの木』(複数)を修飾する数詞『2』と形容詞『小さい』に付加される接頭辞は、形容詞につく接頭辞 **mi-**である。

名詞が「道具の名詞クラス」[単数]であれば、たとえば、名詞『スプーン』[単数]を修飾する数詞『1』と形容詞『小さい』に付加される接頭辞は、形容詞につく接頭辞 **ki-**である。名詞が「道具の名詞クラス」[複数]であれば、たとえば、名詞『スプーン』[複数]を修飾する数詞『2』と形容詞『小さい』に付加される接頭辞は、形容詞につく接頭辞 **vi-**である。

このように、名詞クラスにしたがって異なる形式の接頭辞が修飾語に付加されることを照応と呼ぶ。照応の現象は、名詞と、形容詞など修飾語とのあいだだけに見られる現象ではない。名詞と、動詞複合体を構成する接頭辞とのあいだでも照応の現象が見られる。

**ki-kombe hi-ki ki-me-vunjika**

コップ この それ - 完了 - 壊れている

『このコップは、割れている』

**vi-kombe hi-vi vi-me-vunjika**

コップ [複数] これらの それらの - 完了 - 壊れている

『これらのコップは、割れている』

文の主語が「道具の名詞クラス」[単数]の名詞 **ki-kombe** であれば、動詞複体内の主語の接頭辞は、「道具の名詞クラス」[単数]と照応した形式 **ki-**が用いられる。文の主語が「道具の名詞クラス」[複数]の名詞 **vi-kombe** であれば、動詞複体内の主語の接頭辞は、「道具の名詞クラス」[複数]と照応した形式 **vi-**が用いられる。

また、指示詞『この』は、たとえば、「道具の名詞クラス」[単数]の名詞『コップ』を修飾すると、「道具の名詞クラス」に照応した形式 **hi-ki**になる。「道具の名詞クラス」[複数]の名詞『コップ』[複数]を修飾すると、「道具の名詞クラス」[複数]と照応した形式 **hi-vi**が用いられる。

すべての名詞が意味にもとづく 15 の名詞クラスのどれかに所属するので、名詞の意味と名詞クラスの意味が完全に一致しないこともある。15 の名詞クラスがどのような意味的原理で分類されているのか解明は容易ではない。また、スワヒリ語話者ではない者からみると、名詞と名詞が所属する名詞クラスの意味が合致しないと思える場合もある。たとえば、『町』を意味する名詞は、「木の名詞クラス」に所属する。なぜ『町』が「木の名詞クラス」に所属するのであろうか。また、『村』を意味する名詞は、「道具の名詞クラス」に所属する。ただし、「木の名詞クラス」は、「小さいものの名詞クラス」でもあるので、か

ならずとも意味の不一致というわけではない。ともかくすべての名詞を 15 の名詞クラスに所属させるのだから、どこかで無理が生じるのは仕方のないことである。だからと言って名詞クラスを限りなく増やすと、限りなく複雑な照応という規則を作らなければならなくなる。

ドイツ語やフランス語には女性名詞、男性名詞といった「性」にもとづく名詞分類がある。英語には数えられない名詞、数えられる名詞といった名詞分類がある。日本語には意味にもとづく名詞分類がある。このように何かの基準を用いて名詞を分類することは、あらゆる言語に共通する特徴であると考えられる。それは、人間が世界に存在するものを何かの範疇で分類するという認知的能力にもとづいていると考えられる。名詞分類は、スワヒリ語だけに存在する特殊なものと考えする必要はない。

ここでは簡単に「人間の名詞クラス」、「木の名詞クラス」、「果物の名詞クラス」、「道具の名詞クラス」、と名づけたが、スワヒリ語の名詞をクラスに分類する意味特徴については文法を学ぶ章で詳しく説明する。

動詞複合体：スワヒリ語において、動詞が動詞語幹（語幹：意味を表す中心部分のこと。それが動詞としての機能をもつなら、動詞語幹、名詞としての機能をもつなら、名詞語幹と呼ぶ）だけで単独に用いられるのは、命令形の時以外にはない。つねに動詞語幹には、主語の接頭辞や時制を表す接頭辞など様々な接頭辞が付加される。また、動詞の意味を拡張する接尾辞（接尾辞：語幹のうしろに付与される形式）が付加されることもある。動詞語幹に様々な接頭辞や接尾辞が付加された形式を動詞複合体と呼ぶ。

Ni-li-m-pik-i-a

mtoto chakula

私 - 過去 - 彼 - 料理する - ために - 肯定 子供 食べ物

『私は子供のために食べ物を料理しました』

pik-が、『料理する』という意味を持つ動詞語幹である。接頭辞 ni-は、1 人称単数の主語を表す接頭辞である。接頭辞 li-は、過去時制を表す接頭辞である。接頭辞 m-は、3 人称単数の目的語を表す接頭辞である。また、接尾辞-i は、動詞の意味を拡張し、『誰かのためにする』を意味する動詞をつくる接尾辞である。動詞複合体の最後の母音-a は、終母音と呼ばれ、動詞の肯定形に現れる。ちなみに接頭辞 m-は、後続する目的語とあわせて 3 人称単数の目的語接頭辞が用いられている。これも照応の現象である。

動詞複合体を構成する要素には、主語の接頭辞、時制標識、目的語の接頭辞などが含まれるから、動詞複合体のみで意味のある文章を作ること可能である。

A-li-m-kimbi-li-a

彼 - 過去 - 彼女 - 走る - 向って - 肯定

『彼は、彼女に向って走った』

接頭辞 a-は、3 人称単数を表す主語の接頭辞である。接頭辞 li-は、過去を表す時制標識である。接頭辞 m-は、3 人称単数を表す目的語の接頭辞である。ちなみにスワヒリ語は、女性と男性を文法的「性」で区別することができない。接尾辞-li は、動詞の意味を拡張し、『どこかに向かってする』を意味する動詞をつくる接尾辞である。動詞複合体は、肯定形では終母音-a で終わることが多い。

語順：語順は、かなり自由である。なぜなら、動詞語幹内に主語の接頭辞と目的語の接頭辞をとることができるので、主語の接頭辞と照応しているのが主語であり、目的語の接頭辞と照応しているのが目的語であると、示せるからである。ただ、なんら語用論的に強調のない文は、主語 - 動詞 - 目的語の語順が用いられる。

Mama            a-na-pik-a                                  chakula  
 おかあさん 彼女 - 現在 - 料理する - 肯定 食べ物  
 『お母さんは料理をしています』

主語 **mama** が先頭に、動詞複合体 **a-na-pik-a** が次に、目的語 **chakula** が動詞語幹に後続している。上の文は、主語 - 動詞 - 目的語という語用論的になんら強調のない文である。

Mtoto ni-na-m-pik-i-a  
 子供 私 - 現在 - 料理する - ために - 肯定  
 『子供のために、私は料理する』

目的語 **mtoto** が先頭の位置にある。しかし、動詞複合体内の目的語接頭辞は、3 人称単数を表しており、文の先頭の位置にある名詞と照応している。したがって、文の先頭の位置にある名詞は、目的語であることが明らかにされる。ちなみに動詞複合体内の主語接頭辞は、1 人称単数を表している。文の先頭の位置は、話題（トピック）のための位置である。このことについては、文のなりたちを説明する箇所解説する。

語順は、このようになんら自由ではあるが、語用論的に強調のない文で用いられる語順は定まっている。

## 2 母音・子音・文字

スワヒリ語の発音は、日本語の話し手にとってかなり容易である。発音が困難な子音をスワヒリ語はもたないし、また、スワヒリ語の母音の数は、日本語と同じ 5 母音である。また、スワヒリ語の音節は、基本的に、日本語と同じく母音で終わる、いわゆる開音節からなる。スワヒリ語は、過去にアラビア文字を使用して書かれたことがあった。しかし、現在は、アルファベットを用いて書くことに定められている。正書法は、若干の例外を除いて、ほぼアルファベットの正書法にしたがっている。

### 2. 1 母音

母音体系は、以下の 5 母音 i, e, a, o, u からなる。ほぼ日本語の母音の発音と同じと考えてよい。i は、日本人の一般的な発音よりも唇を張って発音され、u は、日本人の一般的な発音よりも唇を丸めて発音される。長母音や母音連続は、母音の連続と解釈され、異なる音節を形成する。

	前舌母	後舌母
高母音	i	u
中母音	e	o
低母音	a	

	発音	正書法	例
母音音素 /i/	[i]	i	bibi 『姉妹』
母音音素 /e/	[e]	e	wewe 『あなた』
母音音素 /a/	[a]	a	baba 『お父さん』
母音音素 /o/	[o]	o	mtoto 『子供』
母音音素 /u/	[u]	u	mdudu 『虫』

- 1) 異なる母音が連続するとき、異なる母音それぞれが異なる音節を形成する。

	発音	例	発音
母音連続 /au/	[au]	shauri	[ʃa.u.ri] 『計画』

ピリオドは、音節の境界を表す。上の例では、sha [ʃa] と u [u] と ri [ri] がそれぞれ 1 音

節を構成しており、語全体は 3 音節からなる。

- 2) 長母音は、長く発音されるが 2 音節を形成する。

	発音	例	発音
長母音 /aa/	[a:]	faa	[fa.a] 『役立つ』

上の例では、fa [fa] と a [a] がそれぞれ 1 音節を構成し、語全体は 2 音節からなる。



## 2. 2 子音

子音体系は、以下の 32 の子音からなりたっている。

	両唇	唇歯	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声破裂音	p			t	c	k	
有声破裂音	ɓ			d	ɟ	g	
無声摩擦音		f	(θ)	s	ʃ	(x)	h
有声摩擦音		v	(ð)	z		(ɣ)	
鼻音	m			n	ɲ	ŋ	
側面音				l			
ふるえ音				r			
半母音	w				y		
鼻音結合	mb	mv		nd	nj	ng	
				nz			

括弧の中の子音は、借用語においてのみ現れる。

	発音	正書法	例	
子音音素 /p/	[p]	p	paka	『ネコ』
子音音素 /t/	[t]	t	matata	『困難』
子音音素 /c/	[c]	ch	chumvi	『塩』
子音音素 /k/	[k]	k	kaka	『兄』
子音音素 /ɓ/	[ɓ]	b	babu	『祖父』
子音音素 /d/	[d]	d	dawa	『薬』
子音音素 /ɟ/	[ɟ]	j	jicho	『目』
子音音素 /g/	[g]	g	gari	『車』
子音音素 /f/	[f]	f	fimbo	『棒』
子音音素 /θ/	[θ]	th	themanini	『80』
子音音素 /s/	[s]	s	sukuli	『学校』
子音音素 /ʃ/	[ʃ]	sh	shati	『シャツ』
子音音素 /x/	[x]	kh	Khadija	『ハディジャ』
子音音素 /h/	[h]	h	habari	『ニュース』
子音音素 /v/	[v]	v	vita	『戦争』
子音音素 /ð/	[ð]	dh	dhahabu	『金』
子音音素 /z/	[z]	z	zito	『重い』
子音音素 /ɣ/	[ɣ]	gh	ghali	『高い』

子音音素	/m/	[m]	m	mama	『お母さん』
子音音素	/n/	[n]	n	nani	『誰』
子音音素	/ɲ/	[ɲ]	ny	nyanya	『祖母』
子音音素	/ŋ/	[ŋ]	ng'	ng'ombe	『牛』
子音音素	/l/	[l]	l	lala	『寝る』
子音音素	/r/	[r]	r	rudi	『戻る』
子音音素	/w/	[w]	w	weka	『置く』
子音音素	/y/	[y]	y	yai	『卵』

子音の発音と正書法には若干のずれがあるものの、日本人が慣れ親しんでいるアルファベットのローマ字的な読み方と実際の発音は似ている。以下に子音を発音する際に心がけなければならない点を示す。

- 1) 子音 /e/ th, /D/ dh, /x/ kh, /r/ gh は、アラビア語からの借用語にのみ現れる。kh は、現在の正書法では h で表記される。
- 2) 有声閉鎖音 /b/, /d/, /j/, /g/ は、それぞれ、内破音 [b], [d], [j], [g] で発音される。
- 3) 無声閉鎖音は、帯気を伴って発音される音と帯気を伴わずに発音される音がある。実は、帯気音となるか、無気音となるかは、名詞のクラスと関係している。「果物の名詞クラス」[単数] に所属する名詞が無声閉鎖音ではじまる時、その無声閉鎖音は、無気音で発音され、「動物の名詞クラス」に所属する名詞が無声閉鎖音ではじまる時、その無声閉鎖音は、帯気音で発音される。

「果物の名詞クラス」      kaa [ka.a]      『炭』[単数]

「動物の名詞クラス」      kaa [k<sup>h</sup>a.a]      『蟹』

(ピリオドは、音節の境界を表す。正書法においては、音節の境界を書き表すことはない。)

- 4) スワヒリ語の音節は、たいていは、子音と子音に後続する母音からなる開音節で形成される。子音1つと母音1つが1音節を形成している。

nitasoma      [ni.ta.so.ma]      『私は読むでしょう』

上の例では、ni、ta、so、ma がそれぞれ音節を形成している。全体は4おんせつからなる。

鼻音結合は、後続する母音と1音節を形成する。

tembo      [te.mbo]      『象』

上の例において、te が 1 音節を、mbo が 1 音節を形成している。全体は、2 音節からなる。

しかし、鼻音は、鼻音 1 つで 1 つの音節を形成することがある。たとえば、下の例のように、「人の名詞クラス」[単数] や、「木の名詞クラス」[単数] に所属する名詞の語幹が子音ではじまるとき、語幹に先行するクラス接頭辞 m-は、単独で音節を形成する。m-tu 『人』、m-toto 『子供』、m-gomba 『バナナの木』は、それぞれ、2 音節、3 音節、3 音節からなる。

m-tu	[m.tu]	『ひと』[単数]
m-toto	[m.to.to]	『子供』[単数]
m-gomba	[m.go.mba]	『バナナの木』[単数]

ただし、「人間の名詞クラス」[単数] と「木の名詞クラス」[単数] の名詞語幹が母音ではじまるとき、語幹に先行するクラス接頭辞 m-は、後続する母音と音節を形成し、鼻音単独で音節を形成することはない。また、クラス接頭辞 m-と母音のあいだに、わたり音 w が挿入される。たとえば、下の例では、mwa が 1 音節を形成している。また、li が 1 音節、mu が 1 音節を形成する。

mw-alimu	[mwa.li.mu]	『先生』[単数]
----------	-------------	----------

また、「人間の名詞クラス」[単数] や「木の名詞クラス」[単数] に所属しない名詞が鼻音 m-ではじまろうとき、鼻音 m-は、単独で音節を形成することはない。

m-bavu	[mba.vu]	『力』[複数]
--------	----------	---------

ただし、「動物の名詞クラス」に所属する名詞が、その語幹が 1 音節からなるとき、クラス接頭辞 n-は、単独で音節を形成する。たとえば、下の例では、クラス接頭辞 n-(m-)が 1 音節を形成し、語幹 chi、ta、bwa がそれぞれ 1 音節を形成する。

n-chi	[n.ci]	『土地』
n-ta	[n.ta]	『蠟』
m-bwa	[m.bwa]	『犬』 (接頭辞 n-は、後続の子音に同化して m になっている。)

「動物の名詞クラス」に所属する名詞であろうとも、語幹が 2 音節以上からなると

きは、接頭辞 n-は、後続する子音と鼻音・閉鎖音結合を形成し、鼻音・閉鎖音結合は、後続する母音と音節を形成する。たとえば、下の例では、ngo が 1 音節を形成し、ma が 1 音節を形成する。また、nga が 1 音節を形成し、mi、a がそれぞれ 1 音節を形成する。

n-goma      [ŋgo.ma]      『太鼓』  
n-gamia      [ŋga.mi.a]      『ラクダ』

どの鼻音が単独で音節を形成するかは、名詞クラスと、あとでのべるアクセントとの 2 つの関係で決定される。

- 5) /x/ kh, /ɣ/ gh, /θ/ TH, /ð/ DH は、アラビア語からの借用語のみにおいて用いられる。/x/ kh は、アラビア風挨拶やアラビア起源の名前や文語において kh で書かれることがあるが、普通、/h/ h で発音される。現在の正書法は、h で書いている。
- 6) 4) で説明した単独で音節を構成する鼻音をのぞいて、鼻音・閉鎖音結合は、単独の音素ではなく、鼻音と後続する閉鎖子音の連続と解釈される。鼻音と閉鎖子音連続が音節の開始部を構成する。

ng'ombe      [ŋo.mbe]      『牛』

ng'o [ŋo]と mbe [mbe]が、それぞれ 1 つの音節を構成する。語全体は、2 音節からなる。

## 2. 3 アクセント

アフリカの他の多くの言語が声調言語であるのに反して、スワヒリ語は声調の区別をしない。ただし、語は、アクセントをもっている。語のアクセントの位置は、決まっている。スワヒリ語のアクセントは、常に語の後ろから 2 番目の音節に置かれる。アクセントが置かれる音節は、少し長く、強く発音される。たとえば、下の例では、後ろから 2 番目の音節、ku にアクセントがある。また、ta にアクセントがある。

chakula      [ca.kú.la]      『食べ物』  
ninataka      [ni.na.tá.ka]      『私は欲しい』

スワヒリ語のアクセントは、語の最後から 2 番目の位置に置かれることから、名詞が「動物の名詞クラス」に所属し、語幹が 1 音節からなるととき、クラス接頭辞 n-が単独で音節を形成することが予測できる。なぜなら、もし、クラス接頭辞 n-が後続する子音とともに鼻音・閉鎖音結合として、音節の開始部を形成すると、語全体が 1 音節となり、アクセント

の置かれる位置が失われる。語がアクセントをもつことが可能になるためには、語は、2音節以上でなければならない。クラス接頭辞 n- が音節を形成すると、後続する語幹が 1 音節を形成し、クラス接頭辞 n- が後の最後から 2 番目の音節に位置することになる。そして、クラス接頭辞にアクセントが与えられる。\*[ncí]のように、語幹にアクセントがおかれることはない。

n-chi	[n.çi]	『土地』	*[ncí]
n-ta	[n.ta]	『蠟』	*[ntá]

「人間の名詞クラス」[単数]と「木の名詞クラス」[単数]を表示するクラス接頭辞 m- は、本来的に 1 音節を形成しており、アクセントとの関係で説明できない。

たとえば、下の例では、『人間』[単数]を意味する名詞や『木』[単数]を意味する名詞は、1 音節語幹の前に「人間の名詞クラス」[単数]を表示する名詞クラス接頭辞 m-、あるいは、「木の名詞クラス」[単数]を表示する名詞クラス接頭辞 m- が付加されている。語幹は、1 音節を形成し、「人間の名詞クラス」[単数]を表示する接頭辞 m- と、「木の名詞クラス」[単数]を表示する接頭辞 m- が、それぞれ、1 音節を形成する。名詞クラス接頭辞 m- は、語の最後から 2 番目の音節にあたるので、アクセントがクラス接頭辞 m- に与えられる。

m-tu	[m.tu]	『人間』
m-ti	[m.ti]	『木』

母音が連続するとき、連続する母音は、それぞれ単独に音節を形成する。このことは、アクセントとの関係で注意しなければならない。

faida	[fa.i.da]	『利益』
-------	-----------	------

上の語は、fa と i と da がそれぞれ 1 音節を形成しており、全体は 3 音節からなる。最後から 2 番目の音節にアクセントが与えられるので、最後から 2 番目の音節をつくっている i がアクセントをもつ。

ku-fa	[kú.fa]	『死ぬこと』(動詞不定詞)
ku-faa	[ku.fá.a]	『役立つこと』(動詞不定詞)

『死ぬこと』は、2 音節からなるので、最後から 2 番目の音節 ku- にアクセントがある。『役立つこと』は、3 音節からなるので、最後から 2 番目の音節 fa にアクセントが与えら

れることになる。動詞語幹に不定詞をつくる、同じ接頭辞 **ku-**が付加されているが、動詞『役立つ』は、長母音をもつので、不定詞全体では3音節となり、最後から2番目の音節 **a** にアクセントがある。動詞『死ぬ』は、短母音をもつので、不定詞全体では2音節となり、最後から2番目の音節 **ku** にアクセントがある。

スワヒリ語のアクセントの位置は、規則的であるが、アラビア語からの借用語のなかには、例外的にスワヒリ語のアクセント規則にしたがわないものがある。たとえば、下の例では、先頭の音節、**la** にアクセントがある。

lazima [lá.zi.ma] 『せねばならない』

スワヒリ語のアクセントは、以上説明したようにきわめて規則的である。したがって、アクセントの位置を書く必要はない。正書法においてアクセントの位置を書き表すことはしない。

## 2. 4 イントネーション

肯定文と Yes-No 疑問文は、イントネーションだけで区別される。語順の変化とか、特別な疑問文をつくる形式は存在しない。

肯定文は、下降型イントネーションで発音され、疑問文は、文の末尾近くが上昇型イントネーションで発音される。

肯定文

Ninasoma kitabu (下降型イントネーション) 『わたしは本を読んでいます』

疑問文

Unasoma kitabu? (上昇型イントネーション) 『あなたは本を読んでいますか』

## 3 発音練習

母音

i [i]

pita 『通り過ぎる』      bibi 『女性への敬意あるよびかけ』

tisa 『9』      dirisha 『窓』

chimba 『耕す』      jiko 『かまど』

kiti 『椅子』      giza 『闇』

e [e]

pete 『指輪』      beba 『背負う』

tema 『切る』      debe 『かん』

kelele	『叫び声』	mgeni	『見知らぬ人』
a [a]			
pata	『手に入れる』	baba	『お父さん』
taka	『欲しい』	dada	『姉妹』
chache	『少ない』	jasho	『汗』
kata	『切る』	gawa	『分ける』
o [o]			
popo	『こうもり』	boga	『かぼちゃ』
tosha	『十分である』	dogo	『小さい』
choka	『疲れている』	joka	『大蛇』
kopo	『金属のカン』	godoro	『マットレス』
u [u]			
pua	『鼻』	busu	『キス』
tupu	『空っぽの』	duka	『店』
chupa	『ビン』	jua	『太陽』
kuta	『出会う』	gumu	『硬い』
子音			
p [p]			
pima	『計る』	kipepeo	『蝶』
paka	『ネコ』	pokea	『受け取る』
punga	『減少する』		
b [b]			
binadamu	『人間』	bega	『肩』
bata	『アヒル』	bovu	『腐っている』
bunduki	『銃』		
t [t]			
tia	『入れる』	teka	『汲み上げる』
taa	『ランプ』	toka	『出る』
tuma	『使いにやる』		
d [d]			
kodi	『税金』	desturi	『慣習』
daraja	『階段』	kidole	『指』
duma	『チータ』		
ch [c]			
chinja	『首を切る』	cheka	『笑う』
chakula	『食べ物』	chombo	『容器』

chumvi	『塩』		
j [j]			
jirani	『隣人』	jenga	『建てる』
jana	『昨日』	joto	『暑い』
juma	『週』		
k [k]			
kisu	『ナイフ』	kesho	『明日』
kaka	『兄』	kofia	『帽子』
kumi	『10』		
g [g]			
fagia	『掃く』	geuza	『向きを変える』
gawanya	『分ける』	gogo	『丸太』
gunia	『袋』		
f [f]			
fika	『着く』	fedha	『銀』
farasi	『馬』	forodha	『税関』
fuata	『従う』		
v [v]			
vita	『戦争』	vema	『よく』
vaa	『着る』	volkeno	『火山』
vua	『脱ぐ』		
s [s]			
sita	『6』	sema	『言う』
sasa	『今』	soma	『読む』
sukuma	『押す』		
z [z]			
zika	『埋葬する』	zeze	『ギターに似た楽器』
zaa	『生む』	zoea	『慣れる』
zuri	『良い』		
sh [ʃ]			
shilingi	『シリング』	shemeji	『義理の兄弟、姉妹』
shauri	『計画』	shona	『縫う』
shukuru	『感謝する』		
h [h]			
himiza	『急がせる』	hema	『テント』
hapa	『ここ』	homa	『熱』



huzuni	『悲しみ』		
m [m]			
mimi	『私』	meza	『机』
maji	『水』	moto	『火』
muhogo	『キャッサバ』		
n [n]			
nini	『何』	neni	『言葉』
nani	『誰』	noti	『紙幣』
nusu	『半分』		
ny [ɲ]			
nyika	『野原』	mwenye	『持ち主』
nyanya	『トマト』	nyoka	『蛇』
nyuki	『蜜蜂』		
ng' [ŋ]			
ng'ambo	『反対側』	ng'ombe	『牛』
l [l]			
lima	『耕す』	leo	『今日』
lala	『寝る』	loga	『呪術をかける』
lugha	『言語』		
r [r]			
rithi	『相続する』	rejea	『戻る』
raha	『平安』	roho	『精神』
rudi	『帰る』		
w [w]			
wiki	『週』	weka	『置く』
wao	『彼ら』	woga	『怖れ』
y [y]			
yeye	『彼女、彼』	yasmini	『ジャスミン』
yowe	『叫び声』	yumba	『揺れる』
th [e]			
thelathini	『30』	themanini	『80』
thamani	『価値』	thumu	『ニンニク』
dh [ɗ]			
dhiki	『困窮』	dhahabu	『金』
dhoruba	『ハリケーン』	dhuru	『損なう』
kh [x] = h [h]			

gh [v]

ghibu	『失う』	ghera	『妬み』
ghadhabu	『怒り』	ghofira	『許し』
ghumia	『気を失う』		

#### 参考文献

- Amidu, Assibi A. 2001. *Argument and Predicate Relations in Kiswahili*. Köln: RÜDIGER KÖPPE.
- Ashton, E. O. 1944. *Swahili Grammar, Including Intonation*. London: Longman.
- Bryan, Margaret 1959. *The Bantu Languages of Africa*. London: Oxford University Press.
- De Vere Allen, James 1993. *Swahili Origins*. London: James Curry.
- Greenberg, Joseph H. 1963. *The Languages of Africa*. Bloomington: Indiana University Press.
- Haddon, Ernest B. 1955. *Swahili Lessons*. Cambridge: W. Heffer.
- Institute of Kiswahili Research, University of Dar Es Salaam 1996. *English-Swahili Dictionary, Kamusi ya Kiingereza-Kiswahili*. Dar Es Salaam: Institute of Kiswahili Research.
- Johnson, Frederick 1939a. *A Standard Swahili-English Dictionary*. London: Oxford University Press.
- 1939b. *A Standard English-Swahili Dictionary*. London: Oxford University Press.
- Knappert, Jan 1979. *Four Centuries of Swahili Verse, A Literary History and Anthology*. London: Heinemann
1986. *Proverbs from the Lamu Archipelago and the Central Kenya Coast*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Krapf, L. 1882. *A Dictionary of the Suahili Language*. London: Trübner.
- Maw, Joan 1969. *Sentences in Swahili, A Study of their Internal Relationships*. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
1974. *Swahili Style*. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
1985. *Twende! A Practical Swahili Course*. London: Oxford University Press.
- Maw, Joan & John Kelly 1975. *Intonation in Swahili*. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- Miehe, Gudrun 1979. *Die Sprache der Älteren Swahili-Dichtung (Phonologie und Morphologie)*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Myachina, E. N. 1981. *The Swahili Language, A Descriptive Grammar*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Nurse, Derek & Thomas Spear 1985. *The Swahili: Reconstructing History and Language of an African Society, 800-1500*. Philadelphia: University of California Press.

- Russel, Joan 1981. *Communicative Competence in a Minority Group, A Sociolinguistic Study of the Swahili-speaking Community in the Old Town, Mombasa*. Leiden: E.J. Brill.
- Steere, Edward 1884. *A Handbook of the Swahili Language as spoken at Zanzibar*. London: Society for Promoting Christian Knowledge.
- Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Dar-Es-Salaam 1981. *Kamusi ya Kiswahili Sanifu*. Dar Es Salaam: Oxford University Press.
2001. *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza, Swahili-English Dictionary*. Dar Es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
- Whiteley, Wilfred H. 1968. *Some Problems of Transitivity in Swahili*. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
1969. *Swahili, The Rise of a National Language*. London: Methuen.
- Zawawi, Sharifa M. 1979. *Loan Words and their Effect on the Classification of Swahili Nominals*. Leiden: E.J. Brill.

宮本正興 2009 「スワヒリ文学の風土、東アフリカ海岸地方の言語文化誌」第三書館

## スワヒリ語文法

### 4 名詞

名詞は、語幹（意味を伝える語の中心部分）と接辞（文法的な役割をはたす付加的部分）から成り立っている。接辞は、接頭辞と接尾辞の2種類がある。接頭辞は、語幹の前に付加され、接尾辞は、語幹の後ろに付加される。

m-soma-ji 『読者』

上の例のように、接頭辞は、m-のように形式の後ろにハイフンをつけて書き表し、接尾辞は、-jiのように形式の前にハイフンをつけて書き表すことと定められている。この文法解説では文法を説明するために、語幹、接頭辞、接尾辞のあいだに、ハイフンを入れて書き表している。しかし、実際の正書法においては語幹、接頭辞、接尾辞をハイフンで区切って書き表すことはない。一般に販売されている新聞、雑誌、書籍などスワヒリ語出版物においても、語幹、接頭辞、接尾辞などをハイフンで区切ることはしない。

上の例では、接頭辞 m-は、名詞に付加される、「M/W a クラス [単数] (人間の名詞クラス)」を表示する接頭辞である。-ji は、「～する人」という動詞語幹から行為者名詞を派生する接尾辞である。語幹 soma は、『読む』という意味を伝える動詞語幹である。全体として、『読者』 m-soma-ji という名詞は、語幹 soma と接頭辞 m-と接尾辞-ji から成り立っていることになる。

#### 4. 1 名詞クラス

スワヒリ語の名詞は、それぞれの名詞がもっている意味にしたがい分類される。スワヒリ語の全ての名詞は、必ず、表 1 にある 15 のクラスのいずれかに所属する。クラスに所属しない名詞が存在することはありえない。名詞がどのクラスに所属するかは、接頭辞により表示される。接頭辞さえ分かれば、名詞がどのクラスに所属するか判断することができる。スワヒリ語の 15 の名詞クラスには、バントゥ言語学の伝統にしたがい番号が割り当てられている。

バントゥ言語学の伝統は、バントゥ諸語に 23 の名詞クラスの存在を認めている。しかし、バントゥ諸語の中で、23 の名詞クラスの全てをもつ言語は、1 言語も存在しない。スワヒリ語は、バントゥ言語学の伝統が認めている 23 の名詞クラスのうち、15 の名詞クラスをもつ。バントゥ言語学の伝統において認められている、クラス 12、クラス 13、クラス 14、クラス 19、クラス 20、クラス 21、クラス 22、クラス 23 がスワヒリ語には欠けている。したがって、この文法解説においてこれらのクラス番号は、用いない。

スワヒリ語の名詞は、15 のクラスに分類される。しかし、実際は、その多くが、単数名詞のクラスと複数名詞のクラスの対をなしている。例えば、クラス 2 は、クラス 1 と対を

なす複数名詞のクラスである。クラス 1 に所属する名詞を複数にかえると、クラス 2 に所属することになる。同様に、クラス 3 は、クラス 4 と、クラス 5 は、クラス 6 と、クラス 7 は、クラス 8 と対をなしている。

クラス 10 は、クラス 9 と対をなす複数名詞のクラスであるが、クラス 9 とクラス 10 の名詞に付加される名詞クラスを表示する接頭辞は、同じ形をしている。名詞が単数であるか複数であるかは、クラス 9 とクラス 10 の場合、名詞だけでは区別できない。名詞になにか修飾語がつくと、クラス 9 なのか、クラス 10 なのかを区別することができる。

クラス 11 には、単数のみの名詞と、単数と複数の対をもつ名詞の、2 種類が存在する。クラス 11 に所属し、複数をもつ名詞は、クラス 11 の名詞と対をなす複数名詞が、クラス 10 と同じ形の接頭辞をもち、また、クラス 10 と全く同じ文法的な振舞いをするので、クラス 11 と対をなす複数名詞は、クラス 10 に所属するとみなされる。下の表 1 は、クラス 11 とクラス 10 を対をなしていることが分かるように繰り返して書いている。

クラス 15 は、動詞の不定詞からなるクラスである。スワヒリ語の動詞の不定詞は、名詞の性格をもち、名詞の 1 つのクラスを形成する。クラス 15 は、単数と複数の区別をしない。

クラス 16、17、18 は、場所の名詞のクラスである。これらのクラスに所属する本来の名詞は、mahali 『場所』のみである。しかし、場所の名詞をつくる接尾辞-ni を普通名詞に付加することにより場所の名詞を派生することができる。どんな普通名詞も場所の名詞をつくる接尾辞-ni が付加されたら、派生された場所の名詞は、クラス 16、17、18 に所属することになる。クラス 16、17、18 は、単数と複数の区別をしない。

表 1 スワヒリ語の名詞クラス

クラス番号	接頭辞	例	
1	m-	m-tu	『人』[単数]
2	wa-	wa-tu	『人』[複数]
3	m-	m-ti	『木』[単数]
4	mi-	mi-ti	『木』[複数]
5	ji-/φ-	ji-cho	『目』[単数] / -tunda 『果物』[単数]
6	ma-	ma-tunda	『果物』[複数]
7	ki-	ki-tu	『物』[単数]
8	vi-	vi-tu	『物』[複数]
9	N-	ny-umba	『家』[単数]
10	N-	ny-umba	『家』[複数]
11	u-	u-zuri	『美』
11	u-	u-bao	『板』[単数]
10	N-	m-bao	『板』[複数]

15	ku-	ku-taka	『欲しいこと』
16	(pa-)	mahali	『場所』
17	(ku-)	mahali	『場所』
18	(mu-)	mahali	『場所』

#### 4. 2 照応

スワヒリ語の名詞が意味にしたがって分類されていることは、既に指摘した。名詞分類について、文法的に重要なポイントは、名詞がどのような意味をもつかによって分類されるかということより、むしろ、形容詞や指示詞など名詞を修飾する要素と、名詞とのあいだに見られる照応という現象である。形容詞や指示詞など名詞を修飾する要素が名詞を修飾するとき、形容詞や指示詞など名詞を修飾する要素が、修飾する名詞のクラスにしたがって、その形をかえる。この文法現象を照応と呼ぶ。照応は、名詞のクラスにしたがって接辞を選択することによりなしとげられる。形容詞や指示詞などの語幹に付加される接辞をかえることにより、照応がなしとげられる。

m-tu	m-zuri	m-moja	
『人』	『良い』	『1』	= 『1人の良い人』
ki-ti	ki-zuri	ki-moja	
『椅子』	『良い』	『1』	= 『1脚の良い椅子』

上の例は、形容詞と数詞が名詞のクラスと照応することを示している。形容詞や指示詞など名詞を修飾する要素は、強調などないときは、名詞に後続する位置におかれる。形容詞-zuri『良い、美しい』が名詞 m-tu『ひと』(クラス1)を修飾するとき、形容詞語幹-zuri『良い、美しい』に名詞 m-tu『ひと』(クラス1)と照応する接頭辞 m-が付加される。数詞-moja『1』が名詞 m-tu『人』を修飾するとき、数詞語幹-mojaに名詞 m-tu『人』(クラス1)と照応する接頭辞 m-が付加される。

形容詞-zuri『良い、美しい』が名詞 ki-ti『椅子』(クラス7)を修飾するとき、形容詞語幹-zuri『良い、美しい』に名詞 ki-ti『椅子』(クラス7)と照応する接頭辞 ki-が付加される。数詞-moja『1』が名詞 ki-ti『椅子』(クラス7)を修飾するとき、数詞-moja『1』に名詞 ki-ti『椅子』(クラス7)と照応する接頭辞 ki-が付加される。

名詞に付加される接頭辞の場合には、クラス1の接頭辞とクラス3の接頭辞が偶然同じ形式をもつことや、クラス9とクラス10の接頭辞が同じ形式をもつことなどから、名詞のクラスを判定することにおいて、名詞に付加される接頭辞より、むしろ名詞に照応する名詞を修飾する要素の接辞がより重要な働きをしている。

照応には2種類の照応がある。形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応である。形容詞タイプの照応をおこなう名詞を修飾する要素は、形容詞と数詞のみであり、代名詞タイ

プの照応をおこなう名詞を修飾する要素は、指示詞、所有代名詞、動詞に付加される主語接辞、目的語接辞などがある。関係節標識も代名詞タイプの照応をおこなう。形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応は、たいていの場合、異なる形式を用いる。

[形容詞タイプの照応]

m-tu      m-zuri      m-moja  
『人』   『良い』   『1』   =   『1人の良い人』

[代名詞タイプの照応]

m-tu      hu-yu  
『人』   『この』   =   『この人』  
ki-ti      hi-ki  
『椅子』   『この』   =   『この椅子』

形容詞タイプの照応で用いられる接頭辞は、名詞クラスを表示する接頭辞とよく似ている。一方、代名詞タイプの照応で用いられる接頭辞は、名詞クラスを表示する接頭辞と形が同じである場合と、形がちがっている場合がある。代名詞タイプの照応で用いられる接頭辞が名詞クラスを表示する接頭辞とちがっている場合においても、代名詞タイプの照応で用いられる接辞の形は、名詞クラスを表示する接頭辞を構成する母音と関連すると考えられる。

#### 4. 3 M/W a クラス (クラス 1・2)

スワヒリ語の名詞クラスは、番号で呼ぶより、むしろ、名詞に付加される名詞クラスを表示する接頭辞 (以後、名詞クラス接頭辞と呼ぶ) に由来する名前で呼ばれる。クラス 1 とクラス 2 は、単数と複数が対をつくっていて、単数には名詞クラス接頭辞 m- が付加され、複数には名詞クラス接頭辞 wa- が付加される。単数と複数が対をなしているので、クラス 1 とクラス 2 に所属する名詞は、M/W a クラス名詞と呼ぶ。

M/W a クラスに所属する名詞は、人間の名称を表現する名詞である。M クラス (クラス 1) 名詞は、単数を表わし、M/W a クラス [単数] 名詞と呼ぶ。W a クラス (クラス 2) 名詞は、複数を表わし、M/W a クラス [複数] 名詞と呼ぶ。

[名詞クラス接頭辞]

M/W a クラス

	[単数]	[複数]	
m-tu		wa-tu	『人』
m-toto		wa-toto	『子供』

m-geni	wa-geni	『客人』
m-sichana	wa-sichana	『少女』
m-vulana	wa-vulana	『少年』
m-zee	wa-zee	『老人』
m-kulima	wa-kulima	『農夫』
m-talii	wa-talii	『旅行者』
m-tanzania	wa-tanzania	『タンザニア人』
m-hindi	wa-hindi	『インド人』
m-reno	wa-reno	『ポルトガル人』
mw-ungwana	wa-ungwana	『自由民』
mw-alimu	w-alimu	『先生』
mw-anafunzi	w-anafunzi	『生徒』
mw-uguzi	wa-uguzi	『看護師』

M/W a クラス [単数] に所属する名詞は、名詞語幹に名詞クラス接頭辞 m- が付加される。そのとき、語幹の初頭の位置にある音にしたがって、若干の音の変化が生じる。

M/W a クラス [単数] に所属する名詞は、名詞語幹が子音で始まる時、語幹に名詞クラス接頭辞 m- が付加されるだけであり、なんら音の変化はない (表 2-A)。

名詞語幹が母音で始まる時、名詞クラス接頭辞 m- と語幹初頭の母音のあいだに、わたり音 w が挿入される (表 2-B)。名詞-anafunzi 『生徒』は、語幹が母音で始まるので、名詞クラス接頭辞 m- と語幹初頭の母音のあいだに、わたり音 w が挿入される。名詞-toto 『子供』は、語幹が子音で始まるので、名詞クラス接頭辞 m- と語幹初頭の子音のあいだに音の変化はない。

表 2 M/Wa クラス [単数] の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-toto	-anafunzi
m-toto	mw-anafunzi

(-C は、語幹が子音で始まることを、-V は、語幹が母音で始まることを表す。)

M/W a クラス [複数] に所属する名詞は、名詞クラス接頭辞 wa- が付加される。



M/W a クラス [複数] に所属する名詞は、その語幹が母音 a、e、i で始まる時、名詞クラスの接頭辞の母音と語幹初頭の母音のあいだで母音融合が生じる。

表 3 M/Wa クラス [複数] の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹			
-C	-u, -o	-a	-e,	-i
wa-	wa-	w-a	w-e	w-e
(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
-toto	-ungwana	-anafunzi	-enyekiti	-ivi
wa-toto	wa-ungwana	w-anafunzi	w-enyekiti	w-evi

(-o、-u、-a、-e、-i は、それぞれ、語幹が母音 o、u、a、e、i で始まることを表す。)

M/W a クラス [複数] に所属する名詞は、名詞クラス接頭辞 wa が付加される。名詞語幹が子音で始まる時、名詞クラス接頭辞と語幹のあいだに音変化は生じない (表 2-A)。

名詞語幹が母音 a、e、i で始まる時、名詞クラスを表示する接頭辞 wa の母音と語幹初頭の母音 a、e、i は、母音融合を行う。母音 a と a が融合して、a になる (表 2-C)。母音 a と e が融合して、e になる (表 2-D)。母音 a と i が融合して e になる (表 2-E)。

ただし、母音 u、o で語幹が始まる時は、母音融合は生じない (表 2-B)。

例えば、下の例において、名詞-ana『娘、息子』は、語幹が母音 a で始まるので、名詞クラス接頭辞 wa の母音 a と語幹初頭の母音 a が融合して、a になる。名詞-enyekiti『議長』の語幹は、母音 e で始まるので、名詞クラス接頭辞 wa の母音 a と語幹初頭の母音 e が融合して、e になる。名詞-ivi『泥棒』の語幹は、母音 i で始まるので、名詞クラス接頭辞 wa の母音 a と語幹初頭の母音 i が融合して、e になる。

### M/W a クラス

[単数]	[複数]	
mw-ana	w-ana	『娘、息子』
mw-enyekiti	w-enyekiti	『議長』
mw-enzi	w-enzi	『仲間』
mw-ivi	w-evi	『泥棒』

しかし、以下の例のような、国民を表す名詞などは、語幹が母音ではじまろうとも、母音融合を行わない。また、動詞などからの派生名詞の中には、語幹が母音ではじまっても、母音融合をしない名詞がある。また、動詞からの派生名詞であることが意識される名詞は、語幹が母音ではじまっても、母音融合をおこなわない。例えば、名詞 mw-enda wazimu『狂

人』は、動詞語幹-enda『行く』からの派生名詞である。名詞 mw-imbaji『歌手』は、動詞語幹-imba『歌う』からの派生名詞である。

#### M/W a クラス

〔単数〕	〔複数〕	
mw-arabu	wa-arabu	『アラブ人』
mw-ingereza	wa-ingereza	『イギリス人』
mw-islamu	wa-islamu	『イスラム教徒』
mw-enda wazimu	wa-enda wazimu	『狂人』
mw-imbaji	wa-imbaji	『歌手』

M/W a クラスの名詞に不規則な複数形をもつ名詞がある。mw-ana と m-ke が、mw-ana と m-ume が複合した複合語に由来するからである。複数形の複合語を構成する 2 つの語がそれぞれ複数形の形をしている。例えば、複数名詞 w-anawake『女性〔複数〕』は、複数名詞 w-ana『娘、息子』と、M/W a クラス〔複数〕名詞と照応する形容詞、w-ake『女性の』からなる派生名詞である。

#### M/W a クラス

〔単数〕	〔複数〕	
mw-anamke	w-anawake	『女性』
mw-anamume	w-anaume	『男性』

#### [形容詞タイプの照応]

形容詞や数詞が名詞を修飾するとき、修飾される名詞が所属する名詞クラスにしたがって、形容詞や数詞は形をかえる。この現象を形容詞タイプの照応と呼ぶ。M/W a クラスの名詞を形容詞や数詞が修飾するときは、形容詞や数詞にM/W a クラスと照応した接頭辞が付加される。

M/W a クラス〔単数〕の名詞に照応する形容詞タイプの照応（以後、形容詞タイプ照応形式と呼ぶ）は、m-が用いられる。形容詞や数詞がM/W a クラスの名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 m-が形容詞や数詞の語幹の前に付加される。形容詞や数詞の語幹が子音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだには音変化は生じない（表 4-A）。形容詞語幹や数詞が母音で始まると、形容詞タイプ照応形式 m-と形容詞語幹初頭の母音のあいだにわたり音 w が挿入される（表 4-B）。

例えば、形容詞-ema『良い』や形容詞-ingine『もう 1 人の、他の』の語幹は、母音 e や i で始まる。形容詞語幹が母音で始まるので、M/W a クラス〔単数〕の名詞を修飾するとき、形容詞タイプの照応形式 m-と形容詞語幹初頭の母音のあいだにわたり音 w が挿入



／W a クラス [複数] の名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 wa-が形容詞、数詞語幹の前に付加されるが、形容詞タイプ照応形式 wa-と形容詞、数詞語幹の初頭の子音のあいだで音の変化は生じない。

表 5 M/Wa クラス [複数] の形容詞タイプ照応

子音語幹		母音語幹			
-C、-V (-a,-o,-u)		-e	-i		
wa-		w-e	w-e		
(A)		(B)	(C)		
-zuri		-ema	-ingi		
-baya					
-wili					
wa-toto	wa-zuri	wa-toto	w-ema	wa-toto	w-engi
	『子供たち』『良い』	『子供たち』『良い』		『子供たち』	『多い』
wa-toto	wa-baya				
	『子供たち』『悪い』				
wa-toto	wa-wili				
	『子供たち』『2』				
wa-toto	wa-anana				
	『子供たち』『やさしい』				

#### [代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語が名詞を修飾するとき、名詞が所属する名詞クラスにしたがって、修飾語は形をかえる。これを代名詞タイプの照応と呼ぶ。代名詞タイプの照応をおこなう修飾語は、所有代名詞（所有表現を含む）、指示詞、関係節標識、主語接辞、目的語接辞などである。M/Wa クラス [単数] の名詞に形容詞や数詞以外の修飾語が後続するとき、それらの修飾語は、M/Wa クラス [単数] に照応した形になる。代名詞タイプの照応は、修飾語の語幹に名詞クラスと照応した接辞（以後、代名詞タイプ照応形式と呼ぶ）が付加されて、なしとげられる。

M/Wa クラス [単数] の名詞と照応する代名詞タイプの形式は、不規則な形式を多く含んでいるが、基本的には、代名詞タイプ照応形式-yu-から形作られている。

表 6 M/W a クラス [単数] の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	hu-yu 『この』	ye-	a-/yu-	m-
w-ako 『あなたの』	yu-le 『あの』			
w-ake 『彼、彼女の』	hu-yo 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	(E)

m-toto w-angu

『子供』『私の』

m-toto hu-yu

『子供』『この』

m-toto yu-le

『子供』『あの』

m-toto hu-yo

『子供』『その』

m-toto a-na-ye-soma kitabu

『子供』『読む』 『本』 = 『本を読んでいる子供』

m-toto a-na-soma kitabu

『子供』『読む』 『本』 = 『子供は本を読んでいる』

m-toto yu-ko nyumba-ni

『子供』『いる』『家に』 = 『子供は家にいる』

mama a-na-m-pik-i-a m-toto chakula

『お母さん』『～のために料理する』『子供』『食べ物』 = 『お母さんは子供のために食べ物を料理している』

例えば、所有代名詞は、代名詞タイプ照応形式-yu-に含まれる母音 u と所有代名詞語幹 -angu 『私の』、-ako 『あなたの』、-ake 『彼女の、彼の』、-etu 『私たちの』、-enu 『あなたたちの』、-ao 『彼らの』が結合して、形作られている (表 6-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と代名詞タイプ照応形式-yu を-yu-に含まれる母音 u でつないでつくられている。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する le に代名詞タイプ照応形式-yu-が付加されてつくられている。指示詞『その』は、代名詞タイプ照応形式-yu に指示関係を表現する-o が融合した形式-yo と指示詞『この』の前半の部分が結合してつくられている (表 6-B)。

関係節標識は、代名詞タイプ照応形式-yu-に由来すると考えられるが、不規則な形式 ye- になっている (表 6-C)。

主語接辞には、yu-と a-の 2 つの形式が存在し、yu-は、標準スワヒリ語では場所の表現の前にだけ現れるが、方言においては場所の表現以外にも使われることがある (表 6-D)。

目的語接辞は、不規則な形式 m-である (表 6-E)。

形容詞や数詞以外の修飾語が M/W a クラス [複数] に所属する名詞を修飾するとき、形容詞や数詞以外の修飾語は、M/W a クラスに照応する代名詞タイプの照応した形になる。

表 7 M/W a クラス [複数] の代名詞タイプ照応

所有代名詞		指示詞		関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu	『私の』	ha-wa	『この』	o-	wa-	wa-
w-ako	『あなたの』	wa-le	『あの』			
w-ake	『彼、彼女の』	ha-o	『その』			
w-etu	『私たちの』					
w-enu	『あなたたちの』					
w-ao	『彼らの』					
(A)		(B)		(C)		(D)

wa-toto w-angu

『子供たち』『私の』

wa-toto ha-wa

『子供たち』『これらの』

wa-toto wa-le

『子供たち』『あれらの』

wa-toto ha-o

『子供たち』『それらの』

wa-toto wa-na-o-soma kitabu

『子供たち』『読む』 『本』 = 『本を読んでいる子供たち』

wa-toto wa-na-soma kitabu

『子供たち』『読む』『本』 = 『子供たちは本を読んでいます』

mama a-na-wa-pik-i-a wa-toto chakula

『お母さん』『~のために料理する』『子供たち』 『食べ物』 = 『お母さんは子供たちのために食べ物を料理している』

M/W a クラス [複数] の名詞に照応する代名詞タイプ照応の形式は、代名詞タイプ照

応形式-wa-から基本的に形づくられる。

例えば、所有代名詞は、代名詞タイプ照応形式 wa-と、所有代名詞語幹-angu『私の』、-ako『あなたの』、-ake『彼女の、彼の』、-etu『私たちの』、-enu『あなたたちの』、-ao『彼らの』が結合して形づくられる（表 7-A）。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と-wa を-wa の母音 a で結合してつくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le に wa-が付加されてつくられる。指示詞『その』は、-wa に指示関係を表現する-o が融合した形式-o に指示詞『この』の前半の部分が結合して形づくられる（表 7-B）。

関係節標識は、wa-に指示関係を表現する-o が結合してつくられる（表 7-C）。主語接辞と目的語接辞は、-wa である（表 7-D）。

#### 4. 4 「親族名称」、「職業の名称」、「侮蔑をこめた人間・動物の名前」、「動物の名前」

「親族名称」、「職業の名称」、「侮蔑をこめた人間・動物の名前」、「動物の名前」は、名詞クラス接頭辞に関しては、M/Wa クラスの名詞クラス接頭辞以外の名詞クラス接頭辞をもつにもかかわらず、形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応に関しては、M/Wa クラスの名詞と同じ振る舞いをすることがある。

##### [親族名称]

「親族名称」を表す名詞は、名詞クラス接頭辞に関しては、単数と複数が同じ形をしている。したがって、名詞単独では単数であるか複数であるかを区別することはできない。なんらかの修飾語が後続して単数か複数かを区別することができる。つまり、照応により単数か複数か区別することができる。形容詞タイプの照応と、所有代名詞をのぞく代名詞タイプの照応に関しては、M/Wa クラスと同じ振る舞いをする。「親族名称」を表す名詞の中には、Nクラスの名詞クラス接頭辞をもつと思われる名詞も存在するが、名詞クラス接頭辞を見出せない名詞も存在する。

「親族名称」を修飾する所有代名詞の照応は、Nクラス名詞の照応をおこなう。

[単数]	[複数]	
baba	baba	『お父さん』
mama	mama	『お母さん』
dada	dada	『姉妹』
kaka	kaka	『兄』
nyanya	nyanya	『おばあさん』
babu	babu	『おじいさん』
ndugu	ndugu	『兄弟』

表 8 「親族名称」〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	

baba m-zuri                      baba mw-ema  
『お父さん』『良い』『お父さん』『良い』

baba m-baya                      baba mw-ingine  
『お父さん』『悪い』『お父さん』『もう 1 人の』

baba m-moja  
『お父さん』『1』

表 9 「親族名称」〔複数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	
-C	-e	-i
wa-	w-e	w-e
(A)	(B)	(C)
-zuri	-ema	-ingi
-baya		
-moja		

baba wa-zuri                      baba w-ema                      baba w-engi  
『お父さんたち』『良い』『お父さんたち』『良い』『お父さんたち』『多くの』

baba wa-baya  
『お父さんたち』『悪い』

baba wa-wili  
『お父さんたち』『2』

形容詞や数詞が「親族名称」を修飾するとき、形容詞タイプ照応をおこなう。「親族名称」〔単数〕を形容詞や数詞が修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 m-が用いられる。形



容詞や数詞語幹が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない(表 8-A)。形容詞や数詞の語幹が母音で始まる時、名詞が〔単数〕の場合は、形容詞や数詞初頭の母音の前にわたり音 w が挿入される(表 8-B)。

名詞が「親族名称」〔複数〕の場合は、形容詞タイプ照応形式 wa- が用いられる。形容詞や数詞が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない(表 9-A)。形容詞や数詞が母音で始まる時、形容詞タイプ照応形式 wa- の母音 a と形容詞や数詞の語幹初頭の母音 e、i が母音融合をおこなう。母音 a と母音 e が融合して、母音 e になる(表 9-B)。母音 a と母音 i が融合して、母音 e になる(表 9-C)。

形容詞と数詞以外の修飾語が「親族名称」を修飾するとき、代名詞タイプの照応をおこなう。

表 10 「親族名称」の代名詞タイプ照応

〔単数〕						
所有代名詞		指示詞		関係節標識	主語接辞	目的語接辞
y-angu	『私の』	hu-yu	『この』	ye-	a-/yu-	m-
y-ako	『あなたの』	yu-le	『あの』			
y-ake	『彼女、彼の』	hu-yo	『その』			
y-etu	『私たちの』					
y-enu	『あなたたちの』					
y-ao	『彼らの』					
(A)		(B)				
〔複数〕						
所有代名詞		指示詞		関係節標識	主語接辞	目的語接辞
z-angu	『私の』	ha-wa	『この』	o-	wa-	wa-
z-ako	『あなたの』	wa-le	『あの』			
z-ake	『彼女、彼の』	ha-o	『その』			
z-etu	『私たちの』					
z-enu	『あなたたちの』					
z-ao	『彼らの』					
(C)		(D)				

「親族名称」

〔単数〕

dada yangu

『姉妹』『私の』

dada hu-yu

『姉妹』『この』

dada yu-le

『姉妹』『あの』

dada hu-yo

『姉妹』『その』

dada a-na-ye-soma kitabu

『姉妹』『読む』『本』 = 『本を読んでいる姉妹』

dada a-na-soma kitabu

『姉妹』『読む』『本』 = 『姉妹は本を読んでいます』

dada yu-ko nyumba-ni

『姉妹』『いる』『家に』 = 『姉妹は家にいます』

mama a-na-m-pik-i-a dada chakula

『お母さん』『~のために料理する』『姉妹』『食べ物』 = 『お母さんは姉妹のために食べ物を料理する』

[複数]

dada z-angu

『姉妹たち』『私の』

dada ha-wa

『姉妹たち』『これらの』

dada wa-le

『姉妹たち』『あれらの』

dada ha-o

『姉妹たち』『それらの』

dada wa-na-o-soma kitabu

『姉妹たち』『読む』『本』 = 『本を読む姉妹たち』

dada wa-na-soma kitabu

『姉妹たち』『読む』『本』 = 『姉妹たちは本を読んでいます』

dada wa-ko nyumba-ni

『姉妹たち』『いる』『家に』 = 『姉妹たちは家にいます』

mama a-na-wa-pik-i-a dada chakula

『お母さん』『~のために料理する』『姉妹たち』『食べ物』 = 『お母さんは姉妹たちのために食べ物を料理します』

「親族名称」に形容詞や数詞以外の修飾語が後続するとき、所有代名詞をのぞいて、M/W a クラスの名詞を修飾するときと同じ代名詞タイプ照応をおこなう（表 10-B と表 10-D）。しかし、所有代名詞だけは、後で説明するNクラスの名詞を修飾する代名詞タイプ照応をおこなう（表 10-A と表 10-C）。

「親族名称」〔単数〕の代名詞タイプ照応は、M/W a クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式-yu-から基本的につくられる（表 10-B）。「親族名称」〔複数〕の代名詞タイプ照応は、M/W a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式-wa-から基本的につくられる（表 10-D）。

しかし、所有代名詞は、Nクラスの代名詞タイプ照応をおこなう。「親族名称」〔単数〕を修飾する所有代名詞は、Nクラス〔単数〕に照応する代名詞タイプ照応形式 i-から基本的につくられる。「親族名称」〔複数〕を修飾する所有代名詞は、Nクラス〔複数〕に照応する代名詞タイプ照応形式 zi-から基本的につくられる。Nクラスに所属する名詞を修飾するときの所有代名詞の形式については、Nクラス名詞を説明するときに詳しく解説する。

#### 〔職業などの名称〕

「職業などの名称」を表す名詞に、名詞クラス接頭辞に関しては、複数が後で説明する J i /M a クラス（クラス 5・6）の名詞クラス接頭辞をもちながら、形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応に関しては、M/W a クラスの名詞と同じ振る舞いをする名詞がある。単数は、名詞クラス接頭辞をもたない。

〔単数〕	〔複数〕	
bibi	ma-bibi	『女性への呼びかけ』
bwana	ma-bwana	『男性への呼びかけ』
waziri	ma-waziri	『大臣』
katibu	ma-katibu	『秘書』
afisa	ma-afisa	『役人』
meneja	ma-meneja	『マネージャー』
jambazi	ma-jambazi	『強盗』

「職業などの名称」を表す名詞は、形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応に関して、M/W a クラスの名詞と同じ振る舞いをする。形容詞や数詞が「職業などの名称」を修飾するとき、M/W a クラスの名詞を修飾するときと同じ形容詞タイプの照応をおこなう。形容詞や数詞以外の修飾語が「職業などの名称」を修飾するとき、M/W a クラスの名詞を修飾するときと同じ代名詞タイプの照応をおこなう。

表 11 「職業などの名称」〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	
bibi m-zuri	bibi mw-ema
『女性』『良い』	『女性』『良い』
bibi m-baya	bibi mw-ingine
『女性』『悪い』	『女性』『もう 1 人の』
bibi m-moja	
『女性』『1』	

表 12 「職業などの名称」〔複数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	
-C	-e	-i
wa-	w-e	w-i
(A)	(B)	(C)
-zuri	-ema	-ingi
-baya		
-wili		
ma-bibi wa-zuri	ma-bibi w-ema	ma-bibi w-engi
『女性たち』『良い』	『女性たち』『良い』	『女性たち』『多くの』
ma-bibi wa-baya		
『女性たち』『悪い』		
ma-bibi wa-wili		
『女性たち』『2』		

「職業などの名詞」〔単数〕を形容詞や数詞が修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 m- が用いられる。形容詞や数詞語幹が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない（表 11-A）。形容詞語幹が母音で始まると、形容詞タイプ照応形式 m- と形容詞語幹初頭の母音のあいだにわたり音 w が挿入される（表 11-B）。

「職業などの名詞」〔複数〕を形容詞や数詞が修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 **wa-** が用いられる。形容詞語幹が子音で始めると、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない（表 12-A）。形容詞語幹が母音で始めると、形容詞タイプ照応形式 **wa-** の母音 **a** と形容詞初頭の母音 **e, i** が母音融合をおこす。母音 **a** と **e** は、母音融合して、母音 **e** になる（表 12-B）。母音 **a** と **i** は、母音融合して、母音 **e** になる（表 12-C）。

表 13 「職業などの名称」の代名詞タイプの照応

[単数]

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	hu-yu 『この』	ye-	a-/yu-	m-
w-ako 『あなたの』	yu-le 『あの』			
w-ake 『彼女、彼の』	hu-yo 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				

(A)

[複数]

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	ha-wa 『この』	o-	wa-	wa-
w-ako 『あなたの』	wa-le 『あの』			
w-ake 『彼女、彼の』	ha-o 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				

(B)

[単数]

bibi w-angu	『女性』『私の』
bibi hu-yu	『女性』『この』
bibi yu-le	『女性』『あの』
bibi hu-yo	『女性』『その』

bibi a-na-ye-soma kitabu

『女性』『読む』『本』 = 『本を読んでいる女性』

bibi a-na-soma kitabu

『女性』『読む』『本』 = 『女性は本を読んでいます』

bibi yu-ko nyumba-ni

『女性』『いる』『家に』 = 『女性は家にいます』

mama a-na-m-pik-i-a bibi chakula

『お母さん』『～のために料理する』『女性』『食べ物』 = 『お母さんは女性のために食べ物を料理します』

〔複数〕

ma-bibi w-angu

『女性たち』『私の』

ma-bibi ha-wa

『女性たち』『これらの』

ma-bibi wa-le

『女性たち』『あれらの』

ma-bibi ha-o

『女性たち』『それらの』

ma-bibi wa-na-o-soma kitabu

『女性たち』『読む』『本』 = 『本を読んでいる女性たち』

ma-bibi wa-na-soma kitabu

『女性たち』『読む』『本』 = 『女性たちは本を読んでいます』

ma-bibi wa-ko nyumba-ni

『女性たち』『いる』『家に』 = 『女性たちは家にいます』

mama a-na-wa-pik-i-a ma-bibi chakula

『お母さん』『～のために料理する』『女性たち』『食べ物』 = 『お母さんは女性たちのために食べ物を料理しています』

「職業などの名前」〔単数〕に形容詞や数詞以外の修飾語が後続するとき、名詞は、M/W a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞をもたないにもかかわらず、M/W a クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応をおこなう。M/W a クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応と全く同じである（表 13-A）。職業などの名前〔単数〕に照応する代名詞タイプ照応は、M/W a クラス〔単数〕名詞に照応する代名詞タイプ照応形式-yu-から基本的に形づくられる。

「職業などの名前」〔複数〕に形容詞や数詞以外の修飾語が後続するとき、名詞は、M/W a クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞をもたないにもかかわらず、M/W a クラス〔複

数] の代名詞タイプ照応をおこなう。M/W a クラス [複数] の代名詞タイプ照応と全く同じである (表 13-B)。「職業などの名前」[複数] に照応する代名詞タイプ照応は、M/W a クラス [複数] 名詞に照応する代名詞タイプ照応形式-wa-から基本的に形づくられる。

[侮蔑をこめた人間・動物の名前]

「侮蔑をこめた人間・動物の名前」を表す名詞は、後で説明する名詞クラス接頭辞 K i / V i をもつ。名詞クラス接頭辞 K i / V i は、本来、人間が作ったものや道具、人間が使用するものや道具を表す名詞に付加される。また、『小さいもの』や『形のゆがんだもの』を表す名詞にも付加される。名詞クラス接頭辞 K i / V i が付加される名詞の中で、人間や動物の名前を表現する名詞は、形容詞タイプと代名詞タイプの照応に関して、K i / V i クラスの照応を行なわない。形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応に関しては、「侮蔑をこめた人間・動物の名前」を表す名詞は、M/W a クラスの名詞と同じ振る舞いをする。

〔単数〕	〔複数〕	
ki-jana	vi-jana	『若者』
ki-ongozi	vi-ongozi	『指導者』
ki-barua	vi-barua	『労働者』
ki-pofu	vi-pofu	『視覚障害者』
ki-boko	vi-boko	『カバ』
ki-faru	vi-faru	『サイ』
ch-ura	vy-ura	『蛙』

表 14 「侮蔑をこめた人間・動物」〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	
ki-jana m-zuri	ki-jana mw-ema
『若者』『良い』	『若者』『良い』

ki-jana m-baya      ki-jana mw-ingine  
『若者』『悪い』   『若者』『もう1人の』  
ki-jana m-moja  
『若者』『1』

表 15 「侮蔑をこめた人間・動物」〔複数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	
-C	-e	-i
wa-	w-e	w-e
(A)	(B)	(C)
-zuri	-ema	-ingi
-baya		
-moja		

vi-jana wa-zuri      vi-jana w-ema      vi-jana w-engi  
『若者たち』『良い』『若者たち』『良い』『若者たち』『多くの』  
vi-jana wa-baya  
『若者たち』『悪い』  
vi-jana wa-wili  
『若者たち』『2』

「侮蔑をこめた人間・動物の名前」を表す名詞を形容詞や数詞が修飾するとき、形容詞や数詞は、M/W a クラスの形容詞タイプ照応をおこなう。「侮蔑をこめた人間・動物の名前」〔単数〕名詞に形容詞や数詞が後続すると、形容詞タイプ照応形式 **m-** が用いられる。形容詞や数詞の語幹が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない（表形 14-A）。形容詞語幹が母音で始まる時、形容詞タイプ照応形式 **m-** と形容詞語幹初頭の母音のあいだにわたり音 **w** が挿入される（表 14-B）。

形容詞や数詞が「侮蔑をこめた人間・動物の名前」〔複数〕名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 **wa-** が用いられる。形容詞が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と形容詞語幹とのあいだに音変化は生じない（表 15-A）。形容詞タイプ照応 **wa-** と形容詞初頭の母音 **e, i** は、母音融合をおこす。母音 **a** と **e** は、母音融合して、母音 **e** になる（表 15-B）。母音 **a** と **i** は、母音融合して、母音 **e** になる（表 15-C）。



表 16 「侮蔑をこめた人間・動物の名前」の代名詞タイプ照応

〔単数〕

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	hu-yu 『この』	ye-	a-/yu-	m-
w-ako 『あなたの』	yu-le 『あの』			
w-ake 『彼女、彼の』	hu-yo 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				

(A)

〔複数〕

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	ha-wa 『この』	o-	wa-	wa-
w-ako 『あなたの』	wa-le 『あの』			
w-ake 『彼女、彼の』	ha-o 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				

(B)

〔単数〕

ki-jana w-angu

『若者』『私の』

ki-jana hu-yu

『若者』『この』

ki-jana yu-le

『若者』『あの』

ki-jana hu-yo

『若者』『その』

ki-jana a-na-ye-soma kitabu

『若者』『読む』『本』 = 『本を読んでいる若者』

ki-jana a-na-soma kitabu

『若者』『読む』『本』 = 『若者は本を読んでいます』

ki-jana yu-ko nyumba-ni

『若者』『いる』『家に』 = 『若者は家にいます』

mama a-na-m-pik-i-a ki-jana chakula

『お母さん』『~のために料理する』『若者』『食べ物』 = 『お母さんは若者のために食べ物を料理します』

[複数]

vi-jana w-angu

『若者たち』『私の』

vi-jana ha-wa

『若者たち』『これらの』

vi-jana wa-le

『若者たち』『あれらの』

vi-jana ha-o

『若者たち』『それらの』

vi-jana wa-na-o-soma kitabu

『若者たち』『読む』『本』 = 『本を読んでいる若者たち』

vi-jana wa-na-soma kitabu

『若者たち』『読む』『本』 = 『若者たちは本を読んでいます』

vi-jana wa-ko nyumba-ni

『若者たち』『いる』『家に』 = 『若者たちは家にいます』

mama a-na-wa-pik-i-a vi-jana chakula

『お母さん』『~のために料理する』『若者たち』『食べ物』 = 『お母さんは若者たちのために料理をしています』

「侮蔑をこめた人間・動物の名前」名詞を形容詞や数詞以外の修飾語が修飾するとき、「侮蔑をこめた人間・動物の名前」名詞がM/W a クラスの名詞クラス接頭辞をもたないにもかかわらず、形容詞や数詞以外の修飾語は、代名詞タイプの照応に関して、M/W a クラス名詞を修飾するときと全く同じ照応をおこなう。「侮蔑をこめた人間・動物の名前」[単数]名詞の代名詞タイプ照応は、基本的にM/W a クラスの代名詞タイプ照応形式-yu-から形づくられる(表 16-A)。「侮蔑をこめた人間・動物の名前」[複数]名詞の代名詞タイプ照応は、基本的にM/W a クラスの代名詞タイプ照応形式-wa-から形づくられる(表 16-B)。

[動物の名前]

「動物の名前」は、単数と複数が同じ形をしている。したがって、名詞単独では単数か複数か区別することができない。なんらかの修飾語が後続して、照応により、単数か複数か区別することができる。「動物の名前」名詞には、後で説明するNクラス名詞と同じ名

詞クラス接頭辞が付加されている名詞が存在する。また、若干の「動物の名前」名詞の中には、名詞クラス接頭辞を見出せない名詞が存在する。

形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応に関しては、所有代名詞が「動物の名前」名詞〔複数〕を修飾する場合をのぞいて、「動物の名前」名詞は、M/W a クラスの名詞と同じ振る舞いをする。所有代名詞が「動物の名前」〔複数〕を修飾するとき、M/W a クラスの照応をおこなわず、Nクラスの代名詞タイプ照応をおこなう。しかし、所有代名詞が「動物の名前」〔単数〕を修飾するときは、M/W a クラスの代名詞タイプ照応をおこなう。

〔単数〕	〔複数〕	
mbwa	mbwa	『犬』
ndege	ndege	『鳥』
njiwa	njiwa	『はと』
nge	nge	『サソリ』
paka	paka	『猫』
tembo	tembo	『象』
chui	chui	『豹』
kanga	kanga	『ホロホロ鳥』
nungu	nungu	『ヤマアラシ』
nyuki	nyuki	『ミツバチ』
ng'ombe	ng'ombe	『牛』

表 17 「動物名」〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	
mbwa m-zuri	mbwa mw-ema
『犬』『良い』	『犬』『良い』
mbwa m-baya	mbwa mw-ingine
『犬』『悪い』	『犬』『もう 1 匹の』

mbwa m-moja

『犬』『1』

表 18 「動物名」〔複数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	
-C	-e	-i
wa-	w-e	w-e
(A)	(B)	(C)
-zuri	-ema	-ingi
-baya		
-wili		
mbwa wa-zuri	mbwa w-ema	mbwa w-engi
『犬たち』『良い』	『犬たち』『良い』	『犬たち』『多くの』
mbwa wa-baya		
『犬たち』『悪い』		
mbwa wa-wili		
『犬たち』『2』		

形容詞や数詞が、「動物名」を表す名詞を修飾するとき、M/W a クラスの名詞を修飾するときと同じ照応をおこなう。形容詞や数詞が動物名の名詞〔単数〕を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 m- が用いられる。形容詞や数詞語幹が子音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだで音変化は生じない（表 17-A）。形容詞や数詞の語幹が母音で始めると、形容詞タイプの照応形式 m- と形容詞語幹初頭の母音のあいだにわたり音 w が挿入される（表 17-B）。

形容詞や数詞が「動物名」の名詞〔複数〕を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 wa- が用いられる。形容詞や数詞語幹が子音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない（表 18-A）。形容詞語幹が母音 e, i で始めると、形容詞タイプの照応形式 wa- の母音と形容詞語幹初頭の母音は、母音融合を生じる。母音 a と e は、母音 e になる（表 18-B）。母音 a と i は、母音 e になる（表 18-C）。

「動物名」名詞を形容詞や数詞以外の修飾語が修飾するとき、所有代名詞が「動物名」名詞〔複数〕を修飾する場合をのぞいて、M/W a クラスと同じ代名詞タイプの照応をおこなう。

表 19 「動物名」の代名詞タイプの照応

〔単数〕

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	hu-yu	ye-	a-/yu-	m-
w-ako 『あなたの』	yu-le			
w-ake 『彼女、彼の』	hu-yo			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				

(A)

〔複数〕

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
z-angu 『私の』	ha-wa	o-	wa-	wa
z-ako 『あなたの』	wa-le			
z-ake 『彼女、彼の』	ha-o			
z-etu 『私たちの』				
z-enu 『あなたたちの』				
z-ao 『彼らの』				

(B)

(C)

〔単数〕

mbwa w-angu

『犬』『私の』

mbwa hu-yu

『犬』『この』

mbwa yu-le

『犬』『あの』

mbwa hu-yo

『犬』『その』

mbwa a-na-ye-kimbia

『犬』『走る』 = 『走っている犬』

mbwa a-na-kimbia

『犬』『走る』 = 『犬は走っています』

mbwa yu-ko nyumba-ni

『犬』『いる』『家に』 = 『犬は家にいます』

m-toto a-na-m-piga mbwa

『子供』『ぶつ』『犬』 = 『子供は犬をぶっています』

〔複数〕

mbwa z-angu

『犬たち』『私の』

mbwa ha-wa

『犬たち』『これらの』

mbwa wa-le

『犬たち』『あれらの』

mbwa ha-o

『犬たち』『それらの』

mbwa wa-na-o-kimbia

『犬たち』『走る』 = 『走っている犬たち』

mbwa wa-na-kimbia

『犬たち』『走る』 = 『犬たちは走っています』

mbwa wa-ko nyumba-ni

『犬たち』『いる』『家に』 = 『犬たちは家にいます』

m-toto a-na-wa-piga mbwa

『子供』『ぶつ』『犬たち』 = 『子供は犬たちをぶっています』

所有代名詞が「動物名を表す名詞」〔複数〕を修飾するときだけ、M/W a クラスの照応ではなく、Nクラス〔複数〕の照応をする。所有代名詞をのぞいて、形容詞や数詞以外の修飾語は、M/W a クラスの代名詞タイプの照応をおこなう。

「動物名の名詞」〔単数〕を形容詞や数詞以外の修飾語が修飾するとき、M/W a クラス〔単数〕の代名詞タイプの照応をおこなう。「動物名の名詞」〔単数〕の代名詞タイプ照応は、基本的にM/W a クラス代名詞タイプ照応形式-yu-から形づくられる（表 19-A）。

所有代名詞が動物名の名詞〔複数〕を修飾するとき、所有代名詞は、Nクラス〔複数〕の照応をおこなう。Nクラス〔複数〕の照応をする所有代名詞は、代名詞タイプ照応形式 zi- と所有代名詞語幹が結合して形づくられる（表 19-B）。

動物名の名詞〔複数〕を所有代名詞以外の形容詞や数詞ではない修飾語が修飾するとき、N/W a クラス〔複数〕の代名詞タイプの照応をおこなう。「動物名」〔複数〕の代名詞タイプの照応は、M/W a クラス照応形式-wa-から形づくられる（表 19-C）。

#### 4. 5 M/M i クラス (クラス 3・4)

M/M i クラスの名詞は、単数に名詞クラス接頭辞 m-が、複数に名詞クラス接頭辞 mi-が付加される。M/M i クラス〔単数〕は、バントゥ言語学の伝統ではクラス 3 の番号が与えられ、M/M i クラス〔複数〕は、クラス 4 の番号が与えられている。

M/M i クラス〔単数〕は、M/W a クラス〔単数〕と同じ形をした名詞クラス接頭辞が付加されるが、それは、歴史的な変化の結果による偶然である。形容詞タイプの照応や、とくに代名詞タイプの照応に関しては、M/M i クラス〔単数〕名詞は、M/W a クラス〔単数〕名詞と全く違う振る舞いをする。

M/M i クラスに所属する名詞は、木や植物の名前、木や植物からつくられた製品、身体部位の名称と「生命に関係する物」である。また、自然界に存在する外延的な形をもつ物の名前である。M/W a クラスに所属する名詞が人間存在の全体に与えられた名前であるのに対して、M/M i クラスに所属する名詞は、人間の身体の一部の名称である。

M/M i クラスに所属する名詞は、植物体全体に与えられた名前である。また、m-oyo『火』や mw-ezi『月』や m-ji『町』などは、「生命に関係する物」と考えるのは想像力を働かせすぎであろうか。

M/M i クラス〔単数〕に所属する名詞の中に、名詞クラス接頭辞 mu-をもつものがある。名詞クラス接頭辞 mu-は、歴史的に古い形式であると考えられる。M/M i クラス〔単数〕に古い名詞クラス接頭辞 mu-をもつ名詞も、対をなすM/M i クラス〔複数〕は、名詞クラス接頭辞 mi-が付加される。

[名詞クラス接頭辞]

M/M i クラス

〔単数〕	〔複数〕	
m-ti	mi-ti	『木』
m-gomba	mi-gomba	『バナナの木』
m-chungwa	mi-chungwa	『オレンジの木』
m-chele	mi-chele	『米』
m-nanasi	mi-nanasi	『パイナップルの木』
m-shale	mi-shale	『矢』
m-kuki	mi-kuki	『槍』
m-sumari	mi-sumari	『釘』
m-kono	mi-kono	『手』
m-guu	mi-guu	『足』
m-gongo	mi-gongo	『背』
m-fupa	mi-fupa	『骨』
m-fuko	mi-fuko	『袋、ポケット』

m-lima	mi-lima	『山』
m-situ	mi-situ	『森』
m-to	mi-to	『川』
m-ji	mi-ji	『町』
mw-anzo	mi-anzo	『始まり』
mw-isho	mi-isho	『終わり』
mw-iba	mi-iba	『棘』
mw-embe	mi-embe	『マンゴーの木』
mw-aka	mi-aka	『年』
mw-ezi	mi-ezi	『月』
mw-ili	mi-ili	『身体』
m-oyo	mi-oyo	『心』
m-oto	mi-oto	『火』
m-oshi	mi-oshi	『煙』
mw-onzi	mi-onzi	『光線』
mu-hogo	mi-hogo	『キャッサバ』
mu-wa	mi-wa	『サトウキビ』

M/M i クラス〔単数〕に所属する名詞は、名詞クラス接頭辞 m- が接辞される。語幹が子音で始まる時、名詞クラス接頭辞と語幹のあいだに音変化は生じない（表 20-A）。

M/M i クラス〔単数〕に所属する名詞は、その語幹が母音で始まる時、名詞クラス接頭辞 m- と語幹初頭の母音のあいだに、わたり音 w が挿入される（表 20-B）。ただし、語幹初頭の母音が o である時、必ずと言うわけではないが、わたり音 w が挿入されないことがある（表 20-C）。

表 20 M/M i クラス名詞〔単数〕の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹	
-C	-V	-o
m-	mw-	m-
mu-		
(A)	(B)	(C)
m-gomba	mw-embe	m-oto
mu-hogo	mw-aka	

M/M i クラス〔複数〕に所属する名詞は、名詞クラス接頭辞 mi- が接辞される。



M/M i クラス〔複数〕に所属する名詞は、その語幹が母音ではじまろうとも、名詞クラス接頭辞 mi-の母音 i と語幹初頭の母音のあいだで母音融合は生じない（表 21）。

表 21 M/M i クラス名詞〔複数〕の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹	
-C	-V	-o
mi-	mi-	mi-
mi-gomba	mi-embe	mi-oto
mi-hogo	mi-aka	

[形容詞タイプの照応]

形容詞や数詞がM/M i クラスに所属する名詞を修飾するとき、形容詞や数詞は、M/M i クラスに照応する形容詞タイプ照応をおこなう。

形容詞タイプ照応は、M/M i クラス〔単数〕には、形容詞タイプ照応形式 m-が、M/M i クラス〔複数〕には、形容詞タイプ照応形式 mi-が用いられる。

形容詞や数詞がM/M i クラス〔単数〕を修飾するとき、形容詞や数詞が子音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式と形容詞や数詞語幹のあいだに音変化は生じない(表 22-A)。形容詞や数詞の語幹が母音で始まると、形容詞タイプの照応形式 m-と形容詞語幹初頭の母音のあいだにわたり音 w が挿入される(表 22-B) (語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。

形容詞や数詞がM/M i クラス〔複数〕を修飾するとき、形容詞や数詞の語幹が母音 i 以外の母音で始まるとき、形容詞タイプの照応形式 mi-は、my-と書かれる。形容詞や数詞の語幹が母音 i で始まるとき、形容詞タイプの照応形式 mi-の母音 i と形容詞語幹初頭の母音 i が母音融合して、i になる(語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。

表 22 M/M i クラス〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	

m-ti m-zuri	m-ti mw-ema
『木』『良い』	『木』『良い』
m-ti m-baya	m-ti mw-ngine
『木』『悪い』	『木』『もう1つの』
m-ti m-moja	
『木』『1』	

M/M i クラス〔複数〕名詞クラス接頭辞 mi-が名詞語幹に付加される時は、名詞クラス接頭辞 mi-の母音 i と名詞語幹初頭の母音のあいだでなんら音の変化はない。しかし、形容詞や数詞が M/M i クラス〔複数〕名詞を修飾するとき、M/M i クラス〔複数〕の名詞に照応する形容詞タイプ照応形式 mi-の母音 i と形容詞語幹初頭の母音のあいだで音変化や母音融合が生じる。

形容詞や数詞が M/M i クラス〔複数〕名詞を修飾するとき、形容詞や数詞が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式 mi-と語幹のあいだに音変化は生じない(表 23-A)。形容詞や数詞語幹が母音 e で始まる時、形容詞タイプ照応形式 mi-の母音 i は、後続する母音のまえでわたり音 y になる(表 23-B)。形容詞や数詞語幹が母音 i で始まる時、形容詞タイプ照応形式 mi-の母音 i と語幹初頭の母音 i は、母音融合して、母音 i になる(表 23-C)。

表 23 M/M i クラス〔複数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	
-C	-e	-i
mi-	my-	m-i
(A)	(B)	(C)
-zuri	-ema	-ingi
-baya		
-wili		
mi-ti mi-zuri	mi-ti my-ema	mi-ti m-ingi
『木々』『良い』	『木々』『良い』	『木々』『多くの』
mi-ti mi-baya		
『木々』『悪い』		
mi-ti mi-wili		
『木々』『2』		

[代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語が M/M i クラスに所属する名詞を修飾するとき、それら修

飾語は、M/M i クラスの代名詞タイプ照応をおこなう。M/M i クラス〔単数〕に照応する代名詞タイプ照応形式は、-u-である。M/M i クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式-u-は、M/M i クラス〔単数〕と照応する形容詞タイプ照応形式 m-が本来もっていたと考えられる母音要素 u-に由来すると考えられる。また、M/M i クラス名詞〔複数〕に照応する代名詞タイプ照応形式は、-i-である。M/M i クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式-i-は、M/M i クラス〔複数〕に照応する形容詞タイプ照応形式 mi-の母音要素から由来すると考えられる。

M/M i クラス〔単数〕に照応する形容詞タイプの照応形式 m-は、古くは mu-という形をしており、母音要素 u-をもっていたと考えられる。M/M i クラス〔複数〕に照応する形容詞タイプの照応形式は、mi-であり、母音要素 i-をもっている。

形容詞や数詞以外の修飾語がM/M i クラス〔単数〕に所属する名詞を修飾するとき、代名詞タイプの照応をおこなう。M/M i クラス〔単数〕の代名詞タイプの照応をする形式は、代名詞タイプ照応形式-u-にもとづいて形成される。

M/M i クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式 u-は、所有代名詞語幹、-angu『私の』、-ako『あなたの』、-ake『彼女、彼の』、-etu『私たちの』、-enu『あなたたちの』、-ao『彼らの』、が母音で始まるので、これらの所有代名詞語幹に付加されるとき、半母音 w になる(表 24-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と代名詞タイプ照応形式-u-を代名詞照応形式-u-に含まれる母音 u-でつないでつくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le に代名詞タイプ照応形式 u-が付加されてつくられる。指示詞『その』は、代名詞タイプ照応形式-u-に指示関係を表現する-o が融合した形式-o と指示詞『この』の前半の部分が結合してつくられる(表 24-B)。

関係節標識は、代名詞タイプ照応形式 u-と指示関係を表現する-o が融合してつくられる(表 24-C)。主語接辞と目的語接辞は、代名詞タイプ照応形式 u-である(表 24-D)。

表 24 M/M i クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	hu-u 『この』	o-	u-	u-
w-ako 『あなたの』	u-le 『あの』			
w-ake 『彼女、彼の』	hu-o 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

m-gomba w-angu

『バナナの木』『私の』

m-gomba hu-u

『バナナの木』『この』

m-gomba u-le

『バナナの木』『あの』

m-gomba hu-o

『バナナの木』『その』

m-gomba u-li-o-anguka

『バナナの木』『倒れる』 = 『倒れたバナナの木』

m-gomba u-me-anguka

『バナナの木』『倒れる』 = 『バナナの木は倒れている』

m-gomba u-ko shamba-ni

『バナナの木』『ある』『畑に』 = 『バナナの木は畑にある』

mama a-na-u-kata m-gomba

『お母さん』『切る』『バナナの木』 = 『お母さんはバナナの木を切っています』

表 25 M/M i クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
y-angu 『私の』	hi-i 『この』	yo-	i-	i-
y-ako 『あなたの』	i-le 『あの』			
y-ake 『彼女、彼の』	hi-yo 『その』			
y-etu 『私たちの』				
y-enu 『あなたたちの』				
y-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

mi-gomba y-angu

『バナナの木〔複数〕』『私の』

mi-gomba hi-i

『バナナの木〔複数〕』『この』

mi-gomba i-le

『バナナの木〔複数〕』『あの』

mi-gomba hi-yo

『バナナの木〔複数〕』『その』

mi-gomba i-li-yo-anguka

『バナナの木〔複数〕』『倒れる』 = 『倒れたバナナの木〔複数〕』

mi-gomba i-me-anguka

『バナナの木〔複数〕』『倒れる』 = 『バナナの木〔複数〕は倒れている』

mi-gomba i-ko shamba-ni

『バナナの木〔複数〕』『ある』『畑に』 = 『バナナの木〔複数〕は畑にある』

mama a-na-i-kata mi-gomba

『お母さん』『切る』『バナナの木〔複数〕』 = 『お母さんはバナナの木〔複数〕を切っています』

形容詞や数詞以外の修飾語がM/Miクラス〔複数〕に所属する名詞を修飾するとき、M/Miクラス〔複数〕の代名詞タイプの照応をする形式が用いられる。M/Miクラス〔複数〕に照応する形式は、M/Miクラスの代名詞タイプ照応形式-iにもとづいて形成される。

所有代名詞は、代名詞タイプ照応形式 iが所有代名詞語幹-angu『私の』、-ako『あなたの』、-ake『彼女の、彼の』、-etu『私たちの』、-enu『あなたたちの』、-ao『彼らの』に付加されて形成される。このとき、代名詞タイプ照応形式 iは、後続する母音のまえで半母音 yになる（表 25-A）。

指示詞『この』は、近いことを表現する h-と代名詞タイプ照応形式-iを代名詞タイプ照応形式がもつ母音 iで結合してつくられる。指示詞『あの』は、M/Miクラス〔複数〕照応形式 iが話し手から遠いことを表現する-leに付加されて形づくられる。指示詞『その』は、M/Miクラス〔複数〕と照応する代名詞タイプ照応形式 iに指示関係を表現する-oが結合した形式 yoに、指示詞『この』の前半分が結合して形づくられる（表 25-B）。

関係節標識は、M/Miクラス〔複数〕照応形式 iに指示関係を表す oが結合して形づくられる（表 25-C）。

M/Miクラス〔複数〕に照応する主語接辞と目的語接辞は、M/Miクラス〔複数〕と照応する照応形式 iが用いられる（表 25-D）。

#### 4. 6 Ji/Maクラス（クラス5・クラス6）

Ji/Maクラスの名詞は、単数に名詞クラス接頭辞 ji-、あるいは、名詞クラス接頭辞 φ-（ゼロ形態素）を、複数に名詞クラス接頭辞 ma-が付加される。Ji/Maクラス〔単数〕にはバントゥ言語学の伝統ではクラス5の番号が、Ji/Maクラス〔複数〕にはバントゥ言語学の伝統によるクラス6の番号が与えられる。Ji/Maクラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 ji-が付加されるのは、わずかな例外をのぞいて、語幹が母音で始まる名詞と、語幹が単音節からなる名詞に限られる。

Ji/Maクラスの名詞は、果物の名前、植物体の部分の名称、自然界において対で存

在する物、自然界において複数個で存在する物である。また、動詞から由来する、行為を表す派生名詞である。

J i / M a クラスに所属する名詞の特徴の1つが自然界で複数個で存在する物であることから、J i / M a クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞 ma-は、名詞の単数形に付加され、複数をつくる働きをもつ。借用語や「職業などの名称」を表す名詞など、単数にクラス接頭辞をもたない名詞の複数をつくるために、J i / M a クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞 ma-は、用いられることがある。例えば、「職業などの名称」名詞のように単数に名詞クラス接頭辞をもたない名詞が、J i / M a クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞 ma-が付加されて、単数と対をつくる複数がつくられる。

J i / M a クラスに所属する名詞には、複数だけをもち、単数をもたない名詞がある。単数をもたない名詞は、数えることができない名詞に相当する (ma-ji『水』、ma-futa『油』、ma-tata『災難』)。

M / M i クラスが植物体全体の名前であるのに対して、J i / M a クラスは、tawi『枝』や ua『花』など、植物体の部分の名称である。

J i / M a クラスは、大きいものを表すことがある。J i / M a クラスの名詞クラス接頭辞 ji-/ma-は、「大きいもの」を表す働きをもつ (ma-j-umba『ビルディング』〔複数])。

[名詞クラス接頭辞]

J i / M a クラス

〔単数〕	〔複数〕	
tunda	ma-tunda	『果物』
chungwa	ma-chungwa	『オレンジの実』
nanasi	ma-nanasi	『パイナップルの実』
embe	ma-embe	『マンゴーの実』
jani	ma-jani	『葉』
dirisha	ma-dirisha	『窓』
duka	ma-duka	『店』
sanduku	ma-sanduku	『箱』
jua	ma-jua	『日、太陽』
	ma-ji	『水』
	ma-futa	『油』
	ma-ziwa	『ミルク』
	ma-tata	『災難』
j-iko	m-eko	『炉、台所』
j-ino	m-eno	『歯』
j-ambo	m-ambo	『出来事』

j-osho	ma-osho	『汗』
ji-cho	ma-cho	『目』
ji-we	ma-we	『石』
j-embe	ma-j-embe	『鍬』
j-umba	ma-jumba	『ビルディング』
ji-na	ma-ji-na	『名前』

名詞語幹が子音で始まる時、2音節以上からなる語幹には、J i / M a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 ji-は、付加されないか、あるいは、名詞クラス接頭辞  $\emptyset$  (ゼロ形態素) が付加される (表 26-A)。名詞語幹が母音で始まる時、J i / M a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 ji-の母音 i は、語幹の母音の前で脱落する (表 26-B)。また、語幹が子音ではじまろうとも、語幹が単音節からなる時は、J i / M a クラス〔単数〕クラス接頭辞 ji-が語幹のまえに付加される (表 26-C)。

語幹が子音で始まる時、J i / M a クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞 ma-が付加される (表 27-A)。語幹が母音で始まる時、J i / M a クラス〔複数〕クラス接頭辞 ma-の母音は、語幹の母音と母音融合する。名詞語幹が i で始まる時、母音 a と語幹初頭の母音 i は、融合して母音 e になる (表 27-B)。名詞語幹が a で始まる時、クラス接頭辞 ma-の母音 a と語幹初頭の母音 a は、母音融合して a になる (表 27-C)。

複数名詞に付加される名詞クラス接頭辞は、普通、対をなす単数に付加される名詞クラス接頭辞にかわって、語幹に接辞される。しかし、J i / M a クラス〔複数〕のクラス接頭辞 ma-は、ときどき、J i / M a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 ji-を残したまま、名詞クラス接頭辞 ji-の前に付加されることがある (ma-j-embe『鍬』、ma-j-umba『ビルディング』、ma-ji-na『名前』)。

表 26 J i / M a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹	単音節語幹
-C	-V	
$\emptyset$ -	j-	ji-
(A)	(B)	(C)
tunda	j-iko	ji-cho
『果物』	『炉』	『目』

表 27 J i / M a クラス [複数] の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹	
-C	-i	-a
ma-	m-e	m-a
(A)	(B)	(C)
ma-tunda	m-eko	m-ambo
『果物 [複数]』	『炉 [複数]』	『出来事 [複数]』

[形容詞タイプの照応]

形容詞や数詞が J i / M a クラス [単数] の名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 ji- が形容詞や数詞の語幹に付加される。ただし、形容詞や数詞語幹が 2 音節以上からなり、しかも、子音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式 ji- は、出現せず、ゼロ形態素 φ- が現われる (表 28-A)。形容詞タイプ照応形式 ji- が出現するのは、形容詞や数詞語幹が単音節からなるときと形容詞や数詞語幹が母音で始まるときに限られる。

形容詞や数詞語幹が単音節からなるときは、形容詞タイプ照応形式 ji- が語幹に付加される (表 28-C)。形容詞や数詞語幹が母音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式 ji- の母音 i は、語幹初頭の母音の前で脱落する (表 28-C) (語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。

表 28 J i / M a クラス [単数] 形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	単音節語幹
-C	-V	-C
φ-	j-	ji-
(A)	(B)	(C)
-kubwa	-ingine	-pya
-zuri	-ema	
-moja		
tunda kubwa	tunda j-ingine	tunda ji-pya
『果物』『大きい』	『果物』『もう 1 つの』	『果物』『新しい』
tunda zuri	tunda j-ema	
『果物』『良い』	『果物』『良い』	
tunda moja		



『果物』『1』

形容詞や数詞が J i / M a クラス [複数] 名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 ma- が形容詞や数詞語幹に付加される。形容詞や数詞語幹が子音で始まる時、形容詞照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない (表 29-A)。形容詞や数詞語幹が母音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹初頭の母音は母音融合をおこす。形容詞タイプ照応形式 ma- の母音 a と形容詞語幹初頭の母音 e は、母音融合して、母音 e になる (表 29-B)。形容詞タイプ照応形式 ma- の母音 a と語幹初頭の母音 i は、母音融合して、母音 e になる (表 29-C)。形容詞語幹が母音 a、o、u で始まる時、形容詞タイプ照応形式 ma- の母音と形容詞語幹初頭の母音 a、o、u は、母音融合しない。

表 29 Ji/Ma クラス [複数] 形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹	
-C	-e	-i
ma-	m-e	m-e
(A)	(B)	(C)
-kubwa	-ema	-ingi
-zuri		
-wili		
ma-tunda ma-kubwa	ma-tunda m-ema	ma-tunda m-engi
『果物 [複数]』『大きい』	『果物 [複数]』『良い』	『果物 [複数]』『多くの』
ma-tunda ma-zuri		
『果物 [複数]』『良い』		
ma-tunda ma-wili		
『果物 [複数]』『2』		

[代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語が J i / M a クラス [単数] の名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、J i / M a クラス [単数] に照応した形式になる。

表 30 Ji/Ma クラス [単数] の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
l-angu 『私の』	hi-li 『この』	lo	li-	li-
l-ako 『あなたの』	li-le 『あの』			
l-ake 『彼女、彼の』	hi-lo 『その』			

l-etu 『私たちの』

l-enu 『あなたたちの』

l-ao 『彼らの』

(A)

(B)

(C)

(D)

tunda l-angu

『果物』『私の』

tunda hi-li

『果物』『この』

tunda li-le

『果物』『あの』

tunda hi-lo

『果物』『その』

tunda li-li-lo-iva

『果物』『熟す』 = 『熟した果物』

tunda li-me-iva

『果物』『熟す』 = 『果物は熟しています』

tunda li-ko nyunba-ni

『果物』『ある』『家に』 = 『果物は家にあります』

mama a-na-li-nunua tunda

『お母さん』『買う』『果物』 = 『お母さんは果物を買います』

形容詞や数詞以外の修飾語が J i / M a クラス [複数] の名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、J i / M a クラス [複数] に照応した形になる。

表 31 Ji/Ma クラス [複数] の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
y-angu 『私の』	ha-ya 『この』	yo-	ya-	ya-
y-ako 『あなたの』	ya-le 『あの』			
y-ake 『彼女、彼の』	ha-yo 『その』			
y-etu 『私たちの』				
y-enu 『あなたたちの』				
y-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

ma-tunda y-angu

『果物 [複数]』『私の』

ma-tunda ha-ya

『果物 [複数]』『この』

ma-tunda ya-le

『果物 [複数]』『あの』

ma-tunda ha-yo

『果物 [複数]』『その』

ma-tunda ya-li-yo-iva

『果物 [複数]』『熟す』 = 『熟した果物 [複数]』

ma-tunda ya-me-iva

『果物 [複数]』『熟す』 = 『果物 [複数] は熟している』

ma-tunda ya-ko nyumba-ni

『果物 [複数]』『ある』『家に』 = 『果物 [複数] は家にあります』

mama a-na-ya-nunua ma-tunda

『お母さん』『買う』『果物 [複数]』 = 『お母さんは果物を買います』

J i / M a クラス [単数] に所属する名詞と照応するとき、代名詞タイプの照応をする修飾語の形式は、J i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式から形成される。J i / M a クラス [単数] に照応する代名詞タイプ照応形式は、-li-である。J i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式-li-は、J i / M a クラス [単数] の形容詞タイプ照応形式ji-から由来すると考えられるが、どのようにして生じたのか明らかになっていない。

J i / M a クラス [単数] と照応する所有代名詞は、J i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式li-が所有代名詞語幹に付加されて形づくられる。そのとき代名詞タイプ照応形式li-の母音要素は、代名詞語幹初頭の母音の前で脱落する (表 30-A)。

J i / M a クラス [単数] と照応する指示詞『この』は、話し手に近いことを表すhとJ i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式-liをJ i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式の母音要素iで結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表すleにJ i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式li-を結合して形づくられる。指示詞『その』は、J i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式li-と指示関係を表現する-oが結合した形式-loと、指示詞『この』の前半部分が結合して形づくられる (表 30-B)。

関係節標識は、J i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式li-に指示関係を表現する-oが結合して形づくられる。

J i / M a クラス [単数] と照応する主語接辞と目的語接辞は、J i / M a クラス [単数] の代名詞タイプ照応形式li-が用いられる (表 30-D)。

J i / M a クラス [複数] の代名詞タイプ照応形式は、-ya-である。J i / M a クラス

〔複数〕の代名詞タイプ照応形式は、J i / M a クラス形容詞タイプ照応形式 ma-の母音要素と関係があると考えられるが、その関係は明らかではない。

J i / M a クラス〔複数〕と照応する所有代名詞は、J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-を代名詞語幹に付加して形づくられる。このとき、J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-の母音 a は、所有代名詞語幹初頭の母音の前で脱落する（表 31-A）。

J i / M a クラス〔複数〕に照応する指示詞『この』は、話し手に近いことを表す h と J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-を J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式の母音要素 a で結合して形づくられる。J i / M a クラス〔複数〕と照応する『あの』は、話し手から遠いことを表す le に J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-を結合して形づくられる。指示詞『その』は、J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-と指示関係を表す o が結合した形式 yo と、指示詞『この』の前半部分が結合して形づくられる（表 31-B）。

関係節標識は、J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-に指示関係を表現する-o が結合して形づくられる（表 31-C）。

J i / M a クラス〔複数〕と照応する主語接辞と目的語接辞は、J i / M a クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 ya-が用いられる（表 31-D）。

#### [拡大辞]

J i / M a クラスには、「大きいもの」を表す働きがある。他のクラスに所属する名詞に J i / M a クラスの名詞クラス接頭辞を付加することにより、「大きいもの」を表現することができる。すなわち、J i / M a クラスの名詞クラス接頭辞 ji-/ma-は、拡大辞の働きをもつ。J i / M a クラスの名詞クラス接頭辞を付加することにより、規則的に「大きなもの」を表す名詞をつくることができる。他のクラスに所属する名詞クラス接頭辞にかえて、J i / M a クラスの名詞クラス接頭辞 ji-/ma-が接辞される。そのとき、J i / M a クラスの名詞クラス接頭辞が付加される規則にしたがわなければならない。つまり、名詞語幹が単音節からなるとき、あるいは、名詞語幹が母音で始まるときは、J i / M a クラス〔単数〕名詞クラス接頭辞 ji-が接辞される。また、名詞語幹が2音節以上からなり、しかも、語幹が子音で始まるときは、J i / M a クラス〔単数〕名詞クラス接頭辞 ji-は出現しない。

名詞語幹が単音節からなるとき、あるいは、母音で始まるとき、J i / M a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 ji-が接辞されるが、そのとき、複数は、J i / M a クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞 ma-を、J i / M a クラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 ji-をそのまま保持して、接辞される。

〔単数〕          〔複数〕          〔単数〕          〔複数〕

m-toto	wa-toto	toto	ma-toto	『大きい子供』
n-dege	n-dege	dege	ma-dege	『大きい鳥』
n-goma	n-goma	goma	ma-goma	『大きい太鼓』
m-buzi	m-buzi	buzi	ma-buzi	『大きいヤギ』
m-tu	wa-tu	ji-tu	ma-ji-tu	『巨人』
ki-su	vi-su	ji-su	ma-ji-su	『大きいナイフ』
ny-umba	ny-umba	j-umba	ma-j-umba	『ビル』
ny-oka	ny-oka	j-oka	ma-j-oka	『大蛇』

拡大辞 *ji-/ma-*が接辞されて、「大きなもの」を表す名詞を修飾語が修飾するとき、修飾語は、*J i / M a* クラスの形容詞タイプの照応と代名詞タイプの照応をおこなう。

#### 4. 7 *K i / V i* クラス (クラス7・クラス8)

*K i / V i* クラスの単数には、名詞クラス接頭辞 *ki-*が、複数には名詞クラス接頭辞 *vi-*が接辞される。単数と複数が対をなしているので、*K i / V i* クラスと呼ぶ。

*K i / V i* クラスに所属する名詞は、人間がつくるもの、人間が使用するものや道具である。少数の身体名称を表す名詞がこのクラスに所属する。言語の名前も *K i / V i* クラスに所属する。

*K i / V i* クラスは、小さいものを表現するにも用いられる。すなわち、*K i / V i* クラスの名詞クラス接頭辞は、縮小辞としての働きをもつ。

名詞クラス接頭辞 *ki-*と *vi-*をもつ人間や動物の名前がある。これらの名詞は、侮蔑をこめた意味をもつ (*M / W a* クラス、「侮蔑をこめた人間・動物の名前」を参照)。「侮蔑をこめた人間・動物の名前」名詞は、たとえ、*K i / V i* クラスの名詞クラス接頭辞をもつとも、照応に関しては、形容詞タイプの照応についても、代名詞タイプの照応についても、*M / W a* クラスの名詞と同じ振る舞いをするので、*M / W a* クラスに所属させる。

[単数]	[複数]	
ki-tu	vi-tu	『物』
ki-ti	vi-ti	『椅子』
ki-tanda	vi-tanda	『ベッド』
ki-su	vi-su	『ナイフ』
ki-kombe	vi-kombe	『コップ』
ki-jiko	vi-jiko	『スプーン』
ki-tabu	vi-tabu	『本』
ki-oo	vi-oo	『鏡』(不規則、動詞からの派生語?)
ch-akula	vy-akula	『食べ物』

ch-eti	vy-eti	『チケット』
ch-oo	vy-oo	『トイレ』
ch-umba	vy-umba	『部屋』
ki-chwa	vi-chwa	『頭』
ki-fuko	vi-fuko	『小さいポケット、袋』
ki-jiji	vi-jiji	『村』
Ki-swahili		『スワヒリ語』
Ki-ingereza		『英語』
Ki-japani		『日本語』

さらに、K i / V i クラスには様態を表現する名詞が含まれる。様態を表現する名詞は、文において副詞的な働きをする。

ki-dogo	『少し』
vi-zuri	『良く』

mama a-na-pika chakula vi-zuri

『お母さん』『料理する』『良く』 = 『お母さんは上手に料理をします』

単数には名詞クラス接頭辞 ki- が用いられる。名詞語幹が子音で始まる時、名詞クラス接頭辞と語幹のあいだに音変化は生じない (表 32-A)。名詞語幹が母音で始まる時、K i / V i クラス [単数] 名詞クラス接頭辞 ki- は、名詞語幹初頭の母音のまえで音変化して、ch- になる (表 32-B)。

表 32 Ki/Vi クラス [単数] の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹
-C	-V
ki-	ch-
(A)	(B)
-ti	-akula
ki-ti	ch-akula
『椅子』	『食べ物』

複数では名詞クラス接頭辞 vi- が用いられる。名詞語幹が子音で始まる時、名詞クラス接頭辞と語幹のあいだに音変化は生じない (表 33-A)。名詞語幹が母音で始まる時、K

i / V i クラス〔複数〕名詞クラス接頭辞 vi-は、名詞語幹初頭の母音のまえて音変化して、vy-になる（表 33-B）。

表 33 Ki/Vi クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹
-C	-V
vi-	vy-
(A)	(B)
-ti	-akula
vi-ti	vy-akula
『椅子〔複数〕』	『食べ物〔複数〕』

[形容詞タイプの照応]

形容詞や数詞がK i / V i クラスの名詞を修飾するとき、形容詞はK i / V i クラスに照応した形容詞タイプ照応形式が付加される。

K i / V i クラス〔単数〕に照応する形容詞タイプ照応形式は、ki-であり、K i / V i クラス〔複数〕に照応する形容詞タイプ照応形式は、vi-である。

形容詞や数詞がK i / V i クラス〔単数〕名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 ki-が形容詞や数詞語幹に付加される。形容詞や数詞語幹が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない（表 34-A）。形容詞や数詞の語幹が母音 i 以外の母音で始まる時、K i / V i クラス〔単数〕の形容詞タイプ照応形式 ki-は、形容詞語幹初頭の母音のまえて音変化して、ch-になる（表 34-B）（語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照）。形容詞や数詞の語幹が母音 i で始まる時、K i / V i クラス〔単数〕の形容詞タイプ照応形式 ki-の母音 i と形容詞語幹初頭の母音 i は、母音融合して、i になる（表 34-C）。

表 34 Ki/Vi クラス〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹		
-C	-e	-o	-i
ki-	ch-e	ch-o	k-i
(A)	(B)		(C)
-zuri	-ema	-ororo	-ingine
-baya			
-moja			





は、K i / V i クラスに照応した形になる。

形容詞や数詞以外の修飾語がK i / V i クラス〔単数〕の名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、K i / V i クラス〔単数〕に照応した形になる。K i / V i クラス〔単数〕と照応する修飾語の形式は、代名詞タイプ照応形式-ki-から形づくられる。

表 36 Ki/Vi クラス〔単数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
ch-angu 『私の』	hi-ki 『この』	cho-	ki-	ki-
ch-ako 『あなたの』	ki-le 『あの』			
ch-ake 『彼女、彼の』	hi-cho 『その』			
ch-etu 『私たちの』				
ch-enu 『あなたたちの』				
ch-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

ki-tabu ch-angu

『本』『私の』

ki-tabu hi-ki

『本』『この』

ki-tabu ki-le

『本』『あの』

ki-tabu hi-cho

『本』『その』

ki-tabu ki-li-cho-anguka

『本』『落ちる』 = 『落ちた本』

ki-tabu ki-me-anguka chini

『本』『落ちる』『下に』 = 『本が下に落ちている』

ki-tabu ki-ko nyumba-ni

『本』『ある』『家に』 = 『本は家にある』

mama a-na-nunua ki-tabu

『お母さん』『買う』『本』 = 『お母さんは本を買っています』

K i / V i クラス〔単数〕と照応する代名詞タイプ照応形式 ki-は、所有代名詞語幹の初頭母音のまえで音変化をして、ch-になる（表 36-A）。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と代名詞タイプ照応形式-ki を代名詞タイプ照応形式の母音要素 i で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠

いことを表現する-le に代名詞タイプ照応形式 ki-が接辞して形づくられる。指示詞『その』は、代名詞タイプ照応形式 ki-に指示関係を表現する-o が結合した形式-cho に指示詞『この』の前半部分が結合して形づくられる (表 36-B)。

関係節標識は、代名詞タイプ照応形式 ki-に指示関係を表現する形式-o が結合して形づくられる (表 36-C)。

主語接辞と目的語接辞は、代名詞タイプ照応形式 ki-が用いられる (表 36-D)。

形容詞や数詞以外の修飾語がKi / Vi クラス [複数] の名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、Ki / Vi クラス [複数] に照応した形になる。

Ki / Vi クラス [複数] と照応する代名詞タイプの照応をおこなう修飾語は、Ki / Vi クラス [複数] の代名詞タイプ照応形式-vi-から形づくられる。

表 37 Ki/Vi クラス [複数] の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
vy-angu 『私の』	hi-vi 『この』	vyo-	vi-	vi-
vy-ako 『あなたの』	vi-le 『あの』			
vy-ake 『彼女、彼の』	hi-vyo 『その』			
vy-etu 『私たちの』				
vy-enu 『あなたたちの』				
vy-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

vi-tabu vy-angu

『本 [複数]』『私の』

vi-tabu hi-vi

『本 [複数]』『この』

vi-tabu vi-le

『本 [複数]』『あの』

vi-tabu hi-vyo

『本 [複数]』『その』

vi-tabu vi-li-vyo-anguka

『本 [複数]』『落ちる』 = 『落ちた本 [複数]』

vi-tabu vi-me-anguka chini

『本 [複数]』『落ちる』『下に』 = 『本 [複数] が下に落ちている』

vi-tabu vi-ko nyumba-ni

『本 [複数]』『ある』『家に』 = 『本 [複数] が家にある』

mama a-na-vi-nunua vi-tabu

『お母さん』『買う』『本〔複数〕』 = 『お母さんは本〔複数〕を買っています』

K i / V i クラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 vi-は、所有代名詞語幹の初頭母音のまえで音変化をして、vy-になる（表 37-A）。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と代名詞タイプ照応形式-vi を代名詞タイプ照応形式の母音要素 i で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le に代名詞タイプ照応形式 vi-を付加して形づくられる。指示詞『その』は、代名詞タイプ照応形式 vi-に指示関係を表現する-o が結合した形式-vyo に、指示詞『この』の前半部分が付加して形づくられる（表 37-B）。

関係節標識は、代名詞タイプ照応形式 vi-に指示関係を表現する形式-o が結合して形づくられる（表 37-C）。

主語接辞と目的語接辞は、代名詞タイプ照応形式 vi-が用いられる（表 37-D）。

### [縮小辞]

K i / V i クラスは、「小さいもの」を表現する。K i / V i クラスの名詞クラス接頭辞は、他のクラスに所属する名詞に接辞して「小さいもの」を表現する縮小辞の働きをもつ。基本の名詞が、本来、付加される名詞クラス接頭辞にかかわって、K i / V i クラスの名詞クラス接頭辞が名詞語幹に付加される。

[基本形]		[縮小形]		
[単数]	[複数]	[単数]	[複数]	
m-toto	wa-toto	ki-toto	vi-toto	『幼児』
m-lima	mi-lima	ki-lima	vi-lima	『丘』
m-fiko	mi-fuko	ki-fuko	vi-fuko	『小さい袋』
duka	ma-duka	ki-duka	vi-duka	『小さい店』
n-jia	n-jia	ki-jia	vi-jia	『小道』
u-wanja	wanja	ki-wanja	vi-wanja	『地所』

縮小形を形成するとき、名詞語幹が単音節からなるとき、または、名詞語幹が母音で始まるとき、K i / V i クラスの名詞接頭辞 ki-/vi-と語幹のあいだに接頭辞 ji-を付け加える。また、もともと K i / V i クラスに所属する名詞から縮小形を形成するとき、K i / V i クラスの名詞接頭辞 ki-/vi-と語幹のあいだに接頭辞 ji-を付け加える。

[基本形]		[縮小形]		
[単数]	[複数]	[単数]	[複数]	
m-tu	wa-tu	ki-ji-tu	vi-ji-tu	『小人』

mw-ana	w-ana	ki-j-ana	vi-j-ana	『若者』
m-to	mi-to	ki-ji-to	vi-ji-to	『小川』
m-ji	mi-ji	ki-ji-ji	vi-ji-ji	『村』
ji-we	ma-we	ki-ji-we	vi-ji-we	『小石』
m-bwa	m-bwa	ki-ji-bwa	vi-ji-bwa	『子犬』
ny-oka	ny-oka	ki-j-oka	vi-j-oka	『小さい蛇』
ki-tabu	vi-tabu	ki-ji-tabu	vi-ji-tabu	『小さい本』
ki-su	vi-su	ki-ji-su	vi-ji-su	『小さいナイフ』

縮小辞 ki-/vi-が付加されてK i / V i クラスに所属することになった名詞は、形容詞タイプと代名詞タイプの照応に関して、K i / V i クラスの照応をする。ただし、下の1番目の例のように、意味的に人間や動物の名前を表す名詞は、K i / V i クラスの名詞クラス接頭辞が付加された「人間や動物の名前」を表す名詞と同様に、M / W a クラスの形容詞タイプと代名詞タイプの照応をおこなう。それにもかかわらず、下の2番目の例文のように、「小さいこと」を強調したいときには、K i / V i クラスの形容詞タイプ、ならびに、代名詞タイプの照応をする。

ki-toto w-ake a-na-lia

『幼児』『彼女、彼の』『泣く』 = 『彼女、彼の幼児が泣いています』

ki-toto ch-ake ki-na-lia

『幼児』『彼女、彼の』『泣く』 = 『彼女、彼の幼子が泣いています』

#### 4. 8 Nクラス (クラス9・クラス10)

Nクラス名詞は、単数にも複数にも同じ名詞クラス接頭辞 N- (鼻音を代表して大文字の N で書かれる) が接辞されているので、Nクラスと呼ばれる。Nクラス [単数] と Nクラス [複数] は、それぞれ、バントゥ言語学の伝統においてクラス 9、クラス 10 の番号が与えられている。

名詞クラス接頭辞 N-は、後続する名詞語幹の初頭の子音や母音の性格により様々に音変化する。名詞クラス接頭辞に関しては、Nクラス [単数] 名詞にも Nクラス [複数] 名詞にも、同じ名詞クラス接頭辞 N-が接辞されるので、名詞単独では、単数と複数を区別することはできない。また、Nクラスは、形容詞タイプ照応形式が単数と複数で同じ形式をしており、形容詞タイプの照応に関しても単数と複数を区別することができない。名詞を修飾する代名詞や指示詞などの修飾語による代名詞タイプの照応によらなければ、Nクラスは、単数と複数を区別することができない。

Nクラスは、本来、動物の名前の名詞からなるクラスであった。しかし、歴史の過程の中で様々な借用語がこのクラスに所属することになって、Nクラスの意味的な特徴は失わ

れてしまった。スワヒリ語は、名詞を借用するとき、ki-tabu『本』のように語頭の音節の形により借用語の所属するクラスが決定された。名詞 ki-tabu『本』は、アラビア語から借用された。アラビア語は、スワヒリ語の ki-のような名詞クラス接頭辞をもたない。スワヒリ語は、アラビア語の語幹の一部である ki-を名詞クラス接頭辞に解釈した。

借用される語が M/W a クラス、M/M i クラス、J i /M a クラス、K i /V i クラスの名詞クラス接頭辞、m-/wa-、 m-/mi-、ji-/ma-、ki-/vi-などの音節で都合よく始まることはめったにない。Nクラスの名詞クラス接頭辞は、以下で説明するように、借用語をとり入れるのに都合の良い音をしていた。その結果、多くの借用語がNクラスに所属することになったのである。

Nクラスに所属する名詞は、単数にも複数にも名詞クラス接頭辞 N-を接辞される。名詞語幹が、無声子音、鼻音、側面音、ふるえ音、半母音、借用した子音で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、以下のように発音される。

名詞語幹が無声閉鎖子音 p[p]、t[t]、ch[c]、k[k]で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、鼻音として発音されず、後続する無声閉鎖子音が帯気音 [p<sup>h</sup>]、[t<sup>h</sup>]、[c<sup>h</sup>]、[k<sup>h</sup>]で発音される（表 38-B）。ただし、帯気音が無気音であるかは正書法で区別して表記されることはない。ただし、名詞語幹が無声閉鎖子音ではじまろうとも、名詞語幹が単音節からなる時は、名詞クラス接頭辞 N-は、鼻音で発音される（表 38-A）。

名詞語幹が無声摩擦子音 f[f]、s[s]、sh[ʃ]、h[h]で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、全く発音されない。また、名詞語幹が鼻音 m[m]、n[n]、ny[n̩]、ng'[ŋ]で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、全く発音されない。名詞語幹が側面音 l[l]、ふるえ音 r[r]、半母音 w[w]、y[y]で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、全く発音されない。名詞語幹が借用した子音 th[θ]、dh[ð]、gh[ɣ]で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、全く発音されない（表 38-C）。

名詞語幹が有聲閉鎖音で始まる時、名詞クラス接頭辞は、以下のように発音される。名詞クラス接頭辞 N-は、名詞語幹が有聲音で始まる時、鼻音で発音されることがある。そのとき、後続する名詞語幹の有聲音が両唇音 b、あるいは、v であれば、m[m]で発音される（表 38-D）。ただし、語幹が両唇有聲音 b や v ではじまっても、名詞クラス接頭辞 N-が発音されないことがある（表 38-E）。

名詞語幹が歯茎有聲閉鎖音 d や z で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、歯茎鼻音 n[n]で発音される（表 38-F）。ただし、名詞語幹が歯茎有聲音 d や z ではじまっても、名詞クラス接頭辞 N-は、発音されないことがある（表 38-G）。

名詞語幹が硬口蓋有聲閉鎖音 j で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、硬口蓋鼻音 ny[n̩]で発音される（表 38-H）。ただし、名詞語幹が硬口蓋有聲音 j ではじまっても、名詞クラ

ス接頭辞 N-は、発音されないことがある (表 38-I)。

名詞語幹が軟口蓋有声音 g で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、軟口蓋鼻音 ng'[ŋ] で発音される (表 38-J)。ただし、名詞語幹が軟口蓋有声音 g ではじまっても、名詞クラス接頭辞 N-は、発音されないことがある (表 38-K)。

名詞クラス接頭辞 N-とそれに後続する語幹初頭の子音がつくる鼻音と有声閉鎖音の連続は、正書法では、それぞれ、mb、nd、nj、ng と表記される。

名詞語幹が母音で始まる時、名詞クラス接頭辞 N-は、硬口蓋鼻音 ny[n] で発音される (表 38-L)。正書法では ny で表記される。また、名詞語幹が母音ではじまっても、名詞クラス接頭辞 N-は、全く付加されないことがある (表 38-M)。

名詞クラス接頭辞 N-が付加されていても発音されないのか、あるいは、名詞クラス接頭辞 N-がそもそも付加されていないのか、そのどちらとも判断することができないことが多い。名詞クラス接頭辞 N-が付加されない名詞が現れたのは、このクラスに多くの借用語が所属することになったことによると考えられる。

〔単数〕	〔複数〕	
picha	picha	『絵』
posta	posta	『郵便』
pesa	pesa	『お金』
taa	taa	『ランプ』
teksi	teksi	『タクシー』
chumvi	chumvi	『塩』
chupa	chupa	『ビン』
n-chi	n-chi	『国家』
n-ta	n-ta	『蜜蝋』
kalamu	kalamu	『ペン』
karatasi	karatasi	『紙』
faida	faida	『利益』
fedha	fedha	『お金』
sinema	sinema	『映画』

sahani	sahani	『皿』
safari	safari	『旅』
siku	siku	『日』
shauri	shauri	『忠告』
shati	shati	『シャツ』
homa	homa	『マラリア』
huzuni	huzuni	『悲しみ』
m-begu	m-begu	『種』
m-buga	m-buga	『草原』
m-vi	m-vi	『白髪』
n-dizi	n-dizi	『バナナ』
n-jugu	n-jugu	『落花生』
n-gano	n-gano	『小麦粉』
n-gazi	n-gazi	『はしご』
n-guo	n-guo	『衣服、布』
barabara	barabara	『道路』
bunduki	bunduki	『銃』
bahati	bahati	『運』
ny-ama	ny-ama	『肉』
ny-ota	ny-ota	『星』
mashine	mashine	『機械』
mate	mate	『唾液』
nafasi	nafasi	『機会』
arusi	arusi	『結婚式』
theluji	theluji	『雪』
gharama	gharama	『費用』
reli	reli	『鉄道』
wiki	wiki	『週』

表 38 Nクラス〔単数〕〔複数〕の名詞クラス接頭辞

子音語幹（無声子音、鼻音、側面音、ふるえ音、半母音、借用した音で始まる語幹）

単音節語幹

-t, -ch,

n-

(A)

多音節語幹

-p, -t, -ch, -k,

φ-（帯気音で発音される）

(B)

n-chi 『国家』  
n-ta 『蜜蝋』

-picha 『絵』  
-taa 『ランプ』

-f, -s, -sh, -h,  
-m, -n, -ny, -ng'  
-l, -r, -w, -y, -th, -dh, -gh

φ-  
(C)

-fedha 『お金』  
-ng'ombe 『牛』  
-lugha 『言語』  
-wiki 『週』  
-dhoruba 『嵐』

子音語幹（有声子音で始まる語幹）

-b, -v  
m-b  
m-v  
(D)

-b, -v  
φ-  
(E)

m-begu 『種』  
m-vua 『雨』

-bahari 『海』  
-bei 『価格』

-d, -z  
n-d  
(F)

-d  
φ-  
(G)

n-dizi 『バナナ』  
n-doa 『結婚』

-damu 『血液』  
-desturi 『慣習』

-j  
n-j  
(H)

-j  
φ-  
(I)

n-jia 『道』

-jasho 『汗』



n-jugu 『落花生』

-g	-g
n-g	φ-
(J)	(K)

n-guvu 『力』	-gilasi 『グラス』
n-goma 『太鼓』	

母音語幹

-V	-V
ny-	φ-
(L)	(M)

ny-umba 『家』	-asali 『蜂蜜』
-------------	-------------

[形容詞タイプの照応]

Nクラスに所属する名詞を形容詞や数詞が修飾するとき、Nクラスに照応する照応形式が用いられる。Nクラスの名詞クラス接頭辞と同様に、Nクラスに照応する形容詞タイプの照応形式は単数と複数が同じ形をしており、単数と複数を区別することができない。

Nクラスの形容詞タイプの照応には、形容詞タイプ照応形式N-が用いられる。Nクラスの形容詞タイプ照応形式 N-は、名詞クラス接頭辞N-と同様に、後続する形容詞や数詞の初頭の子音や母音の性格により様々な音変化をおこなう。

形容詞語幹が無声子音ではじまり、しかも、形容詞語幹が単音節からなるときは、Nクラスの形容詞タイプ照応形式N-が用いられる。形容詞語幹が両唇音 p で始めると、照応形式N-は、音変化して、m になる (表 39-B)。しかし、形容詞や数詞語幹が無声子音ではじまり、しかも、語幹が2音節以上の音節からなるときは、Nクラスの形容詞タイプ照応形式N-は、発音されない (表 39-A)。

形容詞や数詞語幹が有声子音で始めるとき、Nクラスの形容詞タイプ照応形式N-が語幹に付加される。語幹が両唇音 b、唇歯音 v で始めるとき、形容詞タイプ照応形式N-は、音変化して、両唇鼻音 m になる (表 39-C)。形容詞や数詞語幹が歯茎音 d、z で始めるとき、形容詞タイプ照応形式N-は、音変化して、歯茎鼻音 n になる (表 39-D)。形容詞や数詞語

幹が軟口蓋音 *g* で始まる時、形容詞タイプ照応形式 N-は、音変化して軟口蓋鼻音[ŋ]で発音される。ただし、形容詞タイプ照応形式 N-とそれに後続する子音がつくる鼻音・閉鎖音連続[ŋg]は、正書法では *ng* で表記される (表 39-E)。ふるえ音 *r* で語幹が始まる形容詞がある。形容詞語幹がふるえ音 *r* で始まる時は、照応形式 N-とそれに後続する語幹初頭のふるえ音 *r* がつくる鼻音・閉鎖音連続は、*nd* で発音される (表 39-F)。

形容詞語幹が母音で始まる時、Nクラスの形容詞タイプ照応形式 N-は、硬口蓋鼻音 *ny*[ɲ]で発音される (表 39-J) (語幹が母音 *u* で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。ただし、*-ema*『良い』は、不規則な音変化をして、形容詞タイプの照応形式N-は、語幹初頭の母音のまゝで鼻音・閉鎖音連続 *nj* で発音される (表 39-K)。

表 39 Nクラス〔単数〕〔複数〕の形容詞タイプ照応  
子音語幹 (無声子音)

多音節語幹

単音節語幹

-p, -t, -ch, -k, -f

-p

φ-

m-

(A)

(B)

-pana

-pya

-tatu

-chache

-kubwa

-fupi

barabara pana

picha m-pya

『通』『広い』

『絵』『新しい』

picha tatu

『絵』『3』

picha chache

『絵』『少しの』

kalamu fupi

『ペン』『短い』

子音語幹（有声閉鎖音）

-b	-d, -z	-g	
m-	n-	n-	（発音は[ŋ]）
(C)	(D)	(E)	

-baya	-dogo	-gumu
	-zuri	
picha m-baya	picha n-dogo	n-dizi n-gumu
『絵』『悪い』	『絵』『小さい』	『バナナ』『硬い』
	picha n-zuri	
	『絵』『良い』	

子音語幹（ふるえ音）

-r  
n-d  
(F)

-refu  
n-dizi n-defu  
『バナナ』『長い』

母音語幹                      母音語幹（不規則）

-V	-e
ny-	nj-e
(J)	(K)

-ingine	-ema
-eusi	
picha ny-ingine	picha nj-ema
『絵』『もう1つの』	『絵』『良い』

kalamu ny-eusi

『ペン』『黒い』

[代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語がNクラス名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、Nクラス名詞と照応した形をとる。Nクラスに代名詞タイプの照応をおこなう修飾語の形式は、Nクラスの代名詞タイプ照応形式から形成される。

Nクラスの代名詞タイプ照応形式は、単数と複数異なる形をしている。Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式は、-i-であり、Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式は、-zi-である。

表 40 Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
y-angu 『私の』	hi-i 『この』	yo-	i-	i-
y-ako 『あなたの』	i-le 『あの』			
y-ake 『彼女、彼の』	hi-yo 『その』			
y-etu 『私たちの』				
y-enu 『あなたたちの』				
y-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

ny-umba y-angu

『家』『私の』

ny-umba hi-i

『家』『この』

ny-umba i-le

『家』『あの』

ny-umba hi-yo

『家』『その』

ny-umba i-li-yo-vunjika

『家』『壊れる』 = 『壊れた家』

ny-umba i-me-vunjika

『家』『壊れている』 = 『家は壊れている』

picha i-ko nyumba-ni

『絵』『ある』『家に』 = 『絵は家にある』

mama a-na-i-nunua picha

『お母さん』『買う』『絵』 = 『お母さんは絵を買っています』

Nクラス名詞〔単数〕と照応する所有代名詞は、Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式 i-が代名詞語幹に付加されて形づくられる。そのとき、Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式 i-は、所有代名詞語幹の母音のまゝで音変化して y になる (表 40-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h とNクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式-i を代名詞タイプ照応形式-i の母音要素 i で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le にNクラス〔単数〕代名詞タイプ照応形式 i- が接辞して形づくられる。指示詞『その』は、Nクラス〔単数〕代名詞タイプ照応形式 i- に指示関係を表現する-o が結合した形式-yo に、指示詞『この』の前半部分が付加されて形づくられる (表 40-B)。

関係節標識は、Nクラス〔単数〕代名詞タイプ照応形式 i-に指示関係を表現する-o が結合して形づくられる (表 40-C)。

主語接辞と目的語接辞には、Nクラス〔単数〕代名詞タイプ照応形式 i-が用いられる (表 40-D)。

表 41 Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
z-angu 『私の』	hi-zi 『この』	zo-	zi-	zi-
z-ako 『あなたの』	zi-le 『あの』			
z-ake 『彼女、彼の』	hi-zo 『その』			
z-etu 『私たちの』				
z-enu 『あなたたちの』				
z-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

ny-umba z-angu

『家(複数)』『私の』

ny-umba hi-zi

『家(複数)』『この』

ny-umba zi-le

『家(複数)』『あの』

ny-umba hi-zo

『家(複数)』『その』

ny-umba zi-li-zo-vunjika

『家(複数)』『壊れる』 = 『壊れた家』

ny-mba zi-me-vunjika

『家(複数)』『壊れる』 = 『家は壊れている』

picha zi-ko nyumba-ni

『絵(複数)』『ある』『家に』 = 『絵は家にある』

mama a-na-zi-nunua picha

『お母さん』『買う』『絵(複数)』 = 『お母さんは絵を買っています』

Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式は、-zi-である。Nクラス名詞〔複数〕に照応する所有代名詞は、Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 zi-を所有代名詞語幹に付加して形づくられる。そのとき、代名詞タイプ照応形式 zi-の母音 i は、所有代名詞語幹初頭の母音のまゝで脱落する（表 41-A）。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と Nクラス〔複数〕代名詞タイプ照応形式 -zi- を代名詞タイプ照応形式の母音要素 i で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する -le に Nクラス〔複数〕代名詞タイプ照応形式 zi- を付加して形づくられる。指示詞『その』は、Nクラス〔複数〕代名詞タイプ照応形式 zi- と指示関係を表現する -o が結合した形式 -zo に、指示詞『この』の前半部分が付加されて形づくられる（表 41-B）。

関係節標識は、Nクラス〔複数〕代名詞タイプ照応形式 zi- と指示関係を表現する -o が結合して形づくられる（表 41-C）。

主語接辞と目的語接辞には、Nクラス〔複数〕代名詞タイプ照応形式 zi- が用いられる（表 41-D）。

#### 4. 9 U/Nクラス（クラス 11・クラス 10）

U/Nクラスは、単数に名詞クラス接頭辞 u- が付加され、複数に N クラスの名詞クラス接頭辞が付加されるので U/Nクラスと呼ばれる。単数にはバントゥ言語学の伝統ではクラス 11 の番号が与えられ、複数は、名詞クラス接頭辞に関しても、形容詞タイプと代名詞タイプの照応に関しても、Nクラス（複数）と同じ振る舞いをするので、クラス 10 の番号が与えられている。

しかし、U/Nクラスに所属する名詞は、明確に、2つのグループに分けることができる。1つは、単数だけをもち、単数と対をつくる複数をもたない名詞からなり、もう1つ

のグループは、単数と複数の対をつくっている名詞のグループである。

単数だけからなるUクラス〔単数〕名詞は、数えられない物と抽象的な物の名詞である。

形容詞語幹にUクラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 **u-**を接辞することにより、抽象的な意味をもつ名詞（抽象名詞）をつくることができる。形容詞語幹から派生された、抽象的な意味をもつ名詞は、単数だけからなり、複数をもたない。

単数と複数の対をつくっているU/Nクラスの名詞は、長くて、薄い形をした物の名前である。**w-akati**『時間』や**w-imbo**『歌』を長くて、薄い形をした物と考えるのは想像力を働かせすぎであろうか。

抽象物を意味し、単数と対をなす複数をもたないUクラス〔単数〕に所属する名詞の中には、**J i / M a**クラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞 **ma-**を用いて、複数をつくることができる名詞が若干存在する。

〔単数〕

<b>u-nga</b>	『小麦粉』
<b>u-gali</b>	『ウガリ』
<b>u-ji</b>	『かゆ』
<b>u-dongo</b>	『土』
<b>u-meme</b>	『電気』
<b>w-ali</b>	『炊いた米』
<b>u-zuri</b>	『良いこと』
<b>u-toto</b>	『子供であること』
<b>u-tajiri</b>	『金持ちであること』
<b>u-zee</b>	『古い』

〔単数〕

<b>u-baya</b>	『悪いこと』
<b>u-gonjwa</b>	『病気』

〔複数〕

<b>ma-baya</b>
<b>ma-gonjwa</b>

形容詞語幹にUクラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞 **u-**を接辞することにより、抽象的な意味をもつ名詞を、かなり生産的に派生することができる。形容詞語幹から派生した抽象的な意味をもつ名詞は、単数だけからなる。

〔単数〕

<b>u-hodari</b>	『才能』
<b>u-safi</b>	『清潔』
<b>u-kamili</b>	『完全性』

(形容詞語幹)

<b>hodari</b>	『優れている』
<b>safi</b>	『清潔な』
<b>kamili</b>	『完全な』

u-zuri 『美』                      -zuri 『良い』

〔単数〕	〔複数〕	
u-bao	m-bao	『板』
u-beti	beti	『詩節』
u-tambi	tambi	『ろうそくの芯』
u-kuta	kuta	『壁』
u-funguo	funguo	『鍵』
u-siku	siku	『夜』
u-shanga	shanga	『ビーズ』
u-nywele	nywele	『髪の毛』
u-limi	n-dimi	『舌』
w-imbo	ny-imbo	『歌』
w-avu	ny-avu	『魚網』
w-akati	ny-akati	『時間』
uso	ny-uso	『顔』

U/Nクラス〔単数〕の名詞クラス接頭辞は、u-が用いられる。名詞語幹が子音で始まる時、名詞クラス接頭辞と語幹のあいだに音変化は生じない（表 42-A）。名詞語幹が母音で始まる時、名詞クラス接頭辞 u-は、語幹初頭の母音のまゝで音変化して、半母音 w になる（表 42-B）。名詞語幹が母音 u で始まる時、名詞クラス接頭辞 u-と語幹初頭の母音 u は、母音融合して、u になる（表 42-C）。

表 42 U/Nクラス〔単数〕名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹	
-C	-V (u 以外)	-u
u-	w-	u-
(A)	(B)	(C)
u-bao	w-ali	uso
『板』	『米』	『顔』

U/Nクラス〔複数〕の名詞クラス接頭辞は、Nクラスの名詞クラス接頭辞と同じ N-が用いられる。名詞クラス接頭辞 N-は、後続する語幹初頭の子音や母音の性格により様々な音変化をおこなう。

語幹が無声閉鎖子音 p, t, k で始まる時、Nクラスの名詞クラス接頭辞 N-は、発音さ



れず、語幹初頭の無声閉鎖子音 p、t、k が帯気音で発音される。語幹が無声音 f、s、sh で始まるとき、Nクラスの名詞クラス接頭辞 N-は、発音されないか、あるいは、付加されない（表 43-A）。

名詞語幹が有声閉鎖子音で始まるとき、N-クラスの名詞クラス接頭辞N-は、以下のよう  
に発音される。名詞語幹初頭の子音が両唇音 b のときは、両唇鼻音 m で発音される（表  
43-B）。語幹初頭の子音が歯茎音 d のときは、歯茎鼻音 n で発音される（表 43-C）。ただし、  
語幹初頭の子音が有声閉鎖子音であっても、Nクラスの名詞クラス接頭辞 N-を付加しない  
か、あるいは、発音しない名詞が存在する（表 43-D）。

名詞語幹が母音で始まるとき、Nクラスの名詞クラス接頭辞 N-は、硬口蓋鼻音 ny で発  
音される（表 43-E）。

表 43 U/Nクラス〔複数〕名詞クラス接頭辞

子音語幹（無声子音）

-p, -t, -k, -f, -s, -sh

φ- (p、t、k は帯気音で発音される)

(A)

-panga	-tambi	-kuta	-funguo	-siku	-shanga
『刀』	『ろうそくの芯』	『壁』	『鍵』	『夜』	『ビーズ』

子音語幹（有声音）

-b                      -d                                      -b

m-b                    n-d                                      φ-

(B)                    (C)                                      (D)

m-bao	n-dimi	（単数は u-limi）	-beti
『板』	『舌』		『詩節』

母音語幹

-V

ny-

(E)

-imbo

ny-imbo

『歌』

[形容詞タイプの照応]

形容詞や数詞がU/Nクラスの名詞を修飾するとき、形容詞や数詞は、U/Nクラスに照応した形容詞タイプ照応形式にもとづいた形式になる。

U/Nクラス〔単数〕名詞に照応する、形容詞タイプの照応をおこなう修飾語を形成するには、形容詞タイプ照応形式 m-が用いられる。形容詞や数詞がU/Nクラス〔単数〕の名詞を修飾するとき、形容詞タイプ照応形式 m-が形容詞や数詞語幹に付加される。形容詞や数詞語幹が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式と語幹のあいだに音変化は生じない(表 44-A)。形容詞や数詞の語幹が母音で始まると、形容詞タイプ照応形式 m-と形容詞や数詞語幹の初頭母音のあいだに、わたり音 w が挿入される(表 44-B) (語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。

表 44 U/Nクラス〔単数〕の形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
m-	mw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	
u-kuta m-zuri	u-kuta mw-ema
『壁』『良い』	『壁』『良い』
u-kuta m-baya	u-kuta mw-ingine
『壁』『悪い』	『壁』『もう1つの』
u-kuta m-moja	
『壁』『1』	

U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、Nクラスの形容詞タイプ照応形式と同じ形をしている。また、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、Nクラスの形容詞タイプ照応形式と音変化に関して同じ振る舞いをする。すなわち、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、形容詞語幹初頭の子音と母音の性格により様々な音変化をおこなう。

形容詞語幹が無声子音で始まる時、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、発音されない、あるいは、付加されない(表 45-A)。

形容詞や数詞語幹が無声子音ではじまろうとも、語幹が単音節からなる時は、U/N

クラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、後続する語幹初頭の子音と同じ調音点の鼻音で発音される。例えば、形容詞-pya『新しい』は、単音節からなり、そして、語幹初頭の子音は、両唇音である。したがって、形容詞-pya『新しい』にU/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-が付加されると、形容詞タイプ照応形式 N-は、両唇鼻音 m-で発音される（表 45-B）。

形容詞語幹が有声子音で始まる時、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、後続する形容詞語幹初頭の子音と同じ調音点の鼻音で発音される。例えば、形容詞-baya『悪い』は、両唇音で始まるので、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、両唇鼻音 m-で発音される（表 45-C）。

形容詞-dogo『小さい』にU/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-が付加されると、形容詞-dogo『小さい』は、歯茎音で始まるので、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、歯茎鼻音 n-で発音される（表 45-D）。

形容詞-gumu『硬い』にU/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-が付加されると、形容詞-gumu『硬い』は、軟口蓋音で始まるので、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、軟口蓋鼻音[n̠]で発音される（表 45-E）。ただし、軟口蓋鼻音とそれに

後続する有声閉鎖音の連続は、正書法では ng で表記される。

形容詞語幹が母音で始まる時、U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応形式 N-は、硬口蓋鼻音 ny-で発音される（表 45-F）。ただし、形容詞-ema『良い』は、U/Nクラス〔複数〕名詞を修飾するとき、不規則的に語幹初頭の母音のまえで、鼻音・閉鎖音結合 nj-で発音される（表 45-G）。

表 45 U/Nクラス〔複数〕の形容詞タイプ照応  
子音語幹（無声子音）

多音節語幹	単音節語幹
-p, -t, -ch, -k, -f	-p
φ-	m-
(A)	(B)
-pana	-pya
-tatu	
-chache	
-kubwa	
-fupi	
kuta pana	kuta m-pya

『壁〔複数〕』『広い』

『壁〔複数〕』『新しい』

kuta tatu

『壁〔複数〕』『3』

kuta chache

『壁〔複数〕』『少しの』

kuta kubwa

『壁〔複数〕』『大きな』

kuta fupi

『壁〔複数〕』『短い』

子音語幹（有声子音）

-b, -v

-d, -z

-g

m-

n-

n-

（発音は[ŋ]）

(C)

(D)

(E)

-baya

-dogo

-gumu

-zuri

kuta m-baya

『壁〔複数〕』『悪い』

kuta n-dogo

m-bao n-gumu

『壁〔複数〕』『小さい』『板〔複数〕』『硬い』

kuta n-zuri

『壁〔複数〕』『良い』

母音語幹

母音語幹（不規則）

-V

-e

ny-

nj-

(F)

(G)

-ingine

-ema

-eusi

kuta ny-ingine

『壁〔複数〕』『もう1つの』

kuta nj-ema

『壁〔複数〕』『良い』

m-bao ny-eusi

『板〔複数〕』『黒い』

[代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語がU/Nクラスの名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、U/Nクラスと照応した形になる。U/Nクラスと照応した代名詞タイプの照応をおこなう修飾語の形式は、U/Nクラスの代名詞タイプ照応形式にもとづいて形成される。U/Nクラス〔単数〕と照応する代名詞タイプ照応形式は、-u-である。また、U/Nクラス〔複数〕と照応する代名詞タイプ照応形式は、-zi-であり、Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式と同じ形をしている。

表 46 U/Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
w-angu 『私の』	hu-u 『この』	o-	u-	u-
w-ako 『あなたの』	u-le 『あの』			
w-ake 『彼女、彼の』	hu-o 『その』			
w-etu 『私たちの』				
w-enu 『あなたたちの』				
w-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

u-kuta w-angu

『壁』『私の』

u-kuta hu-u

『壁』『この』

u-kuta u-le

『壁』『あの』

u-kuta hu-o

『壁』『その』

u-kuta u-li-o-anguka

『壁』『倒れる』 = 『倒れた壁』

u-kuta u-me-anguka

『壁』『倒れる』 = 『壁は倒れている』

u-bao u-ko nyumba-ni

『板』『ある』『家に』 = 『板は家にある』

mama a-na-u-nunua u-bao

『お母さん』『買う』『板』 = 『お母さんは板を買っています』

U/Nクラス〔単数〕と照応する所有代名詞は、U/Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ

照応形式 **u-**が所有代名詞語幹に付加されて形づくられる。そのとき、U/Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式 **u-**は、所有代名詞語幹の初頭母音のまゝで音変化して、**w** になる（表 46-A）。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する **h** と代名詞タイプ照応形式-**u** を代名詞タイプ照応形式-**u** の母音要素 **u** で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-**le** に代名詞タイプ照応形式 **u-**を付加して形づくられる。指示詞『その』は、代名詞タイプ照応形式 **u-**に指示関係を表現する-**o** が結合した形式-**o** に、指示詞『この』の前半部分が接辞して形づくられる（表 46-B）。

関係節標識は、代名詞タイプ照応形式 **u-**に指示関係を表現する-**o** が結合して形づくられる（表 46-C）。

主語接辞と目的語接辞は、U/Nクラス〔単数〕の代名詞タイプ照応形式 **u-**が用いられる（表 46-D）。

U/Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式は、Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式-**zi-**と同じである。U/Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式は、Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式と全く同じ振る舞いをする。

表 47 U/Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
z-angu 『私の』	hi-zi 『この』	zo-	zi-	zi-
z-ako 『あなたの』	zi-le 『あの』			
z-ake 『彼女、彼の』	hi-zo 『その』			
z-etu 『私たちの』				
z-enu 『あなたたちの』				
z-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

kuta z-angu

『壁〔複数〕』『私の』

kuta hi-zi

『壁〔複数〕』『この』

kuta zi-le

『壁〔複数〕』『あの』

kuta hi-zo

『壁〔複数〕』『その』

kuta zi-li-zo-anguka

『壁〔複数〕』『倒れる』 = 『倒れた壁〔複数〕』

kuta zi-me-anguka

『壁〔複数〕』『倒れる』 = 『壁〔複数〕は倒れている』

m-bao zi-ko nyumba-ni

『板〔複数〕』『ある』『家に』 = 『板〔複数〕は家にある』

mama a-na-zi-nunua m-bao

『お母さん』『買う』『板〔複数〕』 = 『お母さんは板〔複数〕を買っています』

U/Nクラス〔複数〕と照応する所有代名詞は、U/Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 zi-に所有代名詞語幹が後続して形づくられる。そのとき、代名詞タイプ照応形式 zi-の母音は、所有代名詞語幹初頭の母音のまゝで脱落する（表 47-A）。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と U/Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 zi-を代名詞タイプ照応形式 zi-の母音要素 i で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する -le に代名詞タイプ照応形式 zi-を付加して形づくられる。指示詞『その』は、代名詞タイプ照応形式 zi-に指示関係を表現する -o が結合した形式 -zo に、指示詞『この』の前半部分が付加され形づくられる（表 47-B）。

関係節標識は、代名詞タイプ照応形式 zi-に指示関係を表現する形式 -o が結合して形づくられる（表 47-C）。

主語接辞と目的語接辞は、U/Nクラス〔複数〕の代名詞タイプ照応形式 zi-が用いられる（表 47-D）。

#### 4. 10 Kuクラス（クラス 15）（動詞の不定詞）

動詞語幹に接頭辞 ku-が付加されて、動詞の不定詞が形づくられる。動詞の不定詞は、名詞の性格をもち、名詞の1つのクラスを形成する。バントゥ言語学の伝統では、クラス 15の番号が与えられている。動詞の不定詞を形成するのに、名詞クラス接頭辞 ku-を用いるので、Kuクラスと呼ばれる。Kuクラス（動詞不定詞クラス）は、単数と複数の区別をしない。

ku-soma 『読むこと』

ku-nunua 『買うこと』

ku-taka 『望むこと』

ku-penda 『愛すること』

ku-jifunza 『学ぶこと』

kw-enda 『行くこと』

不定詞をつくる接頭辞 ku-と動詞語幹のあいだに、動詞について説明する箇所解説する目的語接辞を挿入することができる。例えば、動詞語幹 soma 『読む』に先行する位置、Ku クラスの名詞クラス接頭辞 ku-に後続する位置に、目的語接辞 ki-が挿入されている(目的語接辞 ki-は、K i / V i クラス [単数] に照応する目的語接辞である)。

Ku-ki-soma (ki-tabu) 『(本) を読むこと』

Ku-i-nunua (nazi) 『(やしの実) を買うこと』

Ku-li-taka (tunda) 『(果物) を望むこと』

Ku-m-penda(m-toto) 『(子供) を愛すること』

Ku-mw-ambia (mama) 『(おかあさん) に言うこと』

動詞の不定詞は、名詞として主語の位置におかれることも可能である。また、動詞の目的語となることも可能である。例えば、下の 1 番目の文で、動詞の不定詞 Ku-soma ki-tabu 『本を読むこと』が文の主語の位置にある。2 番目の文では、動詞複合体 ni-na-penda 『私は望む』の目的語の位置におかれている。

Ku-soma ki-tabu ni ku-zuri

『読む』『本』『である』『良い』 = 『本を読むことは良い』

Ni-na-penda ku-soma ki-tabu

『好き』『読む』『本』 = 『私は本を読みたい』

また、動詞の不定詞は、文において副詞の働きをすることが可能である。

Ni-me-furahi ku-faulu m-tihani

『喜ぶ』『成功する』『試験』 = 『私は試験に合格してうれしい』

Ni-li-soma sana ili ku-faulu m-tihani

『勉強する』『大層』『ために』『成功する』『試験』 = 『私は試験に合格するために大層勉強した』

上の例で動詞の不定詞からなる不定詞句 ku-faulu m-tihani 『試験に合格すること』は、文の中で副詞の働きをして、述語、あるいは、文全体を修飾していると考えられる。

Ku クラスは、名詞クラス接頭辞 ku-が付加される。動詞語幹が子音で始まる時、名詞クラス接頭辞と語幹のあいだに音変化は生じない(表 48-A)。動詞語幹が母音で始まる時、Ku クラスの名詞クラス接頭辞 ku-と語幹のあいだに、普通、音変化は生じない(表



48-B)。ところが、若干の動詞語幹初頭の母音のまえて名詞クラス接頭辞 ku-の母音 u は、音変化して、半母音 w になる（表 48-C）。語幹が母音で始まる動詞語幹のうち、どの動詞語幹が Ku クラスの名詞クラス接頭辞 ku-の母音 u を音変化させるのか予測できない。

表 48 Ku クラス名詞クラス接頭辞

子音語幹	母音語幹	
-C	-V	-V (若干の語幹)
ku-	ku-	kw-
(A)	(B)	(C)
ku-taka	ku-imba	kw-enda
『望むこと』	『歌うこと』	『行くこと』
ku-penda		kw-isha
『好むこと』		『終えること』

[形容詞タイプの照応]

動詞の不定詞ではあるが名詞の性格をもつので、形容詞などの修飾語により修飾されることが可能である。形容詞や数詞が Ku クラスの名詞（動詞不定詞）を修飾するとき、他のクラスに所属する名詞を修飾するときと同様に、形容詞や数詞などの修飾語は、形容詞タイプの照応をおこなう。Ku クラスの形容詞タイプ照応形式は、ku-である。

形容詞や数詞語幹が子音で始まるとき、形容詞タイプ照応形式 ku-と形容詞や数詞語幹のあいだに音変化は生じない（表 49-A）。形容詞語幹が母音で始まるとき、Ku クラスの形容詞タイプ照応形式 ku-の母音 u は、形容詞語幹初頭の母音のまえて音変化して、半母音 w になる（表 49-B）（語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照）。

表 49 Ku クラス形容詞タイプ照応

子音語幹	母音語幹
-C	-V
ku-	kw-
(A)	(B)
-zuri	-ema
-baya	-ingine
ku-soma ku-zuri	ku-soma kw-ema
『学ぶこと』『良い』	『学ぶこと』『良い』
ku-soma ku-baya	ku-soma kw-ingine
『学ぶこと』『悪い』	『学ぶこと』『もう1つの』

[代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語がKuクラス名詞（動詞不定詞）を修飾するとき、それらの修飾語は、代名詞タイプの照応をおこなう。代名詞タイプの照応をおこなう修飾語は、代名詞タイプ照応形式にもとづいて形づくられる。Kuクラスの代名詞タイプ照応形式は、ku-である。

表 50 Kuクラス代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
kw-angu 『私の』	hu-ku 『この』	ko-	ku-	ku-
kw-ako 『あなたの』	ku-le 『あの』			
kw-ake 『彼女、彼の』	hu-ko 『その』			
kw-etu 『私たちの』				
kw-enu 『あなたたちの』				
kw-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

ku-soma kw-angu

『読むこと』『私の』

ku-soma hu-ku

『読むこと』『この』

ku-soma ku-le

『読むこと』『あの』

ku-soma hu-ko

『読むこと』『その』

ku-soma ku-li-ko-kwisha

『読むこと』『終わる』 = 『終わった読むこと』

ku-soma ku-me-kwisha

『読むこと』『終わる』 = 『読むことは終わっています』

ku-soma ku-ko hapa

『読むこと』『ある』『ここに』 = 『読むことはここにある』

mama a-na-ku-taka ku-soma

『お母さん』『望む』『読むこと』 = 『お母さんは読むことを望んでいます』

Kuクラスと照応する所有代名詞は、Kuクラス代名詞タイプ照応形式 ku-を所有代名

詞語幹に付加して形づくられる。そのとき、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-の母音 u は、所有代名詞語幹初頭の母音のまゝで音変化して、半母音 w になる (表 50-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と K u クラス代名詞タイプ照応形式 -ku を代名詞タイプ照応形式の母音要素 u で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le に K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-を付加して形づくられる。指示詞『その』は、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-に指示関係を表現する-o が結合した形式-ko に、指示詞『この』の前半部分が接辞して形づくられる (表 50-B)。

関係節標識は、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-に指示関係を表現する-o が結合して形づくられる (表 50-C)。

主語接辞と目的語接辞は、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-が用いられる (表 50-D)。

#### [否定の不定詞]

否定の不定詞は、否定の要素 to-を、不定詞をつくる K u クラスの名詞クラス接頭辞 ku-と動詞語幹のあいだに挿入して形づくられる。否定の要素 to-は、K u クラスの名詞クラス接頭辞 ku-に後続し、動詞語幹に先行する位置におかれる。

Ku-to-soma	『読まないこと』
Ku-to-nunua	『買わないこと』
Ku-to-taka	『望まないこと』
Ku-to-penda	『愛さないこと』
Ku-to-ambia	『言わないこと』

目的語接辞を挿入することができる。目的語接辞は、否定の要素 to-に後続し、動詞語幹に先行する位置におかれる。

Ku-to-ki-soma (ki-tabu)	『(本) を読まないこと』
Ku-to-i-nunua (nazi)	『(やしの実) を買わないこと』
Ku-to-li-taka (tunda)	『(果物) を望まないこと』
Ku-to-m-penda (m-toto)	『(子供) を愛さないこと』
Ku-to-mw-ambia (mama)	『(おかあさん) に言わないこと』

否定の不定詞の使い方は、肯定の不定詞の使い方と同じである。主語になることもできる。動詞の目的語になることもできる。下の 1 番目の文で、否定の不定詞からなる不定詞句 ku-to-soma ki-tabu 『本を読まないこと』は、主語の位置におかれる。2 番目の文では、動詞複合体 a-na-taka 『彼女は望む』の目的語になっている。

Ku-to-soma ki-tabu ni ku-baya.

『読まないこと』『本』『です』『悪い』 = 『本を読まないことは悪い』

Mama a-na-taka ku-to-nunua ki-tabu.

『お母さん』『望む』『買わないこと』『本』 = 『お母さんは本を買わないことを望む』

#### 4. 11 P a / K u / M u クラス (クラス 16・17・18) (場所の名詞)

場所の名詞クラスと呼ばれている3つの名詞クラスが存在する。P a クラスとK u クラスとM u クラスである。バントゥ言語学の伝統では、P a クラスは、クラス 16、K u クラスは、クラス 17、M u クラスは、クラス 18 の番号が与えられている。

派生によらない、本来のこれらのクラスに所属する名詞は、mahali『場所』、あるいは、pahali『場所』だけである。しかし、名詞に場所の名詞をつくる接尾辞-ni を付加することにより、どのクラスに所属する名詞からも、これらのクラスに所属する名詞を派生することができる。もちろん、いくら派生することができるといっても、意味的に奇妙なものは避けられる。また、地名を表す固有名詞には、場所の名詞をつくる接尾辞-ni を付加することはない。

P a / K u / M u クラスには、特定の名詞クラス接頭辞が存在しない。名詞クラス接頭辞が存在しないので、名詞単独ではP a クラスなのか、K u クラスなのか、M u クラスなのか区別することはできない。なんらかの修飾語が修飾して、照応の形式でP a クラスなのか、K u クラスなのか、M u クラスなのかを区別することができる。

P a / K u / M u クラスの違いは、以下のとおりである。P a クラスは、特定の場所や場所への方向を表す。K u クラスは、不特定の場所や場所の位置を表す。M u クラスは、場所の内部や場所に沿うことを表す。

P a / K u / M u クラスは、単数と複数を区別しない。

P a / K u / M u クラス

mahali	『場所』	
nyumba-ni	『家に』	nyumba
chumba-ni	『部屋に』	chumba
darasa-ni	『教室に』	darasa
meza-ni	『テーブルに』	meza
kiti-ni	『椅子に』	kiti
soko-ni	『マーケットに』	soko
duka-ni	『店に』	duka
njia-ni	『道に』	njia

Mama a-na-pika ch-akula jiko-ni.

『お母さん』『料理する』『食べ物』『台所で』 = 『お母さんは台所で食べ物を料理しています』

Wa-toto wa-na-jifunza Ki-swahili darasa-ni.

『子供達』『学ぶ』『スワヒリ語』『教室で』 = 『子供達はスワヒリ語を教室で学んでいます』

Khamisi a-li-kwenda ku-nunua nyama soko-ni.

『ハミシ』『行く』『買う』『肉』『マーケットで』 = 『ハミシはマーケットで肉を買うために行った』

Ramadhani a-li-kwenda U-laya.

『ラマダニ』『行く』『ヨーロッパ』 = 『ラマダニはヨーロッパへ行った』

Baba na mama wa-li-kaa Uingereza.

『お父さん』『と』『お母さん』『住む』『イギリス』 = 『お父さんとお母さんはイギリスに住んだ』

#### [形容詞タイプの照応]

形容詞や数詞が P a / K u / M u クラスの名詞を修飾するとき、P a / K u / M u クラスに照応した形容詞タイプの照応形になる。P a / K u / M u クラスに照応する形容詞タイプの照応をおこなう修飾語は、P a / K u / M u クラスの形容詞タイプ照応形式にもとづいて形成される。P a / K u クラスの形容詞タイプ照応形式は、それぞれ、pa-、ku-である。また、M u クラスに照応する形容詞タイプ照応形式は、使用されない。

形容詞や数詞語幹が子音で始まる時、形容詞タイプ照応形式 pa-と語幹とのあいだに音変化は生じない(表 51-A)。形容詞や数詞語幹が母音で始まる時、P a クラス形容詞タイプ照応形式 pa-の母音と後続する形容詞語幹の初頭母音のあいだで母音融合が生じる(語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。形容詞語幹が母音 e で始まると、P a クラス形容詞タイプ照応形式 pa-の母音 a と母音 e が母音融合して、母音 e になる(表 51-C)。形容詞語幹が母音 i で始まる時、形容詞タイプ照応形式 pa-の母音 a と語幹初頭の母音 i は、母音融合して、母音 e になる(表 51-C)。

形容詞や数詞語幹が子音で始まる時、K u クラスの形容詞タイプ照応形式 ku-と語幹のあいだに音変化は生じない(表 51-D)。形容詞や数詞が母音で始まる時、K u クラスの形容詞タイプ照応形式 ku-の母音は、後続する形容詞の初頭母音のまえで音変化して、半母音 w になる(表 51-E)(語幹が母音 u で始まる形容詞については、形容詞の説明を参照)。

表 51 P a / K u クラスの形容詞タイプ照応

P a クラス

子音語幹

母音語幹

-C	-e	-i
pa-	p-e	p-e
(A)	(B)	(C)
-zuri	-ema	-ingine
-baya		
-moja		
mahali pa-zuri	mahali p-ema	mahali p-engine
『場所』『良い』	『場所』『良い』	『場所』『もう1つの』
mahali pa-baya		
『場所』『悪い』		
mahali pa-moja		
『場所』『1』		

#### K u クラス

子音語幹

母音語幹

-C

-V

ku-

kw-

(D)

(E)

-zuri	-ema
-baya	-ingine
-moja	
mahali ku-zuri	mahali kw-ema
『場所』『良い』	『場所』『良い』
mahali ku-baya	mahali kw-ingine
『場所』『悪い』	『場所』『もう1つの』
mahali ku-moja	
『場所』『1』	

#### M u クラス

使用されない

#### [代名詞タイプの照応]

形容詞や数詞以外の修飾語が P a / K u / M u クラスの名詞を修飾するとき、それらの修飾語は、P a / K u / M u クラスと照応した代名詞タイプの照応形式になる。P a / K

u / M u クラスと照応した代名詞タイプの照応をする修飾語の形式は、P a / K u / M u クラスの代名詞タイプ照応形式にもとづいて形づくられる。P a クラスの代名詞タイプ照応形式は、pa-である。K u クラスの代名詞タイプ照応形式は、ku-である。M u クラスの代名詞タイプ照応形式は、mu-である。

表 52 P a クラスの代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
p-angu 『私の』	ha-pa 『この』	po-	pa-	pa-
p-ako 『あなたの』	pa-le 『あの』			
p-ake 『彼女、彼の』	ha-po 『その』			
p-etu 『私たちの』				
p-enu 『あなたたちの』				
p-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

mahali p-angu

『場所』『私の』

mahali ha-pa

『場所』『この』

mahali pa-le

『場所』『あの』

mahali ha-po

『場所』『その』

mahali pa-li-po-kufa watu wengi

『場所』『死ぬ』『人たち』『多くの』 = 『多くの人たちが死んだ場所』

mahali pa-me-kufa watu wengi

『場所』『死ぬ』『人たち』『多くの』 = 『多くの人たちが場所で死んでいる』

mahali pa-po hapa

『場所』『ある』『ここに』 = 『場所はここにある』

mama a-na-pa-tafuta mahali

『お母さん』『探す』『場所』 = 『お母さんは場所を探しています』

P a クラスと照応する所有代名詞は、P a クラス代名詞タイプ照応形式 pa-に所有代名詞語幹が後続して形づくられる。そのときP a クラス代名詞タイプ照応形式 pa-の母音と後続する所有代名詞語幹の初頭母音が母音融合する。P a クラス代名詞タイプ照応形式 pa の母音 a と所有代名詞語幹初頭の母音 a は、母音融合して母音 a になる。P a クラス代名

詞タイプ照応形式 pa-の母音 a と所有代名詞語幹初頭の母音 i は、母音融合して、母音 e になる (表 52-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と P a クラス代名詞タイプ照応形式 -pa を代名詞タイプ照応形式の母音要素 a が結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le に P a クラス代名詞タイプ照応形式 pa-が接辞して形づくられる。指示詞『その』は、P a クラス代名詞タイプ照応形式 pa-に指示関係を表現する-o が結合した形式-po に、指示詞『この』の前半部分が接辞して形づくられる (表 52-B)。

関係節標識は、P a クラス代名詞タイプ照応形式 pa-に指示関係を表現する-o が結合して形づくられる (表 52-C)。

主語接辞と目的語接辞は、P a クラス代名詞タイプ照応形式 pa-が用いられる (表 52-D)。

表 53 Ku クラスの代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
kw-angu 『私の』	hu-ku 『この』	ko-	ku-	ku-
kw-ako 『あなたの』	ku-le 『あの』			
kw-ake 『彼女、彼の』	hu-ko 『その』			
kw-etu 『私たちの』				
kw-enu 『あなたたちの』				
kw-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

mahali kw-angu

『場所』『私の』

mahali hu-ku

『場所』『この』

mahali ku-le

『場所』『あの』

mahali hu-ko

『場所』『その』

mahali ku-li-ko-kufa watu wengi

『場所』『死ぬ』『人たち』『多くの』 = 『多くの人たちが死んだ場所』

mahali ku-me-kufa watu wengi

『場所』『死ぬ』『人たち』『多くの』 = 『多くの人たちが場所で死んでいる』

mahali ku-ko huku

『場所』『ある』『ここに』 = 『場所がここにある』

mama a-na-ku-tafuta mahali



『お母さん』『探す』『場所』 = 『お母さんは場所を探しています』

K u クラスと照応する所有代名詞は、K u クラスの代名詞タイプ照応形式 ku-に所有代名詞語幹が後続して形づくられる。そのときK u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-の母音 u は、代名詞語幹の母音のまゝで音変化して、半母音 w になる (表 53-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h と K u クラス代名詞タイプ照応形式 -ku を、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-の母音要素 u で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-le に K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-が接辞して形づくられる。指示詞『その』は、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-に指示関係を表現する-o が結合した形式-ko に、指示詞『この』の前半部分が接辞して形づくられる (表 53-B)。

関係節標識は、K u クラス代名詞タイプ照応形式 ku-に指示関係を表現する-o が結合して形づくられる (表 53-C)。

主語接辞と目的語接辞は、K u クラスの代名詞タイプ照応形式 ku-が用いられる (表 53-D)。

表 54 M u クラスの代名詞タイプ照応

所有代名詞	指示詞	関係節標識	主語接辞	目的語接辞
mw-angu 『私の』	hu-mu 『この』	mo-	mu-	mu-
mw-ako 『あなたの』	mu-le 『あの』			
mw-ake 『彼女、彼の』	hu-mo 『その』			
mw-etu 『私たちの』				
mw-enu 『あなたたちの』				
mw-ao 『彼らの』				
(A)	(B)	(C)	(D)	

mahali mw-angu

『場所』『私の』

mahali hu-mu

『場所』『この』

mahali mu-le

『場所』『あの』

mahali hu-mo

『場所』『その』

mahali mu-li-mo-kufa watu wengi

『場所』『死ぬ』『人たち』『多くの』 = 『多くの人たちが死んだ場所』

mahali mu-me-kufa watu wengi

『場所』『死ぬ』『人たち』『多くの』 = 『多くの人たちは場所で死んでいます』

mahali mu-mo humu

『場所』『ある』『ここに』 = 『場所はどこにある』

mama a-na-mu-tafuta mahali

『お母さん』『探す』『場所』 = 『お母さんは場所を探しています』

Muクラスと照応する所有代名詞は、Muクラス代名詞タイプ照応形式 mu-に所有代名詞語幹が後続して形づくられる。そのときMuクラスの代名詞タイプ照応形式 mu-の母音 u は、所有代名詞語幹初頭の母音のまえで音変化して、半母音 w になる (表 54-A)。

指示詞『この』は、話し手に近いことを表現する h とMuクラス代名詞タイプ照応形式 -mu を、Muクラスの代名詞タイプ照応形式 mu-の母音要素 u で結合して形づくられる。指示詞『あの』は、話し手から遠いことを表現する-leにMuクラス代名詞タイプ照応形式 ku-を接辞して形づくられる。指示詞『その』は、Muクラス代名詞タイプ照応形式 mu-と指示関係を表現する-o が結合した形式-mo に、指示詞『この』の前半部分が接辞して形づくられる (表 54-B)。

関係節標識は、Muクラス代名詞タイプ照応形式 mu-と指示関係を表現する-o が結合して形づくられる (表 54-C)。

主語接辞と目的語接辞は、Muクラスの代名詞タイプ照応形式 mu-が用いられる (表 54-D)。

Paクラスは、特定の場所や場所への方向を、Kuクラスは、不特定の場所や場所への方向を、Muクラスは、場所の内部や場所に沿うことを表す。文中で指示される同一の場所が、特定の場所か、不特定の場所か、場所の内部であるかにしたがって、Paクラスか、Kuクラスか、Muクラスか、照応形が原則として統一されなければならない。例えば、下の1番目の文は、所有代名詞 p-angu 『私の』も、述語 pa-po 『ある』も、場所の指示詞 hapa 『ここ』も、全て、Paクラスで統一されている。文中で指示されている場所が特定の場所である。もしも、下の2番目の文のように、文中で同一の場所を指示しているにもかかわらず、Paクラス、Kuクラス、Muクラスの照応形が混在すると、その文は、非文となる。

Mahali p-angu pa-po hapa.

『場所』『私の』『ある』『ここ』 = 『私の場所はどこにある』

\*Mahali p-angu pa-ko huku.

『場所』『私の』『ある』『ここ』 = 『私の場所はどこにある』

P a / K u / M u クラスの照応の統一は、あくまでも原則であって、話し言葉の中では守られないことがある。

場所を尋ねる疑問文は、普通、K u クラスの照応形が用いられる。なぜなら、話し手が場所について知識がないから、聞き手に質問しているのである。話し手にとって場所は不特定の場所となる。例えば、疑問詞 wapi 『どこ』を用いた疑問文では、普通、K u クラスの照応形が現れる。

Ki-tabu ch-ako ki-ko wapi?

『本』『あなたの』『ある』『どこ』 = 『あなたの本は、どこにありますか』

Yes-No の答えを要求する疑問文においては、上で解説したことは当てはまらない。話し手と聞き手にあいだに特定の場所であるとの認識があれば、P a クラスの照応形が用いられる。ただし、文中でP a クラス、K u クラス、M u クラスの照応が統一されなければならないという原則は存在する。

Ki-tabu ch-ako ki-po hapa?

『本』『あなたの』『ある』『ここ』 = 『あなたの本はどこにありますか』

## 5 形容詞と形容詞の役割をはたす修飾語

形容詞と数詞は、名詞のクラスに照応して形をかえる、照応という現象がスワヒリ語にはある。しかし、名詞のクラスに照応して形をかえる、照応をする本来の形容詞や数詞は、実際には多くない。下の例において、形容詞-zuri 『良い』は、名詞のクラスに照応して形をかえる形容詞であり、形容詞 tajiri 『金持ちの』は、照応しない形容詞である。また、本来の形容詞や数詞に代わって名詞を修飾する修飾語をつくる様々なやり方がある。

形容詞と形容詞の役割をはたす修飾語は、普通、名詞に後続して名詞を修飾する働きをもつ。また、形容詞と形容詞の役割をはたす修飾語は、名詞に後続して名詞を修飾するだけでなく、動詞や繫辞 ni 『です』（‘This is a pen’の is のように主語と補語をつなぐ役割をする語）に後続する位置におかれて補語の働きをすることができる。例えば、下の3番目の文では形容詞 m-zuri 『良い』が繫辞に後続する位置におかれ、補語の働きをしている。

m-toto m-zuri

『子供』『良い、美しい』

wa-tu tajiri

『人々』『金持ちの』

M-toto huyu ni m-zuri

『子供』『この』『です』『良い』 = 『この子供は良い』

Wa-tu ha-wa ni tajiri

『人々』『この』『です』『金持ちの』 = 『これらの人々は金持ちです』

## 5. 1 形容詞

本来の形容詞は、それが修飾する名詞の名詞クラスに照応して形をかえる。形容詞がおこなう照応を、形容詞タイプの照応と呼ぶ。照応をおこなう、いわゆる、本来の形容詞や数詞は、スワヒリ語に多くない。照応をおこなう形容詞や数詞は、辞書において見出し語の形容詞や数詞語幹のまえにハイフンをつけて書き表す約束になっている。ただし、新聞や雑誌など出版されるテキストにおいて、ハイフンを書くことはしない。

名詞を修飾する形容詞であっても借用語は、形容詞タイプの照応をおこなわない。たとえどのクラスに所属する名詞を修飾しようとも、借用された形容詞は、全く形をかえない。照応をおこなわない形容詞は、辞書において見出し語の語幹のまえにハイフンを書かないことで照応をおこなわないことを示す約束になっている。

[照応をする形容詞]

- pana 『広い』
- baya 『悪い』
- tupu 『空の』
- dogo 『小さい』
- chache 『少ない』
- kubwa 『大きい』
- gumu 『硬い』
- fupi 『短い』
- vivu 『怠け者の』
- zuri 『良い』
- shenzi 『野蛮な』
- moja 『1』
- nene 『太い』
- refu 『長い』 (N クラス注意)
- wili 『2』 (N クラス注意)
- wivu 『妬ましい』 (N クラス注意)
- ingi 『多い』
- ingine 『もう 1 つの』
- ema 『良い』 (N クラスで不規則)

-eusi	『黒い』
-eupe	『白い』
-ekundu	『赤い』
-anana	『やわらかい』
-ororo	『やわらかい』
-ume	『男の、雄の』
-pya	『新しい』
-ke	『女の、雌の』
-nne	『4』

第4章で名詞クラスの形容詞タイプの照応について既に詳しく説明したので、ここではあらためて説明しない。形容詞タイプの照応形式を表にしておく。ただし、表には説明を目的にして無理につくったため、意味が奇妙な例を含んでいる。

表 55 形容詞タイプの照応

	-tupu	-nene	-pya				
M/Wa [単数]	m-tupu	m-nene	m-pya				
M/Wa [複数]	wa-tupu	wa-nene	wa-pya				
M/Mi [単数]	m-tupu	m-nene	m-pya				
M/Mi [複数]	mi-tupu	mi-nene	mi-pya				
Ji/Ma [単数]	-tupu	-nene	ji-pya				
Ji/Ma [複数]	ma-tupu	ma-nene	ma-pya				
Ki/Vi [単数]	ki-tupu	ki-nene	ki-pya				
Ki/Vi [複数]	vi-tupu	vi-nene	vi-pya				
N [単数]	-tupu	-nene	m-pya				
N [複数]	-tupu	-nene	m-pya				
U/N [単数]	m-tupu	m-nene	m-pya				
U/N [複数]	-tupu	-nene	m-pya				
Ku (不定詞)	ku-tupu	ku-nene	ku-pya				
Pa	pa-tupu	pa-nene	pa-pya				
Ku	ku-tupu	ku-nene	ku-pya				
Mu	m-tupu	m-nene	m-pya				
	-baya	-dogo	-refu	-wili	-ingine	-eusi	-ema
M/Wa [単数]	m-baya	m-dogo	m-refu		mw-ingine	mw-eusi	mw-ema
M/Wa [複数]	wa-baya	wa-dogo	wa-refu	wa-wili	w-engine	w-eusi	w-ema

M/Mi [単数]	m-baya	m-dogo	m-refu		mw-ngine	mw-eusi	mw-ema
M/Mi [複数]	mi-baya	mi-dogo	mi-refu	mi-wili	m-ngine	my-eusi	my-ema
Ji/Ma [単数]	-baya	-dogo	-refu		j-ngine	j-eusi	j-ema
Ji/Ma [複数]	ma-baya	ma-dogo	ma-refu	ma-wili	m-engine	m-eusi	m-ema
Ki/Vi [単数]	ki-baya	ki-dogo	ki-refu		k-ngine	ch-eusi	ch-ema
Ki/Vi [複数]	vi-baya	vi-dogo	vi-refu	vi-wili	v-ngine	vy-eusi	vy-ema
N [単数]	m-baya	n-dogo	n-defu		ny-ngine	ny-eusi	nj-ema
N [複数]	m-baya	n-dogo	n-defu	m-bili	ny-ngine	ny-eusi	nj-ema
U/N [単数]	m-baya	m-dogo	m-refu		mw-ngine	mw-eusi	mw-ema
U/N [複数]	m-baya	n-dogo	n-defu	m-bili	ny-ngine	ny-eusi	nj-ema
Ku	ku-baya	ku-dogo	ku-refu		kw-ngine	kw-eusi	kw-ema
Pa	pa-baya	pa-dogo	pa-refu		p-engine	p-eusi	p-ema
Ku	ku-baya	ku-dogo	ku-refu		kw-ngine	kw-eusi	kw-ema
Mu	m-baya	m-dogo	m-refu		mw-ngine	mw-eusi	mw-ema

[母音語幹]

形容詞語幹が母音で始まる時、形容詞タイプの照応形式と形容詞語幹のあいだでつぎのような音変化が生じる

1. 形容詞語幹が母音 i で始まる時。

形容詞タイプ照応形式が母音 i で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 i と形容詞語幹初頭の母音 i が母音融合して母音 i になる (i + i → i)。

Ki/Vi [単数] ki + i → k-i ki-tabu k-ngine 『他の本』

Ki/Vi [複数] vi + i → v-i vi-tabu v-ingi 『多くの本 [複数]』

M/Mi [複数] mi + i → m-i mi-ti m-ingi 『多くの木 [複数]』

Ji/Ma [単数] ji + i → j-i tunda j-ngine 『他の果物』

形容詞タイプ照応形式が母音 a で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 a と形容詞語幹初頭の母音 i が母音融合して母音 e になる (a + i → e)。

M/Wa [複数] wa + i → w-e wa-tu w-engi 『多くの人々』

Ji/Ma [複数] ma + i → m-e ma-tunda m-engi 『多くの果物』

Pa (場所) pa + i → pe mahali p-ngine 『他の場所』

形容詞タイプ照応形式が母音 u で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 u が形容詞語幹初頭母音 i のまえて半母音 w になる (u → w/\_i)。

Ku (不定詞) ku + i → kw-i ku-taka kw-ngine 『他の望むこと』

Ku (場所) ku + i → kw-i mahali kw-ngine 『他の場所』

Mu (場所) mu + i → mw-i mahali mw-ingine 『他の場所』

形容詞タイプ照応形式が、子音 m からなるとき、形容詞タイプ照応形式と形容詞語幹初頭母音 i のあいだに、わたり音 w が挿入される。

M/Wa [単数] m + i → mw-i m-tu mw-ingine 『他の人』

M/Mi [単数] m + i → mw-i m-ti mw-ingine 『他の木』

U/N [単数] m + i → mw-I u-kuta mw-ingine 『他の壁』

形容詞タイプ照応形式 N-は、形容詞語幹初頭母音 i のまえて硬口蓋鼻音で発音される。

N [単数] [複数] N + i → ny ndizi ny-ingi 『多くのバナナ [複数]』

U/N [複数] N + i → ny kuta ny-ingi 『多くの壁 [複数]』

## 2. 形容詞語幹が母音 e で始まるとき。

形容詞タイプ照応形式 ki-は、形容詞語幹初頭母音 e のまえて硬口蓋無声音で発音される (ki → ch/\_e)

Ki/Vi [単数] ki + e → ch-e ki-tabu ch-eupe 『白い本』

形容詞タイプ照応形式 vi-や mi-の母音 i は、形容詞語幹初頭母音 e のまえて半母音 y になる (i → y/\_e)

Ki/Vi [複数] vi + e → vy-e vi-tabu vy-eupe 『白い本 [複数]』

M/Mi [複数] mi + e → my-e mi-ti my-eupe 『白い木 [複数]』

形容詞タイプ照応形式 ji-の母音 i は、形容詞語幹初頭母音 e のまえて脱落する (i → ø/\_e)。

Ji/Ma [単数] ji + e → j-e tunda j-eupe 『白い果物』

形容詞タイプ照応形式が母音 a で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 a と形容詞語幹初頭母音 e が母音融合して母音 e になる (a + e → e)

M/Wa [複数] wa + e → w-e wa-tu w-eupe 『白い人々』

Ji/Ma [複数] ma + e → m-e ma-tunda m-eupe 『白い果物 [複数]』

Pa (場所) pa + e → p-e mahali p-eupe 『白い場所』

形容詞タイプ照応形式が、母音 u で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 u が形容詞語幹初頭母音 e のまえて半母音 w になる (u → w/\_e)。

Ku (不定詞) ku + e → kw-e ku-taka kw-ema 『良い望むこと』

Ku (場所) ku + e → kw-e mahali kw-eupe 『白い場所』

Mu (場所) mu + w → mw-e mahali mw-eupe 『白い場所』

形容詞タイプ照応形式が子音 m からなるとき、形容詞タイプ照応形式と形容詞語幹初頭母音 e のあいだに、わたり音 w が挿入される。

M/Wa [単数] m + e → mw-e m-tu mw-eupe 『白い人』

M/Mi [単数] m + e → mw-e m-ti mw-eupe 『白い木』

U/N [単数] m + e → mw-e u-kuta mw-eupe 『白い壁』

形容詞タイプ照応形式 N-は、形容詞語幹初頭母音 e のまえて硬口蓋鼻音で発音される (N

→ ny/\_e)。

N [単数] [複数] N + e → barua ny-eupe 『白い手紙』

U/N [複数] N + e → kuta ny-eupe 『白い壁 [複数]』

### 3. 形容詞語幹が母音 a、o で始まる時。

母音 a、o で語幹が始まる形容詞はきわめて少ない。また、実際に場所の名詞などを修飾して使われるか疑問であるが、もし使うとすれば以下のようなになるだろう。

形容詞タイプ照応形式 ki-は、形容詞語幹初頭母音 a や o のまえて硬口蓋無声音で発音される (ki → ch/\_a/o)。

Ki/Vi [単数] ki + a/o → ch-a/o ch-akula ch-ororo 『やわらかい食べ物』

形容詞タイプ照応形式 vi-や mi-の母音 i は、形容詞語幹初頭母音 a や o のまえて半母音 y になる (i → y/\_a/o)。

Ki/Vi [複数] vi + a/o → vy-a/o vy-akula vy-ororo 『やわらかい食べ物 [複数]』

M/Mi [複数] mi + a/o → my-a/o mi-kate my-ororo 『やわらかいパン [複数]』

形容詞タイプ照応形式が母音 a で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 a は、後続する形容詞語幹初頭母音 a や o と母音融合しない。

M/Wa [複数] wa + a/o → wa-a/o wa-toto wa-anana, wa-toto wa-ororo 『やわらかい人々』

Ji/Ma [複数] ma + a/o → ma-a/o ma-tunda ma-ororo 『やわらかい果物』

Pa (場所) pa + a/o → pa-a/o mahali pa-ororo? 『やわらかい場所』

形容詞タイプ照応形式が母音 u で終わるとき、形容詞タイプ照応形式の母音 u は、形容詞語幹初頭母音 a や o のまえて半母音 w になる (u → w/\_a/o)。

Ku (不定詞) ku + a/o → kw-a/o ku-taka kw-ororo? 『やわらかい望むこと』

Ku (場所) ku + a/o → kw-a/o mahali kw-ororo? 『やわらかい場所』

Mu (場所) mu + a/o → mw-a/o mahali mw-ororo? 『やわらかい場所』

形容詞タイプ照応形式が子音 m からなるとき、形容詞タイプ照応形式と形容詞語幹初頭母音 a や o のあいだに、わたり音 w を挿入する。

M/Mi [単数] m + a/o → mw-a/o m-tu mw-anana, m-tu mw-ororo 『やわらかい人』

M/Mi [単数] m + a/o → mw-a/o m-kate mw-ororo 『やわらかいパン』

U/N [単数] m + a/o → mw-a/o u-bao mw-ororo 『やわらかい板』

形容詞タイプ照応形式 N-は、形容詞語幹初頭母音 a や o のまえて硬口蓋鼻音で発音される (N → ny/\_a/o)。

N [単数] [複数] N + a/o → ny n-ta ny-ororo 『やわらかい蠟』

U/N [複数] N + a/o → ny m-bao ny-ororo 『やわらかい板』

### 4. 形容詞語幹が母音 u で始まる時。

形容詞語幹が母音 u で始まる時、形容詞語幹の初頭母音と形容詞タイプ照応形式との



あいだで母音融合は生じない。また、形容詞タイプ照応形式 m-と形容詞語幹初頭母音 u のあいだにわたり音 w は挿入されない。N クラスの名詞を修飾するときをのぞいて、形容詞語幹と形容詞タイプ照応形式のあいだで音変化は生じない。

形容詞-ume『雄の』がNクラスの名詞を修飾するとき、Nクラスの形容詞タイプ照応形式 N-は、硬口蓋鼻音 ny ではなく、歯茎鼻音と閉鎖子音結合 nd で発音される。

語幹が母音 u で始まる形容詞は、きわめて少ないが、母音 u で始まる形容詞-ume『男の、雄の』がある。形容詞-ume は、その意味から修飾する名詞が限られている。例えば、形容詞-ume は、生物を表す名詞を修飾するが、無生物名詞を修飾するのは困難である。このような理由から、語幹が母音 u で始まる形容詞と形容詞タイプ照応形式とのあいだに生じる音変化の例を、実際の言語資料の中で探すことは困難である。

Ki/Vi [単数]	ki + u → ki-u	ki-jana ki-ume? 『男の若者』
Ki/Vi [複数]	vi + u → vi-u	vi-jana vi-ume? 『男の若者たち』
M/Mi [複数]	mi + u → mi-u	mi-jusi mi-ume 『雄のトカゲ [複数]』
Ji/Ma [単数]	ji + u → ji-u	j-oکا ji-ume 『雄の大蛇』
M/Wa [複数]	wa + u → wa-u	wa-toto wa-ume 『男の子供たち』
Ji/Ma [複数]	ma + u → ma-u	ma-j-oか ma-ume 『雄の大蛇 [複数]』
M/Wa [単数]	m + u → m-u	m-toto m-ume 『男の子供』
M/Mi [単数]	m + u → m-u	m-jusi m-ume 『雄のトカゲ』
N [単数] [複数]	N + u → nd-u	ng'ombe nd-ume 『雄の牛』

#### [子音語幹]

形容詞語幹が子音で始まる時、以下のような音変化が生じる。

#### 5. 形容詞語幹が無声子音や鼻音で始まる時。

形容詞語幹が無声子音で始まる時、形容詞タイプの照応は、形容詞語幹に形容詞タイプの照応形式を付加するだけで良い。形容詞タイプの照応形式と形容詞語幹のあいだで音変化は生じない（表 55 における形容詞-tupu と形容詞-nene の照応を参照）。

ただし、形容詞語幹が単音節からなる時は、J i / M a クラス [単数] の形容詞タイプ照応形式 ji-が語幹に接辞される。また、Nクラス形容詞タイプの照応形式N-は、後続する形容詞語幹初頭の子音と同じ調音点の母音で発音される。

形容詞語幹が2音節以上の音節からなる時は、J i / M a クラス [単数] の形容詞タイプ照応形式 ji-は接辞されない。また、Nクラス形容詞タイプの照応形式N-は、発音されない。

単音節語幹

多音節語幹

Ji/Ma [単数]	ji-pya	-tupu
N [単数]	m-pya	-tupu

#### 6. 形容詞語幹が有声子音で始まる時。

形容詞語幹が有声子音 **b**、**v**、あるいは、**d**、**z** で始まる時、Nクラス [単数] とNクラス [複数] の形容詞タイプ照応形式N-は、後続する形容詞語幹初頭の子音と同じ調音点の鼻音 **m**、あるいは、**n** で発音される。

形容詞語幹が軟口蓋閉鎖音で始まる時、Nクラス [単数] [複数] の形容詞タイプ照応形式N-は、軟口蓋鼻音 [ŋ] で発音される。ただし、軟口蓋鼻音と軟口蓋閉鎖音の連続は、正書法では **ng** で表記する。

形容詞語幹が両唇半母音 **w** で始まる時、Nクラス [単数] [複数] の形容詞タイプ照応形式N-が両唇鼻音 **m** で発音されると同時に、形容詞語幹初頭の子音、両唇半母音 **w** は、両唇有声閉鎖音 **b** になり、先行する両唇鼻音 **m** とともに両唇鼻音・閉鎖子音連続 **mb** を形成する。

形容詞語幹がふるえ音 **r** で始まる時、Nクラス [単数] [複数] の形容詞タイプ照応形式N-が歯茎鼻音 **n** で発音されると同時に、ふるえ音 **r** は、歯茎有声閉鎖音 **d** になり、先行する歯茎鼻音 **n** とともに歯茎鼻音・閉鎖子音連続 **nd** を形成する。

また、語幹が硬口蓋有声子音 **j** で始まる形容詞は、偶然、存在しない。

語幹が有声子音ではじまり、しかも、語幹が単音節からなる形容詞も存在しない。

表 56 形容詞のNクラス照応

	-baya	-vivu	-dogo	-zuri	-gumu	-wili	-refu
N [単数] [複数]	m-baya	m-vivu	n-dogo	n-zuri	n-gumu	m-bili	n-defu

#### [照応をしない形容詞]

借用語と考えられる形容詞は、照応をおこなわない。つまり、これらの形容詞は、どんなクラスに所属する名詞を修飾しようとも、形をかえることはない。

tajiri	『金持ちの』
tele	『豊かな』
kweli	『真実である』
kamili	『完全な』
bora	『優れている』
bure	『役に立たない』
safi	『清潔な』
sawa	『等しい』

shwari 『穏やかな』  
hodari 『能力のある、勇敢な』  
ghali 『高価な』  
laini 『やわらかい』  
rahisi 『たやすい』  
maskini 『貧しい』  
muhimu 『重要な』  
wazi 『あいている』  
imara 『強い』

m-tu muhimu

『人』『重要な』

wa-tu muhimu

『人たち』『重要な』

ki-tu muhimu

『物』『重要な』

vi-tu muhimu

『物〔複数〕』『重要な』

shauri muhimu

『忠告』『重要な』

mashauri muhimu

『忠告〔複数〕』『重要な』

m-tu tajiri

『人』『金持ちの』

wa-tu tajiri

『人たち』『金持ちの』

m-tu maskini

『人』『貧しい』

wa-tu maskini

『人たち』『貧しい』

[名詞に前置される形容詞]

名詞は、他の修飾語と同様に、強調のない文においては、普通、名詞に後続する位置におかれる。しかし、必ず名詞に先行する位置におかれる名詞がある。形容詞 kila 『各々の』だけは、必ず名詞に先行する位置におかれる。

kila m-toto

『各々の』『子供』

kila neno

『各々の』『言葉』

kila mara

『各々の』『時』

Kila m-tu a-na u-koo wake.

『各々の』『人』『もつ』『家族』『彼の』 = 『各々の人は自分の家族をもつ』

## 5. 2 形容詞の役割をはたす修飾語

スワヒリ語は、形容詞を多くもたない。形容詞にかわって名詞を修飾する修飾語をつくる様々なやり方がある。

[名詞修飾語-enye を使った修飾語]

名詞修飾語-enye は、『伴なっている、もっている』を意味し、形容詞にかわって名詞を修飾する働きをもつ。形容詞にかわって名詞を修飾する修飾語は、形容詞タイプの照応をおこなわないので形容詞とは異なる名前、名詞修飾語と呼ぶ。

名詞修飾語-enye は、名詞を後続させて、後続する名詞とともに名詞を修飾する修飾語をつくる。名詞修飾語-enye は、代名詞タイプの照応をおこなう。名詞修飾語-enye は、語幹が母音で始まるので、照応に関して語幹が母音で始まる、代名詞タイプの照応をおこなう修飾語と同じ振る舞いをする。ただし、M/W a クラスの名詞を修飾するときだけ、不規則的に、M/W a クラス [単数] の形容詞タイプの照応をおこなう。

名詞修飾語-enye と名詞からつくられた形容詞の働きをする修飾語は、形容詞として、名詞に後続して名詞を修飾するだけでなく、繫辞 ni 『です』に後続する位置におかれて補語の働きをすることもできる。

表 57 名詞修飾語-enye の照応

	-enya sifa	『名声をもつ』 = 『有名な』
M/Wa [単数]	mw-enye sifa	
M/Wa [複数]	w-enye sifa	
M/Mi [単数]	w-enye sifa	
M/Mi [複数]	y-enye sifa	
Ji/Ma [単数]	l-enye sifa	
Ji/Ma [複数]	y-enye sifa	
Ki/Vi [単数]	ch-enye sifa	

Ki/Vi〔複数〕	vy-enye sifa
N〔単数〕	y-enye sifa
N〔複数〕	z-enye sifa
U/N〔単数〕	w-enye sifa
U/N〔複数〕	z-enye sifa
Ku〔不定詞〕	kw-enye sifa
Pa(場所)	p-enye sifa
Ku(場所)	kw-enye sifa
Mu(場所)	mw-enye sifa

-enye mali	『金持ちの』
-enye maarifa	『教養のある』
-enye giza	『暗い』

m-tu mw-enye sifa

『人』『もっている』『名声』=『有名な人』

wa-tu w-enye sifa

『人々』『もっている』『名声』=『有名な人々』

ch-uo ki-kuu ch-enye sifa

『学校』『大きな』『もっている』『名声』=『有名な大学』

vy-uo vi-kuu vy-enye sifa

『学校〔複数〕』『大きな』『もっている』『名声』=『有名な大学〔複数〕』

ki-tabu ch-enye picha ny-ingi

『本』『もっている』『絵』『多くの』=『多くの絵がある本』

vi-tabu ch-enye picha ny-ingi

『本〔複数〕』『もっている』『絵』『多くの』=『多くの絵がある本〔複数〕』

M-tu huyu ni mw-enye sifa

『人』『この』『です』『もっている』『名声』=『この人は有名です』

Ch-uo ki-kuu hi-ki ni ch-enye sifa

『学校』『大きい』『この』『です』『もっている』『名声』=『この大学は有名です』

名詞修飾語-enye に M/Wa クラス [単数] [複数]』の形容詞タイプ照応形式 m-/wa-が付加された形式、mw-enye と w-enye は、修飾する名詞をとともわずに、単独で『所有者』を意味する名詞としても用いられる。また、これらの形式は、名詞を後続させ、『～の所有者』を意味する複合的な名詞をつくることができる。

Mw-enye duka

『店の所有者』

w-enye duka

『店の所有者たち』

mw-enye shamba

『畑の所有者』

w-enye shamba

『畑の所有者たち』

名詞修飾語-enye に Ku [場所] クラスの代名詞タイプ照応形式 ku-が付加された形式 kw-enye は、名詞に先行して、場所を示す前置詞の働きをする。前置詞 kw-enye は、方向や位置などを表す。しかし、前置詞 kw-enye だけでは、『上に』、『下に』、『～へ』、『～から』など、どの方向なのか、どの位置なのか、区別することはできない。

Ni-na-kwenda kw-enye benki

『いく』『～へ』『銀行』 = 『私は銀行へ行きます』

Wa-tu wa-me-kaa kw-enye majani

『人々』『座る』『～に』『草』 = 『人々は草の上に座っています』

Ki-tabu ki-ko kw-enye meza

『本』『ある』『～に』『テーブル』 = 『本はテーブルの上にあります』

名詞修飾語-enyewe 『～自身』も、名詞修飾語-enye と同様に、基本的には代名詞タイプ照応をおこなうが、やはり、M/Wa クラス [単数] の名詞を修飾するときだけ、不規則的に形容詞タイプの照応形式を付加する。

-enyewe 『自身』

M/Wa [単数] mw-enyewe

M/Wa [複数] w-enyewe

M/Mi [単数] w-enyewe

M/Mi [複数] y-enyewe

Ji/Ma [単数] l-enyewe

Ji/Ma [複数] y-enyewe

Ki/Vi [単数] ch-enyewe

Ki/Vi [複数] vy-enyewe

N [単数]	y-enyewe
N [複数]	ze-nyewe
U/N [単数]	w-enyewe
U/N [複数]	w-enyewe
Ku (不定詞)	kw-enyewe
Pa (場所)	p-enyewe
Ku (場所)	kw-enyewe
Mu (場所)	mw-enyewe

m-toto mw-enyewe

『子供』『自身』

wa-toto w-enyewe

『子供たち』『自信』

ki-tabu ch-enyewe

『本』『そのもの』

vi-tabu vy-enyewe

『本 [複数]』『そのもの』

[所有表現-a を使った修飾語]

所有表現-a とそれに後続する名詞を用いて、名詞を修飾する修飾語をつくることができる。所有表現-a は、『の』を意味する。被所有者名詞は、所有表現-a に先行する位置におかれ、所有者名詞は、所有表現-a に後続する位置におかれる。所有表現-a『の』は、先行する被所有者名詞が所属するクラスに応じて代名詞タイプの照応をおこなう。

表 58 所有表現を使った修飾語の照応

	-a juu	『上の』
M/Wa [単数]	w-a juu	
M/Wa [複数]	w-a juu	
M/Mi [単数]	w-a juu	
M/Mi [複数]	y-a juu	
Ji/Ma [単数]	l-a juu	
Ji/Ma [複数]	y-a juu	
Ki/Vi [単数]	ch-a juu	
Ki/Vi [複数]	vy-a juu	
N [単数]	y-a juu	
N [複数]	z-a juu	

U/N〔単数〕	w-a juu
U/N〔複数〕	z-a juu
Ku〔不定詞〕	kw-a juu
Pa（場所）	p-a juu
Ku（場所）	kw-a juu
Mu（場所）	mw-a juu

-a baridi	『冷たい』
-a moto	『熱い』
-a kushoto	『左の』
-a kulia	『右の』
-a kitoto	『子供っぽい』
-a chini	『下の』
-a kweli	『本当の』
-a Kiswahili	『スワヒリの』
-a mwituni	『野生の』
-a kienyeji	『生まれながらの』

m-toto w-a mwisho

『子供』『の』『終わり』 = 『最後の子供』

ghorofa y-a juu

『床、階』『の』『上』 = 『上の階』

m-tu w-a ki-zungu

『人』『の』『西洋風』 = 『西洋風の人』

wa-tu w-a ki-zungu

『人々』『の』『西洋風』 = 『西洋風の人〔複数〕』

ji-na l-a kizungu

『名前』『の』『西洋風』 = 『西洋風の名前』

n-guo z-a kizungu

『衣服〔複数〕』『の』『西洋風』 = 『西洋風の衣服』

maji ya moto

『水』『の』『火』 = 『お湯』

動詞の不定詞は、名詞の性格をもつので、所有表現-a『の』に後続して、所有表現-a『の』とともに名詞を修飾する修飾語をつることができる。



ch-akula ch-a ku-tosha

『食べ物』『の』『十分である』 = 『十分な食べ物』

ny-imbo z-a ku-pendeza

『歌〔複数〕』『の』『楽しませる』 = 『楽しい歌〔複数〕』

[形容詞の比較表現と最上級表現]

スワヒリ語は、英語のように形容詞の比較級や最上級の形式をもたない。比較表現は、形容詞と、形容詞に後続する比較のための基準を導く接続詞、kuliko『よりも』、kushinda『に勝る』(動詞 shinda『勝つ』の不定詞に由来する)、kupita『を超える』(動詞 pita『過ぎる』の不定詞に由来する)、kuzidi『を過ぎる』(動詞 zidi『増す』の不定詞に由来する)を用いて形づくる。

Ki-su hi-ki ni ki-kali kuliko ki-le.

『ナイフ』『この』『です』『鋭い』『よりも』『あの』 = 『このナイフはあれよりも鋭い』

Mw-anafunzi hu-yu ni hodari kushinda yu-le.

『生徒』『この』『です』『優れている』『に勝る』『あの』 = 『この生徒はあれよりも優れている』

Embe hi-li ni kubwa kupita li-le.

『マンゴー』『この』『です』『大きい』『を超える』『あの』 = 『このマンゴーはあれよりも大きい』

M-kate w-ako ni m-kubwa kuzidi w-angu.

『パン』『あなたの』『です』『大きい』『を超える』『私の』 = 『あなたのパンは私のより大きい』

最上級の表現は、形容詞と、形容詞に後続し、比較のための基準を導く接続詞 kushinda『に勝る』と、-ote『全ての』を用いて形づくる。-ote『全ての』は、修飾される名詞が所属するクラスの複数クラスに照応する。修飾する名詞の複数形を-ote『全ての』に先行する位置に繰り返しても良い。例えば、下の例の1番目の文では、名詞 m-kate『パン』が修飾されている。-ote『全ての』は、名詞 m-kate『パン』が所属する名詞クラスの(複数)クラス、M/M i クラス(複数)に照応している。

M-kate w-ako ni m-kubwa kushinda y-ote.

『パン』『あなたの』『です』『大きい』『に勝る』『全ての』 = 『あなたのパンは全てに勝り大きい(最も大きい)』

Embe l-ako ni kubwa kushinda ma-embe y-ote.

『マンゴー』『あなたの』『です』『大きい』『に勝る』『マンゴー』『全ての』 = 『あなたの

マンゴーは全てのマンゴーに勝り大きい』

Ki-su hi-ki ni ki-kali kushinda vy-ote.

『ナイフ』『この』『です』『鋭い』『に勝り』『全ての』 = 『このナイフは全てに勝り鋭い』

同等比較表現は、形容詞と、形容詞に後続する基準を導く接続詞 sawa na 『と等しく』、kama 『のように』を用いて形づくる。

M-kate w-ako ni m-kubwa sawa na w-angu.

『パン』『あなたの』『です』『大きい』『と等しく』『私の』 = 『あなたのパンは私のと同じくらい大きい』

Embe hi-li ni m-kubwa kama li-le.

『マンゴー』『この』『です』『大きい』『のように』『あの』 = 『このマンゴーはあれと同じくらい大きい』

Ki-su ch-ako ni ki-kali sawa na ch-ake.

『ナイフ』『あなたの』『です』『鋭い』『と等しく』『彼の』 = 『あなたのナイフは彼のとと同じくらい鋭い』

#### [序数詞]

序数詞は、所有表現-a 『の』と数詞を用いて形づくり、順番を表現する。ただし、『1 番目』には、数詞のかわりに動詞-anza 『始まる』の不定詞 kw-anza 『始まること』を用いる。

『1 番目』には、数詞『1』の古い形式 mosi 『1』を用いることがある。また、『2 番目』を形づくるために用いられる数詞『2』は、形容詞語幹-wili 『2』ではなく、名詞語幹 pili 『2』を用いる。

『1 番目の』 -a kwanza, -a mosi

『2 番目の』 -a pili

『3 番目の』 -a tatu

『4 番目の』 -a nne

『5 番目の』 -a tano

『6 番目の』 -a sita

『7 番目の』 -a saba

『8 番目の』 -a nane

『9 番目の』 -a tisa

『最後の』 -a mwisho

m-toto w-a kwanza

『子供』『の』『始まる』 = 『最初の子供』

m-toto w-a pili

『子供』『の』『2』 = 『2 番目の子供』

m-toto w-a tatu

『子供』『の』『3』 = 『3 番目の子供』

ny-umba y-a nne

『家』『の』『4』 = 『4 番目の家』

ny-umba y-a mwisho

『家』『の』『終わり』 = 『最後の家』

mw-ezi w-a kwanza = mw-ezi wa Januari

『月』『の』『始まる』 = 『月』『の』『1 月』 = 『1 月』

mw-ezi w-a pili = mw-ezi w-a Februari

『月』『の』『2』 = 『月』『の』『2 月』 = 『2 月』

Jumamosi (juma 『週』と mosi 『1』からなる)

『土曜日』

Jumapili (juma 『週』と pili 『2』からなる)

『日曜日』

[名詞修飾語-ote 『全ての』、名詞修飾語-o -ote 『どの、どんな』]

名詞修飾語-ote 『全ての』と名詞修飾語-o -ote 『どの、どんな』は、M/W a クラス [単数] の名詞を修飾するときをのぞいて、代名詞タイプの照応をおこなう。

名詞修飾語-ote 『全ての』の意味的な性格から、名詞修飾語-ote 『全ての』は、たいていは、複数クラスの名詞を修飾する。表 59 は、複数クラスの名詞に照応した名詞修飾語-ote 『全ての』の形式をのせている。しかし、単数クラスの名詞を修飾することも可能である。単数クラスの名詞を修飾するときは、名詞修飾語-ote 『全ての』は、『全体の』という意味をもつ。

名詞修飾語M/W a クラス [単数] の名詞を修飾するときをのぞいて、名詞修飾語-ote 『全ての』と名詞修飾語-o -ote 『どの、どんな』の名詞クラスに照応した形式は、語幹-ote と語幹-o に、代名詞タイプ照応形式が付加されて形づくられる。M/W a クラス [単数] の名詞を修飾するときは、形容詞-o -ote 『どの』は、不規則的に ye yote という形式になる。

表 59 -ote、-o -ote の照応

	-ote	-o -ote
M/Wa [単数]		ye y-ote

M/Wa [複数]	w-ote	w-o w-ote
M/Mi [単数]		w-o w-ote
M/Mi [複数]	y-ote	y-o y-ote
Ji/Ma [単数]		l-o l-ote
Ji/Ma [複数]	y-ote	y-o y-ote
Ki/Vi [単数]		ch-o ch-ote
Ki/Vi [複数]	vy-ote	vy-o vy-ote
N [単数]		y-o y-ote
N [複数]	z-ote	z-o z-ote
U/N [単数]		w-o w-ote
U/N [複数]	z-ote	z-o z-ote
Ku (不定詞)	k-ote	k-o k-ote
Pa (場所)	p-ote	p-o p-ote
Ku (場所)	k-ote	k-o k-ote
Mu (場所)	mw-ote	なし

wa-tu w-ote

『人々』『全ての』

mi-chungwa y-ote

『オレンジの木 [複数]』『全ての』

ma-tunda y-ote

『果物 [複数]』『全ての』

n-dizi z-ote

『バナナ [複数]』『全ての』

vi-tabu vy-ote

『本 [複数]』『全ての』

ch-akula ch-ote

『食べ物』『全ての』

M-pe m-tu ye y-ote nafasi

『与える』『人』『どの』『機会』 = 『どの人にも機会を与えろ』

Mi-chungwa y-o y-ote i-na ma-tunda

『オレンジの木 [複数]』『どの』『もつ』『果物』 = 『どのオレンジの木にも実がついています』

Si-na ma-tunda y-o y-ote

『もたない』『果物 [複数]』『どの』 = 『私はどんな果物ももってません』

### 5. 3 数詞

数詞には、修飾する名詞が所属するクラスに応じて照応をする数詞と、照応をしない数詞がある。照応をする数詞は、形容詞タイプの照応をおこなう。照応をしない数詞は、修飾する名詞がどのクラスに所属しても、形をかえない。

修飾する名詞が所属するクラスに応じて照応をする数詞は、『1』から『5』までと、『8』の数詞である。これら6つの数詞は、修飾する名詞のクラスに応じて、形容詞タイプの照応をおこなう。これら以外の数詞は照応をしない。どのクラスに所属する名詞を修飾しようとも、形をかえない。

数詞『2』は、語幹が両唇半母音 *w* で始まる。数詞『2』がNクラスの名詞を修飾するとき、Nクラスの形容詞タイプ照応形式N-は、両唇鼻音 *m* で発音されると同時に、数詞『2』の語幹初頭の両唇半母音 *w* は、有声閉鎖子音 *b* に音変化して、Nクラスの形容詞タイプ照応形式N-とともに、両唇鼻音・閉鎖子音連続 *mb* を形成する。

数を尋ねる疑問詞-*ngapi* 『いくつ』は、形容詞タイプの照応をおこなう。

[照応する数詞]

『1』 -*moja*

『2』 -*wili*

『3』 -*tatu*

『4』 -*nne*

『5』 -*tano*

『8』 -*nane*

『いくつ』 -*ngapi*

M/Wa [単数] *m-toto m-moja*

『子供』『1』

M/Wa [複数] *wa-toto wa-wili*

『子供たち』『2』

*wa-toto wa-tatu*

『子供たち』『3』

*wa-toto wa-nne*

『子供たち』『4』

*wa-toto wa-tano*

『子供たち』『5』

*wa-toto wa-nane*

『子供たち』『8』

M/Mi〔単数〕	m-gomba m-moja 『バナナの木』『1』
M/Mi〔複数〕	mi-gomba mi-wili 『バナナの木〔複数〕』『2』
Ji/Ma〔単数〕	tunda moja 『果物』『1』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ma-wili 『果物〔複数〕』『2』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-moja 『本』『1』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-wili 『本』『2』
N〔単数〕	meza moja 『テーブル』『1』
N〔複数〕	meza m-bili 『テーブル〔複数〕』『2』
U/N〔単数〕	u-kuta m-moja 『壁』『1』
U/N〔複数〕	kuta m-bili 『壁』『2』
Pa (場所)	mahali pa-moja 『場所』『1』

(pa-moja は、単独で『一緒に』という意味をもつ副詞としての働きをもつ。)

Una wa-toto wa-ngapi?

『もつ』『子供達』『いくつ』 = 『あなたは何人の子供をもっていますか』

Una vi-tabu vi-ngapi?

『もつ』『本〔複数〕』『いくつ』 = 『あなたは何冊本をもっていますか』

[照応しない数詞]

『6』	sita
『7』	saba
『9』	tisa
『10』	kumi
『20』	ishirini
『30』	thelathini

- 『40』 arobaini
- 『50』 hamsini
- 『60』 sitini
- 『70』 sabini
- 『80』 themanini
- 『90』 tisini
- 『100』 mia (moja)

wa-tu sita

『人々』『6』

wa-toto ishirini

『子供たち』『20』

vi-tabu saba

『本〔複数〕』『7』

vi-tabu thelathini

『本〔複数〕』『30』

『10』以上の数字を数えるときは、例えば、『10』足す『1』のように、接続詞 na 『と』で数字をつないで数を表現する。そのとき、照応する数詞は、接続詞 na 『と』の後ろにあっても、修飾する名詞のクラスに応じて形をかえる。

[10 以上の数詞] (かっこの中はアラビア語からの借用)

- 『11』 kumi na -moja (edashara)
- 『12』 kumi na -wili (thenashara)
- 『13』 kumi na -tatu (thelatashara)
- 『14』 kumi na -nne (arobatashara)
- 『15』 kumi na -tano (hamstashara)
- 『16』 kumi na sita (sitashara)
- 『17』 kumi na saba (sabatashara)
- 『18』 kumi na nane (themantashara)
- 『19』 kumi na tisa (tishatashara)
- 『21』 ishirini na -moja
- 『31』 thelathini na -moja
- 『111』 mia moja na kumi na -moja

wa-toto kumi na m-moja

『子供たち』『11』

wa-toto kumi na wa-wili

『子供たち』『12』

vi-tabu kumi na vi-tatu

『本〔複数〕』『13』

vi-tabu kumi na sita

『本（複数）』『16』

#### [形容詞の語順]

名詞を修飾する修飾語は、普通、強調のないときには、名詞に後続する位置におかれる。1つの名詞を2つ以上の形容詞が修飾するとき、量を表現する形容詞が質を表現する形容詞より後ろの位置におかれる。しかし、この語順は、厳密に守られない。話題がどこにあるかによって、形容詞の語順は変化する。

w-anafunzi wa-zuri wa-tano

『生徒たち』『良い』『5』 = 『5人の良い生徒たち』

上の例で、量を表現する形容詞-tano『5』は、質を表現する形容詞-zuri『良い』より後ろの位置におかれる。

### 5. 4 指示詞

指示詞は、名詞を修飾するとき、修飾する名詞のクラスに応じて形をかえる。指示詞は、代名詞タイプの照応をおこなう。名詞クラスと照応する指示詞の形式のなりたちについては、既に名詞を説明する箇所解説したので、ここでは名詞クラスと照応した指示詞の形式を表60にまとめておく。

スワヒリ語には3種類の指示詞がある。話し手に近くて聞き手から遠いものを指す指示詞『この』と、話し手からも聞き手からも遠いものを指す指示詞『あの』と、話し手から遠いけれど聞き手に近いものを指す指示詞『その』である。

表 60 指示詞の照応

	『この』	『あの』	『その』
M/Wa [単数]	hu-yu	yu-le	hu-yo
M/Wa [複数]	ha-wa	wa-le	ha-o
M/Mi [単数]	hu-u	u-le	hu-o
M/Mi [複数]	hi-i	i-le	hi-yo
Ji/Ma [単数]	hi-li	li-le	hi-lo



Ji/Ma [複数]	ha-ya	ya-le	ha-yo
Ki/Vi [単数]	hi-ki	ki-le	hi-cho
Ki/Vi [複数]	hi-vi	vi-le	hi-vyo
N [単数]	hi-i	i-le	hi-yo
N [複数]	hi-zi	zi-le	hi-zo
U/N [単数]	hu-u	u-le	hu-o
U/N [複数]	hi-zi	zi-le	hi-zo
Ku (不定詞)	hu-ku	ku-le	hu-ko
Pa	ha-pa	pa-le	ha-po
Ku	hu-ku	ku-le	hu-ko
Mu	hu-mu	m(u)-le	hu-mo

	『この』	『あの』	『その』
M/Wa [単数]	m-tu hu-yu	m-tu yu-le	m-tu hu-yo
M/Wa [複数]	wa-toto ha-wa	wa-toto wa-le	wa-toto ha-o
M/Mi [単数]	m-ti hu-u	m-ti u-le	m-ti hu-o
M/Mi [複数]	mi-chungwa hi-i	mi-chungwa i-le	mi-chungwa hi-yo
Ji/Ma [単数]	tunda hi-li	tunda li-le	tunda hi-lo
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ha-ya	ma-tunda ya-le	ma-tunda ha-yo
Ki/Vi [単数]	ki-tabu hi-ki	ki-tabu ki-le	ki-tabu hi-cho
Ki/Vi [複数]	vi-tabu hi-vi	vi-tabu vi-le	vi-tabu hi-vyo
N [単数]	n-jia hi-i	n-jia i-le	n-jia hi-yo
N [複数]	n-jia hi-zi	n-jia zi-le	n-jia hi-zo
U/N [単数]	u-kuta hu-u	u-kuta u-le	u-kuta hu-o
U/N [複数]	kuta hi-zi	kuta zi-le	kuta hi-zo
Ku (不定詞)	ku-taka hu-ku	ku-taka ku-le	ku-taka hu-ko
Pa	mahali ha-pa	mahali pa-le	mahali ha-po
Ku	mahali hu-ku	mahali ku-le	mahali hu-ko
Mu	mahali hu-mu	mahali m-le	mahali hu-mo

M-toto hu-yu a-na-kwenda duka-ni

『子供』『この』『行く』『店に』 = 『この子供は店に行きます』

Mama a-na-taka ku-nunua mi-chele i-le

『お母さん』『欲しい』『買う』『コメ』『あの』 = 『お母さんはあのコメを買いたい』

Wa-tu ha-wa wa-na-kaa Tanzania

『人々』『この』『住む』『タンザニア』 = 『これらの人々はタンザニアに住んでいます』

Ni-na-taka vi-tabu hi-vi

『欲しい』『本 [複数]』『この』 = 『私はこれらの本が欲しい』

Ni-na-penda ch-akula ki-le

『好き』『食べ物』『あの』 = 『私はあの食べ物が好きです』

U-ni-let-e-e m-kate hu-o

『とる』『パン』『その』 = 『そのパンを私に取ってください』

指示詞は、名詞に後続して名詞を修飾するだけでなく、単独で名詞の代わりをする、代名詞の働きをもつ。

Yu-le ni m-toto w-ake

『あの』『です』『子供』『彼女、彼の』 = 『あれは彼女の子供です』

Ha-wa ni wa-nafunzi wa shule hi-i

『この』『です』『生徒たち』『の』『学校』『この』 = 『これらはこの学校の生徒たちです』

Hi-ki ni ki-tabu ch-angu

『この』『です』『本』『私の』 = 『これは私の本です』

U-le ni m-lima m-refu kuliko y-ote Tanzania

『あの』『です』『山』『高い』『よりも』『全ての』『タンザニア』 = 『あれはタンザニアで一番高い山です』

I-le ni mi-embe y-etu

『あの』『です』『マンゴーの木 [複数]』『私たちの』 = 『あれらは私たちのマンゴーの木 [複数] です』

N-a-taka hi-ki

『欲しい』『この』 = 『私はこれ (Ki/Vi クラス [単数] のもの) が欲しい』

話し手からも聞き手からも遠いものであるとか、話し手に近く聞き手からは遠いものであるとか、指示詞が指示の機能をはたすために名詞を修飾するときは、指示詞は、他の形容詞と同様に名詞に後続する位置におかれる。

スワヒリ語は、英語の定冠詞にあたるものをもたない。スワヒリ語は、既に文中で言及されたものや、話し手と聞き手のあいだで既知のものであると認識されているものを表現するとき、話し手に近く聞き手からは遠いものを指す指示詞『これ』、あるいは、話し手からも聞き手からも遠いものを指す指示詞『あの』を用いる。そのとき、これらの指示詞は、名詞に先行する位置におかれる。

これらの指示詞が名詞に先行する位置におかれるとき、これらの指示詞は、指示の機能というより、むしろ、既に言及されたもの、話し手と聞き手のあいだに既知のものとして了解があるものであることを表現する。話し手に近く聞き手から遠いものを指す指示詞

『この』は、話し手と聞き手がつくる場に近いもので、しかも、既に言及されたものや、話し手と聞き手のあいだで既知のものであると了解があるものに言及するときに、用いられる。

話し手からも聞き手からも遠いものを指す指示詞『あの』は、話し手と聞き手がつくる場から遠いもので、しかも、既に言及されたものや、話し手と聞き手のあいだに既知のものであると了解があるものを言及するときに、用いられる。

スワヒリ語の指示詞は、指示の対象を、話し手に近く聞き手から遠い存在、話し手からも聞き手からも遠い存在、話し手からは遠いが聞き手に近い存在の3つに分割する。しかし、既に指示物が文中で言及されたり、話し手と聞き手のあいだに指示物が既知のものであると了解されていたりすると、指示の分割法は、話し手と聞き手がつくる場に近い存在と、話し手と聞き手がつくる場から遠い存在の2分割となる。

下の第2の文において遠いものを指す指示詞 *yu-le* 『あの』は、修飾する名詞に先行する位置におかれる。指示詞 *yu-le* 『あの』が修飾する名詞 *m-toto* 『子供』は、第1の文において既に言及されたもの *m-toto m-moja* 『1人の子供』を指示している。

*Ni-li-mw-ona m-toto m-moja shule-ni.*

『見る』『子供』『1』『学校で』

*Yu-le m-toto a-li-soma ki-tabu ch-a maktaba.*

『あの』『子供』『読む』『の』『図書館』

＝『私は学校で1人の子供を見ました。その子供は図書館の本を読んでいました』

*Ni-li-nunua ki-tabu ki-moja duka-ni.*

『買う』『本』『1』『店』

*Hi-ki kitabu, m-toto w-angu a-li-ki-taka.*

『この』『本』『子供』『私の』『欲しい』

＝『私は店で1冊の本を買いました。この本は私の子供が欲しがっていた』

## 5. 5 所有代名詞

所有代名詞は、修飾する名詞が所属するクラスに応じて形をかえる。所有代名詞は、代名詞タイプの照応をおこなう。名詞クラスに照応する所有代名詞の形式を、表 61 にまとめる。

所有代名詞は、所有代名詞語幹に代名詞タイプ照応形式が接辞されて形づくられる。所有代名詞語幹には、1人称単数-*angu* 『私の』、2人称単数-*ako* 『あなたの』、3人称単数-*ake* 『彼女の、彼の、その』、1人称複数-*etu* 『私たちの』、2人称複数-*enu* 『あなたたちの』、3人称複数-*ao* 『彼らの』がある。スワヒリ語は、「男性」や「女性」といった文法的「性」の区別をしないので、『彼女の』か『彼の』か『その』か、また、『彼女たちの』か『彼らの』か『それらの』かを区別しない。また、単数と複数だけを区別する。単数と複数で

外の数の区別はない。

所有表現-a『の』は、修飾する名詞が所属するクラスに応じて形をかえる。被所有物名詞が所有表現-a『の』に先行する位置におかれ、所有者名詞が所有表現-a『の』に後続する位置におかれる。所有表現『の』は、所有表現語幹-a『の』に代名詞タイプ照応形式が接辞されて形づくられる。所有表現-a『の』は、先行する被所有物名詞が所属する名詞クラスに照応する。

表 61 所有代名詞の照応

	『私の』	『あなたの』	『彼女、彼の』	『私たちの』	『あなたたちの』	『彼らの』
	-angu	-ako	-ake	-etu	-enu	-ao
M/Wa〔単数〕	w-angu	w-ako	w-ake	w-etu	w-enu	w-ao
M/Wa〔複数〕	w-angu	w-ako	w-ake	w-etu	w-enu	w-ao
M/Mi〔単数〕	w-angu	w-ako	w-ake	w-etu	w-enu	w-ao
M/Mi〔複数〕	y-angu	y-ako	y-ake	y-etu	y-enu	y-ao
Ji/Ma〔単数〕	l-angu	l-ako	l-ake	l-etu	l-enu	l-ao
Ji/Ma〔複数〕	y-angu	y-ako	y-ake	y-etu	y-enu	y-ao
Ki/Vi〔単数〕	ch-angu	ch-ako	ch-ake	ch-etu	ch-enu	ch-ao
Ki/Vi〔複数〕	vy-angu	vy-ako	vy-ake	vy-etu	vy-enu	vy-ao
N〔単数〕	y-angu	y-ako	y-ake	y-etu	y-enu	y-ao
N〔複数〕	z-angu	z-ako	z-ake	z-etu	z-enu	z-ao
U/N〔単数〕	w-angu	w-ako	w-ake	w-etu	w-enu	w-ao
U/N〔複数〕	z-angu	z-ako	z-ake	z-etu	z-enu	z-ao
Ku(不定詞)	kw-angu	kw-ako	kw-ake	kw-etu	kw-enu	kw-ao
Pa	p-angu	p-ako	p-ake	p-etu	p-enu	p-ao
Ku	kw-angu	kw-ako	kw-ake	kw-etu	kw-enu	kw-ao
Mu	mw-angu	mw-ako	mw-ake	mw-etu	mw-enu	mw-ao

表 62 所有表現-aの照応

	-a
M/Wa〔単数〕	w-a
M/Wa〔複数〕	w-a
M/Mi〔単数〕	w-a
M/Mi〔複数〕	y-a
Ji/Ma〔単数〕	l-a
Ji/Ma〔複数〕	y-a
Ki/Vi〔単数〕	ch-a

Ki/Vi〔複数〕	vy-a
N〔単数〕	y-a
N〔複数〕	z-a
U/N〔単数〕	w-a
U/N〔複数〕	z-a
Ku（不定詞）	kw-a
Pa	p-a
Ku	kw-a
Mu	mw-a

名詞のクラスを説明する際に既に説明したように、所有代名詞が名詞を修飾するとき、その名詞がM/W a クラスの名詞クラス接頭辞をもたないが、「人間」や「動物」の名前を表す名詞であれば、不規則的な照応がおこなわれる。M/W a クラスの名詞クラス接頭辞をもたないが、「人間」や「動物」の名前を表す名詞を修飾語が修飾するときの照応の基本原理は、修飾語がM/W a クラスの照応をおこなうことである。しかし、所有代名詞は、以下のように、様々な不規則的な照応をおこなう。

#### [Nクラス「人間」]

どんな名詞クラス接頭辞が付加されようとも、「人間」や「動物」など生物名詞は、形容詞タイプと代名詞タイプの照応に関して、M/W a クラスの照応をひきおこすのが、基本原則である。それにもかかわらず、「人間」を表す名詞がNクラスの名詞クラス接頭辞をもつとき、所有代名詞がそれらの名詞を修飾するときは、所有代名詞は、M/W a クラスの照応ではなく、Nクラス〔単数〕とNクラス〔複数〕の照応をおこなう。

表 63 Nクラス「人間」名詞の所有代名詞照応

	-angu	-ako	-ake
N〔単数〕	rafiki y-angu 『友達』『私の』	mama y-ako 『お母さん』『あなたの』	baba y-ake 『お父さん』『彼女、彼の』
N〔複数〕	rafiki z-angu 『友達たち』『私の』	mama z-ako 『お母さんたち』『あなたの』	baba z-ake 『お父さんたち』『彼女、彼の』

#### [Nクラス「動物」]

生物名詞は、どんな名詞クラスの接頭辞をもとうとも、形容詞タイプ、代名詞タイプの両方の照応に関して、M/W a クラスの照応をひきおこすのが基本原則である。しかし、「動物」の名前を表す名詞がNクラスの名詞クラス接頭辞をもつとき、それらの名詞の〔単数〕を所有代名詞が修飾するときは、所有代名詞は、M/W a クラス〔単数〕の照応をお

こない、〔複数〕を所有代名詞が修飾するときは、Nクラス〔複数〕の照応をおこなう。

表 64 Nクラス「動物」名詞の所有代名詞照応

	-angu	-ako	-ake
N〔単数〕	mbwa w-angu 『犬』『私の』	mbwa w-ako 『犬』『あなたの』	mbwa w-ake 『犬』『彼女、彼の』
N〔複数〕	mbwa z-angu 『犬〔複数〕』『私の』	mbwa z-ako 『犬〔複数〕』『あなたの』	mbwa z-ake 『犬〔複数〕』『彼女、彼の』

[K i / V i クラス「人間」や「動物」]

どんな名詞クラス接頭辞をもとうとも、生物名詞は、形容詞タイプ、代名詞タイプの両方の照応に関して、M/W a クラスの照応をひきおこすことが基本原則である。「人間」や「動物」の名前を表す名詞がK i / V i クラスの名詞クラス接頭辞をもつとき、それらの名詞を所有代名詞が修飾するときは、所有代名詞は、修飾語が「人間」や「動物」の名前を表す名詞を修飾するときの照応の基本原則をまもり、M/W a クラスの照応をする。

表 65 K i / V i クラス「人間」や「動物」の所有代名詞照応

	-angu	-ako	-ake
Ki/Vi〔単数〕	ki-jana w-angu 『若者』『私の』	ki-ongozi w-ako 『指導者』『あなたの』	ki-wete w-ake 『足の不自由な人』『彼女、彼の』
Ki/Vi〔複数〕	vi-jana w-angu 『若者たち』『私の』	vi-ongozi w-ako 『指導者たち』『あなたの』	vi-wete w-ake 『足の不自由な人たち』『彼女、彼の』

生物名詞の照応の基本原則は、どんな名詞クラス接頭辞をもとうとも、「人間」や「動物」などの生物名詞は、M/W a クラスの形容詞タイプならびに代名詞タイプの照応を修飾語に要求することである。

Nクラスの名詞クラス接頭辞は、単数と複数が同じ形式N-をしている。また、M/W a クラスの所有代名詞は、w-angu『私の』、w-ako『あなたの』、w-ake『彼女、彼の』など、偶然、単数と複数が同じ形式をしている。Nクラスの名詞クラス接頭辞をもち、「人間」や「動物」の名前を表す名詞を所有代名詞が修飾するとき、基本原則に従って、所有代名詞がM/W a クラスの照応をおこなえば、名詞と名詞を修飾する所有代名詞の連続は、単数と複数が全く同じ形式になり、単数と複数を区別することができない。

そこで、所有代名詞がNクラスの照応形式を用いれば、たとえ名詞がNクラスの名詞クラス接頭辞をもとうとも、名詞と所有代名詞の連続は、単数と複数を区別することができる。なぜなら、Nクラスの名詞と照応する代名詞タイプの照応形式は、単数-i-と複数-zi-というように、異なる形をしているからである。

所有代名詞は、所有関係を表現する。所有代名詞は、名詞を修飾して名詞に後続するだけでなく、単独で名詞にかわって用いることができる。代名詞の働きをもつ。

m-toto w-angu

『子供』『私の』

wa-toto w-angu

『子供たち』『私の』

ki-tabu ch-angu

『本』『私の』

vi-tabu vy-angu

『本〔複数〕』『私の』

M-toto hu-yu ni w-angu

『子供』『この』『です』『私の』 = 『この子供は私のです』

Wa-toto ha-wa ni w-angu

『子供たち』『この』『です』『私の』 = 『これらの子供達は私のです』

Ni-na-taka ch-ako

『欲しい』『あなたの』 = 『私はあなたの (K i / V i クラス〔単数〕のもの) が欲しい』

Ni-na-taka vy-ake

『欲しい』『彼女、彼の』 = 『私は彼女の (K i / V i クラス〔複数〕のもの) が欲しい』

スワヒリ語は、修飾語の照応に関して、名詞のクラスよりも「生物」名詞であるか、「無生物」名詞であるかの分類が重要な役割を果たしていることを既に述べた。スワヒリ語は、名詞を「生物」名詞と「無生物」名詞に分類する。

所有者名詞が「人間」や「動物」など「生物」名詞のときは、所有者名詞が複数のとき、3人称複数の所有代名詞-ao「彼らの」が用いられる。しかし、所有者名詞が「無生物」のときは、たとえ所有者名詞が複数であろうとも、3人称単数の所有代名詞-ake『彼女、彼の』が用いられる。下の例において「無生物」名詞 meza『テーブル』は、2卓あり、複数であるにもかかわらず、2番目の文において、複数の「無生物」名詞 meza『テーブル』を指す所有代名詞は、3人称単数の所有代名詞-ake『彼女、彼の』が用いられる。

Ni-li-nunua meza mbili

『買う』『テーブル』『2』

mi-guu y-ake i-me-vunjika

『脚』『彼女、彼の』『壊れる』

= 『私はテーブルを2卓買いました。それらの脚は壊れています』

Ni-li-nunua ma-tunda

『買う』『果物〔複数〕』

Bei y-ake i-li-kuwa ghali sana

『値段』『彼女、彼の』『です』『高い』『大変』

= 『私は果物〔複数〕を買いました、それらの値段は大変高かった』

所有代名詞は、他の名詞を修飾する修飾語と同様に、名詞に後続する位置におかれる。所有代名詞以外の修飾語の語順は、かなり自由であるが、所有代名詞だけは、それが名詞句内でおかれる位置に関して制限がある。所有代名詞が形容詞や指示詞など他の名詞修飾語とともに用いられるとき、所有代名詞が他の修飾語よりも名詞に近い位置におかれる。所有代名詞と名詞が、他の修飾語とくらべて、互いに強い関係をもっているためと考えられる。下の文で、所有代名詞 **z-angu** 『私の』や所有代名詞 **vy-ako** 『あなたの』は、それらが修飾する名詞の直後におかれる。

ng'ombe z-angu ha-wa wa-nne

『牛〔複数〕』『私の』『この』『4』

vi-tabu vy-ako vi-le vi-wili

『本〔複数〕』『あなたの』『あの』『2』

所有表現-a『の』は、所有の意味のほかに、所有の意味から発達した名詞を修飾する修飾語をつくる働きをもつ。所有表現-a『の』を用いた名詞修飾語の作り方については、形容詞の説明の箇所ですでに説明した。

所有表現-a『の』を中心に名詞が所有構造をつくるとき、被所有者名詞が所有表現-a『の』に先行する位置におかれ、所有者名詞が所有表現-a『の』に後続する位置におかれる。

所有表現-a『の』は、被所有者名詞が所属するクラスに応じて形をかえる。所有表現-a『の』は、代名詞タイプの照応をおこなう。所有代名詞が、M/W a クラス以外の名詞クラス接頭辞をもつけれど、「人間」や「動物」など「生物」の名前を表す名詞を修飾するとき、「生物」名詞を修飾する修飾語の照応基本原則にしたがわないで、不規則的な照応をおこなうのと同様に、所有表現-a『の』も、M/W a クラス以外の名詞クラス接頭辞をもつ「人」や「動物」の名前を表す名詞を修飾するとき、不規則的な照応をおこなう。

修飾語がM/W a クラス以外の名詞クラス接頭辞をもち、「人間」や「動物」の名前を表す名詞を修飾語が修飾するとき、修飾語は、M/W a クラスの照応をおこなうことが、



基本原則である。しかし、所有表現-a『の』の場合、基本原則にしたがわない、以下のような様々な不規則的な照応がおこなわれる。

[Nクラス「人間」]

Nクラスの名詞クラス接頭辞をもつ「人間」を表す名詞を所有表現-a『の』が修飾するとき、名詞が〔単数〕であろうと、〔複数〕であろうとも、所有表現-a『の』は、M/W aクラスの照応ではなく、〔単数〕は、Nクラス〔単数〕の照応をおこない、〔複数〕は、Nクラス〔複数〕の照応をおこなう（表 66 を参照）。「生物」名詞を所有表現-a『の』が修飾するとき、所有表現-a が、Nクラスの照応をおこなえば、名詞と所有表現の連続は、単数と複数の区別ができる。

しかし、これには、所有代名詞には見られなかった個人語的なゆれがある。

それによると、Nクラスの名詞クラス接頭辞をもつ「人間」や「動物」の名前を表す名詞を所有表現-a『の』が修飾するとき、基本原理どおりにM/W aクラスの代名詞タイプ照応をおこなう個人が存在する（表 67 を参照）。Nクラスの名詞クラス接頭辞をもつ「生物」名詞を所有表現-a『の』が修飾するとき、所有表現-a『の』が「生物」名詞の照応原則にしたがってM/W aクラスの照応をおこなうと、表 67 のように名詞と所有表現の連続は、単数と複数が区別できない。単数と複数の区別ができなくとも、「生物」名詞であるか、「無生物」名詞であるかの区別を優先する個人が存在することを示している。

表 66 Nクラス「人間」の所有表現の照応（1）

	-a Juma	-a Juma	-a Juma
N〔単数〕	rafiki y-a Juma	mama y-a Juma	baba y-a Juma
N〔複数〕	rafiki z-a Juma	mama z-a Juma	baba z-a Juma

表 67 Nクラス「人間」の所有表現の照応（2）

	-a Juma	-a Juma	-a Juma
N〔単数〕	rafiki w-a Juma	mama w-a Juma	baba w-a Juma
N〔複数〕	rafiki w-a Juma	mama w-a Juma	baba w-a Juma

[Nクラスの「動物」]

Nクラスの名詞クラス接頭辞をもつ「動物」の名前を表す名詞を所有表現-a『の』が修飾するとき、名詞が〔単数〕であるときは、所有表現-a『の』は、M/W aクラス〔単数〕の照応をおこない、名詞が〔複数〕であるときは、所有表現-a『の』は、Nクラス〔複数〕の照応をおこなう（表 68 参照）。

これにも個人語的なゆれが存在する。

それによると、Nクラスの名詞クラス接頭辞をもつ「動物」の名前を表す名詞を所有表現が修飾するとき、名詞が〔単数〕であろうが、〔複数〕であろうが、M/W aクラスの照応をおこなう（表 69 参照）。

表 68 Nクラス「動物」の所有表現の照応（1）

	-a Juma	-a Juma
N〔単数〕	mbwa w-a Juma	ng'ombe w-a Juma
N〔複数〕	mbwa z-a Juma	ng'ombe z-a Juma

表 69 Nクラス「動物」の所有表現の照応（2）

	-a Juma	-a Juma
N〔単数〕	mbwa w-a Juma	ng'ombe w-a Juma
N〔複数〕	mbwa w-a Juma	ng'ombe w-a Juma

[K i / V i クラスの「人間」や「動物」]

K i / V i クラスの名詞クラス接頭辞をもつ「人間」や「動物」の名前を表す名詞を所有表現-a『の』が修飾するとき、所有表現-a『の』は、修飾語が「生物」名詞を修飾するさいの照応の基本原則にしたがい、M/W aクラスの照応をおこなう。

表 70 K i / V i クラス「人間」や「動物」の所有表現の照応

Ki/Vi〔単数〕	ki-jana w-a Juma	ki-ongozi w-a Juma	ki-wete w-a Juma
Ki/Vi〔複数〕	vi-jana w-a Juma	vi-ongozi w-a Juma	vi-wete w-a Juma

所有表現-a『の』は、名詞に後続する位置におかれ、名詞を修飾するだけでなく、繫辞『です』に後続する位置におかれ補語の働きをすることも可能である。

M-toto hu-yu ni w-a Juma

『子供』『この』『です』『の』『ジュマ』 = 『この子供はジュマのです』

Ki-tabu ki-le ni ch-a Khamisi

『本』『あの』『です』『の』『ハミシ』 = 『あの本はハミシのです』

所有表現-a『の』のかわりに所有代名詞を用いて、被所有者名詞と所有者名詞をつなぐことができる。どちらの文を用いても意味はかわらない。下の文で所有代名詞-ake『彼女の、彼の』が所有表現-a『の』のかわりに用いられている。被所有者名詞が所有代名詞に先行する位置におかれ、所有者名詞が所有代名詞に後続する位置におかれる。

m-toto w-ake Juma = m-toto w-a Juma

『子供』『彼の』『ジュマ』 = 『ジュマの子供』

vi-tabu vy-ake Khamisi = vi-tabu vy-a Khamisi

『本〔複数〕』『彼の』『ハミシ』 = 『ハミシの本〔複数〕』

## 5. 6 独立人称代名詞

独立人称代名詞は、人間の人称を指示する。指示詞など修飾語が修飾する名詞が所属するクラスに応じて形をかえるが、独立人称代名詞は、形をかえることはない。スワヒリ語は、1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数、1 人称複数、2 人称複数、3 人称複数のみを区別する。「女性」、「男性」といった文法的「性」の区別はしない。独立人称代名詞は、文において単独で用いられる。

表 71 独立人称代名詞

1 人称単数 mimi 『私』

2 人称単数 wewe 『あなた』

3 人称単数 yeye 『彼女、彼』

1 人称複数 sisi 『私たち』

2 人称複数 ninyi/nyinyi 『あなたたち』 (自由変種、どちらも使われる)

3 人称複数 wao 『彼ら』

2 人称複数の独立人称代名詞には、2 つの変種 ninyi と nyinyi がある。意味の違いはなく、どちらも使われる。

Mimi ni mw-anafunzi.

『私』『です』『生徒』 = 『私は生徒です』

Wao ni Wa-tanzania

『彼ら』『です』『タンザニア人』 = 『彼らはタンザニア人です』

独立人称代名詞には縮小形式が存在する。縮小形式は、他の語に接辞として付加される。

表 72 独立人称代名詞 (縮小形式)

1 人称単数 -mi

2 人称単数 -we

3 人称単数 -ye

1 人称複数 -si

2 人称複数 -nyi

3 人称複数 -o

M-toto a-na-kwenda mji-ni pamoja na-mi.

『子供』『行く』『町へ』『一緒に』『と-私』 = 『子供は町へ私と一緒に行く』

M-ke a-na-kuja shule-ni na-o.

『妻』『来る』『学校から』『と-彼ら』 = 『妻は学校から彼らと来る』

## 5. 7 疑問詞

疑問文には、Yes-No 疑問文（聞き手に肯定的、あるいは、否定的な返答を期待する疑問文）と、『何』『どこ』など疑問詞を用いた疑問文がある。ここでは疑問詞について解説する。疑問詞を用いた疑問文は、若干の例外をのぞいて、疑問文であることを表すための、特殊なアクセントやイントネーションをもつことはない。肯定文と同じアクセントとイントネーションで発音される。

疑問文は、正書法では疑問符を文の終わりにつける約束になっている。

疑問詞には、文において名詞と同じ分布を示す疑問詞と、形容詞と同じ分布を示す疑問詞と、副詞的な要素と同じ分布を示す疑問詞がある。文において名詞と同じ分布を示す疑問詞は、照応をおこなわない。文において形容詞と同じ分布を示す疑問詞には、照応をおこなう疑問詞と照応をおこなわない疑問詞がある。また、文において形容詞と同じ分布を示す疑問詞は、名詞に後続せず単独で用いられることがある。

[名詞と同じ分布を示す疑問詞]

文において名詞と同じ分布を示す疑問詞は、nani『誰』と nini『何』である。これらの2つの疑問詞は、照応をしない。すなわち、形をかえない。

これら2つの疑問詞が文中でおかれる位置は、疑問文に対応する肯定文の中で、疑問詞と対応する名詞がおかれる位置と同じである。ただし、傾向として、疑問詞は文の終わりの位置におかれることが好まれる。

Nani『誰』

Ni-na-m-penda Juma.

『好き』『ジュマ』 = 『私はジュマが好きです』

U-na-penda nani?

『好き』『誰』 = 『あなたは誰が好きですか』

Nani a-na-mpenda Juma?

『誰』『好き』『ジュマ』 = 『誰がジュマを好きなんですか』

Ni-na-kwenda duka-ni panoja na Juma

『行く』『店』『一緒に』『~とともに』『ジュマ』 = 『私はジュマと一緒に店に行きます』

U-na-kwenda duka-ni pamoja na nani?

『行く』『店』『一緒に』『~とともに』『誰』 = 『あなたは誰と一緒に店に行きますか』

Hi-ki ni ki-tabu ch-a Juma.

『この』『です』『本』『の』『ジュマ』 = 『これはジュマの本です』

Hi-ki ni ki-tabu ch-a nani?

『これ』『です』『本』『の』『誰』 = 『これは誰の本ですか』

Hu-yu ni Juma.

『この』『です』『ジュマ』 = 『これはジュマです』

Hu-yu ni nani?

『この』『です』『誰』 = 『これは誰ですか』

(Ni) Nani hu-yu? (カッコの中は省略可能)

『です』『誰』『この』 = 『誰、これは?』

Ha-wa ni nani?

『これ〔複数〕』『です』『誰』 = 『これらは誰ですか』

Jina l-angu Khamisi.

『名前』『私の』『ハミシ』 = 『私の名前はハミシです』

Jina l-ako nani?

『名前』『あなたの』『誰』 = 『あなたの名前は何かですか』

文において疑問詞 nani『誰』がおかれる位置は、疑問文に対応する肯定文のなかの、疑問詞 nani『誰』が対応する名詞のおかれる位置と同じである。疑問詞 nani『誰』は、目的語の位置にも、主語の位置にも、前置詞に後続する位置にもおかれることができる。

例えば、上の例の2番目の文は、1番目の文に対応する疑問文である。疑問詞 nani『誰』は、1番目の目的語 Juma『ジュマ』と対応しており、疑問詞 nani『誰』が文中でおかれる位置は、1番目の文の目的語の位置と一致している。3番目の文は、疑問詞 nani『誰』が文中で主語の位置を占めている。5番目の文は、4番目の文と対応する疑問文である。疑問詞 nani『誰』は、4番目の文における前置詞 na『と』の目的語 Juma『ジュマ』と対応しており、疑問文において前置詞 na『と』の目的語の位置を占めている。7番目の文は、6番目の文と対応する疑問文である。疑問詞 nani『誰』は、6番目の文における所有表現-a『の』の目的語 Juma『ジュマ』と対応しており、疑問文において所有表現-a『の』の目的語の位置を占めている。

疑問詞 nani『誰』をなんらかの修飾語が修飾するときは、普通、修飾語は、M/W a クラス〔単数〕に応じた照応形式になる。

Nani a-na-m-penda Juma? は自然な文と考えられる。また、Hu-yu ni nani? も自然な文で

ある。これらの文は、トピックが nani『誰』、あるいは、huyu『これ』であり、焦点が anampenda Juma『ジュマを愛している』、あるいは、nani『誰』である。トピックが焦点に先行する位置に現れることにより、自然な情報構造をもっている。しかし、??Nani ni hu-yu? は奇妙な文である。それは、??Juma ni hu-yu. が不自然な文であることと共通する理由であろう。これらの文は、焦点である nani『誰』、あるいは、Jum『「ジュマ」』がトピックに先行する位置にあり、不自然な情報構造をしている。そのために不自然な文になっている。

例えば、日本語であっても、まず指し示す対象があつて、それが何者かを尋ねることになるだろう。指し示す対象は、トピックであり、何者かを尋ねるのは焦点となる。したがって、日本語の自然な疑問文は、『これは誰?』になる。

しかし、日本語で『誰?これ』という尋ね方が可能であるように、スワヒリ語においても、それに相当する尋ね方が可能である。(Ni) nani hu-yu? が、それにあたると考えられる。

名前を尋ねるときは、慣習的に疑問詞『誰』をスワヒリ語は用いる。

Nini『何』

Ni-na-taka ki-tabu.

『欲しい』『本』 = 『私は本が欲しい』

U-na-taka nini?

『欲しい』『何』 = 『あなたは何が欲しいのですか』

Ki-tabu hiki ki-ta-ku-pendeza

『本』『この』『喜ばせる』 = 『この本はあなたの気に入るでしょう』

Nini i-ta-ku-pendeza?

『何』『喜ばせる』 = 『何があなたの気に入るでしょうか』

Nini ki-na-ku-pendeza?

『何』『喜ばせる』 = 『何があなたの気に入るでしょうか』

Ni-na-kula u-gali pamoja na m-chuji.

『食べる』『ウガリ』『一緒に』『〜と』『スープ』 = 『私はウガリをスープと一緒に食べる』

U-na-kula u-gali pamoja na nini?

『食べる』『ウガリ』『一緒に』『と』『何』 = 『あなたはウガリを何と一緒に食べますか』

Ki-tabu hi-ki ni cha nini?

『本』『この』『です』『の』『何』 = 『この本は何の(ためのもの)ですか』

Hi-ki ni ki-tabu.

『これ』『です』『本』 = 『これは本です』

Hi-ki ni nini?

『これ』『です』『何』 = 『これは何ですか』

Hi-i ni nini?

『これ』『です』『何』 = 『これは何ですか』

(Ni) Nini hi-i?

『です』『何』『これ』 = 『何？これ』

疑問詞 nini 『何』は、目的語の位置にも、主語の位置にも、また、前置詞の目的語の位置にもおかれることができる。

例えば、2番目の文では、疑問詞 nini 『何』は、文中で目的語の位置におかれる。4番目や5番目の文では、疑問詞 nini 『何』は、主語の位置を占める。7番目の文では疑問詞 nini 『何』は、前置詞 na 『と』の目的語の位置を占めている。8番目の文では疑問詞 nini 『何』は、所有表現-a 『の』の目的語の位置を占めている。10番目の文では、疑問詞 nini 『何』は、繫辞に後続し、補語の位置を占めている。

疑問詞 nini 『何』は、指しているものの名詞クラスが話し手と聞き手のあいだで明らかである場合には、疑問詞 nini 『何』が指している名詞のクラスに応じた照応を修飾語に要求する。修飾語が疑問詞 nini 『何』を修飾するとき、疑問詞 nini 『何』がどのクラスの名詞を指しているか明確でないばあいには、修飾語は、上の例の4番目の文や5番目の文のように、Nクラス〔単数〕の照応か、あるいは、K i / V i クラス〔単数〕の照応をおこなう。

疑問詞を用いた疑問文として、後で説明する関係節を用いた構文が好まれて使われる。その構文は、分裂文とよばれるものである。

(Ni) nani a-na-ye-sema Ki-swahili vi-zuri?

『です』『誰』『話す』『スワヒリ語』『よく』 = 『スワヒリ語を良く話すのは誰ですか』

(Ni) nini u-na-cho-taka?

『です』『何』『欲しい』 = 『あなたが欲しいのは何ですか』

上の文では疑問詞に後続する節が関係節の構造をしている。例えば、上の1番目の文では、関係節 a-na-ye-sema Ki-swahili vi-zuri 『スワヒリ語を上手に話す(人)』が繫辞 ni 『です』によって、疑問詞 nani 『誰』と連結されている(繫辞 ni 『です』は省略することができる)。

疑問詞 nini 『何』は、縮約形式-ni をもっており、その縮約形式は、先行する動詞を中心とする動詞複合体に接辞する。

U-na-jifunz-i-a-ni?

『学ぶ』 = 『あなたは何のために学ぶのですか』

[形容詞と同じ分布を示す疑問詞]

文における分布を形容詞と同じにする疑問詞には、疑問詞 gani『どんな』、疑問詞-ngapi『どれだけ』、疑問詞-pi『どの』がある。質を尋ねる疑問詞 gani『どんな』は、修飾する名詞がどのようなクラスに所属しようとも形をかえない。照応しない形容詞と考えられる。量を尋ねる疑問詞-ngapi『どれだけ』、集合のなかから選択を尋ねる疑問詞-pi『どの』は、修飾する名詞のクラスに応じて形をかえる。照応をする形容詞と考えられる。疑問詞-ngapi『どれだけ』は、形容詞タイプの照応をおこなう。疑問詞-pi『どの』は、代名詞タイプの照応をおこなう。

質を尋ねる疑問詞 gani『どんな』は、名詞に後続する位置におかれ、名詞を修飾する。疑問詞 gani『どんな』は、選択する対象のものから、『どのような性質』のもの、『どのような性格』のものかを限定するために、用いられる。

Ni-na-penda ma-embe ma-kubwa.

『好き』『マンゴー』『大きな』 = 『私は大きなマンゴーが好きです』

U-na-penda ma-tunda gani?

『好き』『果物』『どんな』 = 『あなたはどんな果物が好きですか』

W-anafunzi w-a kike wa-na-jifunza lugha vizuri.

『生徒たち』『の』『女性』『学ぶ』『言語』『よく』 = 『女生徒たちはよく言語を学びます』

W-anafunzi gani wa-na-jifunza lugha vizuri?

『生徒たち』『どんな』『学ぶ』『言語』『よく』 = 『どんな生徒たちが言語をよく学びますか』

Ni-na-kula u-gali pamja na mchuji.

『食べる』『ウガリ』『一緒に』『と』『スープ』 = 『私はウガリをスープと一緒に食べます』

U-na-kula u-gali pamoja na mchuji gani?

『食べる』『ウガリ』『一緒に』『〜と』『スープ』『どんな』 = 『あなたはウガリをどんなスープと一緒に食べますか』

Hi-ki ni ki-tabu gani?

『これ』『です』『本』『どんな』 = 『これはどんな本ですか』

(Ni) Ki-tabu gani hiki?

『です』『本』『どんな』『この』 = 『どんな本？これ』

(Ni) Mtu gani huyu? = 『です』『人』『どんな』『この』 = 『どんな人？これ』

量を尋ねる疑問詞-ngapi『どれだけ』は、修飾する名詞のクラスに応じて形容詞タイプの照応をおこなう。疑問詞-ngapi『どれだけ』は、指示する対象となるものの量を尋ねるために用いられる。量を尋ねるために用いられるので、たいていは、複数の名詞クラスを修飾することになる。場所の P a クラスは、単数と複数を区別しないが、疑問詞-ngapi『どれだけ』により修飾されることが可能である。



表 73 疑問詞-ngapi 『どれだけ』の照応

	-ngapi
M/Wa [複数]	wa-ngapi
M/Mi [複数]	mi-ngapi
Ji/Ma [複数]	ma-ngapi
Ki/Vi [複数]	vi-ngapi
N [複数]	ngapi
U/N [複数]	ngapi
Pa (場所)	pa-ngapi

Ni-na-taka ma-chungwa ma-tano

『欲しい』『オレンジ』『5』 = 『私はオレンジ 5 個欲しい』

U-na-taka ma-chungwa ma-ngapi?

『欲しい』『オレンジ』『いくつ』 = 『あなたはいくつオレンジが欲しいのですか』

Wa-toto ishirini wa-na-jifunza Ki-swahili.

『子供達』『20』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『20 人の子供たちがスワヒリ語を学んでいます』

Wa-toto wa-ngapi wa-na-jifunza Ki-swahili?

『子供達』『どれだけ』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『何人の子供たちがスワヒリ語を学んでいますか』

(Ni) nguo ngapi hi-zi?

『です』『衣服』『この』 = 『これらは衣服がどれだけですか』

量の疑問詞-ngapi 『どれだけ』は、名詞に後続することなく、単独で用いることが可能である。そのとき、量の疑問詞-ngapi 『どれだけ』が指示する名詞のクラスが話し手と聞き手のあいだで明らかである場合は、量の疑問詞-ngapi 『どれだけ』は、それが指示する名詞が所属するクラスに照応した形になる。例えば、下の例で、2 番目の文で話し手が尋ねているのは ma-embe 『マンゴー』の数であることが、話し手と聞き手のあいだで了解されているので、量を尋ねる疑問詞-ngapi 『どれだけ』は、ma-embe 『マンゴー』が所属する名詞クラスと照応する形式になる。

Ni-na-taka ma-embe ma-wili.

『欲しい』『マンゴー』『2』 = 『私はマンゴー 2 つ欲しい』

U-na-taka ma-ngapi?

『欲しい』『どれだけ』 = 『あなたはいくつ欲しいですか』

W-anafunzi kumi wa-na-jifunza Kiswahili.

『生徒たち』『10』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒 10 人がスワヒリ語を学んでいます』

Wa-ngapi wa-na-jifunza Ki-swahili?

『どれだけ』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『何人がスワヒリ語を学んでいますか』

選択の疑問詞-pi『どの』は、名詞を修飾して、修飾する名詞が所属するクラスに応じて形をかえる。選択の疑問詞-pi『どの』は、修飾する名詞に後続する位置におかれる。選択の疑問詞-pi『どの』は、代名詞タイプの照応をおこなう。ただし、M/W a クラス〔複数〕の照応は不規則である。選択の疑問詞-pi『どの』がM/W a クラス〔複数〕の名詞を修飾するとき、選択の疑問詞-pi『どの』は、we-pi が一般的に使われる。規則どおりの照応形式 wa-pi は、場所を尋ねる疑問詞 wapi『どこ』と同じ形式になるため避けられるものと考えられる。場所の P a クラス名詞と照応するとき、疑問詞-pi『どの』は、wa-pi が用いられる。

選択の疑問詞『どの』は、指示するものの集合のなかから選択を求めるために用いられる。

表 74 疑問詞-pi『どの』の照応

	-pi
M/Wa〔単数〕	yu-pi
M/Wa〔複数〕	we-pi (不規則)
M/Mi〔単数〕	u-pi
M/Mi〔複数〕	i-pi
Ji/Ma〔単数〕	li-pi
Ji/Ma〔複数〕	ya-pi
Ki/Vi〔単数〕	ki-pi
Ki/Vi〔複数〕	vi-pi
N〔単数〕	i-pi
N〔複数〕	zi-pi
U/N〔単数〕	u-pi
U/N〔複数〕	zi-pi
Ku (不定詞)	ku-pi
Pa	wa-pi

m-toto yu-pi?

『子供』『どの』

wa-toto we-pi?

『子供達』『どの』

ki-tabu ki-pi?

『本』『どの』

vi-tabu vi-pi?

『本〔複数〕』『どの』

U-na-taka ma-tunda ya-pi?

『欲しい』『果物〔複数〕』『どの』 = 『あなたはどの果物〔複数〕が欲しいですか』

選択の疑問詞-pi『どの』は、名詞に後続することなく単独で用いることが可能である。代名詞の働きをすることができる。そのとき、選択の疑問詞-pi『どの』が指示する名詞のクラスが話し手と聞き手のあいだで明らかであるときは、選択の疑問詞-pi『どの』は、その名詞が所属するクラスに照応する。例えば、下の 2 番目の文で、話し手は、聞き手に ma-tunda『果物』を選択することを要求する。話し手と聞き手のあいだで選択するものが所属する名詞クラスについて理解があることから、代名詞として用いられている疑問詞-pi は、了解している名詞クラスに照応する。

Ku-na ma-tunda m-engi hapa.

『ある』『果物〔複数〕』『多くの』『ここに』 = 『果物がたくさんここにある』

U-na-taka ya-pi?

『欲しい』『どの』 = 『あなたはどれが欲しいですか』

W-anafunzi w-engi wa-na-jifunza Ki-swahili na Ki-ingereza.

『生徒たち』『多くの』『学ぶ』『スワヒリ語』『と』『英語』 = 『多くの生徒たちがスワヒリ語と英語を学んでいます』

We-pi wa-na-jifunza Ki-swahili?

『どの』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『どれ（生徒たち）がスワヒリ語を学んでいますか』

Ni-li-mw-ona m-toto w-ake.

『見る』『子供』『彼女、彼の』 = 『私は彼女の子供に会いました』

Ni yu-pi?

『です』『どの』 = 『どれですか』

[副詞的要素と同じ分布を示す疑問詞]

疑問詞 lini『いつ』、疑問詞 wapi『どこ』、疑問詞 kwa nini『なぜ』、疑問詞 vipi『どのように』は、文において副詞的要素と同じ分布を示す。疑問詞『なぜ』は、前置詞 kwa と疑問詞 nini『何』からなっているので、正書法では切り離して書く。これらの疑問詞は、文において単独で用いられる。したがって、名詞を修飾する修飾語とは異なり、名詞と照応して形をかえることはない。これらの疑問詞は、文の終わりの位置におかれることが好まれる。疑問詞 lini『いつ』は、時間を尋ねる。疑問詞『どこ』wapi は、場所を尋ねる。疑

問詞 *kwa nini* 『なぜ』は、理由を尋ねる。疑問詞 *vipi* 『どのように』は、手段や方法を尋ねる。疑問詞 *kwa nini* 『なぜ』には、縮小形式 *kwani* 『なぜ』がある。

*Ni-ta-kwenda Tanzania mwezi ujao.*

『行く』『タンザニア』『月』『来る』 = 『私は来月タンザニアへ行きます』

*U-ta-kwenda Tanzania lini?*

『行く』『タンザニア』『いつ』 = 『あなたはいつタンザニアへ行きますか』

*U-ta-kwenda mwezi ujao wapi?*

『行く』『月』『来る』『どこ』 = 『あなたは来月どこへ行きますか』

*U-ta-kwenda Tanzania mwezi ujao kwa nini?*

『行く』『タンザニア』『月』『来る』『なぜ』 = 『あなたは来月タンザニアへなぜ行くのですか』

*U-ta-kwenda Tanzania mwezi ujao kwani?*

『行く』『タンザニア』『月』『来る』『なぜ』 = 『あなたは来月タンザニアへなぜ行くのですか』

*U-ta-kwenda Tanzania mwezi ujao vipi?*

『行く』『タンザニア』『月』『来る』『どのように』 = 『あなたはタンザニアへ来月どのようにして行くのですか』

疑問詞 *wapi* 『どこ』は、縮約形式をもっていて、その縮約形式は、先行する動詞を中心とする動詞複合体に付加される。

*U-ta-kwenda-pi?*

『行く』 = 『あなたはどこへ行くのですか』

疑問詞 *mbona* 『なぜ』がある。疑問詞 *mbona* 『なぜ』は、普通、文頭の位置におかれる。疑問詞 *kwa nini* 『なぜ』がたんに理由を尋ねるのに用いられるのに対して、疑問詞 *mbona* 『なぜ』は、相手を非難する意味を含んでいる。

*Mbona u-ta-kwenda Tanzania?*

『なぜ』『行く』『タンザニア』 = 『なぜあなたはタンザニアへ行くのか [行ってはいけない]』

疑問詞 *kwa nini* 『なぜ』以外に、2つ以上の形式からなる、副詞的要素と同じ分布を示す複合的な疑問詞に以下のようなものがある。

muda gani?

『期間』『どんな』 = 『何時間』

namna gani?

『種類』『どんな』 = 『どんな種類』

kiasi gani?

『量、程度』『どんな』 = 『どのくらいの量、どの程度』

mahali gani?

『場所』『どんな』 = 『どんな場所、どこ』

kama nini?

『のような』『何』 = 『何のような』

[疑問文をつくる接尾辞-je]

疑問を強調する語 je 『いったい』は、単独で用いられるときは、文の先頭におかれる傾向がある。また、先行する文に対応する疑問文をつくるために、慣用的に用いられることがある。例えば、下の2番目の例において、疑問を強調する語 je 『いったい』は、先行する文に対応する疑問文をつくっている。

疑問を強調する語 je 『いったい』は、接尾辞として動詞を中心とする動詞複合体に付加されることが可能である。そのとき、接尾辞-je 『どのように』は、動詞を中心とする動詞複合体の末尾の位置にされる。疑問文をつくる接尾辞-je 『いったい』は、理由や手段や方法を尋ねる。

Je, u-ta-kwenda Tanzania mwezi ujao?

『いったい』『行く』『タンザニア』『月』『来る』 = 『あなたは来月タンザニアへ行きますか』

Mimi ni mw-ema. Na wewe, je?

『私』『です』『元気な』『そして』『あなた』『いったい』 = 『私は元気です。あなたはどうか』

U-ta-kwenda-je?

『行く』 = 『あなたはどのように行くのですか』

## 6 副詞と副詞的要素

スワヒリ語には様々な副詞的要素がある。副詞的な要素 ki-dogo 『少し』や vi-zuri 『良く』のように、K i / V i クラスの名詞を起源とするものもあるが、たいていの副詞的要素はその起源が明らかではない。副詞的要素は、形容詞や指示詞など名詞を修飾する修飾語とは異なり、名詞のクラスに応じて形をかえることはない。

ここで副詞的要素と呼ぶ理由は、副詞的要素と呼ぶ語の中に、名詞の性格をもつものが存在するからである。あるいは、本来は名詞であって、文中で副詞的な働きをするものが存在するからである。実際に、ki-dogo『少し』やvi-zuri『良く』のように、名詞クラス接頭辞をもつものがある。名詞としての性格をもつ副詞的要素は、K i / V i クラス接頭辞をもつ副詞的要素をのぞけば、たいてい、名詞としてはNクラスに所属する。以下で例示した副詞的要素の多くは、単独で副詞として働くことも、また、名詞として働くこともできる。例えば、haraka『急いで』は、単独で副詞としても、また、名詞としても用いられる。

副詞的要素を様態を表す副詞的要素、時間を表す副詞的要素、場所や方向を表す副詞的要素に分けることができる。

[様態の副詞的要素]

vizuri	『良く』
vyema	『良く』
vibaya	『悪く』
sana	『大層』
kidogo	『ちょっと』
tena	『再び』
bure	『無駄に』
kabisa	『完全に』
haraka	『急いで』
polepole	『ゆっくり』
taratibu	『注意して』
kasi	『急に』
sawasawa	『等しく』
tu	『ただ』
pia	『もまた』

前置詞 kwa『で』とそれに後続する名詞からなる前置詞句が、副詞的な働きをする。前置詞 kwa『で』とそれに後続する名詞がつくる前置詞句が副詞の働きをする。例えば、下の3番目の文では、前置詞 kwa『で』と名詞 bahati『幸運』からつくられた前置詞句 kwa bahati『幸運にも』は、文中で副詞として機能する。

kwa bahati	『幸運にも』
kwa sauti	『大声で』
kwa haraka	『急いで』

kwa kawaida 『普通』

kwa ghafula 『突然』

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili sana.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『大層』 = 『生徒たちはスワヒリ語を大層学んでいます』

W-anafunzi wa-na-kwenda haraka shule-ni.

『生徒たち』『行く』『急いで』『学校へ』 = 『生徒たちは急いで学校へ行きます』

Kwa bahati, w-anafunzi hawa-ja-chelewa.

『幸運にも』『生徒たち』『遅れる』 = 『幸運にも生徒たちは遅刻しない』

動詞を修飾する様態の副詞は、動詞複合体に後続する位置におかれる。しかし、副詞 **tu** 『ただ、のみ』は、修飾する形容詞が含まれる句の終わりの位置におかれる。下の例では、副詞 **tu** 『のみ』は、それが修飾する形容詞 **ma-wili** 『2』が含まれる名詞句 **ma-embe ma-wili** 『2 個のマンゴー』の直後の位置におかれる。

Baba a-li-nunua ma-embe ma-wili tu soko-ni.

『お父さん』『買う』『マンゴー』『2』『ただ』『マーケットで』 = 『お父さんは2つのマンゴーだけマーケットで買った』

以下の例では、副詞的要素として文中で機能することができる語が本来の名詞として用いられている。例えば、**haraka** 『急ぐこと』は、名詞として下の文の主語の位置を占める。

Haraka haraka ha-i-na baraka

『急ぎ』『急ぎ』『もつ』『幸運』 = 『急がば回れ』

Pole pole ni mwendo

『ゆっくり』『ゆっくり』『です』『進歩』 = 『急がば回れ』

動詞を修飾する様態の副詞は、動詞複合体に後続する位置におかれる。また、動詞複合体に後続する位置であれば、動詞複合体が目的語をもつときは、目的語に後続する位置に副詞がおかれることもある。例えば、下の例において、副詞 **sana** 『大層』は、1 番目の文では動詞複合体に後続する位置におかれ、2 番目の文では目的語に後続する位置におかれている。

W-anafunzi wa-na-jifunza sana.

『生徒たち』『学ぶ』『大層』 = 『生徒たちは大層学んでいます』

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili sana.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『大層』 = 『生徒たちはスワヒリ語を大層学んでいます』

[時の副詞的要素]

sasa 『今』

bado 『まだ』

baadaye 『後で』

juzi 『一昨日』

jana 『昨日』

leo 『今日』

kesho 『明日』

kesho kutwa 『明後日』

zamani 『昔』

asubuhi 『朝』

mchana 『昼』

usiku 『夜』 (名詞としては、U/Nクラスに所属する)

Ni-na-soma ki-tabu sasa.

『読む』『本』『今』 = 『私は今本を読んでいます』

Si-ja-maliza ma-zoezi ya nyumba-ni bado.

『終わる』『練習〔複数〕』『の』『家で』『まだ』 = 『私はまだ宿題を終えていません』

Tu-ta-onana kesho.

『会う』『明日』 = 『私たちは明日会いましょう』

時の副詞は、普通、文の末尾の位置か、文の先頭の位置におかれる。例えば、下の例で、時の副詞 kesho 『明日』は、1番目の文の末尾におかれ、2番目の文の文頭におかれる。

W-anafunzi wa-ta-jifunza Ki-swahili kesho.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『明日』 = 『生徒たちはスワヒリ語を明日学ぶでしょう』

Kesho mw-alimu a-ta-wa-fundisha w-anafunzi Ki-swahili.

『明日』『先生』『教える』『生徒たち』『スワヒリ語』 = 『明日先生は生徒たちにスワヒリ語を教えるでしょう』

[場所、方向の副詞的要素]



chini 『下へ』  
 juu 『上へ』  
 nyuma 『後ろへ』  
 mbele 『前へ』  
 katikati 『中へ』  
 nje 『外へ』  
 karibu 『近くへ』  
 mbali 『遠くへ』

副詞的要素の中には名詞の性格をもつものがある。あるいは、文中で副詞の働きをする、本来の名詞が存在する。それらは、たいてい、Nクラス〔単数〕のクラスに所属する。これらの名詞の性格をもつ副詞的要素は、所有表現-a『の』を後続して、前置詞を形成する。副詞的要素であるが、場所、位置を意味する名詞に、所有表現-a『の』が後続して形成される語の連続は、全体として、名詞を後続させる前置詞の働きをする。そして、場所や方向を指し示す。例えば、副詞的要素 chini『下へ』は、単独で、文中で副詞として働くことができる。また、名詞として所有表現-a『の』の被所有者名詞の位置を占めることができる。Nクラス〔単数〕に所属する名詞として照応をおこす。そして、所有表現-a『の』とともに形成する語の連続は、全体として、前置詞の働きをする。例えば、下の例で、所有表現-a『の』とともに形成する語の連続 chini ya『の下に』は、前置詞として名詞 meza『テーブル』をしたがえる。

chini ya 『の下に』  
 juu ya 『の上に』  
 nyuma ya 『の後ろに』  
 mbele ya 『の前に』  
 katikati ya 『の中に』  
 nje ya 『の外に』

chini ya meza

『下』『の』『テーブル』 = 『テーブルの下に』

juu ya meza

『上』『の』『テーブル』 = 『テーブルの上に』

nyuma ya ny-umba

『後ろ』『の』『家』 = 『家の後ろに』

mbele ya ny-umba

『前』『の』『家』 = 『家の前に』

Ki-tabu ki-ko chini ya meza.

『本』『ある』『下』『の』『テーブル』 = 『本はテーブルの下にある』

Ki-tabu ki-ko juu ya meza.

『本』『ある』『上』『の』『テーブル』 = 『本はテーブルの上にある』

副詞的要素 karibu 『近くへ』と mbali 『遠くへ』は、接続詞 na 『と』を後続して、全体として前置詞の働きをする。

karibu na 『の近くに』

mbali na 『から遠くに』

karibu na m-ji

『近く』『と』『町』 = 『町の近くに』

mbali na m-ji

『遠く』『と』『町』 = 『町から遠くに』

Juma a-me-ishi karibu na m-ji.

『ジュマ』『すむ』『近く』『と』『町』 = 『ジュマは町の近くに住んでいる』

Juma a-me-ishi mbali na m-ji.

『ジュマ』『すむ』『遠く』『と』『町』 = 『ジュマは町から遠くに住んでいる』

場所の名詞クラス P a / K u / M u は、場所の副詞的要素として用いられる。どんなクラスに所属する名詞でも、場所の名詞をつくる接尾辞-ni が付加されると、場所の P a / K u / M u 名詞クラスに所属することになる。場所の名詞をつくる接尾辞-ni が付加された名詞は、たんに場所のクラスに所属する名詞になる。場所の名詞をつくる接尾辞-ni が付加されてつくられた名詞は、具体的な場所を表すことはない。つまり、これらの場所のクラス名詞は、『上で』、『下で』、『中で』、『そばで』なのか、あるいは、『へ』、『から』なのか、区別されない。例えば、下の例において、場所の名詞 shule-ni 『学校で』は、『学校へ』、あるいは、『学校から』も意味する。それらの意味の区別は、動詞により区別されるか、さもなければ、意味的な内容をもつ副詞的要素を用いて区別される。

shule-ni 『学校で』

darasa-ni 『教室で』

nyumba-ni 『家で』

meza-ni 『テーブルで』

mji-ni 『町で』

barabara-ni 『道で』

W-anafunzi wa-na-jifunza shule-ni.

『生徒たち』『学ぶ』『学校で』 = 『生徒たちは学校で学んでいます』

W-anafunzi wa-na-kwenda shule-ni.

『生徒たち』『行く』『学校で』 = 『生徒たちは学校へ行きます』

W-anafunzi wa-na-kuja shule-ni.

『生徒たち』『来る』『学校で』 = 『生徒たちは学校から帰ります』

## 7 前置詞

前置詞は、名詞に先行する位置に単独でおかれるものと2つ以上の語からなるものがある。2つ以上の語からなるものの多くは、副詞的要素と所有表現-a『の』から形成される。そのとき、副詞的要素は、Nクラス〔単数〕の名詞として振る舞い、所有表現-a『の』は、Nクラス〔単数〕に照応した形式になる。単独で前置詞として用いられる語は、形をかえることはない。すなわち、単独で前置詞として文中で働く語は、照応しない形式である。単独で前置詞として用いられる語は多くない。

前置詞は、名詞を後続させて前置詞句を形成する。

[単独の前置詞]

katika 『で、において、から』

kwa 『へ、から、よって』 (所有表現-aの場所クラスKu照応形式)

mpaka 『まで』 (名詞mpaka『境界』に由来する)

hadi 『まで』

na 『と、で』

kutoka 『から』 (動詞-toka『から来る』の不定詞に由来する)

tokea 『から』 (動詞-toka『から来る』の適用形に由来する)

tangu 『から』

Mama a-li-nunua ma-tunda katika duka li-le.

『お母さん』『買う』『果物』『で』『あの』 = 『お母さんは果物をあの店で買った』

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili katika shule.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『で』『学校』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学校で学んでいます』

Nazi i-li-anguka tokea mnazi.

『やしの実』『落ちる』『から』『やしの木』 = 『やしの実がやしの木から落ちた』

Mama a-na-kata nyama kwa kisu.

『お母さん』『切る』『肉』『よって』『ナイフ』 = 『お母さんは肉をナイフで切っています』

Baba a-li-kimbia mpaka stesheni.

『お父さん』『走る』『まで』『駅』 = 『お父さんは駅まで走った』

M-toto a-me-lala usingizi hadi alfajiri.

『子供』『寝る』『眠り』『まで』『夜明け』 = 『子供は夜明けまで寝ている』

Baba a-li-piga nyoka na fimbo

『お父さん』『打つ』『蛇』『で』『棒』 = 『お父さんは蛇を棒で打った』

場所を表す前置詞は、普通名詞を後続させて、場所を表す前置詞句を形成する。もし、前置詞に後続する名詞が、地名などの固有名詞であれば、場所を表現する前置詞は用いらなくても良い。地名などの固有名詞は、場所の名詞をつくる接尾辞-ni が付加されることはない。単独で場所を表す副詞として文中で働く。下の例で固有名詞 Tanzania 『タンザニア』は、場所の名詞をつくる接尾辞-ni が付加されることなく、場所の副詞として働いている。

Wa-toto wa-na-kaa Tanzania.

『子供達』『住む』『タンザニア』 = 『子供達はタンザニアに住んでいます』

Mama a-li-zaliwa Unguja.

『お母さん』『生まれる』『ザンジバル』 = 『お母さんはザンジバルで生まれた』

Khamisi a-li-kwenda U-ingereza.

『ハミシ』『行く』『イギリス』 = 『ハミシはイギリスに行った』

## [2 語の前置詞]

mbele ya 『前で』

nyuma ya 『後ろで』

kati ya 『中で』

katikati ya 『真ん中で』

juu ya 『上で』

chini ya 『下で』

nje ya 『外で』

ndani ya 『内で』

baada ya 『後で』

kabla ya 『前で』

miongoni mwa 『あいだで』 (所有表現は場所のM u クラス照応形式である)

pamoja na 『一緒に』

karibu na 『近くで』

mbali na 『遠くで』

M-ti m-kubwa u-ko nyuma ya ny-umba.

『木』『大きな』『ある』『後ろに』『家』 = 『大きな木が家の後ろにあります』

Ki-tabu ki-ko juu ya meza.

『本』『ある』『上に』『テーブル』 = 『本がテーブルの上にある』

Wa-toto wa-na-cheza m-pira ndani ya ki-wanda.

『子供達』『遊ぶ』『ボール』『内で』『運動場』 = 『子供たちがサッカーを運動場のうちでしています』

Juma a-me-ishi mbali na m-ji.

『ジュマ』『すむ』『遠くに』『町』 = 『ジュマは町から遠くに住んでいます』

## 8 接続詞

接続詞は、節や句をつなぐ働きをする。接続詞は、たいていは、単独の語からなり、名詞を修飾する修飾語が名詞のクラスに応じて照応するのと異なり、形をかえることはない。接続詞は、照応をしない語である。

na	『と、また』
au	『や』
ama	『や』
lakini	『しかし』
kama	『もし、ように』 (補文標識としても用いられる)
kwamba	『こと』 (補文標識)
kwa sababu	『なぜなら』
kwa hiyo	『そうして』
ila	『のぞいて』
ingawa	『けれど』
kisha	『そしてそれから』
halafu	『その後』
ili	『ために』 (目的節を導く)

Mama na baba wa-na-kwenda mji-ni

『お母さん』『と』『お父さん』『行く』『町へ』 = 『お母さんとお父さんは町へ行きます』

Mama a-na-kwenda duka-ni na baba a-na-kwenda soko-ni.

『お母さん』『行く』『店へ』『また』『お父さん』『行く』『マーケットへ』 = 『お母さんは店へ行きます。また、お父さんはマーケットへ行きます』

Juma a-li-kwenda soko-ni, lakini ha-ku-weza kutafuta ma-tunda ma-zuri.

『ジュマ』『行く』『マーケットへ』『しかし』『できる』『見つける』『果物』『良い』 = 『ジュマはマーケットへ行った。しかし、良い果物を見つけることはできなかった』

Kama a-ki-pata pese za kutosha, baba a-ta-nunua vi-tabu.

『もし』『手に入れる』『お金』『の』『十分な』『お父さん』『買う』『本』 = 『もし十分なお金を手に入れたら、お父さんは本を買います』

Mw-alimu a-li-sema kwamba w-anafunzi wa-li-jifunza Ki-swahili vizuri.

『先生』『言う』『こと』『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『良く』 = 『先生は生徒たちがスワヒリ語をよく学んだといった』

Mama a-li-kwenda duka-ni kisha a-li-kwenda soko-ni.

『お母さん』『行く』『店へ』『そしてそれから』『行く』『マーケットへ』 = 『お母さんは店へ行った。それからマーケットへ行った』

Baba a-li-fanya kazi kwa bidii ili ku-pata pesa za ku-tosha.

『お父さん』『働く』『仕事』『一生懸命』『ために』『手に入れる』『お金』『の』『十分な』 = 『お父さんは十分なお金を手に入れるために一生懸命仕事をしました』

## 9 動詞

動詞は、動詞語幹を中心として、接頭辞や接尾辞が付加され、動詞複合体を形成する。動詞複合体を形成する接辞には、主語接辞 (Subject Prefix: SP)、時制標識 (Tense Marker: TM)、関係節標識 (Relative Marker: RM)、目的語接辞 (Object Prefix: OP)、終母音 (Ending Vowel: EV) がある (ただし、終母音が付加されないアラビア語起源の動詞が存在する)。動詞複合体には、それらの接辞が付加される中心となる動詞語幹 (Verb Stem: VS) が必要である。さらに、動詞語幹は、動詞語幹を拡張する接尾辞が付加され、拡張をおこなうことができる。

単純な命令形をのぞいて、動詞複合体が最小限必要とする形式は、主語接辞と時制標識と動詞語幹と終母音である。動詞拡張の接尾辞をのぞいて、動詞語幹に可能なかぎり多くの接辞を付加させて動詞複合体をつくってみる。

SP-TM-RM-OP-VS-EV

ki-tabu ni-li-cho-ki-som-a jana

『本』 『読む』 『昨日』 = 『私が昨日読んだ本』

上の例の動詞複合体 ni-li-cho-ki-som-a 『私が読んだ』において、ni-は、1 人称単数の主語接辞(SP)、li-は、過去時制を表示する時制標識(TM)、cho-は、K i / V i クラス [単数] 名詞と照応する関係節標識(RM)、ki-は、K i / V i クラス [単数] 名詞と照応する目的語接辞(OP)、-som-は、『読む』を意味する動詞語幹(VS)、-a は、肯定の直説法を表示する終母音(EV)である。関係節標識 cho-があることから分かるように、名詞 ki-tabu 『本』に後続する動詞語幹-som- 『読む』を中心とする動詞複合体は、関係節の一部を形成している。以下では、主語接辞、時制、動詞-wa 『である』と動詞-wa na 『もつ』、目的語接辞、命令法と接続法、関係節、動詞拡張という順で説明する。

## 9. 1 主語接辞

名詞クラスそれぞれに照応する主語接辞が存在することは、名詞クラスの解説において既に説明した。名詞クラスに照応する主語接辞のほかに、人称主語接辞がある。スワヒリ語は、1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数、1 人称複数、2 人称複数、3 人称複数を区別する。それぞれの人称に、人称主語接辞がある。

表 75 人称主語接辞 (肯定)

ni-	1 人称単数
u-	2 人称単数
a-/yu-	3 人称単数
tu-	1 人称複数
m-	2 人称複数
wa-	3 人称複数

3 人称単数主語接辞 a-と 3 人称複数主語接辞 wa-は、それぞれ、M/W a クラス [単数] 名詞に照応する主語接辞 a-と M/W a クラス [複数] 名詞に照応する主語接辞 wa-と同じものである。M/W a クラス [単数] の主語接辞には、a-と yu-の 2 つの形式があるが、yu-が用いられるのは、スワヒリ標準語では場所の表現-po 『いる』、-ko 『いる』、-mo 『いる』に接辞するときのみとされる。

人称主語接辞以外の名詞クラスに照応する主語接辞を再録する。表 76 は、肯定時制で用いられる肯定の主語接辞である。M/Wa クラス [単数] [複数] の主語接辞は、3 人称単数と複数の人称主語接辞と同じである。

表 76 名詞クラス主語接辞 (肯定)

M/Wa [単数]	a-/yu-
M/Wa [複数]	wa-
M/Mi [単数]	u-

M/Mi〔複数〕	i-
Ji/Ma〔単数〕	li-
Ji/Ma〔複数〕	ya-
Ki/Vi〔単数〕	ki-
Ki/Vi〔複数〕	vi-
N〔単数〕	i-
N〔複数〕	zi-
U/N〔単数〕	u-
U/N〔複数〕	zi-
Ku(不定詞)	ku-
Pa(場所)	pa-
Ku(場所)	ku-
Mu(場所)	m-

- 1 人称単数 ni-na-soma ki-tabu 『私は本を読みます』  
2 人称単数 u-na-soma ki-tabu 『あなたは本を読みます』  
3 人称単数 a-na-soma ki-tabu 『彼女、彼は本を読みます』  
1 人称複数 tu-na-soma ki-tabu 『私たちは本を読みます』  
2 人称複数 m-na-soma ki-tabu 『あなたたちは本を読みます』  
3 人称複数 wa-na-soma ki-tabu 『彼らは本を読みます』  
M/Wa〔単数〕 m-toto a-na-soma ki-tabu 『子供は本を読みます』  
(M/Wa〔単数〕 m-toto yu-ko nyumba-ni 『子供は家にいます』)  
M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-na-soma ki-tabu 『子供達は本を読みます』  
M/Mi〔単数〕 m-ti u-na-anguka 『木は倒れます』  
M/Mi〔複数〕 mi-ti i-na-anguka 『木〔複数〕は倒れます』  
Ji/Ma〔単数〕 tunda li-na-anguka 『果物は落ちます』  
Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-na-anguka 『果物〔複数〕は落ちます』  
Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-na-anguka 『本は落ちます』  
Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-na-anguka 『本〔複数〕は落ちます』  
N〔単数〕 nazi i-na-anguka 『やしの実は落ちます』  
N〔複数〕 nazi zi-na-anguka 『やしの実〔複数〕は落ちます』  
U/N〔単数〕 u-kuta u-na-anguka 『壁は倒れます』  
U/N〔複数〕 kuta zi-na-anguka 『壁〔複数〕は倒れます』  
Ku(不定詞) ku-taka w-ingi ku-na-leta ma-tata 『多くを望むことは災難をもたらす』  
Pa(場所) mwitu-ni pa-na-lala simba 『森にライオンが寝ている』  
Ku(場所) mwitu-ni ku-na-lala simba 『森にライオンが寝ている』



Mu (場所) mwitu-ni m-na-lala simba 『森の中にライオンが寝ている』

(文の先頭の文字は、大文字で書くことが正書法できまっているが、分かりやすさを考えて表では小文字を使う)

主語接辞には、否定の主語接辞がある。否定の主語接辞は、否定の時制で用いられる。

1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数をのぞく全ての否定の主語接辞は、肯定の主語接辞に否定を表現する要素 ha-を結合することで形づくられる。2 人称単数の否定主語接辞 hu-は、否定の要素 ha-と肯定の 2 人称主語接辞 u-が結合したものに由来すると考えられる。3 人称単数の否定主語接辞 ha-は、否定の要素 ha-と肯定の 3 人称主語接辞 a-が結合して形づくられている。否定の要素 ha-の母音 a と肯定の 3 人称主語接辞 a-の母音 a が母音融合した結果と考えられる。

表 77 人称主語接辞 (否定)

1 人称単数	si-
2 人称単数	hu-
3 人称単数	ha-/hayu-
1 人称複数	hatu-
2 人称複数	ham-
3 人称複数	hawa-

表 78 名詞クラス主語接辞 (否定)

M/Wa [単数]	ha-/hayu-
M/Wa [複数]	hawa-
M/Mi [単数]	hau-
M/Mi [複数]	hai-
Ji/Ma [単数]	hali-
Ji/Ma [複数]	haya-
Ki/Vi [単数]	haki-
Ki/Vi [複数]	havi-
N [単数]	hai-
N [複数]	hazi-
U/N [単数]	hau-
U/N [複数]	hazi-
Ku (不定詞)	haku-
Pa (場所)	hapa-
Ku (場所)	haku-

Mu (場所) ham-

- 1 人称単数 si-somi ki-tabu 『私は本を読みません』  
2 人称単数 hu-somi ki-tabu 『あなたは本を読みません』  
3 人称単数 ha-somi ki-tabu 『彼女、彼は本を読みません』  
(3 人称単数 hayu-ko nyumba-ni 『彼女、彼は家にいません』)  
1 人称複数 hatu-somi ki-tabu 『私たちは本を読みません』  
2 人称複数 ham-somi ki-tabu 『あなたたちは本を読みません』  
3 人称複数 hawa-somi ki-tabu 『彼らは本を読みません』  
M/Wa [単数] m-toto ha-somi ki-tabu 『子供は本を読みません』  
(M/Wa [単数] m-toto hayu-ko nyumba-ni 『子供は家にいません』)  
M/Wa [複数] wa-toto hawa-somi ki-tabu 『子供達は本を読みません』  
M/Mi [単数] m-ti hu-anguki 『木は倒れません』  
M/Mi [複数] mi-ti hai-anguki 『木 [複数] は倒れません』  
Ji/Ma [単数] tunda hali-anguki 『果物は落ちません』  
Ji/Ma [複数] ma-tunda haya-anguki 『果物 [複数] は落ちません』  
Ki/Vi [単数] ki-tabu haki-anguki 『本は落ちません』  
Ki/Vi [複数] vi-tabu havi-anguki 『本 [複数] は落ちません』  
N [単数] nazi hai-anguki 『やしの実は落ちません』  
N [複数] nazi hazi-anguki 『やしの実 [複数] は落ちません』  
U/N [単数] u-kuta hau-anguki 『壁は倒れません』  
U/N [複数] kuta hazi-anguki 『壁 [複数] は倒れません』  
Ku (不定詞) ku-taka w-ingi haku-leti ma-tata 『多くを望むことは災難をもたらしません』  
Pa (場所) mwitu-ni hapa-lali simba 『森にライオンは寝ていません』  
Ku (場所) mwitu-ni haku-lali simba 『森にライオンは寝ていません』  
Mu (場所) mwitu-ni ham-lali simba 『森の中にライオンは寝ていません』

## 9. 2 時制

スワヒリ語には単純時制と複合時制と呼ばれるものがある。単純時制節は、節内に1つの動詞複合体だけをもち、その動詞複合体内の時制標識により時間（出来事や行為が生じる時間と発話時点との関係、例えば、出来事や行為が発話時点より過去に生じたのか、あるいは、発話時点より未来に生じるのか）とアスペクト（出来事や行為が生じる時間における出来事や行為の様態、例えば、出来事や行為が指定された時間に完了したのか、あるいは、出来事や行為が進行しているのか）が表現される。複合時制節は、節内に2つの連続する動詞複合体をもつ。2つの動詞複合体のうち、1つの動詞複合体内の時制標識が節が表現する出来事や行為が生じる時間を指定し、もう1つの動詞複合体内の時制標識が指

定された時間での出来事や行為のAspectを表現する。例えば、下の例の1番目の文は、時間とAspectを表現する時制標識 na (現在継続) をもつ動詞複合体を節内に1つだけもっている。2番目の文は、時間を表現する時制標識 li (過去) をもつ動詞複合体と、Aspectを表現する時制標識 ki (進行) をもつ動詞複合体をもつ。1番目の文のように、時間・Aspectを表現する時制標識を節が1つだけもつ場合、その時制を単純時制と呼ぶ。2番目の文のように、時間とAspectを表現する時制標識を節が2つもつ場合、その時制を複合時制と呼ぶ。

Ni-nasoma ki-tabu.

『読む』『本』 = 『私は本を読んでいます』

Ni-li-kuwa ni-ki-soma ki-tabu.

過去時制『読む』『本』 = 『私は本を読みました』

時制標識には、時間だけを表現する機能をもつものと、時間とAspectの両方を表現する機能をもつものと、Aspectだけを表現する機能をもつものがある。肯定文をつくる時制標識だけを考えると、過去時制標識 li-と未来時制標識 ta-は、時間だけを表現する機能をもつ。現在継続時制標識 na-と現在時制標識 a-と現在完了時制標識 me-は、時間とAspectの両方を表現する機能をもつ。現在進行時制標識 ki-と「語り」過去時制標識 ka-は、Aspectだけを表現する機能をもつ。

文は必ず時間の指定が必要だから、Aspectだけを表現する機能をもつ時制標識は、文において単独で用いることはできない。Aspectだけを表現する機能をもつ時制標識は、文において必ず時間を表現する機能をもつ時制標識とともに用いられる。単純時制の文では、時間とAspectの両方を表現する機能をもつ時制標識は、時間とAspectの両方を同時に表現することになる。時間とAspectの両方を表現する機能をもつ時制標識は、複合時制の文においては、そのおかれる位置により、時間を表現するか、Aspectを表現するかが決定される。

まずはじめに、単純時制を説明する。単純時制には、現在継続時制、現在時制、現在完了時制、現在進行時制、過去時制、未来時制がある。さらに、特殊な形をした習慣時制がある。これらのうち、基本時制は、現在継続時制と現在時制、現在完了時制、過去時制、未来時制である。肯定の時制標識と否定の時制標識が対になって存在するものを基本時制と呼ぶ。肯定の時制標識と否定の時制標識は、たいてい、全く異なる形をしている。

現在継続時制と現在時制に対する否定の時制標識は、同一の否定の時制標識（ゼロ形態素、あるいは、時制の標識が付加されない）が用いられる。時制の分割に関して、肯定での時制の数より否定での時制の数が減少することは、世界の言語でよく見られる現象である。

〔1〕 肯定現在継続時制

肯定の時制標識と否定の時制標識は、たいてい、異なる形式をしている。肯定現在継続時制は、時制標識 na- が用いられる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる

表 79 肯定現在継続時制

1 人称単数	ni-na-soma ki-tabu	『私は本を読みます』
2 人称単数	u-na-soma ki-tabu	『あなたは本を読みます』
3 人称単数	a-na-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読みます』
1 人称複数	tu-na-soma ki-tabu	『私たちは本を読みます』
2 人称複数	m-na-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読みます』
3 人称複数	wa-na-soma ki-tabu	『彼らは本を読みます』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-na-soma ki-tabu	『子供は本を読みます』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-na-soma ki-tabu	『子供達は本を読みます』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-na-anguka	『木は倒れます』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-na-anguka	『木〔複数〕は倒れます』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-na-anguka	『果物は落ちます』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-na-anguka	『果物〔複数〕は落ちます』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-na-anguka	『本は落ちます』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-na-anguka	『本〔複数〕は落ちます』
N〔単数〕	nazi i-na-anguka	『やしの実は落ちます』
N〔複数〕	nazi zi-na-anguka	『やしの実〔複数〕は落ちます』
U/N〔単数〕	u-kuta u-na-anguka	『壁は倒れます』
U/N〔複数〕	kuta zi-na-anguka	『壁〔複数〕は倒れます』
Ku(不定詞)	ku-taka w-ingi ku-na-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらします』
Pa(場所)	mwitu-ni pa-na-lala simba	『森にライオンが寝ています』
Ku(場所)	mwitu-ni ku-na-lala simba	『森にライオンが寝ています』
Mu(場所)	mwitu-ni m-na-lala simba	『森の中にライオンが寝ています』

肯定現在継続時制は、動詞語幹が表す行為や出来事が発話時点で継続して生じていることを表す。したがって、例えば、上の例文が成立するためには、発話時点で行為者が『本を読んで』いなければならない。発話時点で行為者『木』や『果物』が『倒れるか』『落ちるか』していなければならない。もう既に『倒れたり』『落ちたり』してしまっていると上の例文はなりたたない。

[単音節動詞]

単音節動詞と呼ばれる動詞がある。単音節動詞は、時制標識が付加したときに、他の動

詞とは異なる振る舞いをする。単音節動詞は、少ししか存在しないが、-la『食べる』、-pa『与える』、-ja『来る』、-fa『死ぬ』など日常でよく使われる動詞である。

単音節動詞は、終母音を含めて1音節からなる。終母音は、本来、語幹の一部ではないので、単音節動詞は、語幹が子音1つだけ、あるいは、子音だけの連続からなると考えられる。単音節動詞は、語幹が子音だけからなる動詞であると定義できる。その意味では単音節動詞という名前は適当ではないと考えられるが、単音節動詞という名前が定着しているのでそれを使うことにする。

単音節動詞は、ある特定の時制標識とともに用いられるとき、アクセントを調整するために、本来は不定詞をつくる接頭辞 ku-が時制標識と動詞語幹のあいだに挿入される。

単音節動詞が肯定現在継続時制 na-に後続するとき、不定詞の接頭辞 ku-が挿入される。単音節動詞は、『食べる』など「人間」や「動物」を行為者としてとるのが自然な動詞だけなので、「人間」を主語にした、人称の主語接辞が付加された形式を例に説明する。

表 80 肯定現在継続時制（単音節動詞）

1 人称単数	ni-na-kuja shule-ni	『私は学校から帰ります』
2 人称単数	u-na-kuja shule-ni	『あなたは学校から帰ります』
3 人称単数	a-na-kuja shule-ni	『彼女、彼は学校から帰ります』
1 人称複数	tu-na-kuja shule-ni	『私たちは学校から帰ります』
2 人称複数	m-na-kuja shule-ni	『あなたたちは学校から帰ります』
3 人称複数	wa-na-kuja shule-ni	『彼らは学校から帰ります』

スワヒリ語は、語の最後から2番目の音節にアクセントがある。例えば、もし、単音節動詞と肯定現在継続時制標識 na-のあいだに不定詞の接頭辞 ku-を挿入しなければ、\*ni-na-ja (1 人称単数)になる。語の最後から2番目の音節にアクセントがあるので肯定現在継続時制標識 na-にアクセントが落ちる。しかし、肯定現在継続時制標識 na-は、アクセントをもつことができない形式である。これは、肯定現在継続時制標識 na-の由来によるものと考えられる。肯定現在継続時制標識 na-がアクセントをもてないので、不定詞の接頭辞 ku-を挿入して、不定詞の接頭辞 ku-にアクセントをもたせるのである。

このことは、以下の事実から説明できる。例えば、もし、単音節動詞が目的語接辞を時制標識と語幹のあいだにもてば、目的語接辞は、アクセントをもつことができる形式なので、アクセントを調節するために不定詞の接頭辞を挿入する必要はない。なぜなら、目的語接辞にアクセントをおけば良い。

Ni-na-m-pa ki-tabu.

『与える』『本』

『私は彼に本を与える』

上の例では、単音節動詞語幹-pa『与える』と肯定現在継続時制標識 na-のあいだに、目的語接辞 m-『彼女、彼』が付加されている。語の最後から2番目の音節にアクセントは落ちる。語の最後から2番目の音節は、目的語接辞 m-にあたる（鼻音 m は、単独で音節をつくっている）。目的語接辞 m-は、アクセントをもてる形式なので、目的語接辞 m-がアクセントをとまって発音される。アクセントの調整のための不定詞の接頭辞 ku-を挿入する必要はない。

時制標識全てがアクセントをもつことができない形式であるわけではない。肯定現在継続時制標識 na-のようにアクセントをもつことができない時制標識と、アクセントをもつことができる時制標識がある。これ以降、全ての時制に関して、時制標識がアクセントをもつことができるか、もつことができないかを明らかにするために、単音節動詞の人称活用をいつも確認することにする。

#### [アラビア語起源動詞]

バントゥ起源の動詞は、終母音が付加される。しかし、アラビア語起源の動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、あるいは、u をもっており、終母音-a が付加されない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 81 肯定現在継続時制（アラビア語起源動詞）

1 人称単数	ni-na-jaribu kazi	『私は仕事を試みる』
2 人称単数	u-na-jaribu kazi	『あなたは仕事を試みる』
3 人称単数	a-na-jaribu kazi	『彼女、彼は仕事を試みる』
1 人称複数	tu-na-jaribu kazi	『私たちは仕事を試みる』
2 人称複数	m-na-jaribu kazi	『あなたたちは仕事を試みる』
3 人称複数	wa-na-jaribu kazi	『彼らは仕事を試みる』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-na-jaribu kazi	『子供は仕事を試みる』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-na-jaribu kazi	『子供達は仕事を試みる』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-na-baki	『木は残る』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-na-baki	『木〔複数〕は残る』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-na-baki	『果物は残る』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-na-baki	『果物〔複数〕は残る』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-na-baki	『本は残る』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-na-baki	『本〔複数〕は残る』
N〔単数〕	nazi i-na-baki	『やしの実は残る』

N〔複数〕	nazi zi-na-baki	『やしの実〔複数〕は残る』
U/N〔単数〕	u-kuta u-na-baki	『壁は残る』
U/N〔複数〕	kuta zi-na-baki	『壁〔複数〕は残る』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi ku-na-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊す』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-na-keji simba	『森にライオンは座る』
Ku（場所）	mwitu-ni ku-na-keji simba	『森にライオンは座る』
Mu（場所）	mwitu-ni m-na-keji simba	『森の中にライオンは座る』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

### [3] 肯定現在時制

肯定現在継続時制と肯定現在時制に対応する否定現在時制は、このあと[2]において解説する。先に肯定現在時制を[3]として説明する。

肯定現在時制は、時制標識 a- が用いられる。時制標識 a- は、主語接辞の直後の位置におかれる。肯定時制標識 a- と先行する主語接辞のあいだで音変化が生じる。

表 82 肯定現在時制

1 人称単数	n-a-soma Ki-swahili	『私はスワヒリ語を学びます』
2 人称単数	w-a-soma Ki-swahili	『あなたはスワヒリ語を学びます』
3 人称単数	a-soma Ki-swahili	『彼女、彼はスワヒリ語を学びます』
1 人称複数	tw-a-soma Ki-swahili	『私たちはスワヒリ語を学びます』
2 人称複数	mw-a-soma Ki-swahili	『あなたたちはスワヒリ語を学びます』
3 人称複数	w-a-soma Ki-swahili	『彼らはスワヒリ語を学びます』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-soma Ki-swahili	『子供はスワヒリ語を学びます』
M/Wa〔複数〕	wa-toto w-a-soma Ki-swahili	『子供達はスワヒリ語を学びます』
M/Mi〔単数〕	m-ti w-a-poteza majani yake	『木は葉を落とします』
M/Mi〔複数〕	mi-ti y-a-poteza majani yake	『木〔複数〕は葉を落とします』
Ji/Ma〔単数〕	tunda l-a-anguka	『果物は落ちます』
Ji/Ma〔複数〕	matunda y-a-anguka	『果物〔複数〕は落ちます』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ch-a-anguka	『本は落ちます』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vy-a-anguka	『本〔複数〕は落ちます』
N〔単数〕	nazi y-a-anguka	『やしの実は落ちます』
N〔複数〕	nazi z-a-anguka	『やしの実〔複数〕は落ちます』
U/N〔単数〕	u-kuta w-a-anguka	『壁は倒れます』
U/N〔複数〕	ku-ta z-a-anguka	『壁〔複数〕は倒れます』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi kw-a-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらします』

Pa (場所) mwitu-ni p-a-lala simba 『森にライオンが寝ます』  
 Ku (場所) mwitu-ni kw-a-lala simba 『森にライオンが寝ます』  
 Mu (場所) mwitu-ni mw-a-lala simba 『森の中にライオンは寝ます』

主語接辞と時制標識 a-のあいだで以下のような音変化がある。

1 人称単数主語接辞 ni-の母音 i は、時制標識 a-のまえで脱落する。2 人称単数主語接辞 u-は、時制標識 a-のまえで半母音 w になる。3 人称単数主語接辞 a-と時制標識 a-は、母音融合して、母音 a になる。1 人称複数主語接辞 tu-の母音 u は、時制標識 a-のまえで半母音 w になる。2 人称複数主語接辞 mu-の母音 u は、時制標識 a-のまえで半母音 w になる。3 人称複数主語接辞 wa-の母音 a と時制標識 a-は、母音融合して母音 a になる。M/M i クラス〔単数〕の主語接辞 u-、U/N クラス〔単数〕の主語接辞 u-は、時制標識 a-のまえで半母音 w になる。M/M i クラス〔複数〕の主語接辞 i-は、時制標識 a-のまえで半母音 y になる。

J i /M a クラス〔単数〕の主語接辞 li-の母音 i、N クラス〔複数〕の主語接辞 zi-の母音 i、U/N クラス〔複数〕の主語接辞 zi-の母音 i は、時制標識 a-のまえで脱落する。J i /M a クラス〔複数〕の主語接辞 ya-の母音 a、P a (場所) クラスの主語接辞 pa-の母音 a は、時制標識 a-と母音融合して母音 a になる。

K i /V i クラス〔単数〕の主語接辞 ki-は、時制標識 a-のまえで、音変化して ch になる。K i /V i クラス〔複数〕の主語接辞 vi-の母音 i は、時制標識 a-のまえで半母音 y になる。N クラス〔単数〕の主語接辞 i-は、時制標識 a-の前で半母音 y になる。K u (不定詞) クラスの主語接辞 ku-、K u (場所) クラスの主語接辞 ku-の母音 u は、時制標識 a-の前で半母音 w になる。M u (場所) クラスの主語接辞 m-と時制標識 a-のあいだに、わたり音 w を挿入する。

肯定現在時制 a-は、発話時点で出来事や行為が事実であることを表す。行為や出来事が行われることが事実であれば良いのであって、発話時点において実際に行為や出来事が継続的に生じていなくても良い。例えば、上の例において行為者が『スワヒリ語を専攻か教科かなどで学んでいれば』、実際に発話時に『机に向かってスワヒリ語を学んでいなくても』、行為者が『スワヒリ語を学ぶ』という出来事が事実であることにはかわりない。発話時点で出来事や行為が事実であるから、肯定現在時制 a-を用いることができる。発話時点で出来事や行為が事実でさえあれば、肯定現在時制 a-は、発話時における事実や、あるいは、特定の時間にかかわらない真実を述べる時にも用いられることができる。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定現在時制で用いられるとき、肯定現在時制の時制標識-a と先行する主語接辞がつくる音節は、アクセントをもつことができる。したがって、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-を用いる必要はない。



表 83 肯定現在時制（単音節動詞）

- 1 人称単数 n-a-ja shule-ni 『私は学校から帰る』  
 2 人称単数 w-a-ja shule-ni 『あなたは学校から帰る』  
 3 人称単数 a-ja shule-ni 『彼女、彼は学校から帰る』  
 1 人称複数 tw-a-ja shule-ni 『私たちは学校から帰る』  
 2 人称複数 mw-a-ja shule-ni 『あなたたちは学校から帰る』  
 3 人称複数 w-a-ja shule-ni 『彼らは学校から帰る』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源の動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 84 肯定現在時制（アラビア語起源動詞）

- 1 人称単数 n-a-jaribu kazi 『私は仕事を試みます』  
 2 人称単数 w-a-jaribu kazi 『あなたは仕事を試みます』  
 3 人称単数 a-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試みます』  
 1 人称複数 tw-a-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みます』  
 2 人称複数 mw-a-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みます』  
 3 人称複数 w-a-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みます』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto a-jaribu kazi 『子供は仕事を試みます』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto w-a-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みます』  
 M/Mi〔単数〕 m-ti w-a-baki 『木は残ります』  
 M/Mi〔複数〕 mi-ti y-a-baki 『木〔複数〕は残ります』  
 Ji/Ma〔単数〕 tunda l-a-baki 『果物は残ります』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda y-a-baki 『果物〔複数〕は残ります』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ch-a-baki 『本は残ります』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vy-a-baki 『本〔複数〕は残ります』  
 N〔単数〕 nazi y-a-baki 『やしの実は残ります』  
 N〔複数〕 nazi z-a-baki 『やしの実〔複数〕は残ります』  
 U/N〔単数〕 u-kuta w-a-baki 『壁は残ります』  
 U/N〔複数〕 kuta z-a-baki 『壁〔複数〕は残ります』  
 Ku（不定詞） ku-taka w-ingi kw-a-haribu m-oyo 『多くを望むことは心を壊します』  
 Pa（場所） mwitu-ni p-a-kefi simba 『森にライオンが座ります』  
 Ku（場所） mwitu-ni kw-a-kefi simba 『森にライオンが座ります』

Mu (場所) mwitu-ni mw-a-kei simba 『森の中にライオンが座ります』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

〔2〕 = 〔4〕 否定現在時制

否定現在時制は、肯定現在継続時制と肯定現在時制の両方と対をなす否定の時制である。肯定現在継続時制を否定にしたいときも、肯定現在時制を否定にしたいときにも用いられる。肯定現在継続時制を否定にするときも、肯定現在時制を否定にするときも、否定現在時制が用いられるので、否定においては、現在継続時制なのか、現在時制なのかを区別することはできない。

否定現在時制は、時制標識を用いない。時制標識がないことが否定現在時制の特徴である。時制標識を用いないかわりに、終母音-aを-iにかえる。主語接辞は、否定の主語接辞を用いる。

表 85 否定現在時制

1 人称単数	si-som-i ki-tabu	『私は本を読まない』
2 人称単数	hu-som-i ki-tabu	『あなたは本を読まない』
3 人称単数	ha-som-i ki-tabu	『彼女、彼は本を読まない』
1 人称複数	hatu-som-i ki-tabu	『私たちは本を読まない』
2 人称複数	ham-som-i ki-tabu	『あなたたちは本を読まない』
3 人称複数	hawa-som-i ki-tabu	『彼らは本を読まない』
M/Wa[単数]	m-toto ha-som-i ki-tabu	『子供は本を読まない』
M/Wa[複数]	wa-toto hawa-som-i ki-tabu	『子供たちは本を読まない』
M/Mi[単数]	m-ti hau-anguk-i	『木は倒れない』
M/Mi[複数]	mi-ti hai-anguk-i	『木[複数]は倒れない』
Ji/Ma[単数]	tunda hali-anguk-i	『果物は落ちない』
Ji/Ma[複数]	ma-tunda haya-anguk-i	『果物[複数]は落ちない』
Ki/Vi[単数]	ki-tabu haki-anguk-i	『本は落ちない』
Ki/Vi[複数]	vi-tabu havi-anguk-i	『本[複数]は落ちない』
N[単数]	nazi hai-anguk-i	『やしの実は落ちない』
N[複数]	nazi hazi-anguk-i	『やしの実[複数]は落ちない』
U/N[単数]	u-kuta hau-anguk-i	『壁は倒れない』
U/N[複数]	kuta hazi-anguk-i	『壁[複数]は倒れない』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi haku-let-i ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらさない』
Pa (場所)	mwitu-ni hapa-lal-i simba	『森にライオンが寝ない』
Ku (場所)	mwitu-ni haku-lal-i simba	『森にライオンが寝ない』

Mu (場所) mwitu-ni ham-lal-i simba 『森の中にライオンが寝ない』

[単音節動詞]

単音節動詞が否定現在時制で用いられるとき、否定現在時制は時制標識が用いられないので、否定の主語接辞と動詞語幹が接することになる。主語接辞が語の後ろから2番目の音節を構成する。アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、否定の主語接辞と動詞語幹のあいだに挿入されない。なぜなら主語接辞は、アクセントをもつことができる形式であるからである。

表 86 否定現在時制 (単音節動詞)

- 1 人称単数 si-j-i shule-ni 『私は学校から帰らない』
- 2 人称単数 hu-j-i shule-ni 『あなたは学校から帰らない』
- 3 人称単数 ha-j-i shule-ni 『彼女、彼は学校から帰らない』
- 1 人称複数 hatu-j-i shule-ni 『私たちは学校から帰らない』
- 2 人称複数 ham-j-i shule-ni 『あなたたちは学校から帰らない』
- 3 人称複数 hawa-j-i shule-ni 『彼らは学校から帰らない』

[アラビア語起源動詞]

バントゥ起源の動詞は、否定現在時制において終母音-a を-i にかえる。それに対して、アラビア語起源の動詞では、終母音-a を-i にかえることは生じない。なぜなら、アラビア語起源の動詞は、もともと終母音-a をもたないからである。アラビア語起源動詞は、否定現在時制においても、語幹の末尾の位置に、もともとの母音 i、e、u をもつ。

終母音-a を-i にかえないこと以外は、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 87 否定現在時制 (アラビア語起源動詞)

- 1 人称単数 si-jaribu kazi 『私は仕事を試みない』
- 2 人称単数 hu-jaribu kazi 『あなたは仕事を試みない』
- 3 人称単数 ha-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試みない』
- 1 人称複数 hatu-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みない』
- 2 人称複数 ham-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みない』
- 3 人称複数 hawa-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みない』
- M/Wa [単数] m-toto ha-jaribu kazi 『子供は仕事を試みない』
- M/Wa [複数] wa-toto hawa-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みない』
- M/Mi [単数] m-ti hau-baki 『木は残らない』
- M/Mi [複数] mi-ti hai-baki 『木〔複数〕は残らない』

Ji/Ma〔単数〕	tunda hali-baki	『果物は残らない』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda haya-baki	『果物〔複数〕は残らない』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu haki-baki	『本は残らない』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu havi-baki	『本〔複数〕は残らない』
N〔単数〕	nazi hai-baki	『やしの実は残らない』
N〔複数〕	nazi hazi-baki	『やしの実〔複数〕は残らない』
U/N〔単数〕	u-kuta hau-baki	『壁は残らない』
U/N〔複数〕	kuta hazi-baki	『壁〔複数〕は残らない』
Ku(不定詞)	ku-taka w-ingi haku-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊さない』
Pa(場所)	mwitu-ni hapa-kei simba	『森にライオンは座らない』
Ku(場所)	mwitu-ni haku-kei simba	『森にライオンは座らない』
Mu(場所)	mwitu-ni ham-kei simba	『森の中にライオンは座らない』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [5] 肯定現在完了時制

肯定現在完了時制は、時制標識 *me-* が用いられる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。肯定の時制なので、主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。

表 88 肯定現在完了時制

1 人称単数	ni-me-soma ki-tabu	『私は本を読み終える』
2 人称単数	u-me-soma ki-tabu	『あなたは本を読み終える』
3 人称単数	a-me-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読み終える』
1 人称複数	tu-me-soma ki-tabu	『私たちは本を読み終える』
2 人称複数	m-me-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読み終える』
3 人称複数	wa-me-soma ki-tabu	『彼らは本を読み終える』
M/Wa[単数]	m-toto a-me-soma ki-tabu	『子供は本を読み終える』
M/Wa[複数]	wa-toto wa-me-soma ki-tabu	『子供たちは本を読み終える』
M/Mi[単数]	m-ti u-me-anguka	『木は倒れている』
M/Mi[複数]	mi-ti i-me-anguka	『木〔複数〕は倒れている』
Ji/Ma[単数]	tunda li-me-anguka	『果物は落ちている』
Ji/Ma[複数]	ma-tunda ya-me-anguka	『果物〔複数〕は落ちている』
Ki/Vi[単数]	ki-tabu ki-me-anguka	『本は落ちている』
Ki/Vi[複数]	vi-tabu vi-me-anguka	『本〔複数〕は落ちている』
N[単数]	nazi i-me-anguka	『やしの実は落ちている』

- N[複数] nazi zi-me-anguka 『やしの実 [複数] は落ちている』  
 U/N[単数] u-kuta u-me-anguka 『壁は倒れている』  
 U/N[複数] kuta zi-me-anguka 『壁 [複数] は倒れている』  
 Ku (不定詞) ku-taka w-ingi ku-me-leta ma-tata 『多くを望むことは災難をもたらしている』  
 Pa (場所) mwitu-ni pa-me-lala simba 『森にライオンは寝ている』  
 Ku (場所) mwitu-ni ku-me-lala simba 『森にライオンは寝ている』  
 Mu (場所) mwitu-ni m-me-lala simba 『森の中にライオンは寝ている』

現在完了時制は、発話時点で出来事や行為が成し遂げられたこと、出来事や行為の結果、また、出来事や行為の結果による発話時点での出来事や行為の状態を表す。したがって、現在完了時制は、後で説明する状態動詞と一緒によく使われる。

現在完了時制標識 **me-**は、本来、アスペクト（出来事や行為が時間内でどのような様態をしているか、出来事や行為が完結したのか、継続しているのか、あるいは、進行しているのか）を表す。ただし、過去なのか、未来なのか、時間について言及することなく、現在完了時制標識 **me-**が単独で用いられるときは、現在における完了を表す。つまり、現在完了時制のはたらきをする。後で説明する複合時制においては、現在完了時制標識 **me-**は、完了アスペクトを表現する。

#### M-lima u-le u-me-onekana

『山』『あの』『見える』 = 『あの山が見える』

状態動詞-onekana『見える』が現在完了時制とともに用いられ、発話時点での出来事の状態を表わしている。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定現在完了時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 **ku-**が主語接辞と動詞語幹のあいだに挿入される。肯定現在完了時制の時制標識 **me-**は、アクセントをもてない形式である。

目的語接辞が動詞語幹の前の位置に付加される場合、不定詞をつくる接頭辞 **ku-**を挿入する必要はない。

#### 表 89 肯定現在完了時制 (単音節動詞)

- 1 人称単数 ni-me-kuja shule-ni 『私は学校から帰っている』  
 2 人称単数 u-me-kuja shule-ni 『あなたは学校から帰っている』  
 3 人称単数 a-me-kuja shule-ni 『彼女、彼は学校から帰っている』  
 1 人称複数 tu-me-kuja shule-ni 『私たちは学校から帰っている』

- 2 人称複数 m-me-kuja shule-ni 『あなたたちは学校から帰っている』  
 3 人称複数 wa-me-kuja shule-ni 『彼らは学校から帰っている』

#### Ni-me-m-pa chakula

『与える』『食べ物』 = 『私は彼女に食べ物を与えている』

上の例のように、単音節動詞であっても、目的語接辞 m-が動詞語幹のまえの位置に付加されると、アクセントの調整のために不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入する必要はない。アクセントは、目的語接辞 m-にある。

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。そのことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

#### 表 90 肯定現在完了時制（アラビア語起源動詞）

- 1 人称単数 ni-me-jaribu kazi 『私は仕事を試み終える』  
 2 人称単数 u-me-jaribu kazi 『あなたは仕事を試み終える』  
 3 人称単数 a-me-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試み終える』  
 1 人称複数 tu-me-jaribu kazi 『私たちは仕事を試み終える』  
 2 人称複数 m-me-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試み終える』  
 3 人称複数 wa-me-jaribu kazi 『彼らは仕事を試み終える』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto a-me-jaribu kazi 『子供は仕事を試み終える』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-me-jaribu kazi 『子供達は仕事を試み終える』  
 M/Mi〔単数〕 m-ti u-me-baki 『木は残っている』  
 M/Mi〔複数〕 mi-ti i-me-baki 『木〔複数〕は残っている』  
 Ji/Ma〔単数〕 tunda li-me-baki 『果物は残っている』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-me-baki 『果物〔複数〕は残っている』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-me-baki 『本は残っている』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-me-baki 『本〔複数〕は残っている』  
 N〔単数〕 nazi i-me-baki 『やしの実は残っている』  
 N〔複数〕 nazi zi-me-baki 『やしの実〔複数〕は残っている』  
 U/N〔単数〕 u-kuta u-me-baki 『壁は残っている』  
 U/N〔複数〕 kuta zi-me-baki 『壁〔複数〕は残っている』  
 Ku（不定詞） ku-taka w-ingi ku-me-haribu m-oyo 『多くを望むことは心を壊し終える』  
 Pa（場所） mwitu-ni pa-me-kei simba 『森にライオンは座っている』

Ku (場所) mwitu-ni ku-me-keci simba 『森にライオンは座っている』

Mu (場所) mwitu-ni m-me-keci simba 『森の中にライオンは座っている』

アラビア語起源動詞の中に単音節動詞は見当たらない。

## [6] 否定現在完了時制

否定の現在完了時制には、時制標識 ja-を用いる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。否定の時制なので、主語接辞は、否定の主語接辞が用いられる。終母音は、a-のままである。

表 91 否定現在完了時制

1 人称単数	si-ja-soma ki-tabu	『私は本を読んでない』
2 人称単数	hu-ja-soma ki-tabu	『あなたは本を読んでない』
3 人称単数	ha-ja-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読んでない』
1 人称複数	hatu-ja-soma ki-tabu	『私たちは本を読んでない』
2 人称複数	ham-ja-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読んでない』
3 人称複数	hawa-ja-soma ki-tabu	『彼らは本を読んでない』
M/Wa [単数]	m-toto ha-ja-soma ki-tabu	『子供は本を読んでない』
M/Wa [複数]	wa-toto hawa-ja-soma ki-tabu	『子供たちは本を読んでない』
M/Mi [単数]	m-ti hau-ja-anguka	『木は倒れていない』
M/Mi [複数]	mi-ti hai-ja-anguka	『木 [複数] は倒れていない』
Ji/Ma [単数]	tunda hali-ja-anguka	『果物は落ちていない』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda haya-ja-anguka	『果物 [複数] は落ちていない』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu haki-ja-anguka	『本は落ちていない』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu havi-ja-anguka	『本 [複数] は落ちていない』
N [単数]	nazi hai-ja-anguka	『やしの実は落ちていない』
N [複数]	nazi hazi-ja-anguka	『やしの実 [複数] は落ちていない』
U/N [単数]	u-kuta hau-ja-anguka	『壁は倒れていない』
U/N [複数]	kuta hazi-ja-anguka	『壁 [複数] は倒れていない』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi haku-ja-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらしていない』
Pa (場所)	mwitu-ni hapa-ja-lala simba	『森にライオンは寝ていない』
Ku (場所)	mwitu-ni haku-ja-lala simba	『森にライオンは寝ていない』
Mu (場所)	mwitu-ni ham-ja-lala simba	『森の中にライオンは寝ていない』

否定現在完了時制は、肯定現在完了時制と対をなし、発話時点での出来事や行為がまだ

成し遂げられてないこと、発話時点での出来事や行為の否定的な状態を表す。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が否定現在完了時制で用いられるとき、アクセントを調節する不定詞をつくる接頭辞 ku-を動詞語幹と時制標識のあいだに挿入する必要はない。否定現在完了時制の標識 ja-は、アクセントをもつことができる。

表 92 否定現在完了時制（単音節動詞）

- 1 人称単数 si-ja-ja shule-ni 『私は学校から帰っていない』
- 2 人称単数 hu-ja-ja shule-ni 『あなたは学校から帰っていない』
- 3 人称単数 ha-ja-ja shule-ni 『彼女、彼は学校から帰っていない』
- 1 人称複数 hatu-ja-ja shule-ni 『私たちは学校から帰っていない』
- 2 人称複数 ham-ja-ja shule-ni 『あなたたちは学校から帰っていない』
- 3 人称複数 hawa-ja-ja shule-ni 『彼らは学校から帰っていない』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。それ以外をのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 93 否定現在完了（アラビア語起源動詞）

- 1 人称単数 si-ja-jaribu kazi 『私は仕事を試みていない』
- 2 人称単数 hu-ja-jaribu kazi 『あなたは仕事を試みていない』
- 3 人称単数 ha-ja-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試みていない』
- 1 人称複数 hatu-ja-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みていない』
- 2 人称複数 ham-ja-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みていない』
- 3 人称複数 hawa-ja-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みていない』
- M/Wa〔単数〕 m-toto ha-ja-jaribu kazi 『子供は仕事を試みていない』
- M/Wa〔複数〕 wa-toto hawa-ja-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みていない』
- M/Mi〔単数〕 m-ti hau-ja-baki 『木は残っていない』
- M/Mi〔複数〕 mi-ti hai-ja-baki 『木〔複数〕は残っていない』
- Ji/Ma〔単数〕 tunda hali-ja-baki 『果物は残っていない』
- Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda haya-ja-baki 『果物〔複数〕は残っていない』
- Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu haki-ja-baki 『本は残っていない』
- Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu havi-ja-baki 『本〔複数〕は残っていない』
- N〔単数〕 nazi hai-ja-baki 『やしの実は残っていない』



N〔複数〕	nazi hazi-ja-baki	『やしの実〔複数〕は残っていない』
U/N〔単数〕	u-kuta hau-ja-baki	『壁は残っていない』
U/N〔複数〕	kuta hazi-ja-baki	『壁〔複数〕は残っていない』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi haku-ja-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊していない』
Pa（場所）	mwitu-ni hapa-ja-keji simba	『森にライオンは座っていない』
Ku（場所）	mwitu-ni haku-ja-keji simba	『森にライオンは座っていない』
Mu（場所）	mwitu-ni ham-ja-keji simba	『森の中にライオンは座っていない』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

### [7] 肯定過去時制

肯定過去時制には、時制標識 li-が用いられる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。肯定なので肯定の主語接辞が用いられる。

表 94 肯定過去時制

1 人称単数	ni-li-soma ki-tabu	『私は本を読んだ』
2 人称単数	u-li-soma ki-tabu	『あなたは本を読んだ』
3 人称単数	a-li-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読んだ』
1 人称複数	tu-li-soma kitabu	『私たちは本を読んだ』
2 人称複数	m-li-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読んだ』
3 人称複数	wa-li-soma ki-tabu	『彼らは本を読んだ』
M/Wa[単数]	m-toto a-li-soma ki-tabu	『子供は本を読んだ』
M/Wa[複数]	wa-toto wa-li-soma ki-tabu	『子供たちは本を読んだ』
M/Mi[単数]	m-ti u-li-anguka	『木は倒れた』
M/Mi[複数]	mi-ti i-li-anguka	『木〔複数〕は倒れた』
Ji/Ma[単数]	tunda ya-li-anguka	『果物は落ちた』
Ji/Ma[複数]	ma-tunda ya-li-anguka	『果物〔複数〕は落ちた』
Ki/Vi[単数]	ki-tabu ki-li-anguka	『本は落ちた』
Ki/Vi[複数]	vi-tabu vi-li-anguka	『本〔複数〕は落ちた』
N[単数]	nazi i-li-anguka	『やしの実は落ちた』
N[複数]	nazi zi-li-anguka	『やしの実〔複数〕は落ちた』
U/N[単数]	u-kuta u-li-anguka	『壁は倒れた』
U/N[複数]	kuta zi-li-anguka	『壁〔複数〕は倒れた』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi ku-li-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらした』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-li-lala simba	『森にライオンは寝た』
Ku（場所）	mwitu-ni ku-li-lala simba	『森にライオンは寝た』

Mu (場所) mwitu-ni m-li-lala simba 『森の中にライオンは寝た』

過去時制は、発話時点より過去において出来事や行為が生じたことを表す。

[単音節動詞]

単音節動詞が肯定過去時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-を動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入する。肯定過去時制の時制標識 li-は、アクセントをもつことができない形式である。表 95 において不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹-ja『来る』と時制標識 li-のあいだに挿入されている。

もしも目的語接辞が動詞語幹の前の位置に付加されると、アクセントを調整するために不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入する必要はない。

表 95 肯定過去時制(単音節動詞)

- |        |                     |                 |
|--------|---------------------|-----------------|
| 1 人称単数 | ni-li-kuja shule-ni | 『私は学校から帰った』     |
| 2 人称単数 | u-li-kuja shule-ni  | 『あなたは学校から帰った』   |
| 3 人称単数 | a-li-kuja shule-ni  | 『彼女、彼は学校から帰った』  |
| 1 人称複数 | tu-li-kuja shule-ni | 『私たちは学校から帰った』   |
| 2 人称複数 | m-li-kuja shule-ni  | 『あなたたちは学校から帰った』 |
| 3 人称複数 | wa-li-kuja shule-ni | 『彼らは学校から帰った』    |

目的語接辞 ki-がアクセントをもつことのできる形式なので、下の例は、アクセントを調整するため不定詞をつくる接頭辞 ku-を動詞語幹-la と時制標識 li-のあいだに挿入しない。例えば、下の例では、アクセントは、目的語接辞 ki-にある。

Ni-li-ki-la ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『私はその食べ物を食べた』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。そのことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 96 肯定過去時制 (アラビア語起源動詞)

- |        |                   |               |
|--------|-------------------|---------------|
| 1 人称単数 | ni-li-jaribu kazi | 『私は仕事を試みた』    |
| 2 人称単数 | u-li-jaribu kazi  | 『あなたは仕事を試みた』  |
| 3 人称単数 | a-li-jaribu kazi  | 『彼女、彼は仕事を試みた』 |

- 1 人称複数 tu-li-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みた』  
 2 人称複数 m-li-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みた』  
 3 人称複数 wa-li-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みた』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto a-li-jaribu kazi 『子供は仕事を試みた』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-li-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みた』  
 M/Mi〔単数〕 m-ti u-li-baki 『木は残った』  
 M/Mi〔複数〕 mi-ti i-li-baki 『木〔複数〕は残った』  
 Ji/Ma〔単数〕 tunda li-li-baki 『果物は残った』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-li-baki 『果物〔複数〕は残った』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-li-baki 『本は残った』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-li-baki 『本〔複数〕は残った』  
 N〔単数〕 nazi i-li-baki 『やしの実は残った』  
 N〔複数〕 nazi zi-li-baki 『やしの実〔複数〕は残った』  
 U/N〔単数〕 u-kuta u-li-baki 『壁は残った』  
 U/N〔複数〕 ku-ta zi-li-baki 『壁〔複数〕は残った』  
 Ku(不定詞) ku-taka w-ingi ku-li-haribu m-oyo 『多くを望むことは心を壊した』  
 Pa(場所) mwitu-ni pa-li-kei simba 『森にライオンは座った』  
 Ku(場所) mwitu-ni ku-li-kei simba 『森にライオンは座った』  
 Mu(場所) mwitu-ni m-li-kei simba 『森の中にライオンは座った』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

## [8] 否定過去時制

否定過去時制は、時制標識 ku-が用いられる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。否定なので、主語接辞は、否定の主語接辞が用いられる。終母音は、-a のままである。

### 表 97 否定過去時制

- 1 人称単数 si-ku-soma ki-tabu 『私は本を読まなかった』  
 2 人称単数 hu-ku-soma ki-tabu 『あなたは本を読まなかった』  
 3 人称単数 ha-ku-soma ki-tabu 『彼女、彼は本を読まなかった』  
 1 人称複数 hatu-ku-soma ki-tabu 『私たちは本を読まなかった』  
 2 人称複数 ham-ku-soma ki-tabu 『あなたたちは本を読まなかった』  
 3 人称複数 hawa-ku-soma ki-tabu 『彼らは本を読まなかった』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto ha-ku-soma ki-tabu 『子供は本を読まなかった』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto hawa-ku-soma ki-tabu 『子供たちは本を読まなかった』

M/Mi [単数]	m-ti hau-ku-anguka	『木は倒れなかった』
M/Mi [複数]	mi-ti hai-ku-anguka	『木 [複数] は倒れなかった』
Ji/Ma [単数]	tunda hali-ku-anguka	『果物は落ちなかった』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda haya-ku-anguka	『果物 [複数] は落ちなかった』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu haki-ku-anguka	『本は落ちなかった』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu havi-ku-anguka	『本 [複数] は落ちなかった』
N [単数]	nazi hai-ku-anguka	『やしの実は落ちなかった』
N [複数]	nazi hazi-ku-anguka	『やしの実 [複数] は落ちなかった』
U/N [単数]	u-kuta hau-ku-anguka	『壁は倒れなかった』
U/N [複数]	kuta hazi-ku-anguka	『壁 [複数] は倒れなかった』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi haku-ku-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらさなかった』
Pa (場所)	mwitu-ni hapa-ku-lala simba	『森にライオンは寝なかった』
Ku (場所)	mwitu-ni haku-ku-lala simba	『森にライオンは寝なかった』
Mu (場所)	mwitu-ni ham-ku-lala simba	『森の中にライオンは寝なかった』

否定過去時制は、発話時点からさかのぼる過去において出来事や行為が生じなかったことを表す。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が否定過去時制で用いられるとき、アクセントを調整するために不定詞をつくる接頭辞 *ku-*は動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されない。否定過去時制の時制標識 *ku-*は、アクセントをもつことができる形式である。

#### 表 98 否定過去時制 (単音節動詞)

1 人称単数	si-ku-ja shule-ni	『私は学校から帰らなかった』
2 人称単数	hu-ku-ja shule-ni	『あなたは学校から帰らなかった』
3 人称単数	ha-ku-ja shule-ni	『彼女、彼は学校から帰らなかった』
1 人称複数	hatu-ku-ja shule-ni	『私たちは学校から帰らなかった』
2 人称複数	ham-ku-ja shule-ni	『あなたたちは学校から帰らなかった』
3 人称複数	hawa-ku-ja shule-ni	『彼らは学校から帰らなかった』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹末の位置に母音 *i*、*e*、*u* をもっており、終母音 *-a* が付加されない。それ以外については、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振

る舞いをする。

表 99 否定過去時制 (アラビア語起源動詞)

1 人称単数	si-ku-jaribu kazi	『私は仕事を試みなかった』
2 人称単数	hu-ku-jaribu kazi	『あなたは仕事を試みなかった』
3 人称単数	ha-ku-jaribu kazi	『彼女、彼は仕事を試みなかった』
1 人称複数	hatu-ku-jaribu kazi	『私たちは仕事を試みなかった』
2 人称複数	ham-ku-jaribu kazi	『あなたたちは仕事を試みなかった』
3 人称複数	hawa-ku-jaribu kazi	『彼らは仕事を試みなかった』
M/Wa [単数]	m-toto ha-ku-jaribu kazi	『子供は仕事を試みなかった』
M/Wa [複数]	wa-toto hawa-ku-jaribu kazi	『子供達は仕事を試みなかった』
M/Mi [単数]	m-ti hau-ku-baki	『木は残らなかった』
M/Mi [複数]	mi-ti hai-ku-baki	『木 [複数] は残らなかった』
Ji/Ma [単数]	tunda hali-ku-baki	『果物は残らなかった』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda haya-ku-baki	『果物 [複数] は残らなかった』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu haki-ku-baki	『本は残らなかった』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu havi-ku-baki	『本 [複数] は残らなかった』
N [単数]	nazi hai-ku-baki	『やしの実は残らなかった』
N [複数]	nazi hazi-ku-baki	『やしの実 [複数] は残らなかった』
U/N [単数]	u-kuta hau-ku-baki	『壁は残らなかった』
U/N [複数]	kuta hazi-ku-baki	『壁 [複数] は残らなかった』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi haku-ku-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊さなかった』
Pa (場所)	mwitu-ni hapa-ku-kei simba	『森にライオンは座らなかった』
Ku (場所)	mwitu-ni haku-ku-kei simba	『森にライオンは座らなかった』
Mu (場所)	mwitu-ni ham-ku-kei simba	『森の中にライオンは座らなかった』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [9] 肯定未来時制

肯定未来時制は、時制標識 **ta-** を用いられる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。肯定なので、主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。終母音は、**-a** である。

表 100 肯定未来時制

1 人称単数	ni-ta-soma ki-tabu	『私は本を読むでしょう』
2 人称単数	u-ta-soma ki-tabu	『あなたは本を読むでしょう』
3 人称単数	a-ta-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読むでしょう』

1 人称複数	tu-ta-soma ki-tabu	『私たちは本を読むでしょう』
2 人称複数	m-ta-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読むでしょう』
3 人称複数	wa-ta-soma ki-tabu	『彼らは本を読むでしょう』
M/Wa [単数]	m-toto a-ta-soma ki-tabu	『子供は本を読むでしょう』
M/Wa [複数]	wa-toto wa-ta-soma ki-tabu	『子供たちは本を読むでしょう』
M/Mi [単数]	m-ti u-ta-anguka	『木は倒れるでしょう』
M/Mi [複数]	mi-ti i-ta-anguka	『木 [複数] は倒れるでしょう』
Ji/Ma [単数]	tunda li-ta-anguka	『果物は落ちるでしょう』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ya-ta-anguka	『果物 [複数] は落ちるでしょう』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ki-ta-anguka	『本は落ちるでしょう』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu vi-ta-anguka	『本 [複数] は落ちるでしょう』
N [単数]	nazi i-ta-anguka	『やしの実は落ちるでしょう』
N [複数]	nazi zi-ta-anguka	『やしの実 [複数] は落ちるでしょう』
U/N [単数]	u-kuta u-ta-anguka	『壁は倒れるでしょう』
U/N [複数]	kuta zi-ta-anguka	『壁 [複数] は倒れるでしょう』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-ta-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらすでしょう』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-ta-lala simba	『森にライオンは寝るでしょう』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-ta-lala simba	『森にライオンは寝るでしょう』
Mu (場所)	mwitu-ni m-ta-lala simba	『森の中にライオンは寝るでしょう』

肯定未来時制は、発話時点からのちの未来において出来事や行為が生じることを表す。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定未来時制で用いられるとき、アクセントを調整するために不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。未来時制標識 *ta-* は、アクセントをもつことができない形式である。表 101 において、アクセント調整のために不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が、動詞語幹-*ja* 『来る』と時制標識 *ta-* のあいだに挿入されている。

もしも目的語接辞が動詞語幹の前の位置に付加されると、アクセントを調整するために不定詞をつくる接頭辞 *ku-* は、挿入される必要はない。

表 101 肯定未来時制 (単音節動詞)

1 人称単数	ni-ta-kuja shule-ni	『私は学校から帰るでしょう』
2 人称単数	u-ta-kuja shule-ni	『あなたは学校から帰るでしょう』
3 人称単数	a-ta-kuja shule-ni	『彼女、彼は学校から帰るでしょう』
1 人称複数	tu-ta-kuja shule-ni	『私たちは学校から帰るでしょう』

- 2 人称複数 m-ta-kuja shule-ni 『あなたたちは学校から帰るでしょう』  
 3 人称複数 wa-ta-kuja shule-ni 『彼らは学校から帰るでしょう』

下の例では、目的語接辞 m-が動詞語幹の前の位置に付加されている。目的語接辞は、アクセントをもつことができる形式である。したがって、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、動詞語幹-pa と時制標識 ta-のあいだに挿入されない。アクセントは、目的語接辞 m-にある。

#### Ni-ta-m-pa ki-tabu

『与える』『本』 = 『私は彼女に本を与えるでしょう』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a を付加されることはない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

#### 表 102 肯定未来時制（アラビア語起源動詞）

- 1 人称単数 ni-ta-jaribu kazi 『私は仕事を試みるでしょう』  
 2 人称単数 u-ta-jaribu kazi 『あなたは仕事を試みるでしょう』  
 3 人称単数 a-ta-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試みるでしょう』  
 1 人称複数 tu-ta-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みるでしょう』  
 2 人称複数 m-ta-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みるでしょう』  
 3 人称複数 wa-ta-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みるでしょう』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto a-ta-jaribu kazi 『子供は仕事を試みるでしょう』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-ta-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みるでしょう』  
 M/Mi〔単数〕 m-ti u-ta-baki 『木は残るでしょう』  
 M/Mi〔複数〕 mi-ti i-ta-baki 『木〔複数〕は残るでしょう』  
 Ji/Ma〔単数〕 tunda li-ta-baki 『果物は残るでしょう』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-ta-baki 『果物〔複数〕は残るでしょう』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-ta-baki 『本は残るでしょう』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-ta-baki 『本〔複数〕は残るでしょう』  
 N〔単数〕 nazi i-ta-baki 『やしの実は残るでしょう』  
 N〔複数〕 nazi zi-ta-baki 『やしの実〔複数〕は残るでしょう』  
 U/N〔単数〕 u-kuta u-ta-baki 『壁は残るでしょう』  
 U/N〔複数〕 kuta zi-ta-baki 『壁〔複数〕は残るでしょう』  
 Ku（不定詞） ku-taka w-ingi ku-ta-haribu m-oyo 『多くを望むことは心を壊すでしょう』

Pa (場所)	mwitu-ni pa-ta-keŋi simba	『森にライオンは座るでしょう』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-ta-keŋi simba	『森にライオンは座るでしょう』
Mu (場所)	mwitu-ni m-ta-keŋi simba	『森の中にライオンは座るでしょう』

アラビア語起源動詞に単音節動詞はにあたらぬ。

### [10] 否定未来時制

否定未来時制は、肯定未来時制標識と同じ時制標識 *ta-* が用いられる。否定なので、主語接辞は、否定の主語接辞が用いられる。終母音は、*-a* である。

表 103 否定未来時制

1 人称単数	si-ta-soma ki-tabu	『私は本を読まないでしょう』
2 人称単数	hu-ta-soma ki-tabu	『あなたは本を読まないでしょう』
3 人称単数	ha-ta-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読まないでしょう』
1 人称複数	hatu-ta-soma ki-tabu	『私たちは本を読まないでしょう』
2 人称複数	ham-ta-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読まないでしょう』
3 人称複数	hawa-ta-soma ki-tabu	『彼らは本を読まないでしょう』
M/Wa[単数]	m-toto ha-ta-soma ki-tabu	『子供は本を読まないでしょう』
M/Wa[複数]	wa-toto hawa-ta-soma ki-tabu	『子供たちは本を読まないでしょう』
M/Mi[単数]	m-ti hau-ta-anguka	『木は倒れないでしょう』
M/Mi[複数]	mi-ti hai-ta-anguka	『木[複数]は倒れないでしょう』
Ji/Ma[単数]	tunda hali-ta-anguka	『果物は落ちないでしょう』
Ji/Ma[複数]	ma-tunda haya-ta-anguka	『果物 [複数] は落ちないでしょう』
Ki/Vi[単数]	ki-tabu haki-ta-anguka	『本は落ちないでしょう』
Ki/Vi[複数]	vi-tabu havi-ta-anguka	『本 [複数] は落ちないでしょう』
N[単数]	nazi hai-ta-anguka	『やしの実は落ちないでしょう』
N[複数]	nazi hazi-ta-anguka	『やしの実 [複数] は落ちないでしょう』
U/N[単数]	u-kuta hau-ta-anguka	『壁は倒れないでしょう』
U/N[複数]	kuta hazi-ta-anguka	『壁 [複数] は倒れないでしょう』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi haku-ta-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらさないでしょう』
Pa (場所)	mwitu-ni hapa-ta-lala simba	『森にライオンは寝ないでしょう』
Ku (場所)	mwitu-ni haku-ta-lala simba	『森にライオンは寝ないでしょう』
Mu (場所)	mwitu-ni ham-ta-lala simba	『森の中にライオンは寝ないでしょう』

否定未来時制は、発話時点からのちの未来において出来事や行為が生じぬことを表す。



### [単音節動詞]

単音節動詞が否定未来時制で用いられるとき、アクセントを調整するために不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。未来時制標識 ta-は、アクセントをもつことができない形式である。表 104 においてアクセントを調整するために不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹-ja 『来る』と時制標識 ta-のあいだに挿入されている。

もしも目的語接辞が動詞語幹の前の位置に付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、挿入されない。

表 104 否定未来時制 (単音節動詞)

- |        |                       |                      |
|--------|-----------------------|----------------------|
| 1 人称単数 | si-ta-kuja shule-ni   | 『私は学校から帰らないでしょう』     |
| 2 人称単数 | hu-ta-kuja shule-ni   | 『あなたは学校から帰らないでしょう』   |
| 3 人称単数 | ha-ta-kuja shule-ni   | 『彼女、彼は学校から帰らないでしょう』  |
| 1 人称複数 | hatu-ta-kuja shule-ni | 『私たちは学校から帰らないでしょう』   |
| 2 人称複数 | ham-ta-kuja shule-ni  | 『あなたたちは学校から帰らないでしょう』 |
| 3 人称複数 | hawa-ta-kuja shule-ni | 『彼らは学校から帰らないでしょう』    |

例えば、目的語接辞 m-が動詞語幹の前の位置に付加されると、目的語接辞は、アクセントをもつことのできる形式なので、アクセントを調節するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を動詞語幹-pa と時制標識 ku-のあいだに挿入する必要はない。アクセントは、目的語接辞 m-にある。

### Si-ta-m-pa ki-tabu

『与える』『本』 = 『私は彼女に本を与えないでしょう』

### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。それ以外に関しては、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 105 否定未来時制(アラビア語起源動詞)

- |        |                     |                     |
|--------|---------------------|---------------------|
| 1 人称単数 | si-ta-jaribu kazi   | 『私は仕事を試みないでしょう』     |
| 2 人称単数 | hu-ta-jaribu kazi   | 『あなたは仕事を試みないでしょう』   |
| 3 人称単数 | ha-ta-jaribu kazi   | 『彼女、彼は仕事を試みないでしょう』  |
| 1 人称複数 | hatu-ta-jaribu kazi | 『私たちは仕事を試みないでしょう』   |
| 2 人称複数 | ham-ta-jaribu kazi  | 『あなたたちは仕事を試みないでしょう』 |

- 3 人称複数 hawa-ta-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みないでしょう』
- M/Wa〔単数〕 m-toto ha-ta-jaribu kazi 『子供は仕事を試みないでしょう』
- M/Wa〔複数〕 wa-toto hawa-ta-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みないでしょう』
- M/Mi〔単数〕 m-ti hau-ta-baki 『木は残らないでしょう』
- M/Mi〔複数〕 mi-ti hai-ta-baki 『木〔複数〕は残らないでしょう』
- Ji/Ma〔単数〕 tunda hali-ta-baki 『果物は残らないでしょう』
- Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda haya-ta-baki 『果物〔複数〕は残らないでしょう』
- Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu haki-ta-baki 『本は残らないでしょう』
- Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu havi-ta-baki 『本〔複数〕は残らないでしょう』
- N〔単数〕 nazi hai-ta-baki 『やしの実は残らないでしょう』
- N〔複数〕 nazi hazi-ta-baki 『やしの実〔複数〕は残らないでしょう』
- U/N〔単数〕 u-kuta hau-ta-baki 『壁は残らないでしょう』
- U/N〔複数〕 kuta hazi-ta-baki 『壁〔複数〕は残らないでしょう』
- Ku（不定詞） ku-taka w-ingi haku-ta-haribu m-oyo 『多くを望むことは心を壊さないでしょう』
- Pa（場所） mwitu-ni hapa-ta-keci simba 『森にライオンは座らないでしょう』
- Ku（場所） mwitu-ni haku-ta-keci simba 『森にライオンは座らないでしょう』
- Mu（場所） mwitu-ni ham-ta-keci simba 『森の中にライオンは座らないでしょう』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [1 1] 進行アスペクトと条件節をつくる時制標識

現在時制、現在完了時制、過去時制、未来時制が基本時制である。これ以降は、周辺的な時制を説明する。

まず、進行アスペクトをあらわし、また、条件節をつくる時制標識がある。進行アスペクトをあらわし、また、条件節をつくるために、時制標識 ki-が用いられる。時制標識 ki-は、進行アスペクトを表すほか、条件節をつくることができる。

条件節をつくるために、進行アスペクトと条件節をつくる時制標識 ki-を必ず用いなければならないわけではない。単純に接続詞 kama『もし』を用いて、節をつくる述語に基本時制である現在継続時制や未来時制などを用いて条件節をつくることもできる。条件節については、のちに文のなりたちの中で説明する。

進行アスペクトを表示する標識であるから、アスペクト標識と名づけるのが良いだろう。しかし、進行アスペクトを表示する標識は、動詞複合体内において現在継続時制標識や過去時制標識など他の時制標識と同じ位置におかれる。したがって、進行アスペクトを表示する標識を別の名前で呼ぶことは不便であろう。進行アスペクトを表示する標識も、他のアスペクトを表示する標識も含めて、時制標識と呼んでおく。

時制標識 ki-は主語接辞の直後の位置におかれる。肯定なので、主語接辞は、肯定の主語

接辞が用いられる。終母音は、-a である。

表 106 進行アスペクトと条件節

1 人称単数	ni-ki-soma ki-tabu	『私は本を読んでいます』 『私は本を読むなら』
2 人称単数	u-ki-soma ki-tabu	『あなたは本を読んでいます』 『あなたは本を読むなら』
3 人称単数	a-ki-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読んでいます』 『彼女、彼は本を読むなら』
1 人称複数	tu-ki-soma ki-tabu	『私たちは本を読んでいます』 『私たちは本を読むなら』
2 人称複数	m-ki-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読んでいます』 『あなたたちは本を読むなら』
3 人称複数	wa-ki-soma ki-tabu	『彼らは本を読んでいます』 『彼らは本を読むなら』
M/Wa[単数]	m-toto a-ki-soma ki-tabu	『子供は本を読んでいます』 『子供は本を読むなら』
M/Wa[複数]	wa-toto wa-ki-soma ki-tabu	『子供たちは本を読んでいます』 『子供達は本を読むなら』
M/Mi[単数]	m-ti u-ki-anguka	『木は倒れていってます』 『木は倒れるなら』
M/Mi[複数]	mi-ti i-ki-anguka	『木[複数]は倒れていってます』 『木〔複数〕は倒れるなら』
Ji/Ma[単数]	tunda li-ki-anguka	『果物は落ちていってます』 『果物は落ちるなら』
Ji/Ma[複数]	ma-tunda ya-ki-anguka	『果物[複数]は落ちていってます』 『果物〔複数〕は落ちるなら』
Ki/Vi[単数]	ki-tabu ki-ki-anguka	『本は落ちていってます』 『本は落ちるなら』
Ki/Vi[複数]	vi-tabu vi-ki-anguka	『本[複数]は落ちていってます』 『本〔複数〕は落ちるなら』
N[単数]	nazi i-ki-anguka	『やしの実は落ちていってます』 『やしの実は落ちるなら』
N[複数]	nazi zi-ki-anguka	『やしの実[複数]は落ちていってます』 『やしの実〔複数〕は落ちるなら』

- U/N[単数] u-kuta u-ki-anguka 『壁は倒れていってます』  
『壁は倒れるなら』
- U/N[複数] kuta zi-ki-anguka 『壁 [複数] は倒れていってます』  
『壁 [複数] は倒れるなら』
- Ku (不定詞) ku-taka w-ingi ku-ki-leta ma-tata 『多くを望むことは災難をもたらしています』  
『多くを望むことは災難をもたらすなら』
- Pa (場所) mwitu-ni pa-ki-lala simba 『森にライオンは寝ています』  
『森にライオンは寝るなら』
- Ku (場所) mwitu-ni ku-ki-lala simba 『森にライオンは寝ています』  
『森にライオンは寝るなら』
- Mu (場所) mwitu-ni m-ki-lala simba 『森の中にライオンは寝ています』  
『森の中にライオンは寝るなら』

進行アスペクトを表す時制標識 ki-は、単独では時間を表すことができない。したがって、進行アスペクトの時制標識 ki-以外に、時間を表す時制標識をもつ述語を文はもたなければならぬ。

Mama a-li-ni-ona ni-ki-soma ki-tabu.

『お母さん』『見る』『読む』『本』 = 『お母さんは私が本を読んでいるのを見ました』

Ni-li-kuwa ni-ki-soma ki-tabu

『である』『読む』『本』 = 『私は本を読んでいた』

M-toto a-li-kuja a-ki-imba ny-imbo.

『子供』『来る』『歌う』『歌』 = 『子供は歌を歌いながら来た』

はじめの文では主文 a-li-ni-ona 『彼女は私を見た』のなかの時制標識 li-が文全体の時間を決定している。埋め込まれた文 ni-ki-soma ki-tabu 『私は本を読んでいる』のなかの進行アスペクト時制標識 ki-は、主文の時制標識 li-が設定する時点に、埋め込まれた文が意味する出来事や行為が進行していることを表す。

2番目の文は、後で説明する複合時制をもつ文である。主文 ni-li-kuwa 『私は～であった』は、英語の be 動詞にあたる動詞-wa『である』の過去時制標識 li-をともなった形式である。複合動詞を構成する2番目の動詞複合体 ni-ki-soma 『私は読んでいる』の進行アスペクト時制標識 ki-は、複合動詞の1番目の動詞複合体内の時制標識 li-が設定した時点に、2番目の動詞複合体が表す出来事や行為が進行していることを表す。複合時制の1番目の動詞複合体は、時間を設定するだけで、具体的な意味内容をもたない。第1番目の動詞複合体の述語は、あくまでも過去時制を表すだけであり、複合時制全体が過去の進行アスペクトの

出来事や行為を表現する。

2番目の文のような『見る』や『聞く』など感覚動詞からなる主文に埋め込まれた文は、進行アスペクト時制標識 *ki*-のかわりに、現在継続時制標識 *na*-を使うこともできる。進行アスペクト時制標識 *ki*-と継続アスペクト時制標識 *na*-が表現するアスペクトが、重なり合っていると考えられる。

Mama a-li-ni-ona ni-na-soma kitabu.

『お母さんは私が本を読んでいるのを見た』

上の例の3番目の文は、主文 *a-li-kuja* 『彼が来た』のなかの時制標識 *li*-が文全体の時間を決定している。埋め込まれた文 *a-ki-imba ny-imbo* 『彼は歌を歌っている』のなかの進行アスペクト時制標識 *ki*-は、主文が設定する時点に、埋め込まれた文が意味する出来事や行為が進行していることを表す。

上の3つの文は、使い方が異なるように見える。はじめの文では埋め込まれた文の主語が主文の主語と違っている。2番目と3番目の文では、埋め込まれた文の主語と主文の主語が同じである。ただし、2番目の文は主文の述語がただ時間を設定するだけの実質的な意味をもたない動詞からなる。3番目の文は主文の述語が *-ja* 『来る』という実質的な意味をもつ動詞からなる。

違いがあるようにみえるが、埋め込まれた文だけを取り出して考えると、主文が設定する時点に進行する出来事や行為を、埋め込まれた文は表現する。この点では、3つの文は違いがない。

条件の時制標識 *ki*-は条件節をつくることができる。

条件の時制標識 *ki*-がつくる条件節は、単純な条件文のための条件節である。

Ni-ki-soma ki-tabu, mama a-ta-ni-pa ndizi.

『読む』『本』 『お母さん』『与える』『バナナ』 = 『もし私が本を読むなら、お母さんは私にバナナを与えるでしょう』

U-ki-enda Unguja, u-ta-pata ma-tunda ma-zuri.

『いく』『ザンジバル』『手に入れる』『果物』『良い』 = 『もしあなたがザンジバルへ行くなら、良い果物を手に入れるでしょう』

U-ki-taka ku-nunua ma-tunda, u-ende soko-ni.

『望む』『買う』『果物』『行く』『マーケットへ』 = 『もし果物を買いたいのなら、マーケットへ行け』

条件の時制標識 *ki*-がつくる条件節は、主文のあとにおくこともできる。

Mama a-ta-ni-pa ndizi, ni-ki-soma ki-tabu.

『お母さんは私にバナナを与えるでしょう。もし私が本を読むなら』

U-ta-pata ma-tunda ma-zuri, u-ki-enda Unguja.

『あなたは良い果物を手に入れるでしょう。もしザンジバルへ行ったら』

U-ende soko-ni, u-ki-taka ku-nunua ma-tunda.

『マーケットへ行け。もし果物を買いたければ』

条件文においても、主節の述語の時制標識が時間を決定しており、条件節をつくる時制標識 *ki-* はなんら時間を決定していない。

条件節は、接続法を用いた節を後続させて、慣用的な節をつくることがある。接続法については後で解説する。

ni-ki-penda, ni-si-pende

『好き』 『好き』 = 『私が好もうとも好まなくとも』

u-ki-penda, u-si-pende

『好き』 『好き』 = 『あなたが好もうとも好まなくとも』

a-ki-penda, a-si-pende

『好き』 『好き』 = 『彼女、彼が好もうとも好まなくとも』

tu-ki-penda, tu-si-pende

『好き』 『好き』 = 『私たちが好もうとも好まなくとも』

m-ki-penda, m-si-pende

『好き』 『好き』 = 『あなたたちが好もうとも好まなくとも』

wa-ki-penda, wa-si-pende

『好き』 『好き』 = 『彼らが好もうとも好まなくとも』

ni-ki-enda, ni-si-ende

『行く』 『いく』 = 『私が行こうとも行かずとも』

ni-ki-jaribu, ni-si-jaribu

『試みる』 『試みる』 = 『私が試みようとも試みずとも』

#### [単音節動詞]

単音節動詞が進行アスペクト、あるいは、条件節で用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-* を動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入する必要はない。進行アスペクト、条件節をつくる時制標識 *ki-* は、アクセントをもつことができる。

#### 表 107 進行アスペクト、条件節（単音節動詞）

1 人称単数 ni-ki-ja shule-ni 『私は学校から帰っています』

		『私は学校から帰るなら』
2 人称単数	u-ki-ja shule-ni	『あなたは学校から帰っています』 『あなたは学校から帰るなら』
3 人称単数	a-ki-ja shule-ni	『彼女、彼は学校から帰っています』 『彼女、彼は学校から帰るなら』
1 人称複数	tu-ki-ja shule-ni	『私たちは学校から帰っています』 『私たちは学校から帰るなら』
2 人称複数	m-ki-ja shule-ni	『あなたたちは学校から帰っています』 『あなたたちは学校から帰るなら』
3 人称複数	wa-ki-ja shule-ni	『彼らは学校から帰っています』 『彼らは学校から帰るなら』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a を付加されない。

表 108 進行アスペクト、条件節 (アラビア語起源動詞)

1 人称単数	ni-ki-jaribu kazi	『私は仕事を試みています』 『私は仕事を試みるなら』
2 人称単数	u-ki-jaribu kazi	『あなたは仕事を試みています』 『あなたは仕事を試みるなら』
3 人称単数	a-ki-jaribu kazi	『彼女、彼は仕事を試みています』 『彼女、彼は仕事を試みるなら』
1 人称複数	tu-ki-jaribu kazi	『私たちは仕事を試みています』 『私たちは仕事を試みるなら』
2 人称複数	m-ki-jaribu kazi	『あなたたちは仕事を試みています』 『あなたたちは仕事を試みるなら』
3 人称複数	wa-ki-jaribu kazi	『彼らは仕事を試みています』 『彼らは仕事を試みるなら』
M/Wa [単数]	m-toto a-ki-jaribu kazi	『子供は仕事を試みています』 『子供は仕事を試みるなら』
M/Wa [複数]	wa-toto wa-ki-jaribu kazi	『子供達は仕事を試みています』 『子供達は仕事を試みるなら』
M/Mi [単数]	m-ti u-ki-baki	『木は残っています』 『木は残るなら』

M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ki-baki	『木〔複数〕は残っています』 『木〔複数〕は残るなら』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ki-baki	『果物は残っています』 『果物は残るなら』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ki-baki	『果物〔複数〕は残っています』 『果物〔複数〕は残るなら』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ki-baki	『本は残っています』 『本は残るなら』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ki-baki	『本〔複数〕は残っています』 『本〔複数〕は残るなら』
N〔単数〕	nazi i-ki-baki	『やしの実は残っています』 『やしの実は残るなら』
N〔複数〕	nazi zi-ki-baki	『やしの実〔複数〕は残っています』 『やしの実〔複数〕は残るなら』
U/N〔単数〕	u-kuta u-ki-baki	『壁は残っています』 『壁は残るなら』
U/N〔複数〕	kuta zi-ki-baki	『壁〔複数〕は残っています』 『壁〔複数〕は残るなら』
Ku（不定詞）	ku-taka ku-ki-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊しています』 『多くを望むことは心を壊すなら』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-ki-keti simba	『森にライオンは座っています』 『森にライオンは座るなら』
Ku（場所）	mwitu-ni ku-ki-keti simba	『森にライオンは座っています』 『森にライオンは座るなら』
Mu（場所）	mwitu-ni m-ki-keti simba	『森の中にライオンは座っています』 『森の中にライオンは座るなら』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [1 2] 進行アスペクトの否定=[2]、[4]

進行アスペクト時制標識 ki-と対をなす特別な時制標識は存在しない。進行アスペクトの否定表現は、否定現在時制を用いる。否定になると、区別される時制の数が少なくなることは、世界の言語でよくある現象である。否定現在時制の表はくりかえさない。

一方、条件節をつくる時制標識 ki-には、対をなす否定の条件節をつくる時制標識 sipo-がある。時制標識 sipo-については、[1 3]で解説する。



Mama a-li-ni-ona si-som-i ki-tabu

『お母さん』『見る』『読む』『本』 = 『お母さんは私が本を読んでいないのを見た』

Ni-li-kuwa si-som-i ki-tabu

『である』『読む』『本』 = 『私は本を読んでいません』

M-toto a-li-kuja ha-imb-i ny-imbo

『子供』『来る』『歌う』『歌』 = 『子供は歌を歌いながら来た』

主文に埋め込まれた文は、主文の述語が決定する時点において、否定的な出来事や行為が進行していることを表す。

上の2番目の文は、複合時制を用いている。複合時制を構成する1番目の動詞複合体を否定にすることも可能である。その場合、複合時制の1番目の動詞複合体に否定過去時制を用いて、2番目の動詞複合体に肯定進行アスペクトを用いる。例えば、下の複合時制は、1番目の動詞複合体が動詞-wa『である』を中心に否定過去時制 si-ku-wa『であった』から、2番目の動詞複合体が肯定進行アスペクトを用いた ni-ki-soma『私は読んでいる』から形成されている。

Si-ku-wa ni-ki-soma ki-tabu

『である』『読む』『本』 = 『私は本を読んでいません』

### [1 3] 否定条件節をつくる時制標識

否定の条件節は、時制標識 sipo-を用いる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。時制標識 sipo-が用いられるとき、否定であっても主語接辞は、肯定の主語接辞を用いる。否定の主語接辞は用いられない。時制標識 sipo-の中にある si-が既に否定の意味をもっているためである。終母音は、-a である。

表 109 否定条件節

1 人称単数	ni-sipo-soma ki-tabu	『私は本を読まないなら』
2 人称単数	u-sipo-soma ki-tabu	『あなたは本を読まないなら』
3 人称単数	a-sipo-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読まないなら』
1 人称複数	tu-sipo-soma ki-tabu	『私たちは本を読まないなら』
2 人称複数	m-sipo-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読まないなら』
3 人称複数	wa-sipo-soma ki-tabu	『彼らは本を読まないなら』
M/Wa [単数]	m-toto a-sipo-soma ki-tabu	『子供は本を読まないなら』
M/Wa [複数]	wa-toto wa-sipo-soma ki-tabu	『子供達は本を読まないなら』
M/Mi [単数]	m-ti u-sipo-anguka	『木は倒れないなら』

- M/Mi〔複数〕 mi-ti i-sipo-anguka 『木〔複数〕は倒れないなら』  
 Ji/Ma〔単数〕 tunda li-sipo-anguka 『果物は落ちないなら』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-sipo-anguka 『果物〔複数〕は落ちないなら』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-sipo-anguka 『本は落ちないなら』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-sipo-anguka 『本〔複数〕は落ちないなら』  
 N〔単数〕 nazi i-sipo-anguka 『やしの実は落ちないなら』  
 N〔複数〕 nazi zi-sipo-anguka 『やしの実〔複数〕は落ちないなら』  
 U/N〔単数〕 u-kuta u-sipo-anguka 『壁は倒れないなら』  
 U/N〔複数〕 kuta zi-sipo-anguka 『壁〔複数〕は倒れないなら』  
 Ku（不定詞） ku-taka w-ingi ku-sipo-leta ma-tata 『多くを望むことは災難をもたらさないなら』  
 Pa（場所） mwitu-ni pa-sipo-lala simba 『森にライオンは寝ないなら』  
 Ku（場所） mwitu-ni ku-sipo-lala simba 『森にライオンは寝ないなら』  
 Mu（場所） mwitu-ni m-sipo-lala simba 『森の中にライオンは寝ないなら』

否定の条件節をつくる手段は、否定の条件節をつくる時制標識 *sipo-*を用いるやり方だけではない。単純に *kama* 『もし』という意味をもつ接続詞を用いて、否定の条件節をつくることができる。接続詞 *kama* 『もし』に導かれる節をつくる述語は、基本時制である否定現在時制や否定未来時制などを用いる。否定の条件節については、文のなりたちの中で説明する。

Ni-sipo-soma ki-tabu, mama ha-ta-ni-pa ndizi.

『読む』『本』『お母さん』『与える』『バナナ』 = 『私が本を読まないなら、お母さんは私にバナナを与えないでしょう』

U-sipo-enda Unguja, hu-ta-pata ma-tunda ma-zuri.

『行く』『ザンジバル』『手に入れる』『果物』『良い』 = 『あなたがザンジバルへ行かないなら、良い果物は手に入らないでしょう』

U-sipo-taka ku-nunua ma-tunda, u-si-ende soko-ni.

『望む』『買う』『果物』『行く』『マーケットへ』 = 『あなたが果物を買いたくないなら、マーケットへ行くな』

Kama si-ta-soma ki-tabu, mama ha-ta-ni-pa ndizi.

『もし』『読む』『本』『お母さん』『与える』『バナナ』 = 『もし私が本を読まないなら、お母さんは私にバナナを与えないでしょう』

Kama hu-ta-enda Unguja, hu-ta-pata ma-tunda ma-zuri.

『もし』『行く』『ザンジバル』『手に入れる』『果物』『良い』 = 『もしあなたがザンジバ

ルへ行かないなら、良い果物は手に入らないでしょう』

Kama hu-tak-i ku-nunua ma-tunda, u-si-ende soko-ni.

『もし』『望む』『買う』『果物』『行く』『マーケットへ』 = 『もしあなたが果物を買いたくないなら、マーケットへ行くな』

#### [単音節動詞]

単音節動詞が否定条件節をつくる時制標識 sipo-とともに用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と時制標識のあいだに挿入される。表 110 でアクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、動詞語幹-ja と時制標識 sipo-のあいだに挿入されている。

もしも目的語接辞が動詞語幹の前の位置に付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、挿入されない。

表 110 否定条件節（単音節動詞）

1 人称単数	ni-sipo-kuja shule-ni	『私が学校から帰らないなら』
2 人称単数	u-sipo-kuja shule-ni	『あなたが学校から帰らないなら』
3 人称単数	a-sipo-kuja shule-ni	『彼女、彼が学校から帰らないなら』
1 人称複数	tu-sipo-kuja shule-ni	『私たちが学校から帰らないなら』
2 人称複数	m-sipo-kuja shule-ni	『あなたたちが学校から帰らないなら』
3 人称複数	wa-sipo-kuja shule-ni	『彼らが学校から帰らないなら』

下の例のように、単音節動詞-pa『与える』の前の位置に目的語接辞 ni-が付加されると、目的語接辞 ni-は、アクセントをもつことができる形式であるので、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入する必要はない。

Mama a-sipo-ni-pa ch-akula.

『お母さん』『与える』『食べ物』 = 『お母さんが私に食べ物を与えたら』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a を付加されることはない。そのことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 111 否定条件節（アラビア語起源動詞）

1 人称単数	ni-sipo-jaribu kazi	『私は仕事を試みないなら』
2 人称単数	u-sipo-jaribu kazi	『あなたは仕事を試みないなら』

- 3 人称単数 a-sipo-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試みないなら』  
 1 人称複数 tu-sipo-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みないなら』  
 2 人称複数 m-sipo-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みないなら』  
 3 人称複数 wa-sipo-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みないなら』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto a-sipo-jaribu kazi 『子供は仕事を試みないなら』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-sipo-jaribu kazi 『子供達は仕事を試みないなら』  
 M/Mi〔単数〕 m-ti u-sipo-baki 『木が残らないなら』  
 M/Mi〔複数〕 mi-ti i-sipo-baki 『木〔複数〕が残らないなら』  
 Ji/Ma〔単数〕 tunda li-sipo-baki 『果物が残らないなら』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-sipo-baki 『果物〔複数〕が残らないなら』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-sipo-baki 『本が残らないなら』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-sipo-baki 『本〔複数〕が残らないなら』  
 N〔単数〕 nazi i-sipo-baki 『やしの実が残らないなら』  
 N〔複数〕 nazi zi-sipo-baki 『やしの実〔複数〕が残らないなら』  
 U/N〔単数〕 u-kuta u-sipo-baki 『壁が残らないなら』  
 U/N〔複数〕 kuta zi-sipo-baki 『壁〔複数〕が残らないなら』  
 Ku（不定詞） ku-taka w-ingi ku-sipo-haribu m-oyo 『多くを望むことが心を壊さないなら』  
 Pa（場所） mwitu-ni pa-sipo-kei simba 『森にライオンが座らないなら』  
 Ku（場所） mwitu-ni ku-sipo-kei simba 『森にライオンが座らないなら』  
 Mu（場所） mwitu-ni m-sipo-kei simba 『森の中にライオンが座らないなら』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [14] 肯定「語り」過去時制

肯定「語り」過去時制は、時制標識 *ka-* が用いられる。時制標識は、主語接辞の直後の位置におかれる。肯定なので、肯定の主語接辞が用いられる。終母音は、*-a* である。

表 112 肯定「語り」過去時制

- 1 人称単数 ni-ka-soma ki-tabu 『そして私は本を読んだ』  
 2 人称単数 u-ka-soma ki-tabu 『そしてあなたは本を読んだ』  
 3 人称単数 a-ka-soma ki-tabu 『そして彼女、彼は本を読んだ』  
 1 人称複数 tu-ka-soma ki-tabu 『そして私たちは本を読んだ』  
 2 人称複数 m-ka-soma ki-tabu 『そしてあなたたちは本を読んだ』  
 3 人称複数 wa-ka-soma ki-tabu 『そして彼らは本を読んだ』  
 M/Wa〔単数〕 m-toto a-ka-soma ki-tabu 『そして子供は本を読んだ』  
 M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-ka-soma ki-tabu 『そして子供達は本を読んだ』

M/Mi〔単数〕	m-ti u-ka-anguka	『そして木は倒れた』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ka-anguka	『そして木〔複数〕は倒れた』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ka-anguka	『そして果物は落ちた』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ka-anguka	『そして果物〔複数〕は落ちた』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ka-anguka	『そして本は落ちた』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ka-anguka	『そして本〔複数〕は落ちた』
N〔単数〕	nazi i-ka-anguka	『そしてやしの実は落ちた』
N〔複数〕	nazi zi-ka-anguka	『そしてやしの実〔複数〕は落ちた』
U/N〔単数〕	u-kuta u-ka-anguka	『そして壁は倒れた』
U/N〔複数〕	kuta zi-ka-anguka	『そして壁〔複数〕は倒れた』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi ku-ka-leta ma-tata	『そして多くを望むことは災難をもたらした』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-ka-lala simba	『そして森にライオンは寝た』
Ku（場所）	mwiti-ni ku-ka-lala simba	『そして森にライオンは寝た』
Mu（場所）	mwitu-ni m-ka-lala simba	『そして森の中にライオンは寝た』

肯定「語り」過去時制は、物語の中で過去に生じた出来事や行為を述べるときに使われる。物語が始まる最初の文は、過去時制の文である。たいていは、肯定過去時制標識 *li-*、あるいは、否定過去時制標識 *ku-*が用いられる。肯定「語り」過去時制の文で物語をはじめてはならない。物語がその最初の文だけを過去時制の文ではじめられると、それ以降の文は、肯定「語り」過去時制文となる。

肯定「語り」過去時制文が連続するとき、肯定「語り」過去文が述べる出来事や行為は、時間の流れにそって生じる。すなわち、先行する肯定「語り」過去時制文が述べる出来事や行為は、後続する肯定「語り」過去時制文が述べる出来事や行為よりも時間的にさかのぼって生じる。つまり、後続する肯定「語り」時制文が述べる出来事や行為は、先行する肯定「語り」時制文が述べる出来事や行為よりも時間的に後で生じる。

Ni-li-kuja shule-ni, ni-ka-soma ki-tabu chumba-ni mw-angu, mama a-ka-ingia chumba-ni,  
『帰る』『学校から』『読む』『本』『部屋で』『私の』『お母さん』『入る』『部屋に』  
a-ka-ni-pa ndizi.

『与える』『バナナ』

=『私は学校から帰った。そして私の部屋で本を読んだ。そしてお母さんが部屋に入った。そして彼女は私にバナナを与えた』

上の例は、『私が学校から帰る』という出来事が生じた後で、『私が私の部屋で本を読む』という出来事が生じ、その後、『お母さんが部屋に入る』という出来事が続き、さらに、『彼

女が私にバナナを与える』という出来事が生じたことを述べている。連続した、肯定「語り」過去時制文は、時間の流れにそって配置される。

また、肯定「語り」過去時制は、新聞などの見出しに使われることがある。

肯定「語り」過去時制は、基本的には、過去の出来事や行為について述べる。しかし、必ずしも、肯定「語り」過去時制文に先行する文に現れる時制標識は、過去時制標識 li-だけに限定されない。例えば、習慣時制標識 hu-や条件文をつくる時制標識 ki-を用いた文が、肯定「語り」過去時制文に先行することがある。その場合でも、肯定「語り」過去時制文が述べる出来事や行為は、先行する文が述べる出来事や行為よりも時間的に後に生じる。

M-toto hu-enda shule-ni, a-ka-soma ki-tabu.

『子供』『行く』『学校』『読む』『本』 = 『子供は学校へいつも行き、そして本を読む』

M-toto a-ki-enda shule-ni, a-ka-soma ki-tabu, ni-ta-m-pa ch-akula.

『子供』『行く』『学校』『読む』『本』『与える』『食べ物』 = 『子供は学校へ行き、そして本を読むなら、私は彼に食べ物を与える』

上の例から分かるように、肯定「語り」過去時制文は、接続詞 na『と』でつながれることはない。肯定「語り」過去時制をもつ節は、接続詞を用いずに連続する。

また、肯定「語り」過去時制標識 ka-は、後で説明する接続法においても用いられる。このことは、接続法とともに後で説明する。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定「語り」過去時制で用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、動詞語幹と主語接辞の間に挿入される必要はない。肯定「語り」過去時制標識 ka-は、アクセントをもつことができる形式である。

表 113 肯定「語り」過去時制（単音節動詞）

1 人称単数	ni-ka-ja shule-ni	『そして私は学校から帰った』
2 人称単数	u-ka-ja shule-ni	『そしてあなたは学校から帰った』
3 人称単数	a-ka-ja shule-ni	『そして彼女、彼は学校から帰った』
1 人称複数	tu-ka-ja shule-ni	『そして私たちは学校から帰った』
2 人称複数	m-ka-ja shule-ni	『そしてあなたたちは学校から帰った』
3 人称複数	wa-ka-ja shule-ni	『そして彼らは学校から帰った』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a

が付加されない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バン  
トゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 114 肯定「語り」過去時制（アラビア語起源動詞）

1 人称単数	ni-ka-jaribu kazi	『そして私は仕事を試みた』
2 人称単数	u-ka-jaribu kazi	『そしてあなたは仕事を試みた』
3 人称単数	a-ka-jaribu kazi	『そして彼女、彼は仕事を試みた』
1 人称複数	tu-ka-jaribu kazi	『そして私たちは仕事を試みた』
2 人称複数	m-ka-jaribu kazi	『そしてあなたたちは仕事を試みた』
3 人称複数	wa-ka-jaribu kazi	『そして彼らは仕事を試みた』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-ka-jaribu kazi	『そして子供は仕事を試みた』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-ka-jaribu kazi	『そして子供達は仕事を試みた』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-ka-baki	『そして木は残った』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ka-baki	『そして木〔複数〕は残った』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ka-baki	『そして果物は残った』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ka-baki	『そして果物〔複数〕は残った』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ka-baki	『そして本は残った』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ka-baki	『そして本〔複数〕は残った』
N〔単数〕	nazi i-ka-baki	『そしてやしの実は残った』
N〔複数〕	nazi zi-ka-baki	『そしてやしの実〔複数〕は残った』
U/N〔単数〕	u-kuta u-ka-baki	『そして壁は残った』
U/N〔複数〕	kuta zi-ka-baki	『そして壁〔複数〕は残った』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi ku-ka-haribu m-oyo	『そして多くを望むことは心を壊した』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-ka-keti simba	『そして森にライオンは寝た』
Ku（場所）	mwitu-ni ku-ka-keti simba	『そして森にライオンは寝た』
Mu（場所）	mwitu-ni m-ka-keti simba	『そして森の中にライオンは寝た』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [15] 「語り」過去時制の否定 = 9. 5

肯定「語り」過去時制と対をなす、「語り」過去時制の否定は、後で説明する否定の接続法を用いる。否定接続法は、否定時制標識 si- が用いられる。

否定時制標識 si- は、否定だけの意味をもち、過去、現在、未来など、時間を設定することはない。ただ、否定時制標識 si- は、動詞複合体内において他の時制標識と同じ位置におかれるので、時制標識の 1 つとして扱う。

主語接辞は、否定ではあるが、肯定の主語接辞を用いる。既に否定標識 si- が否定の意味

をもっているからである。終母音-aを、接続法の終母音である-eにかえる。否定接続法については、9. 5において詳しく説明する。

M-toto a-li-kwenda shule-ni a-si-som-e ki-tabu.

『子供』『行く』『学校へ』『読む』『本』 = 『子供は学校へ行った。そして本を読まなかった』

研究者の中には、否定の「語り」過去時制の文は、基本時制の中の否定過去時制標識 ku-を用いるとしているものがある。ここでは、否定の「語り」過去時制文は、否定の接続法を用いるとしておくが、「語り」過去時制の否定に相当する、否定過去時制標識 ku-が用いられた文を、先行する文につなぐには、接続詞を用いる。否定過去時制については既に説明したのでここで繰り返さない。

Ni-li-kuja shule-ni, halafu si-ku-soma ki-tabu.

『帰る』『学校から』『その後』『読む』『本』 = 『私は学校から帰った。そして本を読まなかった』

#### [16] 肯定仮定法現在時制

肯定仮定法現在時制は、時制標識-nge が用いられる。ここでは英語文法の用語である仮定法現在と仮定法過去という文法用語をつかっている。しかし、仮定法現在時制と、[18]で説明する仮定法過去時制とのあいだの違いは、スワヒリ語においては、それほど明確ではない。

肯定仮定法現在時制は、肯定の主語接頭辞が用いられる。終母音は、-a である。

表 115 肯定仮定法現在時制

1 人称単数	ni-nge-soma ki-tabu	『もしも私が本を読むなら』
2 人称単数	u-nge-soma ki-tabu	『もしもあなたが本を読むなら』
3 人称単数	a-nge-soma ki-tabu	『もしも彼女、彼が本を読むなら』
1 人称複数	tu-nge-soma ki-tabu	『もしも私たちが本を読むなら』
2 人称複数	m-nge-soma ki-tabu	『もしもあなたたちが本を読むなら』
3 人称複数	wa-nge-soma ki-tabu	『もしも彼らが本を読むなら』
M/Wa [単数]	m-toto a-nge-soma ki-tabu	『もしも子供が本を読むなら』
M/Wa [複数]	wa-toto wa-nge-soma ki-tabu	『もしも子供たちが本を読むなら』
M/Mi [単数]	m-ti u-nge-anguka	『もしも木が倒れるなら』
M/Mi [複数]	mi-ti i-nge-anguka	『もしも木 [複数] が倒れるなら』
Ji/Ma [単数]	tunda li-nge-anguka	『もしも果物が落ちるなら』



Ji/Ma [複数]	ma-tunda ya-nge-anguka	『もしも果物 [複数] が落ちるなら』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ki-nge-anguka	『もしも本が落ちるなら』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu vi-nge-anguka	『もしも本 [複数] が落ちるなら』
N [単数]	nazi i-nge-anguka	『もしもやしの実が落ちるなら』
N [複数]	nazi zi-nge-anguka	『もしもやしの実 [複数] が落ちるなら』
U/N [単数]	u-kuta u-nge-anguka	『もしも壁が倒れるなら』
U/N [複数]	kuta zi-nge-anguka	『もしも壁 [複数] が倒れるなら』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-nge-leta ma-tata	『もしも多くを望むことが災難をもたらすなら』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-nge-lala simba	『もしも森にライオンが寝るなら』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-nge-lala simba	『もしも森にライオンが寝るなら』
Mu (場所)	mwitu-ni m-nge-lala simba	『もしも森の中にライオンが寝るなら』

肯定仮定法現在時制は、発話時点で実は生じていない出来事や行為が生じる可能性を述べる。また、発話時点で生じていない出来事や行為が生じる条件を述べる。

出来事や行為が生じる条件を述べる条件節にも肯定仮定法現在が用いられる。肯定仮定法現在が用いられた出来事や行為が生じる条件を述べる条件節は、出来事や行為が生じる可能性を述べる主節に先行する位置におかれる。出来事や行為が生じる可能性を述べる主節にも肯定仮定法現在が用いられる。また、主節は、仮定法現在であれば、否定仮定法現在であってもかまわない。否定仮定法現在については[17]で説明する。

Ni-nge-jifunza kwa bidii, ni-nge-sema Ki-swahili.

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『もしも一生懸命学ばなら、私はスワヒリ語を話すでしょう (一生懸命学ばないだろう)』

U-nge-fanya kazi sana, u-nge-maliza haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』 = 『もしもあなたは大層仕事をすれば、早く終えるでしょう (大層仕事をしないだろう)』

Nazi i-nge-anguka juu ya ki-chwa, u-nge-umizwa vibaya.

『やしの実』『落ちる』『上に』『頭』『傷つく』『ひどく』 = 『もしもやしの実が頭の上に落ちたら、あなたはひどく傷つくでしょう (落ちることはないだろう)』

下の例は、主節に否定仮定法現在時制を用いている。

Ni-nge-jifunza kwa bidii, ni-singe-shindwa katika m-tihani.

『学ぶ』『一生懸命』『失敗する』『に』『試験』 = 『もしも一生懸命学ばなら、試験に失敗しないだろう (一生懸命学ばないだろう)』

英語文法における仮定法現在は、現在生じていない出来事や行為が生じる可能性を述べる。仮定法過去は、過去に生じていない出来事や行為が生じた可能性について述べる。

スワヒリ語の仮定法現在と仮定法過去は、それほどはっきりとした違いがない。どちらかといえば、仮定法現在で述べられる出来事や行為が生じる可能性が、仮定法過去で述べられる出来事や行為が実現する可能性よりも、より高いと考えられる。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定仮定法現在時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 **ku-**が動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。肯定仮定法現在時制標識 **nge-**は、アクセントをもつことができない形式であるからである。表 116 では、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**が、動詞語幹-**ja**『来る』と時制標識 **nge-**のあいだに挿入されている。

もしも目的語接辞が動詞語幹の直前の位置に付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**は、挿入されない。

表 116 肯定仮定法現在時制 (単音節動詞)

- |        |                             |                     |
|--------|-----------------------------|---------------------|
| 1 人称単数 | <b>ni-nge-kuja shule-ni</b> | 『もしも私が学校から帰るなら』     |
| 2 人称単数 | <b>u-nge-kuja shule-ni</b>  | 『もしもあなたが学校から帰るなら』   |
| 3 人称単数 | <b>a-nge-kuja shule-ni</b>  | 『もしも彼女、彼が学校から帰るなら』  |
| 1 人称複数 | <b>tu-nge-kuja shule-ni</b> | 『もしも私たちが学校から帰るなら』   |
| 2 人称複数 | <b>m-nge-kuja shule-ni</b>  | 『もしもあなたたちが学校から帰るなら』 |
| 3 人称複数 | <b>wa-nge-kuja shule-ni</b> | 『もしも彼らが学校から帰るなら』    |

下の例では、単音節動詞-**pa**『与える』の直前の位置に目的語接辞 **ku-**『あなた』が付加されている。目的語接辞は、アクセントをもつことができる形式なので、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**を挿入する必要はない。アクセントは、目的語接辞 **ku-**『あなた』にある。

**U-nge-kuja kw-angu, ni-nge-ku-pa ma-tunda.**

『来る』『私のところへ』『与える』『果物』 = 『もしもあなたが私のところへ来るなら、私はあなたに果物を与えるでしょう(来ないだろう)』

単音節動詞-**wa na**『もつ』や単音節動詞-**ja**『来る』の直前の位置に、仮定法現在時制の時制標識 **nge-**がおかれると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**が、動詞語幹と時制標識のあいだに挿入される。

U-nge-soma vi-tabu v-ingi, u-nge-ku-wa na maarifa ny-ingi.

『読む』『本』『多くの』『もつ』 『知識』『多くの』 = 『もしもあなたが多くの本を読むなら、多くの知識をもつだろう』

A-nge-kuja leo, ni-nge-ku-pik-i-a nyama

『来る』『今日』『料理する』『肉』 = 『もしも彼が今日来るなら、私は肉を料理するだろう』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i, e, u をもっており、終母音-a が付加されることはない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 117 肯定仮定法現在時制 (アラビア語起源動詞)

- 1 人称単数 ni-nge-jaribu kazi 『もしも私が仕事を試みるなら』  
2 人称単数 u-nge-jaribu kazi 『もしもあなたが仕事を試みるなら』  
3 人称単数 a-nge-jaribu kazi 『もしも彼女、彼が仕事を試みるなら』  
1 人称複数 tu-nge-jaribu kazi 『もしも私たちが仕事を試みるなら』  
2 人称複数 m-nge-jaribu kazi 『もしもあなたたちが仕事を試みるなら』  
3 人称複数 wa-nge-jaribu kazi 『もしも彼らが仕事を試みるなら』  
M/Wa [単数] m-toto a-nge-jaribu kazi 『もしも子供が仕事を試みるなら』  
M/Wa [複数] wa-toto wa-nge-jaribu kazi 『もしも子供たちが仕事を試みるなら』  
M/Mi [単数] m-ti u-nge-baki 『もしも木が残るなら』  
M/Mi [複数] mi-ti i-nge-baki 『もしも木 [複数] が残るなら』  
Ji/Ma [単数] tunda li-nge-baki 『もしも果物が残るなら』  
Ji/Ma [複数] ma-tunda ya-nge-baki 『もしも果物 [複数] が残るなら』  
Ki/Vi [単数] ki-tabu ki-nge-baki 『もしも本が残るなら』  
Ki/Vi [複数] vi-tabu vi-nge-baki 『もしも本 [複数] が残るなら』  
N [単数] nazi i-nge-baki 『もしもやしの実が残るなら』  
N [複数] nazi zi-nge-baki 『もしもやしの実 [複数] が残るなら』  
U/N [単数] u-kuta u-nge-baki 『もしも壁が残るなら』  
U/N [複数] kuta zi-nge-baki 『もしも壁 [複数] が残るなら』  
Ku (不定詞) ku-taka w-ingi ku-nge-haribu m-oyo 『もしも多くを望むことが心を壊すなら』  
Pa (場所) mwitu-ni pa-nge-kei simba 『もしも森にライオンが座るなら』  
Ku (場所) mwitu-ni ku-nge-kei simba 『もしも森にライオンが座るなら』  
Mu (場所) mwitu-ni m-nge-kei simba 『もしも森の中にライオンが座るなら』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

### [17] 否定仮定法現在時制

肯定仮定法現在時制と対をなす否定仮定法現在時制は、時制標識 *singe-* が用いられる。否定であるけれど、主語接辞は、肯定の主語接辞を用いる。時制標識 *singe-* は、否定時制標識 *si-* と仮定法現在時制標識 *nge-* から成り立っている。否定現在仮定法時制標識 *singe-* の *si-* が既に否定の意味をもっている。終母音は、*-a* である。

表 118 否定仮定法現在時制

1 人称単数	<i>ni-singe-soma ki-tabu</i>	『もしも私が本を読まないなら』
2 人称単数	<i>u-singe-soma ki-tabu</i>	『もしもあなたが本を読まないなら』
3 人称単数	<i>a-singe-soma ki-tabu</i>	『もしも彼女、彼が本を読まないなら』
1 人称複数	<i>tu-singe-soma ki-tabu</i>	『もしも私たちが本を読まないなら』
2 人称複数	<i>m-singe-soma ki-tabu</i>	『もしもあなたたちが本を読まないなら』
3 人称複数	<i>wa-singe-soma ki-tabu</i>	『もしも彼らが本を読まないなら』
M/Wa〔単数〕	<i>m-toto a-singe-soma ki-tabu</i>	『もしも子供が本を読まないなら』
M/Wa〔複数〕	<i>wa-toto wa-singe-soma ki-tabu</i>	『もしも子供たちが本を読まないなら』
M/Mi〔単数〕	<i>m-ti u-singe-anguka</i>	『もしも木が倒れないなら』
M/Mi〔複数〕	<i>mi-ti i-singe-anguka</i>	『もしも木〔複数〕が倒れないなら』
Ji/Ma〔単数〕	<i>tunda li-singe-anguka</i>	『もしも果物が落ちないなら』
Ji/Ma〔複数〕	<i>ma-tunda ya-singe-anguka</i>	『もしも果物〔複数〕が落ちないなら』
Ki/Vi〔単数〕	<i>ki-tabu ki-singe-anguka</i>	『もしも本が落ちないなら』
Ki/Vi〔複数〕	<i>vi-tabu vi-singe-anguka</i>	『もしも本〔複数〕が落ちないなら』
N〔単数〕	<i>nazi i-singe-anguka</i>	『もしもやしの実が落ちないなら』
N〔複数〕	<i>nazi zi-singe-anguka</i>	『もしもやしの実〔複数〕が落ちないなら』
U/N〔単数〕	<i>u-kuta u-singe-anguka</i>	『もしも壁が倒れないなら』
U/N〔複数〕	<i>kuta zi-singe-anguka</i>	『もしも壁〔複数〕が倒れないなら』
Ku (不定詞)	<i>ku-taka w-ingi ku-singe-leta ma-tata</i>	『もしも多くを望むことが災難をもたらさないなら』
Pa (場所)	<i>mwitu-ni pa-singe-lala simba</i>	『もしも森にライオンが寝ないなら』
Ku (場所)	<i>mwitu-ni ku-singe-lala simba</i>	『もしも森にライオンが寝ないなら』
Mu (場所)	<i>mwitu-ni m-singe-lala simba</i>	『もしも森の中にライオンが寝ないなら』

否定仮定法現在時制は、時制標識 *singe-* ではなく、時制標識 *nge-* を用いて表示することも可能である。そのときは、主語接辞は、否定の主語接辞を用いる。終母音は、*-a* である。この時制標識 *nge-* と否定の主語接辞を用いる否定仮定法現在時制の形式は、あまり一般的

ではない。

表 119 否定仮定法現在時制 (nge-)

- 1 人称単数 si-nge-soma ki-tabu 『もしも私が本を読まないなら』  
2 人称単数 hu-nge-soma ki-tabu 『もしもあなたが本を読まないなら』  
3 人称単数 ha-nge-soma ki-tabu 『もしも彼女、彼が本を読まないなら』  
1 人称複数 hatu-nge-soma ki-tabu 『もしも私たちが本を読まないなら』  
2 人称複数 ham-nge-soma ki-tabu 『もしもあなたたちが本を読まないなら』  
3 人称複数 hawa-nge-soma ki-tabu 『もしも彼らが本を読まないなら』

否定仮定法現在時制は、発話時点で実際には生じている出来事や行為が生じない可能性について述べる。また、実際には生じている出来事や行為が生じない条件について述べる。出来事や行為が生じない条件を述べる条件節は、否定仮定法現在時制を用いる。出来事や行為が生じない可能性について述べる主節は、否定仮定法現在時制を用いる。

また、仮定法現在であれば、主節は、肯定文であっても良い。そのときは、肯定仮定法現在時制を用いる。

否定仮定法現在時制で述べられる否定的な出来事や行為は、次に説明する否定仮定法過去が述べる否定的な出来事や行為よりも、実現可能性が高い。

Ni-singe-jifunza kwa bidii, ni-singe-sema Ki-swahili.

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『もしも一生懸命学ばなければ、私はスワヒリ語を話さないでしょう (一生懸命学ぶだろう)』

U-singe-fanya kazi sana, u-singe-maliza haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』 = 『もしも大層仕事をしなければ、あなたは仕事を早く終えないでしょう (大層仕事をするでしょう)』

Nazi i-singe-anguka juu ya ki-chwa, u-singe-umizwa vibaya.

『やしの実』『落ちる』『上に』『頭』『傷つく』『ひどく』 = 『もしもやしの実が頭の上に落ちなければ、あなたはひどく傷つかないでしょう [落ちるだろう]』

下の例は、主節が肯定文であり、肯定仮定法現在時制が用いられている。

U-singe-jifunza kwa bidii, u-nge-shindwa katika m-tihani.

『学ぶ』『一生懸命』『失敗する』『に』『試験』 = 『もしも一生懸命学ばなければ、試験に失敗するだろう (一生懸命学ぶだろう)』

[単音節動詞]

単音節動詞が否定仮定法現在時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-を動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入する。これは肯定仮定法現在時制と同じ理由である。いくら否定時制標識 si-が仮定法現在時制の時制標識-nge の前の位置に付加されようとも、仮定法現在時制の時制標識-nge がアクセントをもつことができない以上、否定仮定法現在時制においては、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入されなければならない。

もしも目的語接辞が動詞語幹の直前の位置に付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入される必要はない。

表 120 否定仮定法現在時制（単音節動詞）

1 人称単数	ni-singe-kuja shule-ni	『もしも私は学校へ来ないなら』
2 人称単数	u-singe-kuja shule-ni	『もしもあなたは学校へ来ないなら』
3 人称単数	a-singe-kuja shule-ni	『もしも彼女、彼は学校へこないなら』
1 人称複数	tu-singe-kuja shule-ni	『もしも私たちは学校へ来ないなら』
2 人称複数	m-singe-kuja shule-ni	『もしもあなたたちは学校へ来ないなら』
3 人称複数	wa-singe-kuja shule-ni	『もしも彼らは学校へ来ないなら』

下の例は、単音節動詞-pa 『与える』の語幹の直前の位置に目的語接辞 ni- 『私』が付加されている。目的語接辞は、アクセントをもつことができるので、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入する必要はない。アクセントは、目的語接辞 ni- 『私』にある。

mama a-singe-ni-pa ch-akula

『お母さん』『与える』『食べ物』 = 『もしもお母さんが私に食べ物を与えたら』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加される必要はない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 121 否定仮定法現在時制（アラビア語起源動詞）

1 人称単数	ni-singe-jaribu kazi	『もしも私は仕事を試みなければ』
2 人称単数	u-singe-jaribu kazi	『もしもあなたは仕事を試みなければ』
3 人称単数	a-singe-jaribu kazi	『もしも彼女、彼は仕事を試みなければ』
1 人称複数	tu-singe-jaribu kazi	『もしも私たちは仕事を試みなければ』

- 2 人称複数 m-singe-jaribu kazi 『もしもあなたたちは仕事を試みなければ』
- 3 人称複数 a-singe-jaribu kazi 『もしも彼らは仕事を試みなければ』
- M/Wa〔単数〕 m-toto a-singe-jaribu kazi 『もしも子供は仕事を試みなければ』
- M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-singe-jaribu kazi 『もしも子供達は仕事を試みなければ』
- M/Mi〔単数〕 m-ti u-singe-baki 『もしも木は残らなければ』
- M/Mi〔複数〕 mi-ti i-singe-baki 『もしも木〔複数〕は残らなければ』
- Ji/Ma〔単数〕 tunda li-singe-baki 『もしも果物は残らなければ』
- Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-singe-baki 『もしも果物〔複数〕は残らなければ』
- Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-singe-baki 『もしも本は残らなければ』
- Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-singe-baki 『もしも本〔複数〕は残らなければ』
- N〔単数〕 nazi i-singe-baki 『もしもやしの実は残らなければ』
- N〔複数〕 nazi zi-singe-baki 『もしもやしの実〔複数〕は残らなければ』
- U/N〔単数〕 u-kuta u-singe-baki 『もしも壁は残らなければ』
- U/N〔複数〕 kuta zi-singe-baki 『もしも壁〔複数〕は残らなければ』
- Ku (不定詞) ku-taka w-ingi ku-singe-haribu m-oyo 『もしも多くを望むことは心を壊さなければ』
- Pa (場所) mwitu-ni pa-singe-kei simba 『もしも森にライオンは座らなければ』
- Ku (場所) mwitu-ni ku-singe-kei simba 『もしも森にライオンは座らなければ』
- Mu (場所) mwitu-ni m-singe-kei simba 『もしも森の中にライオンは座らなければ』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [18] 肯定仮定法過去時制

肯定仮定法過去時制は、時制標識 *ngali-* が用いられる。時制標識 *ngali-* には自由変種（意味が変わることなく自由に置き換えが可能な形式）として、時制標識 *ngeli-* がある。しかし、時制標識 *ngali-* がより一般的に用いられる。より一般的な時制標識 *-ngali* を用いて説明する。肯定なので、主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。終母音は、*-a* である。

表 122 肯定仮定法過去時制

- 1 人称単数 ni-ngali-soma ki-tabu 『もしも私は本を読んだなら』
- 2 人称単数 u-ngali-soma ki-tabu 『もしもあなたは本を読んだなら』
- 3 人称単数 a-ngali-soma ki-tabu 『もしも彼女、彼は本を読んだなら』
- 1 人称複数 tu-ngali-soma ki-tabu 『もしも私たちは本を読んだなら』
- 2 人称複数 m-ngali-soma ki-tabu 『もしもあなたたちは本を読んだなら』
- 3 人称複数 wa-ngali-soma ki-tabu 『もしも彼らは本を読んだなら』
- M/Wa〔単数〕 m-toto a-ngali-soma ki-tabu 『もしも子供は本を読んだなら』

M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-ngali-soma ki-tabu	『もしも子供達は本を読んだなら』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-ngali-anguka	『もしも木は倒れたなら』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ngali-anguka	『もしも木〔複数〕は倒れたなら』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ngali-anguka	『もしも果物は落ちたなら』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ngali-anguka	『もしも果物〔複数〕は落ちたなら』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ngali-anguka	『もしも本は落ちたなら』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ngali-anguka	『もしも本〔複数〕は落ちたなら』
N〔単数〕	nazi i-ngali-anguka	『もしもやしの実は落ちたなら』
N〔複数〕	nazi zi-ngali-anguka	『もしもやしの実〔複数〕は落ちたなら』
U/N〔単数〕	u-kuta u-ngali-anguka	『もしも壁は倒れたなら』
U/N〔複数〕	kuta zi-ngali-anguka	『もしも壁〔複数〕は倒れたなら』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-ngali-leta ma-tata	『もしも多くを望むことが災難をもたらしたなら』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-ngali-lala simba	『もしも森にライオンが寝たなら』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-ngali-lala simba	『もしも森にライオンが寝たなら』
Mu (場所)	mwitu-ni m-ngali-lala simba	『もしも森の中にライオンが寝たなら』

肯定仮定法過去時制は、発話時点をさかのぼる過去において出来事や行為が実際には生じなかったにもかかわらず、生じた可能性について述べる。また、実際には生じなかったにもかかわらず、発話時点をさかのぼる過去において、出来事や行為が生じる条件について述べる。実際には生じなかったにもかかわらず、出来事や行為が生じる条件を述べる節は、肯定仮定法過去が用いられる。実際には生じなかったにもかかわらず、出来事や行為の生じた可能性を述べる主節は、仮定法過去であれば、肯定文であっても否定文であっても良い。肯定であれば、肯定仮定法過去時制を、否定であれば、否定仮定法過去時制が用いられる。否定仮定法過去時制は、[19]で説明する。

Ni-ngali-jifunza kwa bidii, ni-ngali-sema Ki-swahili.

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『もしも一生懸命学んでいたら、私はスワヒリ語を話しただろう (一生懸命学ばなかった)』

U-ngali-fanya kazi sana, u-ngali-maliza haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』 = 『もしも大層仕事をしていたら、あなたは早く終えただろう (大層仕事をしなかった)』

Nazi i-ngali-anguka juu ya ki-chwa, u-ngali-umizwa vibaya.

『やしの実』『落ちる』『上に』『頭』『傷つく』『ひどく』 = 『もしもやしの実が頭の上に落ちていたら、あなたはひどく傷ついただろう (落ちることはなかった)』



下の例は、主節が否定であり、否定仮定法過去時制を用いている。

Ni-ngali-jifunza kwa bidii, ni-singali-shindwa katika m-tihani.

『学ぶ』『一生懸命』『失敗する』『に』『試験』 = 『もしも一生懸命学んでいたら、試験に失敗しなかったら（一生懸命学ばなかった）』

仮定法現在と仮定法過去の違いを強調して日本語訳をつけている。実際には、スワヒリ語の仮定法現在時制と仮定法過去時制には、はっきりとした違いはない。両者の違いは、仮定法過去時制で述べられる出来事や行為のほうが、仮定法現在時制で述べられる出来事や行為よりも、実現の可能性が低いと考えられる。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定仮定法過去時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 *ku-*が動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。肯定仮定法過去時制標識 *ngali-*は、アクセントをもつことができない形式である。もしも、目的語接辞が動詞語幹の直前の位置に付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*を挿入する必要はない。目的語接頭辞がアクセントをもつからである。

表 123 肯定仮定法過去時制（単音節動詞）

1 人称単数	<i>ni-ngali-kuja shule-ni</i>	『もしも私が学校から帰ったなら』
2 人称単数	<i>u-ngali-kuja shule-ni</i>	『もしもあなたが学校から帰ったなら』
3 人称単数	<i>a-ngali-kuja shule-ni</i>	『もしも彼女、彼が学校から帰ったなら』
1 人称複数	<i>tu-ngali-kuja shule-ni</i>	『もしも私たちが学校から帰ったなら』
2 人称複数	<i>m-ngali-kuja shule-ni</i>	『もしもあなたたちが学校から帰ったなら』
3 人称複数	<i>wa-ngali-kuja shule-ni</i>	『もしも彼らが学校から帰ったなら』

アクセントをもつことができる目的語接辞が動詞語幹の直前に付加されると、アクセントを調節するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*を挿入する必要はない。下の例では、単音節動詞-*pa*『与える』の直前の位置にある目的語接辞 *ni-*がアクセントをもつ。

*mama a-ngali-ni-pa ch-akula*

『お母さん』『与える』『食べ物』 = 『もしもお母さんが私に食べ物を与えたなら』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 *i*、*e*、*u* をもっており、終母音-*a*が付加されることはない。それ以外については、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の

動詞と同じ振る舞いをする。

表 124 肯定仮定法過去（アラビア語起源動詞）

1 人称単数	ni-ngali-jaribu kazi	『もしも私が仕事を試みたなら』
2 人称単数	u-ngali-jaribu kazi	『もしもあなたが仕事を試みたなら』
3 人称単数	a-ngali-jaribu kazi	『もしも彼女、彼が仕事を試みたなら』
1 人称複数	tu-ngali-jaribu kazi	『もしも私たちが仕事を試みたなら』
2 人称複数	m-ngali-jaribu kazi	『もしもあなたたちが仕事を試みたなら』
3 人称複数	wa-ngali-jaribu kazi	『もしも彼らが仕事を試みたなら』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-ngali-jaribu kazi	『もしも子供が仕事を試みたなら』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-ngali-jaribu kazi	『もしも子供たちが仕事を試みたなら』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-ngali-baki	『もしも木が残ったなら』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ngali-baki	『もしも木〔複数〕が残ったなら』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ngali-baki	『もしも果物が残ったなら』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ngali-baki	『もしも果物〔複数〕が残ったなら』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ngali-baki	『もしも本が残ったなら』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ngali-baki	『もしも本〔複数〕が残ったなら』
N〔単数〕	nazi i-ngali-baki	『もしもやしの実が残ったなら』
N〔複数〕	nazi zi-ngali-baki	『もしもやしの実〔複数〕が残ったなら』
U/N〔単数〕	u-kuta u-ngali-baki	『もしも壁が残ったなら』
U/N〔複数〕	kuta zi-ngali-baki	『もしも壁〔複数〕が残ったなら』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi ku-ngali-haribu m-oyo	『もしも多くを望むことが心を壊したなら』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-ngali-keci simba	『もしも森にライオンが座ったなら』
Ku（場所）	mwitu-ni ku-ngali-keci simba	『もしも森にライオンが座ったなら』
Mu（場所）	mwiu-ni m-ngali-keci simba	『もしも森の中にライオンが座ったなら』

アラビア語起源動詞の中に単音節動詞は見当たらない。

#### [19] 否定仮定法過去時制

否定仮定法過去時制は、時制標識 *singali-* が用いられる。否定であるけれど、主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。時制標識 *singali-* の中に否定の要素 *si-* が付加されている。終母音は、*-a* である。

肯定仮定法過去時制標識 *ngali-* と否定の主語接辞を用いて、否定仮定法過去時制を表す方法もある (*si-ngali-soma* 『もしも私が読まなかったなら』)。しかし、このやり方は、あまり一般的ではない。

また、時制標識 *singali-*のかわりに自由変種として時制標識 *singeli-*を使うことも可能である。しかし、時制標識 *singali-*を使うことが一般的である。

表 125 否定仮定法過去時制

1 人称単数	<i>ni-singali-soma ki-tabu</i>	『もしも私が本を読まなかったなら』
2 人称単数	<i>u-singali-soma ki-tabu</i>	『もしもあなたが本を読まなかったなら』
3 人称単数	<i>a-singali-soma ki-tabu</i>	『もしも彼女、彼が本を読まなかったなら』
1 人称複数	<i>tu-singali-soma ki-tabu</i>	『もしも私たちが本を読まなかったなら』
2 人称複数	<i>m-singali-soma ki-tabu</i>	『もしもあなたたちが本を読まなかったなら』
3 人称複数	<i>wa-singali-soma ki-tabu</i>	『もしも彼らが本を読まなかったなら』
M/Wa〔単数〕	<i>m-toto a-singali-soma ki-tabu</i>	『もしも子供が本を読まなかったなら』
M/Wa〔複数〕	<i>wa-toto wa-singali-soma ki-tabu</i>	『もしも子供たちが本を読まなかったなら』
M/Mi〔単数〕	<i>m-ti u-singali-anguka</i>	『もしも木が倒れなかったなら』
M/Mi〔複数〕	<i>mi-ti i-singali-anguka</i>	『もしも木〔複数〕が倒れなかったなら』
Ji/Ma〔単数〕	<i>tunda li-singali-anguka</i>	『もしも果物が落ちなかったなら』
Ji/Ma〔複数〕	<i>ma-tunda ya-singali-anguka</i>	『もしも果物〔複数〕が落ちなかったなら』
Ki/Vi〔単数〕	<i>ki-tabu ki-singali-anguka</i>	『もしも本が落ちなかったなら』
Ki/Vi〔複数〕	<i>vi-tabu vi-singali-anguka</i>	『もしも本〔複数〕が落ちなかったなら』
N〔単数〕	<i>nazi i-singali-anguka</i>	『もしもやしの実が落ちなかったなら』
N〔複数〕	<i>nazi zi-singali-anguka</i>	『もしもやしの実〔複数〕が落ちなかったなら』
U/N〔単数〕	<i>u-kuta u-singali-anguka</i>	『もしも壁が倒れなかったなら』
U/N〔複数〕	<i>kuta zi-singali-anguka</i>	『もしも壁〔複数〕が倒れなかったなら』
Ku (不定詞)	<i>ku-taka w-ingi ku-singali-leta ma-tata</i>	『もしも多くを望むことが災難をもたらさなかったなら』
Pa (場所)	<i>mwitu-ni pa-singali-lala simba</i>	『もしも森にライオンが寝なかったなら』
Ku (場所)	<i>mwitu-ni ku-singali-lala simba</i>	『もしも森にライオンが寝なかったなら』
Mu (場所)	<i>mwitu-ni m-singali-lala simba</i>	『もしも森の中にライオンが寝なかったなら』

否定仮定法過去は、発話時点をさかのぼる過去の時点で、実際には生じた出来事や行為が実現しなかった可能性について述べる。また、実際には生じていたであろう出来事や行為が実現しなかった条件について述べる。出来事や行為が実現しなかった条件を述べるには、否定仮定法過去を用いた条件節を使う。

スワヒリ語において仮定法過去と仮定法現在、さほどはっきりした区別がない。否定仮定法過去で表現される否定的出来事や行為は、否定仮定法現在で表現される否定的出来事や行為の可能性より低い。

条件節が否定仮定法過去時制が用いられるとき、主節においては、仮定法過去時制であ

れば、否定文であっても、肯定文であってもかまわない。否定文であれば、否定仮定法過去時制が用いられ、肯定文であれば、肯定仮定法過去時制が用いられる。

Ni-singali-jifunza kwa bidii, ni-singali-sema Ki-swahili

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『一生懸命学ばなかったなら、私はスワヒリ語を話さなかったでしょう [一生懸命学んだ]』

U-singali-fanya kazi sana, u-singali-maliza haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』 = 『大層仕事をしなかったなら、あなたは早く終えなかったでしょう (大層仕事をした)』

Nazi i-singali-anguka juu ya kichwa, u-singali-umizwa vibaya.

『やしの実』『落ちる』『上に』『頭』『傷つく』『ひどく』 = 『やしの実が頭の上に落ちなかったなら、あなたはひどく傷つかなかったでしょう (やしの実が落ちた)』

下の例は、主文が肯定仮定法過去時制を用いている。

Ni-singali-jifunza kwa bidii, ni-ngali-shindwa katika m-tihani.

『学ぶ』『一生懸命』『失敗する』『に』『試験』 = 『一生懸命学ばなかったら、私は試験に失敗しただろう (一生懸命学んだ)』

英語文法におけるほど、スワヒリ語の仮定法現在時制と仮定法過去時制のあいだの違いは明確ではない。それは否定の仮定法現在時制と否定の仮定法過去時制のあいだでも同じことである。

[単音節動詞]

単音節動詞が否定仮定法過去時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 *ku-*が動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。いくら否定時制標識 *si-*が時制標識 *ngali-*に先行しても、時制標識 *ngali-*がアクセントをもつことができない形式だからである。

もしも目的語接辞が動詞語幹の直前の位置に付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*は挿入されない。

表 126 否定仮定法過去時制 (単音節動詞)

- |        |                          |                         |
|--------|--------------------------|-------------------------|
| 1 人称単数 | ni-singali-kuja shule-ni | 『もしも私が学校から帰らなかったなら』     |
| 2 人称単数 | u-singali-kuja shule-ni  | 『もしもあなたが学校から帰らなかったなら』   |
| 3 人称単数 | a-singali-kuja shule-ni  | 『もしも彼女、彼が学校から帰らなかったなら』  |
| 1 人称複数 | tu-singali-kuja shule-ni | 『もしも私たちが学校から帰らなかったなら』   |
| 2 人称複数 | m-singali-kuja shule-ni  | 『もしもあなたたちが学校から帰らなかったなら』 |

3 人称複数 wa-singali-kuja shule-ni 『もしも彼らが学校から帰らなかったなら』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。そのことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、否定仮定法過去時制においてバントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 127 否定仮定法過去時制 (アラビア語起源動詞)

1 人称単数	ni-singali-jaribu kazi	『もしも私は仕事を試みなかったなら』
2 人称単数	u-singali-jaribu kazi	『もしもあなたは仕事を試みなかったなら』
3 人称単数	a-singali-jaribu kazi	『もしも彼女、彼は仕事を試みなかったなら』
1 人称複数	tu-singali-jaribu kazi	『もしも私たちは仕事を試みなかったなら』
2 人称複数	m-singali-jaribu kazi	『もしもあなたたちは仕事を試みなかったなら』
3 人称複数	wa-singali-jaribu kazi	『もしも彼らは仕事を試みなかったなら』
M/Wa [単数]	m-toto a-singali-jaribu kazi	『もしも子供は仕事を試みなかったなら』
M/Wa [複数]	wa-toto wa-singali-jaribu kazi	『もしも子供たちは仕事を試みなかったなら』
M/Mi [単数]	m-ti u-singali-baki	『もしも木は残らなかったなら』
M/Mi [複数]	mi-ti i-singali-baki	『もしも木 [複数] は残らなかったなら』
Ji/Ma [単数]	tunda li-singali-baki	『もしも果物は残らなかったなら』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ya-singali-baki	『もしも果物 [複数] は残らなかったなら』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ki-singali-baki	『もしも本は残らなかったなら』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu vi-singali-baki	『もしも本 [複数] は残らなかったなら』
N [単数]	nazi i-singali-baki	『もしもやしの実は残らなかったなら』
N [複数]	nazi zi-singali-baki	『もしもやしの実 [複数] は残らなかったなら』
U/N [単数]	u-kuta u-singali-baki	『もしも壁は残らなかったなら』
U/N [複数]	ku-ta zi-singali-baki	『もしも壁 [複数] は残らなかったなら』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-singali-haribu m-oyo	『もしも多くを望むことは心を壊さなかったなら』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-singali-kezi simba	『もしも森にライオンは座らなかったなら』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-singali-kezi simba	『もしも森にライオンは座らなかったなら』
Mu (場所)	mwitu-ni m-singali-kezi simba	『もしも森の中にライオンは座らなかったなら』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

譲歩文をつくるための時制標識がある。スワヒリ語は、特定の時制標識を用いて譲歩文をつくるので、譲歩時制を時制の1つとして説明する。

譲歩文は、時制標識 nga-、あるいは、時制標識 japo-を用いる。主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。終母音は、-a である。

時制標識 nga-で表される譲歩文は、実現可能な出来事や行為を表現する。時制標識 japo-で表される譲歩文は、実現不可能な出来事や行為を表現する。

表 128 譲歩時制 nga-

1 人称単数	ni-nga-soma ki-tabu	『私が本を読んでも』
2 人称単数	u-nga-soma ki-tabu	『あなたが本を読んでも』
3 人称単数	a-nga-soma ki-tabu	『彼女、彼が本を読んでも』
1 人称複数	tu-nga-soma ki-tabu	『私たちが本を読んでも』
2 人称複数	m-nga-soma ki-tabu	『あなたたちが本を読んでも』
3 人称複数	wa-nga-soma ki-tabu	『彼らが本を読んでも』
M/Wa [単数]	m-toto a-nga-soma ki-tabu	『子供が本を読んでも』
M/Wa [複数]	wa-toto wa-nga-soma ki-tabu	『子供たちが本を読んでも』
M/Mi [単数]	m-ti u-nga-anguka	『木が倒れても』
M/Mi [複数]	mi-ti i-nga-anguka	『木 [複数] が倒れても』
Ji/Ma [単数]	tunda li-nga-anguka	『果物が落ちても』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ya-nga-anguka	『果物 [複数] が落ちても』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ki-nga-anguka	『本が落ちても』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu vi-nga-anguka	『本 [複数] が落ちても』
N [単数]	nazi i-nga-anguka	『やしの実が落ちても』
N [複数]	nazi zi-nga-anguka	『やしの実 [複数] が落ちても』
U/N [単数]	u-kuta u-nga-anguka	『壁が倒れても』
U/N [複数]	kuta zi-nga-anguka	『壁 [複数] が倒れても』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-nga-leta ma-tata	『多くを望むことが災難をもたらしても』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-nga-lala simba	『森にライオンが寝ても』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-nga-lala simba	『森にライオンが寝ても』
Mu (場所)	mwitu-ni m-nga-lala simba	『森の中にライオンが寝ても』

時制標識 nga-が表す譲歩文は、実現可能な出来事や行為が生じる可能性について述べる。例えば、下の1番目の文は、『話し手がスワヒリ語を一生懸命学ぶ可能性があるけれど、たとえ一生懸命学んでも』という譲歩的な意味を述べている。

Ni-nga-jifunza kwa bidii, si-sem-i Ki-swahili.

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』=『一生懸命学んでも、私はスワヒリ語を話さない』

U-nga-fanya kazi sana, hu-maliz-i haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』=『大層仕事をして、あなたは早く終えない』

Nazi i-nga-anguka juu ya ki-chwa, hu-umizw-i vi-baya.

『やしの実』『落ちる』『上に』『頭』『傷つく』『ひどく』=『やしの実が頭の上に落ちて、あなたはひどく傷つかない』

#### [単音節動詞]

単音節動詞が時制標識 nga-とともに用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されない。時制標識 nga-は、アクセントをもつことができる形式である。

表 129 譲歩時制 nga- (単音節動詞)

- |        |                    |                  |
|--------|--------------------|------------------|
| 1 人称単数 | ni-nga-ja shule-ni | 『私が学校から帰っても』     |
| 2 人称単数 | u-nga-ja shule-ni  | 『あなたが学校から帰っても』   |
| 3 人称単数 | a-nga-ja shule-ni  | 『彼女、彼が学校から帰っても』  |
| 1 人称複数 | tu-nga-ja shule-ni | 『私たちが学校から帰っても』   |
| 2 人称複数 | m-nga-ja shule-ni  | 『あなたたちが学校から帰っても』 |
| 3 人称複数 | wa-nga-ja shule-ni | 『彼らが学校から帰っても』    |

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されることはない。終母音-a が付加されないことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源動詞と同じ振る舞いをする。

表 130 譲歩時制 nga- (アラビア語起源動詞)

- |           |                            |                 |
|-----------|----------------------------|-----------------|
| 1 人称単数    | ni-nga-jaribu kazi         | 『私は仕事を試みても』     |
| 2 人称単数    | u-nga-jaribu kazi          | 『あなたは仕事を試みても』   |
| 3 人称単数    | a-nga-jaribu kazi          | 『彼女、彼は仕事を試みても』  |
| 1 人称複数    | tu-nga-jaribu kazi         | 『私たちは仕事を試みても』   |
| 2 人称複数    | m-nga-jaribu kazi          | 『あなたたちは仕事を試みても』 |
| 3 人称複数    | wa-nga-jaribu kazi         | 『彼らは仕事を試みても』    |
| M/Wa [単数] | m-toto a-nga-jaribu kazi   | 『子供は仕事を試みても』    |
| M/Wa [複数] | wa-toto wa-nga-jaribu kazi | 『子供たちは仕事を試みても』  |
| M/Mi [単数] | m-ti u-nga-baki            | 『木は残っても』        |
| M/Mi [複数] | mi-ti i-nga-baki           | 『木 [複数] は残っても』  |

Ji/Ma〔単数〕	tunda li-nga-baki	『果物は残っても』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-nga-baki	『果物〔複数〕は残っても』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-nga-baki	『本は残っても』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-nga-baki	『本〔複数〕は残っても』
N〔単数〕	nazi i-nga-baki	『やしの実は残っても』
N〔複数〕	nazi zi-nga-baki	『やしの実〔複数〕は残っても』
U/N〔単数〕	u-kuta u-nga-baki	『壁が残っても』
U/N〔複数〕	kuta zi-nga-baki	『壁〔複数〕は残っても』
Ku(不定詞)	ku-taka w-ingi ku-nga-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊しても』
Pa(場所)	mwitu-ni pa-nga-keci simba	『森にライオンは座っても』
Ku(場所)	mwitu-ni ku-nga-keci simba	『森にライオンは座っても』
Mu(場所)	mwitu-ni m-nga-keci simba	『森の中にライオンは座っても』

アラビア語起源動詞の中に単音節動詞は見当たらない。

譲歩時制標識 *japo-* を用いた譲歩文は、実現不可能な出来事や行為の仮定的な実現可能性について述べる。譲歩時制標識 *japo-* は、動詞 *ja-* 『来る』と場所クラス *Pa* の関係節標識 *po-* が結合した形式に由来する。

表 131 譲歩時制 *japo-*

1 人称単数	ni-japo-soma ki-tabu	『たとえ私は本を読むとしても (読まないけど)』
2 人称単数	u-japo-soma ki-tabu	『たとえあなたは本を読むとしても (読まないけど)』
3 人称単数	a-japo-soma ki-tabu	『たとえ彼女、彼が本を読むとしても (読まないけど)』
1 人称複数	tu-japo-soma ki-tabu	『たとえ私たちは本を読むとしても (読まないけど)』
2 人称複数	m-japo-soma ki-tabu	『たとえあなたたちは本を読むとしても (読まないけど)』
3 人称複数	wa-japo-soma ki-tabu	『たとえ彼らは本を読むとしても (読まないけど)』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-japo-soma ki-tabu	『たとえ子供は本を読むとしても (読まないけど)』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-japo-soma ki-tabu	『たとえ子供たちは本を読むとしても (読まないけど)』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-japo-anguka	『たとえ木は倒れるとしても (倒れないけど)』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-japo-anguka	『たとえ木〔複数〕は倒れるとしても (倒れないけど)』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-japo-anguka	『たとえ果物は落ちるとしても (落ちないけど)』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-japo-anguka	『たとえ果物〔複数〕は落ちるとしても (落ち



ないけど)』

Ki/Vi [単数] ki-tabu ki-japo-anguka 『たとえ本は落ちるとしても (落ちないけど)』

Ki/Vi [複数] vi-tabu vi-japo-anguka 『たとえ本 [複数] は落ちるとしても (落ちないけど)』

N [単数] nazi i-japo-anguka 『たとえやしの実は落ちるとしても (落ちないけど)』

N [複数] nazi zi-japo-anguka 『たとえやしの実 [複数] は落ちるとしても (落ちないけど)』

U/N [単数] u-kuta u-japo-anguka 『たとえ壁は倒れるとしても (倒れないけど)』

U/N [複数] kuta zi-japo-anguka 『たとえ壁 (複数) は倒れるとしても (倒れないけど)』

Ku (不定詞) ku-taka w-ingi ku-japo-leta ma-tata 『たとえ多くを望むことは災難をもたらすとしても (もたらさないけど)』

Pa (場所) mwitu-ni pa-japo-lala simba 『たとえ森にライオンが寝るとしても (寝ないけど)』

Ku (場所) mwitu-ni ku-japo-lala simba 『たとえ森にライオンが寝るとしても (寝ないけど)』

Mu (場所) mwitu-ni m-japo-lala simba 『たとえ森の中にライオンが寝るとしても (寝ないけど)』

時制標識 *japo*-を使った譲歩文は、実現不可能な出来事や行為の仮定的な実現可能性について述べる。例えば、下の文は、『話し手が一生懸命学ぶ可能性はないけれど、もし学んだとしても』という譲歩的な意味をもつ。

Ni-japo-jifunza kwa bidii, si-sem-i Ki-swahili.

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『たとえ一生懸命学んでも、私はスワヒリ語を話さない (学ばないけど)』

U-japo-fanya kazi sana, hu-maliz-i haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』 = 『たとえ大層仕事をしても、あなたは早く終えない』

Nazi i-japo-anguka juu ya ki-chwa, hu-umizw-i vibaya.

『やしの実』『落ちる』『上に』『頭』『傷つく』『ひどく』 = 『たとえやしの実が頭の上に落ちて、あなたはひどく傷つかない』

[単音節動詞]

単音節動詞が譲歩時制標識 *japo*-とともに用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku*-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。時制標識 *japo*-は、アクセントをもつことができない形式である。もしも動詞語幹の直前の位置に目的語

接辞が付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入することはない。

表 132 譲歩時制 japo- (単音節動詞)

- 1 人称単数 ni-japo-kuja shule-ni 『たとえ私が学校から帰っても』
- 2 人称単数 u-japo-kuja shule-ni 『たとえあなたが学校から帰っても』
- 3 人称単数 a-japo-kuja shule-ni 『たとえ彼女、彼が学校から帰っても』
- 1 人称複数 tu-japo-kuja shule-ni 『たとえ私たちが学校から帰っても』
- 2 人称複数 m-japo-kuja shule-ni 『たとえあなたたちが学校から帰っても』
- 3 人称複数 wa-japo-kuja shule-ni 『たとえ彼らが学校から帰っても』

下の例では、単音節動詞-pa『与える』の直前の位置に目的語接辞 ku-『あなた』が付加されている。目的語接辞は、アクセントをもつことができる形式なので、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入する必要はない。アクセントは、目的語接辞 ku-『あなた』にある。

Ni-japo-ku-pa chakula, ni ki-dogo tu.

『与える』『食べ物』『です』『小さい』『のみ』 = 『たとえ私があなたに食べ物を与えても(与えないけど)、それは少しだけです』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹の末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。そのことをのぞいて、アラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 133 譲歩時制 japo- (アラビア語起源動詞)

- 1 人称単数 ni-japo-jaribu kazi 『たとえ私は仕事を試みても』
- 2 人称単数 u-japo-jaribu kazi 『たとえあなたは仕事を試みても』
- 3 人称単数 a-japo-jaribu kazi 『たとえ彼女、彼は仕事を試みても』
- 1 人称複数 tu-japo-jaribu kazi 『たとえ私たちは仕事を試みても』
- 2 人称複数 m-japo-jaribu kazi 『たとえあなたたちは仕事を試みても』
- 3 人称複数 wa-japo-jaribu kazi 『たとえ彼らは仕事を試みても』
- M/Wa (単数) m-toto a-japo-jaribu kazi 『たとえ子供は仕事を試みても』
- M/Wa (複数) wa-toto wa-japo-jaribu kazi 『たとえ子供たちは仕事を試みても』
- M/Mi (単数) m-ti u-japo-baki 『たとえ木は残っても』
- M/Mi (複数) mi-ti i-japo-baki 『たとえ木(複数)は残っても』

Ji/Ma (単数)	tunda li-japo-baki	『たとえ果物は残っても』
Ji/Ma (複数)	ma-tunda ya-japo-baki	『たとえ果物 (複数) は残っても』
Ki/Vi (単数)	ki-tabu ki-japo-baki	『たとえ本は残っても』
Ki/Vi (複数)	vi-tabu vi-japo-baki	『たとえ本 (複数) は残っても』
N (単数)	nazi i-japo-baki	『たとえやしの実は残っても』
N (複数)	nazi zi-japo-baki	『たとえやしの実 (複数) は残っても』
U/N (単数)	u-kuta u-japo-baki	『たとえ壁は残っても』
U/N (複数)	kuta zi-japo-baki	『たとえ壁 (複数) は残っても』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-japo-haribu m-oyo	『たとえ多くを望むことは心を壊しても』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-japo-kei simba	『たとえ森にライオンは座っても』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-japo-kei simba	『たとえ森にライオンは座っても』
Mu (場所)	mwitu-ni m-japo-kei simba	『たとえ森の中にライオンは座っても』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [譲歩文を導く接続詞]

譲歩文を導く接続詞 *ingawa* と接続詞 *ijapokuwa* がある。接続詞 *ingawa* は、Nクラス [単数] の主語接辞 *i-*が、譲歩時制標識 *nga-*と動詞-*wa* 『である』に付加した形式に由来する (動詞-*wa* 『である』は単音節動詞である)。接続詞 *ijapokuwa* は、Nクラス [単数] の主語接辞 *i-*が、譲歩時制標識 *japo-*と動詞-*wa* 『である』に付加した形式である (単音節動詞と譲歩時制標識のあいだにアクセント調整のための *ku-*が挿入されている)。

これらの接続詞で導かれる譲歩文は、主語がどんなものであっても、また、時制がどんな時制であってもかまわない。例えば、下の例の1番目の文は、譲歩節に否定現在時制が用いられている。2番目の文は、肯定現在継続時制を用いている。

#### *Ingawa ha-jifunzi kwa bidii, a-ta-sema Kiswahili*

『たとえ』『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『たとえ一生懸命学ばなくとも、彼はスワヒリ語を話すでしょう』

#### *Ijapokuwa ni-na-kufa, ni-na-m-penda m-ke w-angu.*

『たとえ』『死ぬ』『愛する』『妻』『私の』 = 『たとえ死んでも、私は妻を愛するでしょう』

後で説明する複合時制は、2つの動詞複合体からなり、それぞれの動詞複合体は、同じ主語接辞をもつ。しかし、譲歩文を導く接続詞は、つねに、Nクラス [単数] の主語接辞をもち、後続する節の主語接辞と一致することはない。このことをのぞけば、これらの接続詞に導かれる譲歩文は、後で説明する複合時制と似た構造をもっている。おそらく、こ

これらの接続詞により導かれる譲歩文は、複合時制の構造に由来すると考えられる。これらの譲歩節を導く接続詞は、複合時制の構造が文法化した結果であろう。

[2 1] 譲歩時制の否定=[2 6]

譲歩時制と対をなす否定の譲歩文をつくる特別な時制標識は存在しない。譲歩時制の否定は、複合時制を用いる。複合時制は、[2 6]で説明する。

[2 2] 肯定完結時制、近接未来時制、「なる」時制

周辺的な時制として、3つの時制、肯定完結時制、近接未来時制、「なる」時制を同時に解説する。これらの時制は、助動詞的な働きをする動詞複合体に、動詞の不定詞が後続して形成される。

肯定完結時制は、助動詞的な働きをする動詞複合体に、時制標識 *me-*と動詞語幹 *-isha* 『～し終える』を用いる。終母音は、*-a* である。動詞 *-isha* 『～し終える』は、単音節動詞なので、時制標識 *me-*と動詞語幹 *-isha* のあいだにアクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*を挿入する必要がある。時制標識 *me-*と *-kwisha* からなる動詞複合体に、動詞の不定詞が後続する。肯定なので主語接辞は、肯定の主語接辞を用いる。

表 134 肯定完結時制

1 人称単数	<i>ni-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『私は本を読み終えた』
2 人称単数	<i>u-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『あなたは本を読み終えた』
3 人称単数	<i>a-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『彼女、彼は本を読み終えた』
1 人複数	<i>tu-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『私たちは本を読み終えた』
2 人称複数	<i>m-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『あなたたちは本を読み終えた』
3 人称複数	<i>wa-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『彼らは本を読み終えた』
M/Wa [単数]	<i>m-toto a-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『子供は本を読み終えた』
M/Mi [複数]	<i>wa-toto wa-me-kwisha ku-soma ki-tabu</i>	『子供たちは本を読み終えた』
M/Mi [単数]	<i>m-ti u-me-kwisha ku-anguka</i>	『木は倒れ終えた』
M/Mi [複数]	<i>mi-ti i-me-kwisha ku-anguka</i>	『木 [複数] は倒れ終えた』
Ji/Ma [単数]	<i>tunda li-me-kwisha ku-anguka</i>	『果物は落ち終えた』
Ji/Ma [複数]	<i>ma-tunda ya-me-kwisha ku-anguka</i>	『果物 [複数] は落ち終えた』
Ki/Vi [単数]	<i>ki-tabu ki-me-kwisha ku-anguka</i>	『本は落ち終えた』
Ki/Vi [複数]	<i>vi-tabu vi-me-kwisha ku-anguka</i>	『本 [複数] は落ち終えた』
N [単数]	<i>nazi i-me-kwisha ku-anguka</i>	『やしの実は落ち終えた』

N〔複数〕	nazi zi-me-kwisha ku-anguka	『やしの実〔複数〕は落ち終えた』
U/N〔単数〕	u-kuta u-me-kwisha ku-anguka	『壁は倒れ終えた』
U/N〔複数〕	kuta zi-me-kwisha ku-anguka	『壁〔複数〕は倒れ終えた』
Ku（不定詞）	ku-taka w-ingi ku-me-kwisha ku-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらし終えた』
Pa（場所）	mwitu-ni pa-me-kwisha ku-lala simba	『森にライオンは寝終えた』
Ku（場所）	mwitu-ni ku-me-kwisha ku-lala simba	『森にライオンは寝終えた』
Mu（場所）	mwitu-ni m-me-kwisha ku-lala simba	『森の中にライオンは寝終えた』

肯定完結時制は、発話時点において出来事や行為が既に完結していることを述べる。

肯定完結時制には、個人語的な、地域的な変種が存在する。上の表を用いて説明したのは、もっとも長い形式をもった変種である。

時制標識 *me-*とアクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*と動詞語幹 *-isha* が縮小した形式、*-mesha* を用いる変種がある。主語接辞は、*-mesha* に付加される。それに後続するのは、動詞の不定詞である。1人称単数の例だけを下に示す。

Ni-mesha ku-soma ki-tabu.

『読む』『本』 = 『私は本を読み終えた』

さらに、時制標識 *me-*とアクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*と動詞語幹 *-isha* 『～し終える』が縮小した形式 *-mesha* が、時制標識として再解釈され、動詞語幹に直接、その形式 *mesha-* が付加される変種がある。終母音は、*-a* である。*mesha-* は、既に時制標識として、動詞語幹に直接、付加される。もはや助動詞的な働きをしていないので、動詞の不定詞が後続することはできない。1人称単数の例だけを下に示す。

Ni-mesha-soma ki-tabu.

『読む』『本』 = 『私は本を読み終えた』

これら3つの変種には、意味の違いはない。これら3つの変種は、動詞が時制標識へと変化する過程を示していると考えられる。

#### [単音節動詞]

3つの変種のうち、動詞の不定詞を用いる形式は、不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が動詞の前に付加されているので、いくら動詞語幹が単音節動詞であろうとも、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-* をさらに挿入する必要はない。不定詞の *ku-* はアクセントをもつことができる形式である。アクセントは、不定詞をつくる接頭辞 *ku-* にある。

Ni-mekwisha ku-la ch-akula 『私は食べ物を食べ終えた』

Ni-mesha ku-la ch-akula 『私は食べ物を食べ終えた』

3つの変種のうち、最後の変種である、時制標識 me-とアクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-と動詞語幹-isha『～し終える』が縮小した形式が時制標識と再解釈された変種は、単音節動詞には用いられない。

#### [近接未来時制]

近接未来時制は、動詞-enda『行く』に主語接辞と時制標識が付加された動詞複合体に、動詞の不定詞が後続して形づくられる。動詞-enda『行く』を中心とする動詞複合体が助動詞的な働きをしている。

Ni-na-kw-enda ku-soma ki-tabu.

『読む』『本』 = 『私は本を読むでしょう』

近接未来時制は、完結時制のように、縮小した形式が生まれていない。助動詞的な働きをする動詞-enda『行く』からなる動詞複合体に、動詞の不定詞が後続する文と考えることができる。

#### [「なる」時制]

「なる」時制は、動詞-ja『来る』に主語接辞と時制標識が付加された動詞複合体に、動詞の不定詞が後続して形づくられる。動詞-ja『来る』を中心とする動詞複合体が助動詞的な働きをしている。

Ni-li-ku-ja ku-soma ki-tabu.

『読む』『本』 = 『私は本を読むことになった』

「なる」時制は、完結時制のように、縮小した形式が生まれていない。助動詞的な働きをする動詞-ja『来る』からなる動詞複合体に、動詞の不定詞が後続する文と考えることができる。

#### [23] 完結時制の否定=[6]

完結時制の否定は、否定完了時制と同じであると考えられる。完結時制の否定は、否定完了時制 ja-と動詞-isha『～し終える』からなる動詞複合体に、動詞の不定詞が後続するものと考えられる。肯定完結時制のように時制標識への再解釈がみられないことから、否定

完了時制標識と動詞-isha『し終える』を中心とする動詞複合体が助動詞的な働きをしていて、その動詞複合体に動詞の不定詞が後続していると考えられる。独立した時制と考える必要はない。

#### [24] 肯定習慣時制

肯定習慣時制は、時制標識 hu-が用いられる。肯定習慣時制以外の時制標識は、動詞複合体の先頭の位置に、すなわち、時制標識に先行する位置に、必ず主語接辞が付加される。ところが、肯定習慣時制だけは主語接辞が用いられない。肯定習慣時制標識 hu-がつねに動詞複合体の初頭の位置におかれる。主語接辞が用いられないから、動詞複合体だけでは、主語の人称や数、あるいは、主語が所属する名詞クラスを区別することはできない。したがって、文脈で主語が明らかである場合をのぞいて、必ず、主語を肯定習慣時制標識から始まる動詞複合体の前におかなければならない。主語が人称である場合には、独立人称代名詞を用いる。

表 135 肯定習慣時制

1 人称単数	mimi hu-soma ki-tau	『私は本を読むことにしている』
2 人称単数	wewe hu-soma ki-tabu	『あなたは本を読むことにしている』
3 人称単数	yeye hu-soma ki-tabu	『彼女、彼は本を読むことにしている』
1 人称複数	sisi hu-soma ki-tabu	『私たちは本を読むことにしている』
2 人称複数	ninyi hu-soma ki-tabu	『あなたたちは本を読むことにしている』
3 人称複数	wao hu-soma ki-tabu	『彼らは本を読むことにしている』
M/Wa[単数]	m-toto hu-soma ki-tabu	『子供は本を読むことにしている』
M/Wa[複数]	wa-toto hu-soma ki-tabu	『子供たちは本を読むことにしている』
M/Mi[単数]	m-ti hu-anguka	『木は倒れることになっている』
M/Mi[複数]	mi-ti hu-anguka	『木[複数]は倒れることになっている』
Ji/Ma[単数]	tunda hu-anguka	『果物は落ちることになっている』
Ji/Ma[複数]	ma-tunda hu-anguka	『果物[複数]は落ちることになっている』
Ki/Vi[単数]	ki-tabu hu-anguka	『本は落ちることになっている』
Ki/Vi[複数]	vi-tabu hu-anguka	『本[複数]は落ちることになっている』
N[単数]	nazi hu-anguka	『やしの実は落ちることになっている』
N[複数]	nazi hu-anguka	『やしの実[複数]は落ちることになっている』
U/N[単数]	u-kuta hu-anguka	『壁は倒れることになっている』
U/N[複数]	kuta hu-anguka	『壁[複数]は倒れることになっている』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi hu-leta ma-tata	『多くを望むことは災難をもたらすことになっている』
Pa (場所)	?mwitu-ni hu-lala simba	『森にライオンは寝ることにしている』

Ku (場所) ?mwitu-ni hu-lala simba 『森にライオンは寝ることになっている』

Mu (場所) ?mwitu-ni hu-lala simba 『森の中にライオンは寝ることになっている』

肯定習慣時制は、発話時点で習慣的に生じる出来事や行為を述べる。

場所名詞を主語にした文は、Pa/Ku/Mu の区別ができない。場所名詞を主語にした文が実際に使用されるか、明らかではない。もし、場所名詞を主語にした文が使用されるとしても、場所名詞 mwitu-ni『森で』が主語になっているのか、あるいは、主語 simba『ライオン』が後置されているのか、明らかではない。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が肯定習慣時制で用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されない。肯定習慣時制標識 hu-は、アクセントをもつことができる形式である。

表 136 肯定習慣時制 (単音節動詞)

1 人称単数 mimi hu-ja shule-ni 『私は学校から帰ることになっている』

2 人称単数 wewe hu-ja shule-ni 『あなたは学校から帰ることになっている』

3 人称単数 yeye hu-ja shule-ni 『彼女、彼は学校から帰ることになっている』

1 人称複数 sisi hu-ja shule-ni 『私たちは学校から帰ることになっている』

2 人称複数 ninyi hu-ja shule-ni 『あなたたちは学校から帰ることになっている』

3 人称複数 wao hu-ja shule-ni 『彼らは学校から帰ることになっている』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その動詞語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音 -a が付加されない。それ以外は、アラビア語起源動詞は、肯定習慣時制においてバントゥウ起源の動詞と同じ振る舞いをする。

表 137 肯定習慣時制 (アラビア語起源動詞)

1 人称単数 mimi hu-jaribu kazi 『私は仕事を試みることにしている』

2 人称単数 wewe hi-jaribu kazi 『あなたは仕事を試みることにしている』

3 人称単数 yeye hu-jaribu kazi 『彼女、彼は仕事を試みることにしている』

1 人称複数 sisi hu-jaribu kazi 『私たちは仕事を試みることにしている』

2 人称複数 ninyi hu-jaribu kazi 『あなたたちは仕事を試みることにしている』

3 人称複数 wao hu-jaribu kazi 『彼らは仕事を試みることにしている』

M/Wa [単数] m-toto hu-jaribu kazi 『子供は仕事を試みることにしている』

M/Wa [複数] wa-toto hu-jaribu kazi 『子供たちは仕事を試みることにしている』



M/Mi [単数]	m-ti hu-baki	『木は残ることになっている』
M/Mi [複数]	mi-ti hu-baki	『木 [複数] は残ることになっている』
Ji/Ma [単数]	tunda hu-baki	『果物は残ることになっている』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda hu-baki	『果物 [複数] は残ることになっている』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu hu-baki	『本は残ることになっている』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu hu-baki	『本 [複数] は残ることになっている』
N [単数]	nazi hu-baki	『やしの実は残ることになっている』
N [複数]	nazi hu-baki	『やしの実 [複数] は残ることになっている』
U/N [単数]	u-kuta hu-baki	『壁は残ることになっている』
U/N [複数]	kuta hu-baki	『壁 [複数] は残ることになっている』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi hu-haribu m-oyo	『多くを望むことは心を壊すことになっている』
Pa (場所)	?mwitu-ni hu-keci simba	『森にライオンは座ることになっている』
Ku (場所)	?mw-tu-ni hu-keci simba	『森にライオンは座ることになっている』
Mu (場所)	?mwitu-ni hu-keci simba	『森の中にライオンは座ることになっている』

アラビア語起源動詞には単音節動詞は見当たらない。

## [25] 肯定習慣時制の否定=[2]

肯定習慣時制と対をなす否定の特別な時制標識はない。肯定習慣時制の否定を表現しようとする、否定現在時制を用いる。否定現在時制は、既に説明した。

## [26] 複合時制

複合時制は、それぞれが時制標識をもつ2つの動詞複合体からなる。先行する動詞複合体は、いわゆる英語の *be* 動詞にあたる動詞-*wa* 『である』に主語接辞と時制標識が接辞されて形成される。ちなみに動詞-*wa* 『である』は、単音節動詞である。

文全体の時間（出来事や行為が生じる時間と発話時点との関係）とアスペクト（出来事や行為が生じる時間における出来事や行為の様態）は、先行する動詞複合体の時制標識が決定する。複合時制を形成する先行する動詞複合体には、動詞-*wa* 『である』が用いられる。他の動詞は用いられない。先行する動詞複合体は、時間とアスペクトのみに言及するだけであり、文がどんな出来事や行為を表しているのかについては、なんら言及しない。

一方、後続する動詞複合体を形成する動詞が文の意味、すなわち、出来事や行為の内容を表現する。後続する動詞複合体には、どんな動詞語幹が用いられてもかまわない。後続する動詞複合体は、動詞語幹に主語接辞と時制標識が付加され、さらに、必要であれば、

目的語接辞等が付加される。そして、後続する動詞複合体を構成する時制標識は、アスペクト（出来事や行為が生じる時間における出来事や行為の様態）だけを表示する。また、後続する動詞複合体の主語接辞は、先行する動詞複合体の主語接辞と同じでなければならない。

例えば、下の例では、先行する動詞複合体 *ni-li-ku-wa* は、過去時制標識 *li*-をもっており、文全体の時間を決定する。後続する動詞語幹は、出来事や行為を表示する動詞-*soma* 『読む』を中心にして、主語接辞 *ni*-と時制標識 *ki*-が付加されている。後続する動詞複合体の時制標識 *ki*-がアスペクトを表示する。時制標識 *ki*-は、進行アスペクトを表示する時制標識である。したがって、複合時制全体は、過去時における進行アスペクト、つまり、過去時制進行アスペクトを表示する。

また、先行する動詞複合体 *ni-ki-ku-wa* は、条件節をつくる時制標識 *ki*-をもっている。後続する動詞複合体の時制標識 *ki*-は、進行アスペクト時制標識である。したがって、複合時制全体は、進行アスペクトの条件節をつくっている。

*ni-li-ku-wa ni-ki-soma ki-tabu.*

『読む』『本』 = 『私は本を読んでいた』

*ni-ki-ku-wa ni-ki-soma ki-tabu.*

『読む』『本』 = 『私が本を読んでいるなら』

複合時制の中で、先行する動詞複合体の時制標識が文全体の時間、あるいは、アスペクトを表示するのだから、先行する動詞複合体に使える時制標識は、時間、あるいは、アスペクトを表示する機能をもつ時制標識でなければならない。後続する動詞複合体の時制標識は、アスペクトを表示するのだから、後続する動詞複合体の時制標識は、アスペクトを表示する時制標識でなければならない。このようにして、先行する動詞複合体の時制標識と後続する動詞複合体の時制標識の組み合わせが決定される。

論理的には、時間、あるいは、アスペクトを表示できる時制標識を先行する動詞複合体に用い、アスペクトを表示できる時制標識を後続する動詞複合体に用いる、組み合わせが可能である。しかし、基本的に用いられる複合時制の組み合わせは、先行する動詞複合体に時間、あるいは、アスペクトを表示する時制標識を用い、後続する動詞複合体に継続、完了、進行のアスペクトを表示する時制標識を用いる、組み合わせである。表 138 は、現在、過去、未来の基本時制と、継続、完了、進行のアスペクトの組み合わせである。

また、否定文をつくる時、先行する動詞複合体で否定の時制を用いるか、後続する動詞複合体で否定の時制を用いるか、時間とアスペクトの組み合わせによってパターンが異なる。後続する動詞複合体が継続アスペクトの場合、後続する動詞複合体が否定の動詞複合体となる。つまり、否定現在時制が用いられる。それ以外は、先行する動詞複合体に否定時制が用いられる。ただし、複合時制の後続する動詞複合体に、否定の現在時制完了ア

スペクトと否定の現在時制進行アスペクトは、見当たらない。

表 138 基本時制の複合時制の組み合わせ

時間	アスペクト							
	継続			完了		進行		
現在	-na-kuwa	-na-		-na-kuwa	-me-	-na-kuwa	-ki-	
(否定)	-na-ku-wa	ha -φ-	-i	なし		なし		
過去	-li-kuwa	-na-		-li-kuwa	-me-	-li-kuwa	-ki-	
(否定)	-li-kuwa	ha -φ-	-i	ha-	-kuwa	-me-	ha- -kuwa	-ki-
未来	-ta-kuwa	-na-		-ta-kuwa	-me-	-ta-kuwa	-ki-	
(否定)	-ta-kuwa	ha -φ-	-i	ha-	-ta-kuwa	-me-	ha- -ta-kuwa	-ki-

現在、過去、未来など基本時制以外の時間、あるいは、アスペクトを表現する時制と、アスペクトの組み合わせも可能である。そのとき、スワヒリ語が区別する自然なアスペクトは、継続、完了、進行アスペクトの3つである。したがって、複合時制の後続する動詞複合形で用いられる時制標識は、継続、完了、進行の3つが、普通、用いられる。

現在完了時制と完了アスペクトの組み合わせは、同じ時制・アスペクトの繰り返しであり、不自然である。また、否定において見当たらない時制、あるいは、アスペクトと、アスペクトの組み合わせがある。

表 139 基本時制以外の複合時制

時間・アスペクト	アスペクト						
	継続			完了		進行	
完了	-me-kuwa	-na-		なし		-me-kuwa	-ki-
(否定)	-me-kuwa	ha -φ-	-i	なし		なし	
「語り」過去	-ka-wa	-na-		-kawa	-me-	-ka-wa	-ki-
(否定)	-ka-wa	ha -φ-	-i	なし		なし	
条件節	-ki-wa	-na-		-ki-wa	-me-	-ki-wa	-ki-
(否定)	-ki-wa	ha -φ-	-i	なし		なし	
仮定法現在	-nge-kuwa	-na-		-nge-kuwa	-me-	-nge-kuwa	-ki-
(否定)	-nge-kuwa	ha -φ-	-i	-singe-kuwa	-me-	-singe-kuwa	-ki-
仮定法過去	-ngali-kuwa	-na-		-ngali-kuwa	-me-	-ngali-kuwa	-ki-
(否定)	-ngali-kuwa	ha -φ-	-i	-singali-kuwa	-me-	-singali-kuwa	-ki-
習慣	hu-wa	-na-		hu-wa	-me-	hu-wa	-ki-
(否定)	hu-wa	ha -φ-	-i	なし		なし	

Wa-toto wa-me-kuwa wa-na-soma Ki-swahili darasa-ni.

『子供達』『学ぶ』『スワヒリ語』『教室で』 = 『子供達はスワヒリ語を教室で学び終えた』

W-anafunzi wa-me-kuwa wa-na-kimbia katika ki-wanja cha shule-ni.

『生徒たち』『走る』『で』『校庭』 = 『生徒たちは校庭で走りつづけ終えた』

Khamisi a-li-kwenda shamba-ni, a-ka-kuwa a-me-panda mahindi.

『ハミシ』『行く』『畑へ』『植える』『とうもろこし』 = 『ハミシは畑へ行った。そしてとうもろこしを植え終えた』

Khamisi a-li-kwenda shamba-ni, a-ka-kuwa a-ki-lima.

『ハミシ』『行く』『畑へ』『耕す』 = 『ハミシは畑へ行った。そして耕し終えた』

U-ki-wa hu-jifunzi kwa bidii, hu-sem-i Ki-swahili.

『学ぶ』『一生懸命』『話す』『スワヒリ語』 = 『一生懸命学ばなければ、あなたはスワヒリ語を話さない』

U-ki-wa u-me-fanya kazi, hu-poke-i chai.

『する』『仕事』『受け取る』『茶』 = 『仕事をし終えなければ、あなたはお茶を受け取らない』

U-ki-wa u-ki-fanya kazi sana, u-ta-maliza haraka.

『する』『仕事』『大層』『終える』『早く』 = 『仕事を大層し続ければ、あなたは早く終えるでしょう』

U-nge-kuwa u-me-lima shamba, u-nge-pumzika.

『耕す』『畑』『休む』 = 『畑を耕し終えたら、あなたは休むだろう』

U-nge-kuwa u-ki-lima shamba, u-nge-maliza haraka.

『耕す』『畑』『終える』『早く』 = 『畑を耕し続けたら、あなたは早く終えるでしょう』

Wewe hu-wa u-me-jifunza Ki-swahili asubuhi.

『あなた』『学ぶ』『スワヒリ語』『朝』 = 『あなたはいつも朝にスワヒリ語を学び終える』

Wewe hu-wa u-ki-kimbia katika ki-wanja cha shule-ni.

『あなた』『走る』『で』『校庭』 = 『あなたはいつも校庭で走っている』

### 9. 3 動詞-wa『である』と動詞-wa na『もつ』

英語の be 動詞に相当する動詞-wa『である、になる』と、動詞-wa『である、になる』に接続詞 na『と』が結合した動詞-wa na『もつ』を説明する。動詞-wa『である』と接続詞 na『と』のあいだにはどんな要素もはいることができないが、正書法では分離して書くことになっている。

動詞-wa『である、になる』は、単音節動詞である。そのために、動詞-wa『である』は、時制標識により、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を必要とする場合と、不定詞をつくる接頭辞 ku-を必要としない場合がある。ここではアクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-の有無を中心に説明する。

[動詞 wa-『である』]

動詞-wa『である』が繫辞として機能して、主語と補語をつなぐときのやり方を説明する。ただし、現在時制においては、主語と補語をつなぐために動詞 wa-『である、になる』は用いられない。現在時制においては、主語がどんな名詞であろうとも、形が変わらない主語と補語をつなぐ繫辞 ni『である』が用いられる。繫辞 ni は、時制接辞も主語接辞も付加されることはない。主語接辞が付加されないため、人称を表すためには独立人称代名詞を用いなければならない。

表 140 繫辞 ni『です』 (人称)

1 人称単数	mimi ni mw-anafunzi	『私は生徒です』
2 人称単数	wewe ni mw-anafunzi	『あなたは生徒です』
3 人称単数	yeye ni mw-anafunzi	『彼女、彼は生徒です』
1 人称複数	sisi ni w-anafunzi	『私たちは生徒です』
2 人称複数	ninyi ni w-anafunzi	『あなたたちは生徒です』
3 人称複数	wao ni w-anafunzi	『彼らは生徒です』

人間以外のものが主語になっても、繫辞 ni『である』は、形が変わらない。つまり、主語接辞が付加されない。時制接辞が付加されることもない。

繫辞 ni『である』がつなぐのは、主語と補語が一致するものだけではなく、補語が主語の性質や状態を表す場合も可能である。

表 141 繫辞 ni『です』

1 人称単数	mimi ni m-kubwa	『私は大きい』
2 人称単数	wewe ni m-kubwa	『あなたは大きい』
3 人称単数	yeye ni m-kubwa	『彼女、彼は大きい』
1 人称複数	sisi ni wa-kubwa	『私たちは大きい』
2 人称複数	ninyi ni wa-kubwa	『あなたたちは大きい』
3 人称複数	wao ni wa-kubwa	『彼らは大きい』
M/Wa(単数)	m-toto ni m-kubwa	『子供は大きい』
M/Wa(複数)	wa-toto ni wa-kubwa	『子供達は大きい』
M/Mi(単数)	m-ti ni m-kubwa	『木は大きい』

M/Mi(複数)	mi-ti ni mi-kubwa	『木(複数)は大きい』
Ji/Ma(単数)	tunda ni kubwa	『果物は大きい』
Ji/Ma(複数)	ma-tunda ni ma-kubwa	『果物(複数)は大きい』
Ki/Vi(単数)	ki-tabu ni ki-kubwa	『本は大きい』
Ki/Vi(複数)	vi-tabu ni vi-kubwa	『本(複数)は大きい』
N(単数)	nazi ni kubwa	『やしの実は大きい』
N(複数)	nazi ni kubwa	『やいの実(複数)は大きい』
U/N(単数)	u-kuta ni m-kubwa	『壁は大きい』
U/N(複数)	kuta ni kubwa	『壁(複数)は大きい』
Ku (不定詞)	ku-taka ni ku-zuri	『望むことは良い』
Pa (場所)	mahali ni pa-zuri	『場所が良い』
Ku (場所)	mahali ni ku-zuri	『場所が良い』
Mu (場所)	mahali ni m-zuri	『場所が良い』

繫辞 ni『です』は、よく省略されることがある。

Mimi mw-anafunzi.

『私』『生徒』 = 『私は生徒です』

M-ti hu-u m-kubwa.

『木』『この』『大きい』 = 『この木は大きい』

Ki-tabu hi-ki ch-angu.

『本』『この』『私の』 = 『この本は私のものです』

(所有代名詞が名詞を修飾するときは、名詞の直後の位置におかれる。この文では指示詞が名詞の直後の位置におかれていて、所有代名詞が名詞の直後の位置におかれていない。このことから、所有代名詞は、補語であることが分かる。)

現在時制のとき、繫辞 ni『です』を用いなくて、主語接辞を単独で用いることができる。ただし、そのとき、独立人称代名詞や名詞を、主語接辞に先行する位置におくことはできない。また、3人称単数が主語の場合、主語接辞 *yu-* が用いられる。

表 142 繫辞 ni の代わりにする主語接辞

1人称単数	ni m-kubwa	『私は大きい』
2人称単数	u m-kubwa	『あなたは大きい』
3人称単数	yu m-kubwa	『彼女、彼は大きい』
1人称複数	tu wa-kubwa	『私たちは大きい』
2人称複数	m wa-kubwa	『あなたたちは大きい』

3 人称複数	wa wa-kubwa	『彼らは大きい』
M/Wa(単数)	yu m-kubwa	『彼女、彼は大きい』
M/Wa(複数)	wa wa-kubwa	『彼らは大きい』
M/Mi(単数)	u m-kubwa	『それは大きい』
M/Mi(複数)	i mi-kubwa	『それらは大きい』
Ji/Ma(単数)	li kubwa	『それは大きい』
Ji/Ma(複数)	ya ma-kubwa	『それらは大きい』
Ki/Vi(単数)	ki ki-kubwa	『それは大きい』
Ki/Vi(複数)	vi vi-kubwa	『それらは大きい』
N(単数)	i kubwa	『それは大きい』
N(複数)	zi kubwa	『それらは大きい』
U/N(単数)	u m-kubwa	『それは大きい』
U/N(複数)	zi kubwa	『それらは大きい』
Ku (不定詞)	ku ku-zuri	『それは良い』
Pa (場所)	pa pa-zuri	『そこは良い』
Ku (場所)	ku ku-zuri	『そこは良い』
Mu (場所)	mu m-zuri	『そこは良い』

繫辞 ni『です』のかわりに主語接辞が用いられるのは、2 人称単数と 3 人称単数をのぞいては、おもに文語においてである。口語において用いられるのは、2 人称単数 u と 3 人称単数 yu である。

主語と補語をつなぐ文を否定文にするには、繫辞 ni『です』と対をなす、否定の繫辞 si が用いられる。否定の繫辞 si に、主語接辞を付加することはできない。時制標識が付加されることもない。つまり、主語がどんなものであっても、形はかわらない。人称が主語の場合、独立人称代名詞が否定の繫辞 si に先行する位置におかれる。

表 143 繫辞 si

1 人称単数	mimi si mw-anafunzi	『私は生徒ではない』
2 人称単数	wewe si mw-anafunzi	『あなたは生徒ではない』
3 人称単数	yeye si mw-anafunzi	『彼女、彼は生徒ではない』
1 人称複数	sisi si w-anafunzi	『私たちは生徒ではない』
2 人称複数	ninyi si w-anafunzi	『あなたたちは生徒ではない』
3 人称複数	wao si w-anafunzi	『彼らは生徒ではない』
M/Wa(単数)	m-toto si mw-anafunzi	『子供は生徒ではない』
M/Wa(複数)	wa-toto si w-anafunzi	『子供達は生徒ではない』
M/Mi(単数)	m-ti si w-angu	『木は私のものではない』

M/Mi(複数)	mi-ti si y-angu	『木(複数)は私のものではない』
Ji/Ma(単数)	tunda si l-angu	『果物は私のものではない』
Ji/Ma(複数)	ma-tunda si y-angu	『果物(複数)は私のものではない』
Ki/Vi(単数)	ki-tabu si ch-angu	『本は私のものではない』
Ki/Vi(複数)	vi-tabu si vy-angu	『本(複数)は私のものではない』
N(単数)	nazi si y-angu	『やしの実は私のものではない』
N(複数)	nazi si z-angu	『やしの実(複数)は私のものではない』
U/N(単数)	u-kuta si w-angu	『壁は私のものではない』
U/N(複数)	kuta si z-angu	『壁(複数)は私のものではない』
Ku(不定詞)	ku-taka si kw-angu	『望むことは私のものではない』
Pa(場所)	mahali si p-angu	『場所は私のものではない』
Ku(場所)	mahali si kw-angu	『場所は私のものではない』
Mu(場所)	mahali si mw-angu	『場所は私のものではない』

否定の繫辞 si は、省略することはできない。なぜなら、否定の繫辞 si を省略すると、肯定となってしまうからである。また、否定の繫辞 si のかわりに、否定の主語接辞が用いられることはない。

現在時制以外の時制においては、動詞-wa『である』が、主語と補語をつなぐ繫辞の働きをするために、時制標識とともに用いられる。動詞-wa『である』は、単音節動詞である。単音節動詞は、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、時制標識によっては、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されたり、挿入されなかったりする。基本時制である、現在継続時制、過去時制、未来時制の肯定と否定を説明しておく。

動詞-wa『である』が現在継続時制標識 na-とともに用いられると、その意味は、『～になる』である。動詞-wa『である』は、時制標識と主語接辞が付加される。したがって、主語が人称を表すとき、強調がないかぎり、独立人称代名詞をとくに必要としない。

単音節動詞が現在継続時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。

表 144 動詞-wa『である、になる』肯定現在継続時制

1 人称単数	ni-na-kuwa mw-anafunzi	『私は生徒になる』
2 人称単数	u-na-kuwa mw-anafunzi	『あなたは生徒になる』
3 人称単数	a-na-kuwa mw-anafunzi	『彼女、彼は生徒になる』
1 人称複数	tu-na-kuwa w-anafunzi	『私たちは生徒になる』
2 人称複数	m-na-kuwa w-anafunzi	『あなたたちは生徒になる』
3 人称複数	wa-na-kuwa w-anafunzi	『彼らは生徒になる』
M/Wa(単数)	m-toto a-na-kuwa mw-anafunzi	『子供は生徒になる』



M/Wa(複数)	wa-toto wa-na-kuwa w-anafunzi	『子供たちは生徒になる』
M/Mi(単数)	m-ti u-na-kuwa m-kubwa	『木は大きくなる』
M/Mi(複数)	mi-ti i-na-kuwa mi-kubwa	『木(複数)は大きくなる』
Ji/Ma(単数)	tunda li-na-kuwa kubwa	『果物は大きくなる』
Ji/Ma(複数)	ma-tunda ya-na-kuwa ma-kubwa	『果物(複数)は大きくなる』
Ki/Vi(単数)	ki-tabu ki-na-kuwa ki-chafu	『本は汚れる』
Ki/Vi(複数)	vi-tabu vi-na-kuwa vi-chafu	『本(複数)は汚れる』
N(単数)	nazi i-na-kuwa kubwa	『やしの実は大きくなる』
N(複数)	nazi zi-na-kuwa kubwa	『やしの実(複数)は大きくなる』
U/N(単数)	u-kuta u-na-kuwa m-refu	『壁は高くなる』
U/N(複数)	kuta zi-na-kuwa ndefu	『壁(複数)は高くなる』
Ku(不定詞)	ku-taka ku-na-kuwa ku-baya	『望むことは悪くなる』
Pa(場所)	mahali pa-na-kuwa pa-pana	『場所は広くなる』
Ku(場所)	mahali ku-na-kuwa ku-pana	『場所は広くなる』
Mu(場所)	mahali m-na-kuwa m-pana	『場所は広くなる』

肯定継続時制文と対をなす否定文は、否定の繫辞 *si* を用いた文である。なぜなら、肯定継続時制標識と対をなす時制標識を、スワヒリ語はもたないからである。

肯定過去時制は、時制標識 *li-* が用いられる。否定過去時制は、時制標識 *ku-* が用いられる。単音節動詞が肯定過去時制で用いられるとき、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。単音節動詞が否定過去時制で用いられるとき、アクセント調整の *ku-* は必要ない。

表 145 動詞-wa『である』肯定過去時制と否定過去時制

	肯定	否定
	『私は生徒でした』 etc.	『私は生徒でなかった』 etc.
1 人称単数	ni-li-kuwa mw-anafunzi	si-ku-wa mw-anafunzi
2 人称単数	u-li-kuwa mw-anafunzi	hu-ku-wa mw-anafunzi
3 人称単数	a-li-kuwa mw-anafunzi	ha-ku-wa mw-anafunzi
1 人称複数	tu-li-kuwa w-anafunzi	hatu-ku-wa w-anafunzi
2 人称複数	m-li-kuwa w-anafunzi	ham-ku-wa w-anafunzi
3 人称複数	wa-li-kuwa w-anafunzi	hawa-ku-wa w-anafunzi
M/Wa(単数)	m-toto a-li-kuwa mw-anafunzi	m-toto ha-ku-wa mw-anafunzi
M/Wa(複数)	wa-toto wa-li-kuwa w-anafunzi	wa-toto hawa-ku-wa w-anafunzi
M/Mi(単数)	m-ti u-li-kuwa m-kubwa	m-ti hau-ku-wa m-kubwa
M/Mi(複数)	mi-ti i-li-kuwa mi-kubwa	mi-ti hai-ku-wa mi-kubwa

Ji/Ma(単数)	tunda li-li-kuwa kubwa	tunda hali-ku-wa kubwa
Ji/Ma(複数)	ma-tunda ya-li-kuwa ma-kubwa	ma-tunda haya-ku-wa ma-kubwa
Ki/Vi(単数)	ki-tabu ki-li-kuwa ki-kubwa	ki-tabu haki-ku-wa ki-kubwa
Ki/Vi(複数)	vi-tabu vi-li-kuwa vi-kubwa	vi-tabu havi-ku-wa vi-kubwa
N(単数)	nazi i-li-kuwa kubwa	nazi hai-ku-wa kubwa
N(複数)	nazi zi-li-kuwa kubwa	nazi hazi-ku-wa kubwa
U/N(単数)	u-kuta u-li-kuwa m-kubwa	u-kuta hau-ku-wa m-kubwa
U/N(複数)	kuta zi-li-kuwa kubwa	kuta hazi-ku-wa kubwa
Ku (不定詞)	ku-taka ku-li-kuwa ku-zuri	ku-taka haku-ku-wa ku-zuri
Pa (場所)	mahali pa-li-kuwa pa-zuri	mahali hapa-ku-wa pa-zuri
Ku (場所)	mahali ku-li-kuwa ku-zuri	mahali haku-ku-wa ku-zuri
Mu (場所)	mahali m-li-kuwa m-zuri	mahali ham-ku-wa m-zuri

未来時制は、肯定においても否定においても、時制標識 *ta-* が用いられる。単音節動詞-*wa* 『である、になる』が未来時制で用いられるとき、肯定においても否定においても、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。

表 146 動詞 *wa-* 『である、になる』肯定未来時制と否定未来時制

	肯定	否定
	『私は生徒になるでしょう』 etc.	『私は生徒にならないでしょう』 etc.
1 人称単数	ni-ta-kuwa mw-anafunzi	si-ta-kuwa mw-anafunzi
2 人称単数	u-ta-kuwa mw-anafunzi	hu-ta-kuwa mw-anafunzi
3 人称単数	a-ta-kuwa mw-anafunzi	ha-ta-kuwa mw-anafunzi
1 人称複数	tu-ta-kuwa w-anafunzi	hatu-ta-kuwa w-anafunzi
2 人称複数	m-ta-kuwa w-anafunzi	ham-ta-kuwa w-anafunzi
3 人称複数	wa-ta-kuwa w-anafunzi	hawa-ta-kuwa w-anafunzi
M/Wa(単数)	m-toto a-ta-kuwa mw-anafunzi	m-toto ha-ta-kuwa mw-anafunzi
M/Wa(複数)	wa-toto wa-ta-kuwa w-anafunzi	wa-toto hawa-ta-kuwa w-anafunzi
M/Mi(単数)	m-ti u-ta-kuwa m-kubwa	m-ti hau-ta-kuwa m-kubwa
M/Mi(複数)	mi-ti i-ta-kuwa mi-kubwa	mi-ti hai-ta-kuwa mi-kubwa
Ji/Ma(単数)	tunda li-ta-kuwa kubwa	tunda hali-ta-kuwa kubwa
Ji/Ma(複数)	ma-tunda ya-ta-kuwa ma-kubwa	ma-tunda haya-ta-kuwa ma-kubwa
Ki/Vi(単数)	ki-tabu ki-ta-kuwa ki-chafu	ki-tabu haki-ta-kuwa ki-chafu

Ki/Vi(複数)	vi-tabu vi-ta-kuwa vi-chafu	vi-tabu havi-ta-kuwa vi-chafu
N(単数)	nazi i-ta-kuwa kubwa	nazi hai-ta-kuwa kubwa
N(複数)	nazi zi-ta-kuwa kubwa	nazi hazi-ta-kuwa kubwa
U/N(単数)	u-kuta u-ta-kuwa m-kubwa	u-kuta hau-ta-kuwa m-kubwa
U/N(複数)	kuta zi-ta-kuwa kubwa	kuta hazi-ta-kuwa kubwa
Ku (不定詞)	ku-taka ku-ta-kuwa ku-zuri	ku-taka haku-ta-kuwa ku-zuri
Pa (場所)	mahali pa-ta-kuwa pa-zuri	mahali hapa-ta-kuwa pa-zuri
Ku (場所)	mahali ku-ta-kuwa ku-zuri	mahali haku-ta-kuwa ku-zuri
Mu (場所)	mahali m-ta-kuwa m-zuri	mahali ham-ta-kuwa m-zuri

現在完了時制は、肯定においては、時制標識 *me-*が、否定においては、時制標識 *ja-*が用いられる。肯定現在完了時制で単音節動詞-*wa*『である、になる』が用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。否定現在完了時制においては、アクセントの調整は必要ない。

表 147 動詞-*wa*『である、になる』肯定現在完了時制と否定現在完了時制

	肯定	否定
	『私は生徒になってる』 etc.	『私は生徒になってない』 etc.
1 人称単数	ni-me-kuwa mw-anafunzi	si-ja-wa mw-anafunzi
2 人称単数	u-me-kuwa mw-anafunzi	hu-ja-wa mw-anafunzi
3 人称単数	a-me-kuwa mw-anafunzi	ha-ja-wa mw-anafunzi
1 人称複数	tu-me-kuwa w-anafunzi	hatu-ja-wa w-anafunzi
2 人称複数	m-me-kuwa w-anafunzi	ham-ja-wa w-anafunzi
3 人称複数	wa-me-kuwa w-anafunzi	hawa-ja-wa w-anafunzi
M/Wa(単数)	m-toto a-me-kuwa mw-anafunzi	m-toto ha-ja-wa mw-anafunzi
M/Wa(複数)	wa-toto wa-me-kuwa w-anafunzi	wa-toto hawa-ja-wa w-anafunzi
M/Mi(単数)	m-ti u-me-kuwa m-kubwa	m-ti hau-ja-wa m-kubwa
M/Mi(複数)	mi-ti i-me-kuwa mi-kubwa	mi-ti hai-ja-wa mi-kubwa
Ji/Ma(単数)	tunda li-me-kuwa kubwa	tunda hali-ja-wa kubwa
Ji/Ma(複数)	ma-tunda ya-me-kuwa ma-kubwa	ma-tunda haya-ja-wa ma-kubwa
Ki/Vi(単数)	ki-tabu ki-me-kuwa ki-chafu	ki-tabu haki-ja-wa ki-chafu
Ki/Vi(複数)	vi-tabu vi-me-kuwa vi-chafu	vi-tabu havi-ja-wa vi-chafu
N(単数)	nazi i-me-kuwa kubwa	nazi hai-ja-wa kubwa
N(複数)	nazi zi-me-kuwa kubwa	nazi hazi-ja-wa kubwa
U/N(単数)	u-kuta u-me-kuwa m-kubwa	u-kuta hau-ja-wa m-kubwa
U/N(複数)	kuta zi-me-kuwa kubwa	kuta hazi-ja-wa kubwa

Ku (不定詞)	ku-taka ku-me-kuwa ku-zuri	ku-taka haku-ja-wa ku-zui
Pa (場所)	mahali pa-me-kuwa pa-zuri	mahali hapa-ja-wa pa-zuri
Ku (場所)	mahali ku-me-kuwa ku-zuri	mahali haku-ja-wa ku-zuri
Mu (場所)	mahali m-me-kuwa m-zuri	mahali ham-ja-wa m-zuri

[動詞-wa na 『もつ』]

所有すること、すなわち、英語の have に相当するスワヒリ語の表現は、現在時制以外の時制においては、動詞-wa 『である』に接続詞 na 『と』を後続させて形づくられる。主語接辞と時制標識が動詞-wa 『である』に先行する位置におかれる。

現在時制においては、動詞-wa 『である』を用いない。現在時制においては、接続詞 na 『と』に、それに先行する位置に、主語接辞を付加して所有表現を形づくる。肯定であれば、肯定の主語接辞を、否定であれば、否定の主語接辞を、接続詞 na 『と』に先行する位置に付加する。正書法では主語接辞と接続詞 na 『と』は、切り離さず続けて書くことになっている。

表 148 所有表現-na 『もつ』の肯定現在時制と否定現在時制

	肯定	否定
	『私は本をもつ』 etc.	『私は本を持たない』 etc.
1 人称単数	ni-na ki-tabu	si-na ki-tabu
2 人称単数	u-na ki-tabu	hu-na ki-tabu
3 人称単数	a-na ki-tabu	ha-na ki-tabu
1 人称複数	tu-na ki-tabu	hatu-na ki-tabu
2 人称複数	m-na ki-tabu	ham-na ki-tabu
3 人称複数	wa-na ki-tabu	hawa-na ki-tabu
M/Wa [単数]	m-toto a-na ki-tabu	m-toto ha-na ki-tabu
M/Wa [複数]	wa-toto wa-na ki-tabu	wa-toto hawa-na ki-tabu
M/Mi [単数]	m-ti u-na ma-jani	m-ti hau-na ma-jani
M/Mi [複数]	mi-ti i-na ma-jani	mi-ti hai-na ma-jani
Ji/Ma [単数]	tunda li-na mbegu	tunda hali-na mbegu
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ya-na mbegu	ma-tunda haya-na mbegu
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ki-na karatasi	ki-tabu haki-na karatasi
Ki/Vi [複数]	vi-tabu vi-na karatasi	vi-tabu havi-na karatasi
N [単数]	nazi i-na maji	nazi hai-na maji
N [複数]	nazi zi-na maji	nazi hazi-na maji
U/N [単数]	u-kuta u-na tundu	u-kuta hau-na tundu
U/N [複数]	kuta zi-na tundu	kuta hazi-na tundu

Ku (不定詞)	ku-taka ku-na ma-tata	ku-taka haku-na ma-tata
Pa (場所)	mahali pa-na ny-umba	mahali hapa-na ny-umba
Ku (場所)	mahali ku-na ny-umba	mahali haku-na ny-umba
Mu (場所)	mahali m-na ny-umba	mahali ham-na ny-umba

P a / K u / M u クラス (場所) 名詞の肯定の主語接辞と接続詞 na 『と』 からなる構造は、存在表現、すなわち、英語の *there is* に相当する表現である。P a / K u / M u クラス (場所) 名詞の否定の主語接辞と接続詞 na 『と』 からなる構造は、存在表現、すなわち、英語の *there is/are not* に相当する表現である。

現在時制以外の時制では、動詞-wa 『である』 に接続詞 na 『と』 が後続して、所有表現 『もつ』 が形づくられる。動詞-wa 『である』 と接続詞 na 『と』 は、そのあいだにどんな要素も入ることはできないけれど、正書法において切り離して書くことになっている。動詞-wa 『である』 には、時制標識と主語接辞が付加される。

過去時制は、肯定においては、時制標識 *li-* が、否定においては、時制標識 *ku-* が用いられる。単音節動詞-wa 『である』 が肯定過去時制標識 *li-* とともに用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。否定過去時制においては、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-* が挿入される必要はない。

表 149 動詞-wa na 『もつ』 の肯定過去時制と否定過去時制

	肯定	否定
	『私は本をもっていた』 etc.	『私は本をもっていなかった』 etc.
1 人称単数	ni-li-kuwa na ki-tabu	si-ku-wa na ki-tabu
2 人称単数	u-li-kuwa na ki-tabu	hu-ku-wa na ki-tabu
3 人称単数	a-li-kuwa na ki-tabu	ha-ku-wa na ki-tabu
1 人称複数	tu-li-kuwa na ki-tabu	hatu-ku-wa na ki-tabu
2 人称複数	m-li-kuwa na ki-tabu	ham-ku-wa na ki-tabu
3 人称複数	wa-li-kuwa na ki-tabu	hawa-ku-wa na ki-tabu
M/Wa [単数]	m-toto a-li-kuwa na ki-tabu	m-toto ha-ku-wa na ki-tabu
M/Wa [複数]	wa-toto wa-li-kuwa na ki-tabu	wa-toto hawa-ku-wa na ki-tabu
M/Mi [単数]	m-ti u-li-kuwa na ma-jani	m-ti hau-ku-wa na ma-jani
M/Mi [複数]	mi-ti i-li-kuwa na ma-jani	mi-ti hai-ku-wa na ma-jani
Ji/Ma [単数]	tunda li-li-kuwa na mbegu	tunda hali-ku-wa na mbegu
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ya-li-kuwa na mbegu	ma-tunda haya-ku-wa na mbegu
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ki-li-kuwa na karatasi	ki-tabu haki-ku-wa na karatasi

Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-li-kuwa na karatasi	vi-tabu havi-ku-wa na karatasi
N〔単数〕	nazi i-li-kuwa na maji	nazi hai-ku-wa na maji
N〔複数〕	nazi zi-li-kuwa na maji	nazi hazi-ku-wa na maji
U/N〔単数〕	u-kuta u-li-kuwa na tundu	u-kuta hau-ku-wa na tundu
U/N〔複数〕	kuta zi-li-kuwa na tundu	kuta hazi-ku-wa na tundu
Ku（不定詞）	ku-taka ku-li-kuwa na ma-tata	ku-taka haku-ku-wa na ma-tata
Pa（場所）	mahali pa-li-kuwa na ny-umba	mahali hapa-ku-wa na ny-umba
Ku（場所）	mahali ku-li-kuwa na ny-umba	mahali haku-ku-wa na ny-umba
Mu（場所）	mahali m-li-kuwa na ny-umba	mahali ham-ku-wa na ny-imba

P a / K u / M u クラス（場所）名詞の主語接辞と肯定過去時制標識 li-が動詞-wa『である』に付加された形式に、接続詞 na『と』が後続した構造は、いわゆる英語の there was/were に相当する存在表現の肯定過去時制である。P a / K u / M u クラス（場所）名詞の主語接辞と否定過去時制標識 ku-が動詞-wa na『もつ』に付加された構造は、いわゆる英語の there was/were not に相当する存在表現の否定過去時制である。

未来時制は、時制標識 ta-が用いられる。単音節動詞-wa na『もつ』が未来時制で用いられるとき、肯定においても否定においても、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。

表 150 動詞-wa na『もつ』肯定未来時制と否定未来時制

	肯定	否定
	『私は本をもつでしょう』 etc.	『私は本をもたないでしょう』 etc.
1 人称単数	ni-ta-kuwa na ki-tabu	si-ta-kuwa na ki-tabu
2 人称単数	u-ta-kuwa na ki-tabu	hu-ta-kuwa na ki-tabu
3 人称単数	a-ta-kuwa na ki-tabu	ha-ta-kuwa na ki-tabu
1 人称複数	tu-ta-kuwa na ki-tabu	hatu-ta-kuwa na ki-tabu
2 人称複数	m-ta-kuwa na ki-tabu	ham-ta-kuwa na ki-tabu
3 人称複数	wa-ta-kuwa na ki-tabu	hawa-ta-kuwa na ki-tabu
M/Wa〔単数〕	m-toto a-ta-kuwa na ki-tabu	m-toto ha-ta-kuwa na ki-tabu
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-ta-kuwa na ki-tabu	wa-toto hawa-ta-kuwa na ki-tabu
M/Mi〔単数〕	m-ti u-ta-kuwa na ma-jani	m-ti u-ta-kuwa na ma-jani
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ta-kuwa na ma-jani	mi-ti i-ta-kuwa na ma-jani
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ta-kuwa na mbegu	tunda hali-ta-kuwa na mbegu
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ta-kuwa na mbegu	ma-tunda haya-ta-kuwa na mbegu
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ta-kuwa na karatasi	ki-tabu haki-ta-kuwa na karatasi

Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ta-kuwa na karatasi	vi-tabu havi-ta-kuwa na karatasi
N〔単数〕	nazi i-ta-kuwa na maji	nazi hai-ta-kuwa na maji
N〔複数〕	nazi zi-ta-kuwa na maji	nazi hazi-ta-kuwa na maji
U/N〔単数〕	u-kuta u-ta-kuwa na tundu	u-kuta hau-ta-kuwa na tundu
U/N〔複数〕	kuta zi-ta-kuwa na tundu	kuta hazi-ta-kuwa na tundu
Ku（不定詞）	ku-taka ku-ta-kuwa na ma-tata	ku-taka haku-ta-kuwa na ma-tata
Pa（場所）	mahali pa-ta-kuwa na ny-umba	mahali hapa-ta-kuwa na ny-umba
Ku（場所）	mahali ku-ta-kuwa na ny-umba	mahali haku-ta-kuwa na ny-umba
Mu（場所）	mahali m-ta-kuwa na ny-umba	mahali ham-ta-kuwa na ny-umba

P a / K u / M u クラス（場所）名詞の主語接辞が未来時制標識-ta と動詞-wa『である』に付加され、さらに、接続詞 na『と』を後続させる形式は、英語の there is に相当する存在表現の未来時制である。

現在完了時制は、肯定においては、時制標識 me-、否定においては、時制標識 ja-が用いられる。単音節動詞-wa『である』が肯定現在完了時制で用いられるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。否定現在完了時制で用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、挿入されない。

表 151 動詞-wa na『もつ』肯定現在完了時制と否定現在完了時制

	肯定	否定
	『私は本をもっている』 etc.	『私は本をもっていない』 etc.
1 人称単数	ni-me-kuwa na ki-tabu	si-ja-wa na ki-tabu
2 人称単数	u-me-kuwa na ki-tabu	hu-ja-wa na ki-tabu
3 人称単数	a-me-kuwa na ki-tabu	ha-ja-wa na ki-tabu
1 人称複数	tu-me-kuwa na ki-tabu	hatu-ja-wa na ki-tabu
2 人称複数	m-me-kuwa na ki-tabu	ham-ja-wa na ki-tabu
3 人称複数	wa-me-kuwa na ki-tabu	hawa-ja-wa na ki-tabu
M/Wa〔単数〕	m-toto a-me-kuwa na ki-tabu	m-toto ha-ja-wa na ki-tabu
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-me-kuwa na ki-tabu	wa-toto hawa-ja-wa na ki-tabu
M/Mi〔単数〕	m-ti u-me-kuwa na ma-jani	m-ti hau-ja-wa na ma-jani
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-me-kuwa na ma-jani	mi-ti hai-ja-wa na ma-jani
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-me-kuwa na mbegu	tunda hali-ja-wa na mbegu
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-me-kuwa na mbegu	ma-tunda haya-ja-wa na mbegu
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-me-kuwa na karatasi	ki-tabu haki-ja-wa na karatasi

Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-me-kuwa na karatasi	vi-tabu havi-ja-wa na karatasi
N〔単数〕	nazi i-me-kuwa na maji	nazi hai-ja-wa na maji
N〔複数〕	nazi zi-me-kuwa na maji	nazi hazi-ja-wa na maji
U/N〔単数〕	u-kuta u-me-kuwa na tundu	u-kuta hau-ja-wa na tundu
U/N〔複数〕	kuta zi-me-kuwa na tundu	kuta hazi-ja-wa na tundu
Ku(不定詞)	ku-taka ku-me-kuwa na ma-tata	ku-taka haku-ja-wa na ma-tata
Pa(場所)	mahali pa-me-kuwa na ny-umba	mahali hapa-ja-wa na ny-umba
Ku(場所)	mahali ku-me-kuwa na ny-umba	mahali haku-ja-wa na ny-umba
Mu(場所)	mahali m-me-kuwa na ny-umba	mahali ham-ja-wa na ny-umba

P a / K u / M u クラス (場所) 名詞の主語接辞が現在完了時制標識と動詞-wa『である』に付加され、さらに、接続詞 na『と』に後続される形式は、英語の there is に相当する存在表現の現在完了時制の形式である。

[存在表現]

英語の there is に相当する存在表現は、動詞-wa na『もつ』に先行する位置に P a / K u / M u クラス (場所) 名詞の主語接辞が付加されて形づくられる。これは、動詞-wa na『もつ』を表す表現が、クラス P a / K u / M u に所属する名詞を主語としてもつ形式に相当する。これらの現在時制、過去時制、未来時制、現在完了時制の形式は、既に上の表に書かれている。ここでは P a / K u / M u の 3 つの主語接辞による違いを中心に説明する。

英語の there is に相当する存在表現は、P a / K u / M u クラスの主語接辞が動詞-wa na『もつ』に付加されて形づくられる。ただし、現在時制においては、主語接辞は、直接、接続詞 na に付加される。肯定は、肯定主語接辞が接続詞 na『と』に先行する位置に付加され、否定では、否定主語接辞が接続詞 na『と』に先行する位置に付加される。

表 152 存在表現 (there is) の肯定現在時制と否定現在時制

	肯定	否定
	『家はある』	『家はない』
P a	pa-na ny-umba	hapa-na ny-umba
K u	ku-na ny-umba	haku-na ny-umba
M u	m-na ny-umba	ham-na ny-umba

現在時制以外の時制では、動詞-wa『である』に主語接辞と時制接辞が付加された形式に、接続詞 na『と』が後続して、存在表現は形成される。動詞-wa『である』は、単音節動詞であるから、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに、時制により、挿入されたり、されなかったりする。



アクセント調整のために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入されるのは、肯定過去時制、肯定未来時制、否定未来時制、肯定現在完了時制である。

表 153 存在表現 (there is) の肯定過去時制と否定過去時制

	肯定	否定
	『家があった』	『家はなかった』
P a	pa-li-kuwa na ny-umba	hapa-ku-wa na ny-umba
K u	ku-li-kuwa na ny-umba	haku-ku-wa na ny-umba
M u	m-li-kuwa na ny-umba	ham-ku-wa na ny-umba

表 154 存在表現 (there is) の肯定未来時制と否定未来時制

	肯定	否定
	『家はあるでしょう』	『家はないでしょう』
P a	pa-ta-kuwa na ny-umba	hapa-ta-kuwa na ny-umba
K u	ku-ta-kuwa na ny-umba	haku-ta-kuwa na ny-umba
M u	m-ta-kuwa na ny-umba	ham-ta-kuwa na ny-umba

表 155 存在表現 (there is) の肯定現在完了時制と否定現在完了時制

	肯定	否定
	『家があります』	『家はありません』
P a	pa-me-kuwa na ny-umba	hapa-ja-wa na ny-umba
K u	ku-me-kuwa na ny-umba	haku-ja-wa na ny-umba
M u	m-me-kuwa na ny-umba	ham-ja-wa na ny-umba

P a クラス名詞の主語接辞が使われるとき、対象物が存在する場所が既に言及されているか、あるいは、対象物が存在する場所が、話し手と聞き手のあいだでどこであるか既に了解されている。

pa-na mi-chungwa y-angu shamba-ni.

『ある』『オレンジの木』『私の』『畑に』 = 『私のオレンジの木〔複数〕が畑にある』

K u クラス名詞の主語接辞が使われるとき、対象物が存在する場所がどこなのか、話し手と聞き手のあいだで了解がない。P a と K u の違いがはっきりと分かるのは、疑問文で

ある。例えば、相手に対象物がどこにあるかを質問するときである。話し手は、対象物が存在する場所が分からないから、相手に対象物がどこにあるのか質問する。したがって、話し手と聞き手のあいだに対象物が存在する場所が了解されていない。そこで、K u クラス名詞の主語接辞を使うことになる。

**Ku-na ny-umba wapi?**

『ある』『家』『どこ』 = 『家はどこにありますか』

上の文を P a クラス名詞の主語接辞を用いると、非文（文法的に不適切な文）になる。どこに存在するか分からないから話し手は、聞き手に質問するのである。既知の場所ではないから、P a クラス名詞の主語接辞を使うことはできない。

**\*Pa-na ny-umba wapi?**

M u クラス名詞の主語接辞が使われるとき、対象物がどこか場所の中に存在することを述べる。

**M-na ma-chungwa ma-tatu ki-kapu-ni.**

『ある』『オレンジ』『3』『籠に』 = 『籠の中に3個のオレンジがある』

指示詞は、P a / K u / M u クラス名詞に照応することは既に説明した。例えば、話し手に近いものを指す指示詞は、P a / K u / M u クラスと照応して、P a クラスと照応すると、**ha-pa**、K u クラスと照応すると、**hu-ku**、M u クラスと照応すると **hu-mu** となる。これらの指示詞は、英語の場所の副詞 **here** や **there** に相当し、副詞的要素として文の中で用いられる。

1 つの文において存在表現と P a / K u / M u クラス名詞に照応する指示詞が共起するとき、存在表現に P a クラス名詞の主語接辞が使われると、指示詞は、これら P a / K u / M u クラスと照応する指示詞のうち、P a クラスと照応する指示詞が用いられる。

**Pa-na vi-tabu hapa.**

『ある』『本』『ここ』 = 『ここに本はある』

もし、存在表現に K u クラス名詞の主語接辞が使われると、K u クラスと照応する指示詞が用いられる。

**Ku-na ny-umba ya Juma hu-ku.**

『ある』『家』『の』『ジュマ』『ここ』 = 『この辺りにジュマの家はある』

存在表現にMu クラス名詞の主語接辞が使われると、Mu クラスと照応する指示詞が使われる。

M-na mi-kate kabati-ni hu-mu.

『ある』『パン』『食器入れに』『この』 = 『この食器入れの中にパンはある』

1つの文において、PaとKuとMuのクラスに照応する指示詞や主語接辞が混在することはできない。なぜなら、話題となっている場所が、既知の場所なのか、まだ両者が了解していない場所なのか、あるいは、どこか場所の中なのか、場所の指示的性質は、話し手と聞き手のあいだで共通の認識として存在する。既知の場所に用いられる存在表現 pa-na 『ある』と、未知の場所に用いられる指示詞が1つの文で共起することはありえない。

\*Pa-na ny-umba hu-ku.

上の文で、話し手は、pa-na をつかって、『既知の場所にある』と言いながら、その場所は、『未知のそこに』と言う。これは非文である。

#### [場所表現、動詞-wa-po/-ko/-mo]

スワヒリ語で対象物がどこかの場所にあることを表現するには、英語の be 動詞に相当する動詞-wa 『である』を用いる。しかし、動詞-wa 『である』を単独で用いることはできない。動詞-wa 『である』に、場所の指示を表すクリティック（アクセントの位置を決めるための音節に数えられない要素）-po、-ko、-mo を付加しなければならない。

現在時制では、動詞-wa 『である』を用いなくて、主語接辞を、直接、場所の指示を表すクリティック-po、-ko、-mo に、それらに先行する位置に付加する。肯定は、肯定の主語接辞を用いる。否定は、否定の主語接辞を用いる。3人称単数の主語接辞は、場所の指示を表すクリティック-po、-ko、-mo に付加されるとき、主語接辞 a-ではなく、主語接辞 yu-を用いる。

表 156 場所表現の肯定現在時制と否定現在時制

	肯定	否定
	『私は家にいる』 etc.	『私は家にいない』 etc.
1 人称単数	ni-po/-ko/-mo nyumba-ni	si-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称単数	u-po/-ko/-mo nyumba-ni	hu-po/-ko/-mo nyumba-ni

3 人称単数	yu-po/-ko/-mo nyumba-ni	hayu-po/-ko/-mo nyumba-ni
1 人称複数	tu-po/-ko/-mo nyumba-ni	hatu-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称複数	m-po/-ko/-mo nyumba-ni	ham-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称複数	wa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hawa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔単数〕	m-toto yu-po/-ko/-mo nyumba-ni	m-toto hayu-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-po/-ko/-mo nyumba-ni	wa-toto hawa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Mi〔単数〕	m-ti u-po/-ko/-mo shamba-ni	m-ti hau-po/-ko/-mo shamba-ni
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-po/-ko/-mo shamba-ni	mi-ti hai-po/-ko/-mo shamba-ni
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-po/-ko/-mo meza-ni	tunda hali-po/-ko/-mo meza-ni
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-po/-ko/-mo meza-ni	ma-tunda haya-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-po/-ko/-mo meza-ni	ki-tabu haki-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-po/-ko/-mo meza-ni	vi-tabu havi-po/-ko/-mo meza-ni
N〔単数〕	nazi i-po/-ko/-mo meza-ni	nazi hai-po/-ko/-mo meza-ni
N〔複数〕	nazi zi-po/-ko/-mo meza-ni	nazi hazi-po/-ko/-mo meza-ni
U/N〔単数〕	u-kuta u-po/-ko/-mo kijiji-ni	u-kuta u-po/-ko/-mo kijiji-ni
U/N〔複数〕	kuta zi-po/-ko/-mo kijiji-ni	kuta hazi-po/-ko/-mo kijiji-ni
Ku（不定詞）	ku-taka ku-po/-ko/-mo moyo-ni	ku-taka haku-po/-ko/-mo moyo-ni
Pa（場所）	mahali pa-po/-ko/-mo kijiji-ni	mahali hapa-po/-ko/-mo kijiji-ni
Ku（場所）	mahali ku-po/-ko/-mo kijiji-ni	mahali haku-po/-ko/-mo kijiji-ni
Mu	なし	なし

現在時制以外の時制においては、動詞-wa『である』に主語接辞と時制標識が先行する位置に付加された形式に、場所を指示するクリティック-po/-ko/-mo が後続する位置に付加される。

動詞-wa『である』は、単音節動詞である。場所を指示するクリティックは、アクセントの位置を決めるための音節に数えられない。場所を指示するクリティックを除外して、語の末尾から音節の数をかぞえていく。そうすると、時制標識がおかれる位置とアクセントが落ちる位置が一致する。時制標識にはアクセントをもつことができない形式があることは既に指摘した。それゆえ、時制により、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されたり、挿入されなかったりすることが生じる。

肯定過去時制は、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。否定過去時制では、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入されない。

表 157 場所表現の肯定過去時制と否定過去時制

肯定		否定	
	『私は家にいた』 etc.		『私は家にいなかった』 etc.
1 人称単数	ni-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		si-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称単数	u-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		hu-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称単数	a-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		ha-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
1 人称複数	tu-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		hatu-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称複数	m-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		ham-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称複数	wa-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		hawa-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔単数〕	m-tu a-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		m-tu ha-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔複数〕	wa-tu wa-li-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni nyumba-ni		wa-tu hawa-ku-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Mi〔単数〕	m-ti u-li-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni		m-ti hau-ku-wa-po/-ko/-mo shamba-ni
M/M i〔複数〕	mi-ti i-li-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni		mi-ti hai-ku-wa-po/-ko/-mo shamba-ni
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-li-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni		tunda hali-ku-wa-po/-ko/-mo meza-ni
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-li-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni meza-ni		ma-tunda haya-ku-wa-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-li-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni		ki-tabu haki-ku-wa-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-li-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni		vi-tabu havi-ku-wa-po/-ko/-mo meza-ni
N〔単数〕	nazi i-li-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni		nazi hai-ku-wa-po/-ko/-mo meza-ni
N〔複数〕	nazi zi-li-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni		nazi hazi-ku-wa-po/-ko/-mo meza-ni
U/N〔単数〕	u-kuta u-li-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni		u-kuta hau-ku-wa-po/-ko/-mo mji-ni
U/N〔複数〕	kuta zi-li-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni		kuta hazi-ku-wa-po/-ko/-mo mji-ni
Ku (不定詞)	ku-taka ku-li-kuwa-po/-ko/-mo moyo-ni moyo-ni		ku-taka haku-ku-wa-po/-ko/-mo moyo-ni
Pa (場所)	mahali pa-li-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni		mahali hapa-ku-wa-po/-ko/-ko mji-ni
Ku (場所)	mahali ku-li-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni		mahali haku-ku-wa-po/-ko/-mo mji-ni
Mu	なし		なし

未来時制は、時制標識 ta-が用いられる。肯定未来時制においても、否定未来時制においても、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入される。

表 158 場所表現の肯定未来時制と否定未来時制

肯定		否定	
	『私は家にいるでしょう』 etc.		『私は家にいないでしょう』 etc.
1 人称単数	ni-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni		si-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni

2 人称単数	u-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hu-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称単数	a-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	ha-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni
1 人称複数	tu-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hatu-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称複数	m-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	ham-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称複数	wa-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hawa-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumbani
M/Wa〔単数〕	m-tu a-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	m-tu ha-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔複数〕	wa-tu wa-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	wa-tu hawa-ta-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Mi〔単数〕	m-ti u-ta-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni	m-ti hau-ta-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-ta-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni	mi-ti hai-ta-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	tunda hali-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	ma-tunda haya-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	ki-tabu haki-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	vi-tabu havi-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni
N〔単数〕	nazi i-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	nazi hai-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni
N〔複数〕	nazi zi-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	nazi hazi-ta-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni
U/N〔単数〕	u-kuta u-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	u-kuta hau-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni
U/N〔複数〕	kuta zi-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	kuta hazi-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni
Ku（不定詞）	ku-taka ku-ta-kuwa-po/-ko/-mo moyo-no moyo-ni	ku-taka haku-ta-kuwa-po/-ko/-mo moyo-ni
Pa（場所）	mahali pa-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	mahali hapa-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni
Ku（場所）	mahali ku-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	mahali haku-ta-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni
Mu	なし	なし

現在完了時制は、肯定においては時制標識 *me-*、否定においては時制標識 *ja-*を用いる。肯定現在完了時制では、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*が、動詞語幹と主語接辞の間に挿入される。否定現在完了時制では、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*が挿入されない。

表 159 場所表現の肯定現在完了時制と否定現在完了時制

	肯定	否定
	『私は家にいます』 etc.	『私は家にはいません』 etc.
1 人称単数	ni-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	si-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称単数	u-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hu-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称単数	a-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	ha-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni

1 人称複数	tu-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hatu-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
2 人称複数	m-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	ham-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
3 人称複数	wa-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	hawa-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔単数〕	m-tu a-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni	m-tu ha-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Wa〔複数〕	wa-tu wa-me-kuwa-po/-ko/-mo nyumba-ni nyumba-ni	wa-tu hawa-ja-wa-po/-ko/-mo nyumba-ni
M/Mi〔単数〕	m-ti u-me-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni	m-ti hau-ja-wa-po/-ko/-mo shamba-ni
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-me-kuwa-po/-ko/-mo shamba-ni	mi-ti hai-ja-wa-po/-ko/-mo shamba-ni
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-me-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	tunda hali-ja-wa-po/-ko/-mo meza-ni
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-me-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni meza-ni	ma-tunda haya-ja-wa-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-me-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	ki-tabu haki-ja-wa-po/-ko/-mo meza-ni
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-me-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	vi-tabu havi-ja-wa-po/-ko/-mo meza-ni
N〔単数〕	nazi i-me-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	nazi hai-ja-wa-po/-ko/-mo meza-ni
N〔複数〕	nazi zi-me-kuwa-po/-ko/-mo meza-ni	nazi hazi-ja-wa-po/-ko/-mo meza-ni
U/N〔単数〕	u-kuta u-me-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	u-kuta hau-ja-wa-po/-ko/-mo mji-ni
U/N〔複数〕	kuta zi-me-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	kuta hazi-ja-wa-po/-ko/-mo mji-ni
Ku（不定詞）	ku-taka ku-me-kuwa-po/-ko/-mo moyo-ni moyo-ni	ku-taka haku-ja-wa-po/-ko/-mo moyo-ni
Pa（場所）	mahali pa-me-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	mahali hapa-ja-wa-po/-ko/-mo mji-ni
Ku（場所）	mahali ku-me-kuwa-po/-ko/-mo mji-ni	mahali haku-ja-wa-po/-ko/-mo mji-ni
Mu（場所）	なし	なし

#### 9. 4 目的語接辞

動詞複合体を構成する要素の1つに目的語接辞がある。主語接辞が、もっとも単純な命令をのぞいて、動詞複合体に必須の要素であるのに対して、目的語接辞は、必ずしも動詞複合体を構成しなくてもかまわない。目的語接辞は、動詞複合体に必須の要素ではないといえる。目的語接辞の動詞複体内での位置は、決まっている。目的語接辞は、必ず、動詞語幹の直前の位置におかれる。また、目的語接辞は、動詞複体内でただ1つだけ付加される。スワヒリ語以外のバントゥー語の中には、複数の目的語接辞を1つの動詞複体内にもつことができる言語が存在するが、スワヒリ語は、動詞複体内にただ1つの目的語接辞をもつことができる。

目的語の働きについては、完全に明らかになっているわけではない。ここでは、従来の研究から適当だとおもわれるものを紹介する。まず、異論がない目的語の形式について説明する。目的語接辞には、1人称単数、2人称単数、3人称単数、1人称複数、2人称複数、3人称複数の人称の目的語接辞と、名詞クラスに照応する目的語接辞がある。名詞ク

ラスに照応する目的語接辞は、主語接辞と同じ形をしている。参考のため、表 160 に目的語接辞とともに主語接辞を再録する。

表 160 目的語接辞

	目的語接辞	主語接辞
1 人称単数	ni-	ni-
2 人称単数	ku-	u-
3 人称単数	m(w)-	a-/yu-
1 人称複数	tu-	tu-
2 人称複数	wa-	m-
3 人称複数	wa-	wa-
M/Wa [単数]	m(w)-	a-/yu-
M/Wa [複数]	wa-	wa-
M/Mi [単数]	u-	u-
M/Mi [複数]	i-	i-
Ji/Ma [単数]	li-	li-
Ji/Ma [複数]	ya-	ya-
Ki/Vi [単数]	ki-	ki-
Ki/Vi [複数]	vi-	vi-
N [単数]	i-	i-
N [複数]	zi-	zi-
U/N [単数]	u-	u-
U/N [複数]	zi-	zi-
Ku (不定詞)	ku-	ku-
Pa (場所)	pa-	pa-
Ku (場所)	ku-	ku-
Mu (場所)	m(w)-	m(w)-
再帰	ji-	なし

目的語接辞は、動詞複合体にとって目的語となる名詞が所属するクラスと照応した形式が選択される。下の 1 番目の例では、動詞-nunua『買う』を中心とする動詞複合体にとっての目的語 ki-tabu『本』が、K i / V i [単数] クラスに所属する名詞である。目的語接辞は、目的語 ki-tabu『本』が所属するK i / V i [単数] クラスに照応する形式 ki-が用いられる。目的語接辞 ki-は、動詞語幹-nunua『買う』の直前の位置に付加される。

3 人称単数目的語接辞 m-は、母音で始まる動詞が後続すると、目的語接辞と動詞語幹のあいだに、わたり音 w が挿入される。下の 2 番目の例は、動詞-ona『見る』が母音で始ま



るので、目的語接辞 m-と動詞語幹-ona 『見る』のあいだにわたり音 w が挿入されている。同様に、Mu クラス〔場所名詞〕の目的語接辞 m-が、母音で始まる動詞が後続すると、わたり音 w が挿入されることは、表 160 において目的語接辞 m-のあとに、括弧のなかのわたり音 w で示している。

Ki / Vi クラスの名詞に照応する目的語接辞 ki-と vi-は、母音で始まる動詞語幹が後続しても、なんら音変化はおこさない。それに対して、代名詞照応形式 ki-は、所有代名詞語幹-angu 『私の』が後続するとき、ch- (ch-angu) に、vi-は、vy- (vy-angu) に音変化する。目的語接辞 ki-や vi-は、代名詞照応形式 ki-や vi-と同じ形をしているにもかかわらず、振る舞い方が異なる。文法的な性格の違いが音韻的な振る舞いを異なるものに行っていると考えられる。

Ni-li-ki-nunua ki-tabu.

『買う』『本』 = 『私は本を買った』

Ni-li-mw-ona m-toto.

『見る』『子供』 = 『私は子供を見た』

Ni-li-vi-ona vi-tabu.

『見る』『本〔複数〕』 = 『私は本〔複数〕を見た』

再帰目的語接辞は、主語がなんであれ、つまり、主語がどの名詞クラスに所属しても、同一の形式 ji-が用いられる。

M-toto hu-yu a-na-ji-tegemea.

『子供』『この』『頼る』 = 『この子供は自活している』

Ni-li-ji-som-e-a ki-tabu.

『ために読む』『本』 = 『私は自分のために本を読んだ』

M-tu lazima ha-ji-u-e.

『人』『義務』『殺す』 = 『人は自殺してはならない』

Wa-sichana wa-le wa-li-ji-ficha.

『少女たち』『あの』『隠す』 = 『あの少女たちは身を隠した(隠れた)』

目的語接辞は、動詞が目的語をとることのできる動詞であれば、すなわち、動詞が他動詞であれば、あらゆる時制において付加されることが可能である。動詞が不定詞であっても目的語接辞を付加することができる。目的語接辞は、時制標識に後続する位置に、そして、動詞語幹の直前の位置におかれる。不定詞に付加されるときは、不定詞をつくる接頭辞 ku-/kuto- (否定の不定詞をつくる接頭辞)の直後の位置におかれる。下は、現在時制、現在継続時制、過去時制、未来時制、現在完了時制、不定詞の肯定と否定の例である。

	肯定	否定
	『私はその仕事をする』 etc.	『私はその仕事をしない』 etc.
現在時制	n-a-i-fanya kazi	si-i-fany-i kazi
現在継続時制	ni-na-i-fanya kazi	上と同じ
過去時制	ni-li-i-fanya kazi	si-ku-i-fanya kazi
未来時制	ni-ta-i-fanya kazi	si-ta-i-fanya kazi
現在完了時制	ni-me-i-fanya kazi	si-ja-i-fanya kazi
不定詞	ku-i-fanya kazi	kuto-i-fanya kazi

人称目的語接辞は、2 人称単数と複数、3 人称単数においては、主語接辞と形が異なる。それら以外の人称では、主語接辞と同じ形をしている。

表 161 人称目的語接辞

1 人称単数	mama a-na-ni-piga	『お母さんは私を打つ』 etc.
2 人称単数	mama a-na-ku-piga	
3 人称単数	mama a-na-m-piga	
1 人称複数	mama a-na-tu-piga	
2 人称複数	mama a-na-wa-piga	
3 人称複数	mama a-na-wa-piga	

2 人称複数の目的語接辞と 3 人称複数の目的語接辞が同じ形をしている。2 人称複数と 3 人称複数、文脈で区別できないとき、あるいは、どうしても区別したいときは、2 人称複数の動詞複合体の最後の位置に複数性を表す接尾辞-ni (2 人称複数の独立人称代名詞 ninyi から由来すると考えられる) を付加する。そのとき、終母音-a は、音変化をおこして、母音 e になる。また、下の 2 番目の文のように、アラビア語起源動詞で終母音-a を付加されない動詞は、複数性を表す接尾辞-ni を付加するだけである。なんら音変化は生じない。

下の 3 番目の文のように、複数性を表す接尾辞を付加するかわりに、たんに、2 人称複数の独立代名詞を動詞複合体とともに用いても良い。

Mama a-li-wa-pig-e-ni.

『お母さん』『打つ』 = 『お母さんはあなたたちを打った』

Mama a-li-wa-hesabu-ni.

『お母さん』『数える』 = 『お母さんはあなたたちを数えた』

Mama a-li-wa-pig-a ninyi.

『お母さん』『打つ』 = 『お母さんはあなたたちを打った』

複数性を表す接尾辞-ni を用いるとき、目的語接辞を、2人称複数の目的語接辞 wa-のかわりに、2人称単数の目的語接辞 ku-を用いることがある。下の例の2番目の文のように、複数性を表す接尾辞-ni とともに、2人称単数の目的語接辞 ku-を用いると、動詞が表現する行為が2人称複数の人々の個別にふりかかることを表す。3番目の文のように、複数性を表す接尾辞-ni とともに2人称複数の目的語接辞 wa-を用いると、動詞が表現する行為が2人称複数の人々の集団にまとまってふりかかることを表す。

Mama a-li-wa-piga ninyi.

『お母さん』『打つ』『あなたたち』 = 『お母さんはあなたたちを打った』

Mama a-li-ku-pig-e-ni.

『お母さんはあなたたちを別々に打った』

Mama a-li-wa-pig-e-ni.

『お母さんはあなたたちをまとめて打った』

目的語接辞は、アクセントをもつことができる形式である。単音節動詞がアクセントをもつことができない時制標識とともに用いられるとき、アクセントを調節するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と時制標識のあいだに挿入される。しかし、もしも目的語接辞が単音節動詞の直前の位置に付加されると、目的語接辞がアクセントをもつことが可能なので、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-は挿入されない。下の例で1番目の文は、目的語接辞 ni-が動詞複合体内に付加されているので、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、挿入されない。アクセントは、目的語接辞にある。2番目の文は、動詞複合体内に目的語接辞をもたない。したがって、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入されている。

Mama a-li-ni-pa ch-akula.

『お母さん』『与える』『食べ物』 = 『お母さんは私に食べ物を与えた』

Mama a-li-kuja shule-ni.

『お母さん』『来る』『学校から』 = 『お母さんは学校から来た』

[目的語接辞の働き]

目的語接辞の働きについて、まだ明らかになっていないことが多い。考えられる働きについて説明する。

#### 1) 代名詞としての働き

目的語接辞の第1の働きは、従来の研究においてはあまり強調されていないが、代名詞としての働きであろう。スワヒリ語には、独立人称代名詞が存在する。しかし、独立人称

代名詞が主語の位置に現れることも、また、目的語の位置に現れることも、さほど多くない。独立人称代名詞が主語の位置に現れたり、目的語として用いられるとき、それは、何らかの強調があるときである。

独立人称代名詞 *mimi* が主語の位置に現れても、主語接辞 *ni-* を省略することはできない。また、独立人称代名詞 *mimi* が目的語として用いられるとき、目的語接辞 *ni-* が省略されると不自然な文になる（\*の印は非文法的な文であることをしめし、?の印は不自然な文であることを示す）。

下の1番目の文は、主語に強調がある。たとえ主語に強調があっても、右の文のように、主語接辞を省略した文は、非文である。

2番目の文は、目的語に強調がある。右の文のように、目的語接辞が省略されて、独立代名詞が用いられる文は、不自然な文である。

目的語になら強調がないときは、目的語接辞を用いた、しかも、独立代名詞を用いない3番目の文が自然な文である。

*Mimi ni-li-taka ki-tabu. / \*Mimi li-taka ki-tabu*

『私』『欲しい』『本』 『私』『欲しい』『本』 = 『私が！本を欲しかった』 『私は本が欲しかった』

*Mama a-li-ni-piga mimi. / ? Mama a-li-piga mimi.*

『お母さん』『打つ』『私』『お母さん』『打つ』『私』 = 『お母さんが私を！打った』

*Mama a-li-ni-piga.*

『お母さん』『打つ』 = 『お母さんは私を打った』

目的語が人称以外のときでも、目的語接辞の重要な働きは、代名詞としての働きである。先行する文や文脈において既に言及された人間以外のものを指示するとき、目的語接辞を用いる。そのとき、指示する名詞が所属する名詞クラスに照応した目的語接辞の形式を用いる。

*Baba a-li-nunua ki-tabu jana.*

*Ni-li-ki-soma.*

『お父さん』『買う』『本』『昨日』 『読む』 = 『お父さんは昨日日本を買った。私はそれを読んだ』

*Baba a-li-nunua ki-tabu jana.*

*Ni-li-soma kitabu.*

『お父さん』『買う』『本』『昨日』 『読む』『本』 = 『お父さんは昨日日本を買った。私は本を読んだ』

上の1番目の例では、先行する文で言及された名詞 *ki-tabu* 『本』を、後続する文において指示するために、目的語接辞 *ki-* が用いられる。『私』が読んだ本は、『お父さん』が昨日

買った本と同じものであることを示している。

2 番目の例は、『私』が読んだ本を『お父さん』が昨日買った本と同じものであると解釈することはできない。もしそうなら不自然な解釈である。『私』が読んだ本と『お父さん』が昨日買った本とは別の本か、あるいは、『私』が本を読むのは慣習的な行為であり、本は特定の本ではないことを示している。

## 2) 語用論的働き

目的語接辞は、口語よりも文語で多く使用される。ぞんざいな、あるいは、カジュアルなスタイルの文よりも、形式ばった文で、より多く目的語接辞は使用される。この働きは、統語論の働きではなく、語用論的働きである。日本語において文語で、あるいは、形式ばった文で、より多くの分類辞（1 本、1 冊など）が用いられることと同じである。

Ni-li-nunua ki-tabu hi-ki.

『買う』『本』『この』 = 『私はこの本を買った』

Ni-li-ki-nunua ki-tabu hi-ki.

『買う』『本』『この』 = 『私はこの本を買った』

上の 2 つの文は、指示詞 hi-ki『この』が対象物を指示しているので、目的語接辞を用いても、用いなくても、十分自然な文であると考えられる。しかし、1 番目の文は、目的語接辞が用いられず、2 番目の文には目的語接辞が用いられている。2 番目の文がより文語的で、形式ばった文と言える。

## 3) 「人間」、「生物」

目的語が 1 つの文に 2 つ以上存在するとき、一方の目的語が「人間」、あるいは、「生物」であるとき、動詞複合体は 1 つの目的語接辞だけをもつことができるが、その目的語接辞は、「人間」、あるいは、「生物」の目的語を指す。

Mama a-li-ni-pa ki-tabu.

『お母さん』『与える』『本』 = 『お母さんは私に本を与えた』

Mama a-li-m-pik-i-a m-toto w-ake ch-akula.

『お母さん』『～ために料理する』『子供』『彼女の』『食べ物』 = 『お母さんは彼女の子供のために食べ物を料理した』

\*Mama a-li-ki-pik-i-a ch-akula m-toto w-ake

『お母さん』『～のために料理する』『食べ物』『子供』『彼女の』

上の 1 番目の例では目的語接辞は、代名詞の働きを優先しているとも理解できるが、目

的語は、『私』と『本』の2つが存在する。2つ存在する目的語の中で、「人間」である『私』を優先して、目的語接辞が指示する。

2番目の例では、目的語接辞 m-は、代名詞の働きをしていない。2つ存在する目的語のどちらをも目的語接辞が指示することが可能であるにもかかわらず、「人間」である『子供』を指示している。目的語接辞 ki-が、「人間」ではない『食べ物』を指示している3番目の例は、非文法的な文である。

スワヒリ語は、「人間」と「生物」には特別な地位を与えている。例えば、たとえ名詞が K i / V i クラスや N クラスなど、M / W a クラス以外の名詞クラスに所属しようとも、「人間」や「生物」を意味する名詞は、M / W a クラスの照応をおこなう。また、「人間」や「生物」以外の名詞は、いくら複数であっても、単数の所有代名詞-ake『彼女、彼の』が用いられる。複数の所有代名詞-ao『彼らの』が用いられるのは、「人間」や「生物」名詞だけである。目的語接辞が「人間」や「生物」を指すのは、このことと関連している。

スワヒリ語の文において、動詞複合体の直後の位置は、「焦点」の位置である。この「焦点」の位置には、新しく話題にしたいこと、すなわち、新情報がおかれることが自然である。動詞複合体に先行する位置は、旧情報、すなわち、既に話し手と聞き手にとって既知のものがおかれる。

#### Mama a-li-m-pik-i-a m-toto w-ake ch-akula.

『お母さん』『~のために料理する』『子供』『彼女の』『食べ物』 = 『お母さんは子供のために食べ物を料理した』

上の例では、主語『お母さん』については話し手と聞き手のあいだに既に言及されていたかしており、『お母さん』は、旧情報に属する。話し手が聞き手に与えたい情報は、主語が『誰のために』料理するかである。文は、『誰が』、『誰に』、『なにを』するかについての情報を、話し手が聞き手につたえることを目的にしている。『誰が』については、たいていは、既に言及されているか、話し手と聞き手のあいだに了解が存在するかして、旧情報に属しているのが普通である。したがって、『誰が』は、主語の位置におかれる。

つぎに話し手が聞き手に新情報として与えたい情報は、『誰に』である。『誰に』が新情報をつたえる「焦点」の位置におかれると、情報構造は自然な構造をもつことができる。スワヒリ語の「焦点」の位置は、動詞複合体の直後である。

動詞複合体の直後の位置は、統語論的に動詞複合体が「文法格」を与える名詞が偶然おかれる位置である。動詞複合体の直後の位置におかれた名詞は、動詞複合体から目的語としての「文法格」が与えられる。目的語「文法格」が与えられた名詞は、目的語として動詞複合体内の目的語接辞と照応する。「焦点」の位置は、統語論的に動詞複合体から「文法格」が与えられる位置と一致する。

スワヒリ語が「人間」や「生物」に特別な位置を文法体系内で与えていることと、新情

報として「焦点」の位置におかれる名詞に「受益者」や「受動者」が選択されることにより、スワヒリ語内における「人間」や「生物」名詞の優位性が情報構造と一致する。「焦点」の位置は、動詞複合体から「文法格」を与えられる位置と一致することから、目的語接辞は、「人間」や「生物」を指すことになる。

#### 4) 承前辞としての働き

目的語に「人間」や「生物」名詞が存在しないとき、目的語接辞は、承前辞としての働きをもつ。文や文脈において、既に言及されたものや話し手と聞き手のあいだに了解されているものを指示するときに、目的語接辞は用いられる。

目的語接辞が用いられるということは、動詞複合体が目的語接辞と照応する名詞に「文法格」を与えていることを示している。動詞複合体が「文法格」を与える名詞は、普通、強調のないとき、動詞複合体の直後の位置におかれる。しかし、実際には、目的語接辞が動詞複合体に付加されるとき、目的語接辞と照応する名詞は、動詞複合体に先行する位置におかれることが多い。このことは、動詞複合体に先行する位置は、既知のもの、旧情報のものがおかれる位置であることから、動詞複合体の目的語接辞と照応する名詞は、話し手と聞き手にとって既に言及されたものか、了解されたものである。たとえ名詞が動詞複合体に後続する位置におかれようとも、動詞複合体内の目的語接辞と照応する名詞は、既知のもの、あるいは、旧情報のものとなる。

#### Baba a-li-ki-nunua ki-tabu.

『お父さん』『買う』『本』 = 『お父さんはその本を買った』

目的語接辞が用いられずに、動詞複合体の直後の位置、すなわち、「焦点」におかれる名詞は、いまだに言及されたことのないもの、新情報を聞き手に与えたいことを意味する。したがって、目的語接辞が用いられずに、動詞複合体の直後の位置におかれる名詞は、聞き手にとって初めて知るものである。

#### Baba a-li-nunua ki-tabu.

『お父さん』『買う』『本』 = 『お父さんは本を買った』

上の例では、『お父さん』が買う本は、聞き手にとって未知の本であるか、あるいは、『お父さんが本を買う』という行為そのものに「焦点」があてられている。

目的語が「人間」であるとき、動詞複合体は、普通、目的語接辞をもつ傾向がある。逆に、目的語が「人間」であるにもかかわらず、動詞複合体が目的語接辞をもたないとき、

目的語が話し手と聞き手にとって、初めてのものであることを、わざわざ意味することになる。

M-toto a-li-mw-ona mw-alimu.

『子供』『見る』『先生』 = 『子供は先生を見た』

M-toto a-li-ona mw-alimu.

『子供』『見る』『先生』 = 『子供は（見知らぬ）先生を見た』

## 9. 5 命令法と接続法

[命令法]

もっとも単純な命令は、動詞語幹を単独で用いる。主語接辞も時制標識も付加しなければ、相手 1 人に対する命令の形式になる。相手が 2 人以上の場合、複数性を表す接尾辞-ni を動詞の末尾に付加する。そのとき、終母音-a は、音変化をおこして、母音 e になる。複数性を表す接尾辞-ni は、2 人称複数の独立人称代名詞 ninyi に由来すると考えられる。

単音節動詞とアラビア語起源動詞は、バントゥ起源の動詞とは異なるやり方で命令形の形式をつくることがある。

表 162 命令法

単数	複数	
nunua	nunu-e-ni	『買え』
ona	on-e-ni	『見ろ』
jifunza	jifunz-e-ni	『学べ』
soma	som-e-ni	『読め』
fanya	fany-e-ni	『しろ』
maliza	maliz-e-ni	『終えろ』
pika	pik-e-ni	『料理しろ』

Nunua ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買え』

Nunu-e-ni vi-tabu.

『買う』『本〔複数〕』 = 『本〔複数〕を買え〔複数〕』

Ona ndege mti-ni.

『見る』『鳥』『木で』 = 『木の上の鳥を見ろ』



On-e-ni ndege mti-ni.

『見る』『鳥』『木で』 = 『木の上の鳥を見ろ〔複数〕』

Jifunza Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『スワヒリ語を学べ』

Jifunz-e-ni Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『スワヒリ語を学べ〔複数〕』

Soma ki-tabu.

『読む』『本』 = 『本を読め』

Som-e-ni ki-tabu.

『読む』『本』 = 『本を読め〔複数〕』

Fanya kazi.

『する』『仕事』 = 『仕事をしろ』

Fany-e-ni kazi.

『する』『仕事』 = 『仕事をしろ〔複数〕』

Maliza ma-zoezi ya nyumba-ni.

『終える』『練習』『の』『家で』 = 『宿題を終えろ』

Maliz-e-ni ma-zoezi ya nyumba-ni.

『終える』『練習』『の』『家で』 = 『宿題を終えろ〔複数〕』

Pika ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『食べ物を料理しろ』

Pik-e-ni ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『食べ物を料理しろ〔複数〕』

[単音節動詞]

単音節動詞は、アクセントを調節するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹に先行する位置に付加される。相手が2人以上の命令は、複数性を表す接尾辞-ni が動詞語幹末尾の位置に付加され、終母音-a は、音変化して、母音 e になる。

表 163 命令法 (単音節動詞)

単数

複数

kula

kul-e-ni 『食べる』

kunywa

kunyw-e-ni 『飲む』

Kula ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『食べ物を食べる』

Kul-e-ni ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『食べ物を食べろ〔複数〕』

Kunywa chai.

『飲む』『お茶』 = 『お茶を飲め』

Kunyw-e-ni chai.

『飲む』『お茶』 = 『お茶を飲め〔複数〕』

単音節動詞を含む以下の3つの動詞は、不規則な命令の形式をもつ。動詞 leta 『運ぶ』は、相手が1人の命令だけが不規則な形式をもつ。

表 164 命令法 (不規則動詞)

単数	複数	
nenda	nend-e-ni	『行け』 (-enda 『行く』は、ときに単音節動詞の振る舞いをする)
njoo	njoo-ni	『来い』 (単音節動詞-ja 『来る』)
lete	let-e-ni	『運べ』 (複数は規則的)

Nenda mji-ni.

『行く』『町へ』 = 『町へ行け』

Nend-e-ni mji-ni.

『行く』『町へ』 = 『町へ行け〔複数〕』

Njoo hapa.

『来る』『ここ』 = 『ここへ来い』

Njoo-ni hapa.

『来る』『ここ』 = 『ここへ来い〔複数〕』

Lete ki-su.

『運ぶ』『ナイフ』 = 『ナイフをもってこい』

Let-e-ni ki-su.

『運ぶ』『ナイフ』 = 『ナイフをもってこい〔複数〕』

動詞 enda 『行く』は、ときどき、単音節動詞として振る舞うことがある。また、どの時制で単音節動詞として振る舞うか、個人語的にゆれがある。ただし、命令法では個人語的なゆれはない。

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源の動詞は、語幹の末尾の位置に終母音-a が付加されない。したがって、相手が2人以上の命令の場合、複数性を表す接尾辞-ni が語幹末尾の位置に付加されるとき、

語幹末尾の位置の母音になんら音変化は生じない。たんに単数の命令の語尾の位置に複数性を表す接尾辞-ni を付加するだけで、相手が2人以上の命令の形式をつくることができる。

表 165 命令法 (アラビア語起源動詞)

単数	複数	
jaribu	jaribu-ni	『試みよ』
haribu	haribu-ni	『壊せ』
jibu	jibu-ni	『答えろ』
rudi	rudi-ni	『戻れ』
samehe	samehe-ni	『許せ』

Jaribu ki-su.

『試みる』『ナイフ』 = 『ナイフを試せ』

Jaribu-ni ki-su.

『試みる』『ナイフ』 = 『ナイフを試せ〔複数〕』

Haribu nyumba.

『壊す』『家』 = 『家を壊せ』

Haribu-ni nyumba.

『壊す』『家』 = 『家を壊せ〔複数〕』

Jibu ma-swali.

『答える』『質問〔複数〕』 = 『質問に答えろ』

Jibu-ni ma-swali.

『答える』『質問(複数)』 = 『質問に答えろ〔複数〕』

Rudi nyumba-ni.

『戻る』『家に』 = 『家に戻れ』

Rudi-ni nyumba-ni.

『戻る』『家に』 = 『家に戻れ〔複数〕』

Samehe.

『許す』 = 『許せ』

Samehe-ni.

『許す』 = 『許せ〔複数〕』

これらのもっとも単純な命令法は、どちらかといえば「ぶっきらぼうな」、あるいは、「礼儀正しくない」命令である。

[禁止]

否定の命令、すなわち、禁止は、否定の接続法を用いる。接続法の形式をつくるためには、動詞の語幹に主語接辞を付加し、終母音-aを母音eにかえる。時制接辞は、否定時制標識 si-を用いる。禁止、すなわち、否定の命令なので、主語接辞は、2人称単数主語接辞 u-と2人称複数主語接辞 m-に限られる。主語接辞は、否定時制標識 si-が動詞語幹に先行する位置に付加されるので、肯定の主語接辞が用いられる。否定時制標識が否定の意味を表す。

単音節動詞が否定の接続法で用いられるとき、否定の時制標識 si-がアクセントをもつことのできる形式なので、アクセントを調節するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を、動詞語幹と否定の時制標識 si-のあいだに挿入する必要はない。

表 166 禁止＝否定の接続法

単数	複数
u-si-nunu-e	m-si-nunu-e 『買うな』
u-si-on-e	m-si-on-e 『見るな』
u-si-jifunz-e	m-si-jifunz-e 『学ぶな』
u-si-som-e	m-si-som-e 『読むな』
u-si-fany-e	m-si-fany-e 『するな』
u-si-pik-e	m-si-pik-e 『料理するな』

U-si-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買うな』

M-si-nunu-e vi-tabu.

『買う』『本〔複数〕』 = 『本〔複数〕を買うな〔複数〕』

U-si-jifunz-e Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『スワヒリ語を学ぶな』

M-si-jifunz-e Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『スワヒリ語を学ぶな〔複数〕』

U-si-som-e ki-tabu.

『読む』『本』 = 『本を読むな』

M-si-som-e ki-tabu.

『読む』『本』 = 『本を読むな〔複数〕』

U-si-fany-e kazi.

『する』『仕事』 = 『仕事をするな』

M-si-fany-e kazi.

『する』『仕事』 = 『仕事をするな〔複数〕』

U-si-pik-e ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『食べ物を料理するな』

M-si-pik-e ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『食べ物を料理するな〔複数〕』

[単音節動詞]

単音節動詞をふくめて、肯定命令では不規則の命令形をつくる動詞も、禁止、すなわち、否定の接続法では、規則的な否定接続法の形式をもつ。

表 167 禁止=否定の接続法（単音節動詞、不規則動詞）

単数	複数
u-si-l-e	m-si-l-e 『食べるな』
u-si-nyw-e	m-si-nyw-e 『飲むな』
u-si-end-e	m-si-end-e 『いくな』
u-si-j-e	m-si-j-e 『来るな』
u-si-let-e	m-si-let-e 『運ぶな』

U-si-l-e ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『食べ物を食べるな』

M-si-l-e ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『食べ物を食べるな〔複数〕』

U-si-nyw-e pombe.

『飲む』『ビール』 = 『ビールを飲むな』

M-si-nyw-e pombe.

『飲む』『ビール』 = 『ビールを飲むな〔複数〕』

U-si-end-e mji-ni.

『行く』『町へ』 = 『町へ行くな』

M-si-end-e mji-ni.

『行く』『町へ』 = 『町へ行くな〔複数〕』

U-si-j-e hapa.

『来る』『ここ』 = 『ここへ来るな』

M-si-j-e hapa.

『来る』『ここ』 = 『ここへ来るな〔複数〕』

U-si-let-e maji.

『運ぶ』『水』 = 『水をもってくるな』

M-si-let-e maji.

『運ぶ』『水』 = 『水をもってくるな〔複数〕』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。したがって、接続法の形式をつくるとき、バントゥ起源の動詞のように、終母音-a を母音 e にかえることはしない。接続法において、語幹末尾の位置の母音は、アラビア語起源動詞が、本来、語幹末尾の位置にもっている母音のままである。

表 168 禁止=否定接続法〔アラビア語起源動詞〕

単数	複数
u-si-jaribu	m-si-jaribu 『試みるな』
u-si-haribu	m-si-haribu 『壊すな』
u-si-jibu	m-si-jibu 『答えるな』
u-si-rudi	m-si-rudi 『戻るな』
u-si-samehe	m-si-samehe 『許すな』

U-si-jaribu ki-su hi-ki.

『試す』『ナイフ』『この』 = 『このナイフを試すな』

M-si-jaribu ki-su hi-ki.

『試す』『ナイフ』『この』 = 『このナイフを試すな〔複数〕』

U-si-haribu nyumba hi-i.

『壊す』『家』『この』 = 『この家を壊すな』

M-si-jaribu motokaa.

『試す』『自動車』 = 『自動車を試すな〔複数〕』

U-si-jibu ma-swali.

『答える』『質問〔複数〕』 = 『質問に答えるな』

M-si-jibu ma-swali.

『答える』『質問〔複数〕』 = 『質問に答えるな〔複数〕』

U-si-rudi nyumba-ni.

『戻る』『家に』 = 『家に戻るな』

M-si-rudi kijiji-ni.

『戻る』『村に』 = 『村に戻るな〔複数〕』

U-si-samehe.

『許す』 = 『許すな』

M-si-samehe.

『許す』 = 『許すな〔複数〕』

### [丁寧な命令]

丁寧な命令は、肯定の接続法を用いる。接続法の形式をつくるためには、動詞語幹に先行する位置に主語接辞を付加する。主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。さらに、終母音-aを母音eにかえる。命令なので、用いられる主語接辞は、2人称の主語接辞に限られる。相手が1人の場合は、2人称単数主語接辞u-が用いられ、相手が2人以上の場合は、2人称複数主語接辞m-が用いられる。時制標識は、ゼロ形態素か、あるいは、用いない。

単音節動詞に関しては、主語接辞がアクセントをもつことのできる形式なので、動詞語幹と主語接辞のあいだに、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞ku-を挿入する必要はない。単音節動詞をふくめ、単純な命令の形式では不規則な形式をもつ動詞も、接続法においては規則的な形式をもつ。

表 169 丁寧な命令

単数	複数
u-nunu-e	m-nunu-e 『買え』
u-on-e	m-on-e 『見ろ』
u-jifunz-e	m-jifunz-e 『学べ』
u-som-e	m-som-e 『読め』
u-fany-e	m-fany-e 『しろ』
u-maliz-e	m-maliz-e 『終えろ』
u-pik-e	m-pik-e 『料理しろ』

U-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買ってください』

M-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買ってください〔複数〕』

U-jifunz-e Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『スワヒリ語を学んでください』

M-jifunz-e Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『スワヒリ語を学んでください〔複数〕』

U-pik-e ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『食べ物を料理してください』

M-pik-e ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『食べ物を料理してください〔複数〕』

接続法を用いるため、丁寧な命令において、単音節動詞や不規則動詞は、規則的な形式が用いられる。

表 170 丁寧な命令（単音節動詞、不規則動詞）

単数	複数
u-l-e	m-l-e 『食べろ』
u-nyw-e	m-nyw-e 『飲め』
u-end-e	m-end-e 『行け』
u-j-e	m-j-e 『来い』
u-let-e	m-let-e 『運べ』

U-l-e ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『食べ物を食べてください』

M-l-e ch-akula.

『食べる』『食べ物』 = 『食べ物を食べてください〔複数〕』

U-nyw-e chai.

『飲む』『茶』 = 『お茶を飲んでください』

M-nyw-e chai.

『飲む』『茶』 = 『お茶を飲んでください〔複数〕』

U-end-e mji-ni.

『行く』『町へ』 = 『町へ行ってください』

M-end-e mji-ni.

『行く』『町へ』 = 『町へ行ってください〔複数〕』

U-j-e hapa.

『来る』『ここ』 = 『ここへ来てください』

M-j-e hapa.

『来る』『ここ』 = 『ここへ来てください〔複数〕』

U-let-e maji.

『運ぶ』『水』 = 『水をもってきてください』

M-let-e maji.

『運ぶ』『水』 = 『水をもってきてください』

[アラビア語起源動詞]



アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。したがって、接続法をつくるために、バントゥ起源の動詞のように、終母音-a を母音 e にかえることをしない。アラビア語起源動詞は、接続法においても、本来、語幹末尾の位置にもっている母音のままである。

表 171 丁寧な命令〔アラビア語起源動詞〕

単数	複数	
u-jaribu	m-jaribu	『試せ』
u-haribu	m-haribu	『壊せ』
u-jibu	m-jibu	『答えろ』
u-rudi	m-rudi	『戻れ』
u-samehe	m-samehe	『許せ』

U-jaribu kazi.

『試す』『仕事』 = 『仕事を試してください』

M-jaribu kazi.

『試す』『仕事』 = 『仕事を試してください〔複数〕』

U-haribu nyumba.

『壊す』『家』 = 『家を壊してください』

M-haribu nyumba.

『壊す』『家』 = 『家を壊してください〔複数〕』

U-rudi nyumba-ni.

『戻る』『家へ』 = 『家に戻ってください』

M-rudi nyumba-ni.

『戻る』『家へ』 = 『家に戻ってください〔複数〕』

U-samehe.

『許す』 = 『許してください』

M-samehe.

『許す』 = 『許してください〔複数〕』

#### [肯定接続法]

肯定接続法の形式は、動詞語幹に主語接辞を付加して形づくられる。主語接辞は、肯定の主語接辞を用いる。時制標識が付加される位置に、時制接辞としてゼロ形態素を用いるか、あるいは、時制接辞を付加しないことが特徴である。また、接続法の形式を形づくるとき、もっとも重要なことは、終母音-a を母音 e にかえることである。

表 172 肯定接続法

1 人称単数	ni-som-e ki-tabu	『本を読もう』
2 人称単数	u-som-e ki-tabu	『本を読んでください』
3 人称単数	a-som-e ki-tabu	『彼が本を読むようにしてください』
1 人称複数	tu-som-e ki-tabu	『私たちは本を読もう』
2 人称複数	m-som-e ki-tabu	『本を読んでください〔複数〕』
3 人称複数	wa-som-e ki-tabu	『彼らが本を読むようにしてください』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-som-e ki-tabu	『子供が本を読むようにしてください』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-som-e ki-tabu	『子供たちが本を読むようにしてください』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-anguk-e	『木が倒れるようにしてください』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-anguk-e	『木〔複数〕が倒れるようにしてください』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-anguk-e	『果物が落ちるようにしてください』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-anguk-e	『果物〔複数〕が落ちるようにしてください』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-anguk-e	『本が落ちるようにしてください』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-anguk-e	『本〔複数〕は落ちよう』
N〔単数〕	nazi i-anguk-e	『やしの実が落ちるようにしてください』
N〔複数〕	nazi zi-anguk-e	『やしの実〔複数〕が落ちるようにしてください』
U/N〔単数〕	u-kuta u-anguk-e	『壁が倒れるようにしてください』
U/N〔複数〕	kuta zi-anguk-e	『壁〔複数〕が倒れるようにしてください』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-let-e ma-tata	『多くを望むことが災難をもたらすようにしてください』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-lal-e simba	『森にライオンが寝るようにしてください』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-lal-e simba	『森にライオンが寝るようにしてください』
Mu (場所)	mwitu-ni m-lal-e simba	『森の中にライオンが寝るようにしてください』

肯定接続法は、2 人称で用いられるとき、それは「丁寧な」命令である。2 人称以外の 1 人称や 3 人称で接続法が用いられるとき、それは「提案」を表す。以下の例では、1 人称と 3 人称の接続法が、話し手による「提案」を表すのに用いられている。

Ni-fany-e kazi.

『する』『仕事』 = 『私は仕事をしましょう』

Tu-let-e mi-zigo.

『運ぶ』『荷物〔複数〕』 = 『私たちは荷物を運びましょう』

A-jifunz-e Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『彼がスワヒリ語を学ぶようにしましょう』

### Wa-pik-e ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『彼らが食べ物を料理するようにしましょう』

肯定接続法の用い方には、既に命令法で説明した「丁寧な命令」と「提案」を表現する使い方がある。それら以外にもあわせて7つの接続法が用いられなければならない場合がある。

#### 1) 丁寧な命令 (2人称の接続法)

接続法が丁寧な命令を表すために用いられることは既に説明した。

#### 2) 提案 (1人称と3人称の接続法)

提案のための接続法の文が疑問文のイントネーションで発音されることがある。

### Ni-fany-e kazi?

『する』『仕事』 = 『私は仕事をしましょうか』

### Tu-let-e mi-zigo?

『運ぶ』『荷物〔複数〕』 = 『私たちは荷物を運びましょうか』

### A-jifunz-e Ki-swahili?

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『彼がスワヒリ語を学ぶようにしましょうか』

### Wa-pik-e ch-akula?

『料理する』『食べ物』 = 『彼らが食べ物を料理するようにしましょうか』

3) 2つ以上の命令が連続するとき、最初の命令は、単純な命令の形式を用いてもかまわない。しかし、2番目以降の命令は、接続法を用いる。

下の例で、1番目の命令だけが、単純な命令の形式 **Nenda** 『行け』をしている。2番目の命令は、接続法の形式 **u-nunu-e** 『買え』、3番目の命令も接続法の形式 **u-m-let-e-e** 『～に運べ』が用いられる。

### Nenda soko-ni, u-nunu-e ma-tunda, u-m-let-e-e m-toto ma-tunda ya-le.

『行く』『マーケットへ』『買う』『果物』『～に運ぶ』『子供』『果物』『それ』 = 『マーケットへ行って、果物を買って、子供にそれらの果物をもっていけ』

4) 命令法をつくる動詞複合体に目的語接辞が付加されるとき、動詞複合体は、単純な命令の形式ではなく、必ず、接続法の形式を用いる。

下の例では、命令 **ambi-e** 『言え』に目的語接辞 **m(w)-**が付加されているため、単純な命令の形式ではなく、接続法の形式が用いられる。

U-mw-ambi-e kama ni-ta-safiri Kenya.

『言う』『ことを』『旅する』『ケニア』 = 『私がケニアを旅することを彼に言え』

5) 願望や間接命令を意味する埋め込み文には、接続法が用いられる。接続法が用いられる条件は、主節の主語と埋め込まれた従属節の主語が異なることである。

下の例の 1 番目の文では、主節の主語が『私』であり、埋め込まれた従属節の主語が wanafunzi 『生徒たち』である。第 2 の文では、主節の主語が mama 『お母さん』であり、埋め込まれた従属節の主語が m-toto wake 『彼女の子供』である。主節の主語と従属節の主語が異なるので、従属節は、接続法が用いられる。従属節については、後で「文のなりたち」のところで解説する。

Ni-na-wa-taka w-anafunzi wa-som-e Ki-swahili.

『望む』『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『私は生徒たちがスワヒリ語を学んで欲しい』

Mama a-li-mw-ambia m-toto w-ake a-som-e ki-tabu.

『お母さん』『言う』『子供』『彼女の』『読む』『本』 = 『お母さんは彼女の子供に本を読むようにと言った』

上の文は、主文と埋め込み文の主語が異なるものである。主節と埋め込み文の主語が同じであれば、願望を意味する文は、接続法ではなく動詞の不定詞を使うことができる。

以下の分では主節の主語と埋め込み文の主語が同じものを指している。

Ni-na-taka ku-soma ki-tabu.

『望む』『読む』『本』 = 『私は本を読みたい』

6) 目的や意図を意味する埋め込まれた従属節には、接続法が用いられる。目的や意図をより明確に表すために、接続詞 ili 『～ために』が、埋め込まれた従属節の直前の位置に挿入されることがある。

Ni-li-m-nunu-li-a m-toto w-angu ki-tabu ili a-som-e.

『～に買う』『本』『読む』 = 『私は本を私の子供が読むために買った』

Baba a-li-m-nunu-li-a m-ke w-ake nyama ili a-pik-e.

『お父さん』『～に買う』『妻』『彼の』『肉』『料理する』 = 『お父さんは肉を彼の妻が料理をするために買った』

上の2つの例では、主節の主語と埋め込まれた従属節の主語が異なるものを指している。

下の例は、主節の主語と埋め込み文の主語が同じものを指している。主節の主語と埋め込み文の主語が同じものを指しているときでも、埋め込み文に接続法を使った従属節を使うことができる。

Ni-li-nunua nyama ni-pik-e ch-akula.

『買う』『肉』『料理する』『食べ物』 = 『私は食べ物を料理するために肉を買った』

Mama a-li-nunua nyama ili a-pik-e ch-akula.

『お母さん』『買う』『肉』『～ために』『料理する』『食べ物』 = 『お母さんは食べ物を料理するために肉を買った』

Tu-li-kwenda soko-ni tu-nunu-e ma-tunda.

『行く』『マーケットへ』『買う』『果物』 = 『私たちは果物を買うためにマーケットへ行った』

Ni-li-kwenda Tanzania ili ni-on-an-e na mw-anafunzi w-angu.

『行く』『タンザニア』『～ために』『会う』『生徒』『私の』 = 『私は私の生徒と会うためにタンザニアへ行った』

意図や目的を表す埋め込み文の主語が主文の主語と同じものを指すとき、埋め込み文に動詞の不定詞を使うことができる。そのとき、不定詞の直前の位置に、接続詞 ili 『～ために』を挿入することがある。

Ni-li-nunua nyama ku-pika ch-akula.

『買う』『肉』『料理する』『食べ物』 = 『私は食べ物を料理するために肉を買った』

Mama a-li-nunua nyama ili kupika chakula.

『お母さん』『買う』『肉』『～ために』『料理する』『食べ物』 = 『お母さんは食べ物を料理するために肉を買った』

Tu-li-kwenda soko-ni ku-nunua ma-tunda.

『行く』『マーケットへ』『買う』『果物』 = 『私たちは果物を買うためにマーケットへ行った』

Ni-li-kwenda Tanzania ili ku-on-ana na mw-anafunzi w-angu.

『行く』『タンザニア』『～ために』『会う』『生徒』『私の』 = 『私は私の生徒に会うためにタンザニアへ行った』

7) 義務などを表現する、必ず、接続法の文が後続しなければならない語が存在する。そのとき、繫辞 ni が、義務などを表す語に先行する位置におかれることがある。例えば、下の例で、義務などを表す語 lazima 『義務』に先行する位置に、繫辞 ni 『である』が用いられても、用いられなくても良い。

(Ni) Lazima ni-jifunz-e Ki-swahili.

『義務』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『私はスワヒリ語を学ばなければならない』

(Ni) Afadhali ni-sem-e Ki-swahili.

『好ましい』『話す』『スワヒリ語』 = 『私はスワヒリ語を話すのが良い』

(Ni) Bora u-pik-e nyama

『最良』『料理する』『肉』 = 『あなたは肉を料理するのが最良です』

接続法の文を後続させる語には、lazima 『必要、義務』、afadhali 『好ましい』、bora 『最良』のほかに、sharti 『義務』、heri 『有利』、yafaa 『適当』(ただし、yafaa は、繫辞 ni を先行させることはない) などがある。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が、接続法で用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-は、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されない。主語接辞は、アクセントをもつことができる形式である。

表 173 肯定接続法 (単音節動詞)

1 人称単数	ni-j-e shule-ni	『私は学校から帰ろう』
2 人称単数	u-j-e shule-ni	『学校から帰れ』
3 人称単数	a-j-e shule-ni	『彼女、彼が学校から帰るようにしよう』
1 人称複数	tu-je shule-ni	『私たちは学校から帰ろう』
2 人称複数	m-je shule-ni	『学校から帰れ [複数]』
3 人称複数	wa-j-e shule-ni	『彼らが学校から帰るようにしよう』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。したがって、接続法の形式をつくるための終母音-a を母音 e にかえるという操作がおこなわれない。アラビア語起源動詞は、接続法の形式をつくるためには、主語接辞を直接、動詞語幹に付加する。

表 174 肯定接続法 (アラビア語起源動詞)

1 人称単数	ni-jaribu kazi	『私は仕事を試みよう』
2 人称単数	u-jaribu kazi	『仕事を試みろ』
3 人称単数	a-jaribu kazi	『彼女、彼が仕事を試みるようにしよう』
1 人称複数	tu-jaribu kazi	『私たちは仕事を試みよう』

- 2 人称複数 m-jaribu kazi 『仕事を試みろ〔複数〕』
- 3 人称複数 wa-jaribu kazi 『彼らが仕事を試みるようにしよう』
- M/Wa〔単数〕 m-toto a-jaribu kazi 『子供が仕事を試みるようにしよう』
- M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-jaribu kazi 『子供たちが仕事を試みるようにしよう』
- M/Mi〔単数〕 m-ti u-baki 『木が残るようにしよう』
- M/Mi〔複数〕 mi-ti i-baki 『木〔複数〕が残るようにしよう』
- Ji/Ma〔単数〕 tunda li-baki 『果物が残るようにしよう』
- Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-baki 『果物〔複数〕が残るようにしよう』
- Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-baki 『本が残るようにしよう』
- Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-baki 『本〔複数〕が残るようにしよう』
- N〔単数〕 nazi i-baki 『やしの実が残るようにしよう』
- N〔複数〕 nazi zi-baki 『やしの実〔複数〕が残るようにしよう』
- U/N〔単数〕 u-kuta u-baki 『壁が残るようにしよう』
- U/N〔複数〕 kuta zi-baki 『壁〔複数〕が残るようにしよう』
- Ku(不定詞) ku-taka w-ingi ku-haribu m-oyo 『多くを望むことが心を壊すようにしよう』
- Pa(場所) mwitu-ni pa-keci simba 『森にライオンが寝るようにしよう』
- Ku(場所) mwitu-ni ku-keci simba 『森にライオンが寝るようにしよう』
- Mu(場所) mwitu-ni m-baki simba 『森の中にライオンが寝るようにしよう』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

#### [否定接続法]

否定接続法の形式は、否定時制標識 si-を用いる。接続法の形式を形づくるもっとも重要な特徴は、終母音-aを母音eにかえることである。否定であるけれど、既に否定時制標識 si-が付加されているため、主語接辞は、肯定の主語接辞を用いる。

#### 表 175 否定接続法

- 1 人称単数 ni-si-som-e ki-tabu 『私は本を読まないでいよう』
- 2 人称単数 u-si-som-e ki-tabu 『本を読むな』
- 3 人称単数 a-si-som-e ki-tabu 『彼女、彼が本を読まないようにしよう』
- 1 人称複数 tu-si-som-e ki-tabu 『私たちは本を読まないでいよう』
- 2 人称複数 m-si-som-e ki-tabu 『本を読むな〔複数〕』
- 3 人称複数 wa-si-som-e ki-tabu 『彼らが本を読まないようにしよう』
- M/Wa〔単数〕 m-toto a-si-som-e ki-tabu 『子供が本を読まないようにしよう』
- M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-si-som-e ki-tabu 『子供たちが本を読まないようにしよう』
- M/Mi〔単数〕 m-ti u-si-anguk-e 『木が倒れないようにしよう』
- M/Mi〔複数〕 mi-ti i-si-anguk-e 『木〔複数〕が倒れないようにしよう』

Ji/Ma〔単数〕 tunda li-si-anguk-e 『果物が落ちないようにしよう』  
 Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-si-anguk-e 『果物〔複数〕が落ちないようにしよう』  
 Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-si-anguk-e 『本が落ちないようにしよう』  
 Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-si-anguk-e 『本〔複数〕が落ちないようにしよう』  
 N〔単数〕 nazi i-si-anguk-e 『やしの実が落ちないようにしよう』  
 N〔複数〕 nazi zi-si-anguk-e 『やしの実〔複数〕が落ちないようにしよう』  
 U/N〔単数〕 u-kuta u-si-anguk-e 『壁が倒れないようにしよう』  
 U/N〔複数〕 kuta zi-si-anguk-e 『壁〔複数〕が倒れないようにしよう』  
 Ku(不定詞) ku-taka w-ingi ku-si-let-e ma-tata 『多くを望むことが災難をもたらさないようにしよう』  
 Pa(場所) mwitu-ni pa-si-lal-e simba 『森にライオンが寝ないようにしよう』  
 Ku(場所) mwitu-ni ku-si-lal-e simba 『森にライオンが寝ないようにしよう』  
 Mu(場所) mwitu-ni m-si-lal-e simba 『森の中にライオンが寝ないようにしよう』

否定接続法は、既に説明した禁止を表す以外に、肯定接続法とほぼ同じ用いられ方をする。肯定接続法と同様に、7つの使い方と、さらに、肯定接続法にはない否定接続法に特有の使い方が、1つある。否定接続法は、肯定接続法のそれぞれの用い方に否定の意味が与えられる。

#### 1) 禁止 (2人称)

否定接続法は、2人称で用いられるときは、禁止である。禁止については既に否定の命令で説明した。

#### 2) 否定の提案 (1人称と3人称)

否定接続法が2人称以外の1人称や3人称で用いられるとき、それは「否定の提案」である。

Ni-si-fany-e kazi.

『する』『仕事』 = 『私は仕事をしないでおこう』

Tu-si-let-e mi-zigo.

『運ぶ』『荷物〔複数〕』 = 『私たちは荷物を運ばないでおこう』

A-jifunz-e Ki-swahili.

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『彼女、彼がスワヒリ語を学ばないようにしよう』

Wa-si-pik-e ch-akula.

『料理する』『食べ物』 = 『彼らが食べ物を料理ないようにしよう』



否定の提案を表す文は、疑問文のイントネーションで発音されることがある。

Ni-si-fany-e kazi?

『する』『仕事』 = 『私は仕事をしないでおこうか』

Tu-si-let-e mi-zigo?

『運ぶ』『荷物〔複数〕』 = 『私たちは荷物を運ばないでおこうか』

A-jifunz-e Ki-swahili?

『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『彼女、彼がスワヒリ語を学ばないようにしようか』

Wa-pik-e ch-akula?

『料理する』『食べ物』 = 『彼らが食べ物を料理ないようにしようか』

3) 2つ以上の命令が連続するとき、2番目以降の命令は、接続法を用いるという規則がある。否定命令も2番目以降の命令に接続法が用いられる。

Kaa hapa, u-si-end-e soko-ni, u-si-nunu-e ma-tunda.

『座る』『ここ』『行く』『マーケットへ』『買う』『果物』 = 『ここにいる、マーケットへ行くな、果物を買うな』

上の例では、第1番目の命令が単純な命令形 kaa『座れ』になっている。2番目以降の命令は、否定接続法になっている。

4) 命令法をつくる動詞複合体に目的語接辞が付加されるとき、動詞複合体は、単純な命令の形式を用いることはできない。接続法を用いるという規則がある。しかし、否定の命令(=禁止)は、もともと否定の接続法を用いる。否定の命令法であれば、動詞複合体が目的語接辞を付加していようとも、いなくとも、動詞複合体は、接続法の形式が用いられる。

U-si-mw-ambi-e kama ni-ta-safiri Kenya.

『言う』『ことを』『旅する』『ケニア』 = 『私がケニアを旅することを彼に言うな』

5) 願望や間接命令を意味する埋め込まれた従属節は、接続法が用いられる。接続法が用いられる条件は、主節の主語と埋め込まれた従属節の主語が、異なることである。埋め込まれた従属節に否定の接続法が用いられると、否定の願望や間接的禁止を意味する。間接的禁止を表現するために、主節で用いられる動詞は、kataza『禁止する』や zuia『妨げる』などである。

下の例の1番目の文は、否定の願望の文である。2番目の文は、間接的禁止の文である。

Ni-na-wa-taka w-anafunzi wa-si-som-e Ki-swahili.

『望む』『生徒たち』『勉強する』『スワヒリ語』 = 『私は生徒たちがスワヒリ語を勉強しないよう望む』

Mama a-li-m-kataza m-toto w-ake a-som-e ki-tabu hi-ki.

『お母さん』『禁止する』『子供』『読む』『本』『この』 = 『お母さんは子供がこの本を読むことを禁止した』

上の例では、主節と埋め込まれた従属節の主語が、異なるものを指している。主節の主語と埋め込まれた従属節の主語が異なるものを指す場合にのみ、埋め込まれた従属節に否定接続法を用いることができる。

否定の願望を表す文において、主節と埋め込み文の主語が同じであれば、動詞の不定詞を用いることができる。ただし、この場合、主節を否定文にする。埋め込み文に否定不定詞を使わない。

下の例で、埋め込み文に動詞の肯定不定詞 *ku-soma* が用いられている。主節の主語も埋め込み文の主語も『私』を指している。

Si-ku-taka ku-soma ki-tabu hi-ki.

『望む』『読む』『本』『この』 = 『私はこの本を読みたくなかった』

6) 目的や意図を表す埋め込み文は、接続法が用いられる。目的や意図をより明確に表すために、接続詞 *ili* 『～ために』が埋め込み文の直前に挿入されることがある。否定接続法が用いられると、目的や意図は否定の意味をとともなう。

Ni-li-m-nunu-li-a m-toto w-angu ki-tabu a-si-li-e.

『～に買う』『子供』『私の』『本』『この』 = 『私は本を私の子供が泣かないように買った』

Baba a-li-ondoka mapema ili a-si-chelew-e.

『お父さん』『出発する』『早く』『～ために』『遅れる』 = 『お父さんは遅れないように早く出発した』

7) 義務などを表す、必ず、接続法の文が後続しなければならない語が存在する。そのとき、繫辞 *ni* 『です』が、義務などを表す語に先行する位置におかれることがある。否定接続法が用いられると、否定の義務などの意味になる。

(Ni) Lazima ni-si-jifunz-e Ki-swahili.

『義務』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『私はスワヒリ語を学んではならない』

(Ni) Afadhali u-si-sem-e Ki-japani.

『好ましい』『話す』『日本語』 = 『あなたは日本語を話さないほうが良い』

接続法の文を後続させる語には、lazima『義務』、afadhali『好ましい』、bora『最良』、sharti『義務』、heri『有利』、yafaa『適当』などがある。

8) 否定接続法は、不首尾に終わる結果を表す。埋め込まれた従属節に否定接続法が用いられるとき、主文で表現される行為や出来事が、埋め込まれた従属節により否定的な結果となることを表す。これは、肯定接続法にない、否定接続法の特有の使い方である。例えば、下の例で、話し手は、『果物を買おうと努力した』が、『買えなかった』という否定的結果に終わったことを、否定接続法による従属節で表す。

Ni-li-kwenda soko-ni ku-nunua ma-tunda ni-si-pat-e.

『行く』『マーケットへ』『買う』『果物』『手に入れる』 = 『私はマーケットへ果物を買に行ったが、手に入らなかった』

Baba a-li-fanya kazi kwa bidii a-si-faulu.

『お父さん』『する』『仕事』『一生懸命』『成功する』 = 『お父さんは一生懸命仕事をしたが、成功しなかった』

#### [単音節動詞]

単音節動詞が、否定接続法で用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を、動詞語幹と否定時制標識 si-のあいだに挿入しない。否定時制標識 si-は、アクセントをもつことができる形式である。

表 176 否定接続法 (単音節)

1 人称単数	ni-si-j-e shule-ni	『私は学校から帰らないようにしよう』
2 人称単数	u-si-j-e shule-ni	『学校から帰るな』
3 人称単数	a-si-j-e shule-ni	『彼女、彼が学校から帰らないようにしよう』
1 人称複数	tu-si-j-e shule-ni	『私たちは学校から帰らないようにしよう』
2 人称複数	m-si-j-e shule-ni	『学校から帰るな [複数]』
3 人称複数	wa-si-j-e shule-ni	『彼らが学校から帰らないようにしよう』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、その語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっており、終母音-a が付加されない。したがって、接続法の形式をつくる特徴的な操作である、終母音-a を母音 e にかえるという操作が生じない。動詞語幹に先行する位置に否定時制標識 si- を付加する。

したがって、主語接辞は、否定ではあるが肯定の主語接辞を用いる。

表 177 否定接続法 (アラビア語起源動詞)

1 人称単数	ni-si-jaribu kazi	『私は仕事を試みないようにしよう』
2 人称単数	u-si-jaribu kazi	『仕事を試みるな』
3 人称単数	a-si-jaribu kazi	『彼女、彼が仕事を試みないようにしよう』
1 人称複数	tu-si-jaribu kazi	『私たちは仕事を試みないようにしよう』
2 人称複数	m-si-jaribu kazi	『仕事を試みるな〔複数〕』
3 人称複数	wa-si-jaribu kazi	『彼らが仕事を試みないようにしよう』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-si-jaribu kazi	『子供が仕事を試みないようにしよう』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-si-jaribu kazi	『子供たちが仕事を試みないようにしよう』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-si-baki	『木が残らないようにしよう』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-si-baki	『木〔複数〕が残らないようにしよう』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-si-baki	『果物が残らないようにしよう』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-si-baki	『果物〔複数〕が残らないようにしよう』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-si-baki	『本が残らないようにしよう』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-si-baki	『本〔複数〕が残らないようにしよう』
N〔単数〕	nazi i-si-baki	『やしの実が残らないようにしよう』
N〔複数〕	nazi zi-si-baki	『やしの実〔複数〕が残らないようにしよう』
U/N〔単数〕	u-kuta u-si-baki	『壁が残らないようにしよう』
U/N〔複数〕	kuta zi-si-baki	『壁〔複数〕が残らないようにしよう』
Ku (不定詞)	ku-taka w-ingi ku-si-haribu m-oyo	『多くを望むことが心を壊さないようにしよう』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-si-keci simba	『森にライオンが座らないようにしよう』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-si-keci simba	『森にライオンが座らないようにしよう』
Mu (場所)	mwitu-ni m-si-keci simba	『森の中にライオンが座らないようにしよう』

アラビア語起源動詞に単音節動詞は見当たらない。

## 9. 6 関係節

スワヒリ語は、3 種類の関係節をもっている。それらをアンバ関係節、時制関係節、一般関係節と呼ぶことにする。

アンバ関係節は、関係節標識が付加される形式 **amba-**と関係節標識からなる形式により、つねに導かれる。関係節標識が付加される形式 **amba-**に後続する位置に、関係節標識が付加される。関係節標識が付加される形式 **amba-**は、特定の意味をもたないが、もともとは、動詞 **ambia** 『言う』の語幹 **amb-** 『言う』に由来すると考えられる。

時制関係節は、関係節標識がつねに時制標識の直後の位置に付加される。ただし、時制関係節をつくることが可能な時制標識は、肯定現在継続時制標識 **na-**、肯定過去時制標識 **li-**、肯定未来時制標識 **taka-**（関係節標識が付加されるとき、未来時制標識 **ta-**は、**taka-**になる）、否定時制標識 **si-**の 4 つだけである。

一般関係節は、動詞複合体の末尾の位置に付加される。そのとき、けっして時制標識が動詞複体内に付加されない。

関係節標識は、けっして省略することはできない。つまり、関係詞の省略をスワヒリ語は許さない。

関係節標識は、名詞のクラスに照応して形をかえる。ただし、先行詞が人間である場合、

人称の区別はなく、単数であれば、1人称でも、2人称でも、3人称でも、関係節標識 *ye-* が用いられる。複数であれば、1人称でも、2人称でも、3人称でも、関係節標識 *o-* が用いられる。関係節標識 *ye-* は、M/Wa [単数] 名詞クラスに照応する関係節標識であり、関係節標識 *o-* は、M/Wa [複数] 名詞クラスに照応する関係節標識である。

表 178 関係節標識

1 人称単数	<i>ye-</i>
2 人称単数	<i>ye-</i>
3 人称単数	<i>ye-</i>
1 人称複数	<i>o-</i>
2 人称複数	<i>o-</i>
3 人称複数	<i>o-</i>
M/Wa [単数]	<i>ye-</i>
M/Wa [複数]	<i>o-</i>
M/Mi [単数]	<i>o-</i>
M/Mi [複数]	<i>yo-</i>
Ji/Ma [単数]	<i>lo-</i>
Ji/Ma [複数]	<i>yo-</i>
Ki/Vi [単数]	<i>cho-</i>
Ki/Vi [複数]	<i>vyo-</i>
N [単数]	<i>yo-</i>
N [複数]	<i>zo-</i>
U/N [単数]	<i>o-</i>
U/N [複数]	<i>zo-</i>
Ku (不定詞)	<i>ko-</i>
Pa (場所)	<i>po-</i>
Ku (場所)	<i>ko-</i>
Mu (場所)	<i>mo-</i>

関係節標識は、名詞クラスに照応する代名詞タイプの照応形式に、指示関係を示す形式 *-o* が結合して形づくられる。そのとき、かなり規則的な音変化がともなう。

例えば、M/Mi (単数) の名詞クラスに照応する代名詞タイプ照応形式 *i* に指示関係を示す形式 *-o* が結合すると、代名詞タイプ照応形式の母音 *i* は、半母音 *y* に音変化して、関係節標識 *-yo* が形づくられる。M/Wa [単数] の名詞クラスと照応する関係節標識 *ye-* は、説明できない。

表 179 関係節標識のなりたち

M/Wa [単数]	ye-		
M/Wa [複数]	o-	<	wa + o-
M/Mi [単数]	yo-	<	i + o-
M/Mi [複数]	o-	<	u + o-
Ji/Ma [単数]	lo-	<	li + o-
Ji/Ma [複数]	yo-	<	ya + o-
Ki/Vi [単数]	cho-	<	ki + o-
Ki/Vi [複数]	vyo-	<	vi + o-
N [単数]	yo-	<	i + o-
N [複数]	zo-	<	zi + o-
U/N [単数]	o-	<	u + o-
U/N [複数]	zo-	<	zi + o-
Ku (不定詞)	ko-	<	ku + o-
Pa (場所)	po-	<	pa + o-
Ku (場所)	ko-	<	ku + o-
Mu (場所)	mo-	<	mu + o-

[アンバ関係節]

アンバ関係節においては、関係節標識を導く形式 **amba-**に後続する位置に関係節標識が付加される。関係節標識を導く形式 **amba-**とそれに付加される関係節標識との結合体は、独立した語を形成する。関係節標識を導く形式 **amba-**と関係節標識との結合体は、先行詞（関係節が修飾する名詞）に後続する位置におかれる。

表 180 アンバ関係節（現在継続時制）

1 人称単数	mimi amba-ye ni-na-soma ki-tabu	『本を読む私』
2 人称単数	wewe amba-ye u-na-soma ki-tabu	『本を読むあなた』
3 人称単数	yeye amba-ye a-na-soma ki-tabu	『本を読む彼女、彼』
1 人称複数	sisi amba-o tu-na-soma ki-tabu	『本を読む私たち』
2 人称複数	ninyi amba-o m-na-soma ki-tabu	『本を読むあなたたち』
3 人称複数	wao amba-o wa-na-soma ki-tabu	『本を読む彼ら』
M/Wa [単数]	m-toto amba-ye a-na-soma ki-tabu	『本を読む子供』
M/Wa [複数]	wa-toto amba-o wa-na-soma ki-tabu	『本を読む子供たち』
M/Mi [単数]	m-ti amba-o u-na-anguka	『倒れる木』

M/Mi〔複数〕	mi-ti amba-yo i-na-anguka	『倒れる木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda amba-lo li-na-anguka	『落ちる果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda amba-yo ya-na-anguka	『落ちる果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu amba-cho ki-na-anguka	『落ちる本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu amba-vyo vi-na-anguka	『落ちる本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi amba-yo i-na-anguka	『落ちるやしの実』
N〔複数〕	nazi amba-zo zi-na-anguka	『落ちるやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta amba-o u-na-anguka	『倒れる壁』
U/N〔複数〕	kuta amba-zo zi-na-anguka	『倒れる壁〔複数〕』
Ku(不定詞)	kutaka amba-ko ku-na-leta ma-tata	『災難をもたらす望むこと』
Pa(場所)	mwitu-ni amba-po pa-na-lala simba	『ライオンが寝てる森で』
Ku(場所)	mwitu-ni amba-ko ku-na-lala simba	『ライオンが寝てる森で』
Mu(場所)	mwitu-ni amba-mo m-na-lala simba	『ライオンが寝てる森の中で』

アンバ関係節は、表 181 のようにあらゆる時制で用いることができる。

アンバ関係節は、必ず、先行詞を必要とする。関係節をつくる形式 **amba-**と関係節標識の結合体で始まる文は、許されない。名詞や代名詞がアンバ関係節に先行しなければならない。

表 181 アンバ関係節 (M/Wa(単数))

肯定現在継続時制	m-tu amba-ye a-na-soma ki-tabu	『本を読む人』
肯定現在時制	m-tu amba-ye a-soma ki-tabu	『本を読む人』
否定現在時制	m-tu amba-ye ha-som-i ki-tabu	『本読まない人』
肯定現在完了時制	m-tu amba-ye a-me-soma ki-tabu	『本を読んでいる人』
否定現在完了時制	m-tu amba-ye ha-ja-soma ki-tabu	『本を読んでいない人』
肯定過去時制	m-tu amba-ye a-li-soma ki-tabu	『本を読んだ人』
否定過去時制	m-tu amba-ye ha-ku-soma ki-tabu	『本を読まなかった人』
肯定未来時制	m-tu amba-ye a-ta-soma ki-tabu	『本を読むだろう人』
否定未来時制	m-tu amba-ye ha-ta-soma ki-tabu	『本を読まないだろう人』
進行アスペクト	m-tu amba-ye a-ki-soma ki-tabu	『本を読み続けている人』
肯定接続法	m-tu amba-ye lazima a-som-e ki-tabu	『本を読まなければならない人』
否定接続法	m-tu amba-ye lazima a-si-som-e ki-tabu	『本を読んではいけない人』

アンバ関係節は時制標識をもたない文でも用いることができる。

例えば、埋め込み文が、繫辞 **ni** で主語と補語をつないだ時制標識をもたない文であって



も、アンバ関係節なら、関係節をつくることができる。

現在時制で『もつ』という表現は、時制標識をもたない。時制標識をもたない文であってもアンバ関係節なら、関係節をつくることができる。の1番目の文は、2番目の文に3番目の文を関係節として埋めこんでつくられる。3番目の文から分かるように、関係節は、繫辞 *ni* 『である』によって主語と補語が結ばれただけの文である。

2つ目の関係節を用いた文は、接続詞 *na* 『と』に主語接辞が付加された『もつ』という表現から関係節がなりたっており、時制標識を関係節はもたない。

Hi-ki ni ki-tabu amba-cho ni ch-angu.

『これ』『です』『本』 アンバ関係節標識 『です』『私の』 = 『これは私のものである本です』

Hi-ki ni ki-tabu.

『これ』『です』『本』 = 『これは本です』

Ki-tabu ni ch-angu.

『本』『です』『私の』 = 『本は私のです』

Mw-anamke amba-ye ana wa-toto wa-wili a-na-tembea kijiji-ni.

『女性』 アンバ関係節標識 『もつ』『子供たち』『2』『歩く』『村で』 = 『2人の子供をもつ女性が村を歩く』

Mw-anamke ana wa-toto wa-wili.

『女性』『もつ』『子供たち』『2』 = 『女性は2人の子供をもつ』

A-na-tambea kijiji-ni.

『歩く』『村で』 = 『彼女は村を歩く』

下の文では、1人称単数が先行詞であっても *M/Wa* [単数] クラスと照応する関係節標識 *-ye* が用いられている。また、アンバ関係節は、先行詞なしに文の先頭に立つことができないので、独立代名詞 *mimi* 『私』がアンバ関係節に先行する位置におかれる。

Mimi amba-ye ni-li-kwenda soko-ni ni-li-nunua vi-azi.

『私』 アンバ関係節標識 『行く』『マーケットへ』『買う』『ジャガイモ』 = 『マーケットへ行った私はジャガイモを買った』

埋め込み文の目的語が関係節化されるとき、普通、目的語接辞が関係節内の動詞複合体に付加される。目的語接辞は、既に言及されたもの、話し手と聞き手のあいだに既知のものであるとの了解があることを表す。関係節を用いたとき、先行詞が関係節の前に位置す

るため、関係節化された目的語は、既に言及されたものとなる。したがって、目的語接辞が用いられる。しかし、口語においては、関係節内の動詞複合体から目的語接辞が脱落することがある。

Hi-ki ni ki-tabu amba-cho ni-li-ki-nunua jana.

『これ』『です』『本』 アンバ関係節標識『買う』『昨日』 = 『これは私が昨日買った本です』

Hi-ki ni ki-tabu.

『これ』『です』『本』 = 『これは本です』

Ni-li-nunua ki-tabu jana.

『買う』『本』『昨日』 = 『私は本を昨日買った』

1 番目の文は、2 番目の文に 3 番目の文が関係節化されて埋め込まれた文である。埋め込み文における目的語 *ki-tabu* 『本』が関係節化されている。関係節は、先行詞 *ki-tabu* 『本』を修飾する。関係節をつくる *amba-*と関係節標識-*cho* からなる結合体は、先行詞 *ki-tabu* 『本』に後続する位置におかれる。

アンバ関係節においては、どんな名詞句であっても関係節化される。関係節化される名詞句は、目的語のほかに、主語でも、前置詞に後続する前置詞の目的語であっても、また、文中のどんな名詞句であってもかまわない。下の例では、文中の主語 *m-tu* が関係節化されている。関係節は、2 番目の文に埋め込まれている。関係節は、先行詞 *m-tu* 『人』を修飾する。関係節標識が付加される形式 *amba-*と関係節標識-*ye* からなる結合体は、先行詞 *m-tu* 『人』に後続する位置におかれる。

Hu-yu ni m-tu amba-ye a-li-nunua ki-tabu jana.

『これ』『です』『人』 アンバ関係節標識『買う』『本』『昨日』 = 『これは昨日本を買った人です』

Hu-yu ni m-tu.

『これ』『です』『人』 = 『これは人です』

M-tu a-li-nunua ki-tabu jana.

『人』『買う』『本』『昨日』 = 『人は本を昨日買った』

前置詞に後続する名詞が関係節化される時、前置詞に承前辞が付加される。下の 3 番目の文の、前置詞 *kwa* 『～で、～を用いて』に後続する名詞が関係節化されている。1 番目の文において、承前辞として 3 人称単数所有代名詞-*ake* が前置詞 *kwa* 『～で』に付加されている。

2 つ目の関係節の例では、所有を表す前置詞-*a* 『の』に後続する名詞が関係節化されて

いる。承前辞として3人称単数所有代名詞-akeが前置詞-a『の』に付加されている。

3つ目の関係節の例では、承前辞として3人称所有代名詞-akeが前置詞句 ndani ya-『野中に』に付加されている。

Hi-ki ni ki-su amba-cho ni-li-kata nyama kw-ake.

『これ』『です』『ナイフ』『切る』『肉』『で-それ』 = 『これは私が肉を切ったナイフです』

Hi-ki ni ki-su.

『これ』『です』『ナイフ』 = 『これはナイフです』

Ni-li-kata nyama kwa ki-su.

『きる』『肉』『〜で』『ナイフ』 = 『私はナイフで肉を切った』

Mw-alimu amba-ye w-anafunzi w-ake wa-li-cheza ngoma ni M-japani.

『先生』アンバ関係節標識『生徒たち』『彼の』『遊ぶ』『踊り』『です』『日本人』  
『踊った生徒たちの先生は、日本人です』

Mw-alimu ni M-japani.

『先生』『です』『日本人』 = 『先生は日本人です』

W-anafunzi wa mw-alimu wa-li-cheza ngoma.

『生徒たち』『の』『先生』『遊ぶ』『踊り』 = 『先生の生徒たちは踊った』

Ni-na-tafuta duka amba-lo m-na ma-tunda ndani y-ake.

『探す』『店』アンバ関係節標識『ある』『果物』『中に』『その』 = 『私は果物がある店を探す』

Ni-na-tafuta duka.

『探す』『店』 = 『私は店を探す』

M-na ma-tunda ndani ya duka.

『ある』『果物』『中に』『の』『店』 = 『果物が店の中にある』

上の1番目の関係節の例は、口語では用いられる文ではあるが、自然な文ではない。なぜなら、既に言及されたものは後続する動詞複合体内で目的語接辞が付加されるなどして、既に言及されたものであることを示すことが望まれる。しかし、前置詞を使った文では、目的語接辞を動詞複合体内に付加することができない。前置詞を使わないで、前置詞が果たしている文法関係を表現するやり方がスワヒリ語には存在する。そのやり方を用いるとより自然な文をつくることができる。これについては、動詞の拡張で説明する。

上の2番目や3番目の関係節の例は、不自然であってもほかに言いかえる方法がない。

[時制関係節]

時制関係節は、肯定現在継続時制標識 na-、肯定過去時制標識 li-、肯定未来時制標識 taka-（未来時制標識 ta-は、関係節標識に後続されるとき、形をかえて taka-になる）、否定時制標識 si-をともなう動詞複合体においてつくることが可能である。それ以外の時制においては、時制関係節をつくることができない。関係節標識は、時制標識 na-、li-、taka-、si-の直後の位置に付加される。否定時制は、否定を表現し、現在であるか、過去であるか、未来であるか、時間について言及しない。

現在継続時制での時制関係節の照応は、表 182 である。肯定過去時制標識 li-、肯定未来時制標識 taka-、否定時制標識 si-を、表 182 の現在継続時制標識 na-とおきかえれば、肯定過去時制、肯定未来時制、否定時制になる。

表 182 時制関係節（現在継続時制）

1 人称単数	mimi ni-na-ye-soma ki-tabu	『本を読む私』
2 人称単数	wewe u-na-ye-soma ki-tabu	『本を読むあなた』
3 人称単数	yeye a-na-ye-soma ki-tabu	『本を読む彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-na-o-soma ki-tabu	『本を読む私たち』
2 人称複数	ninyi m-na-o-soma ki-tabu	『本を読むあなたたち』
3 人称複数	wao wa-na-o-soma ki-tabu	『本を読む彼ら』
M/Wa(単数)	m-toto a-na-ye-soma ki-tabu	『本を読む子供』
M/Wa(複数)	wa-toto wa-na-o-soma ki-tabu	『本を読む子供たち』
M/Mi(単数)	m-ti u-na-o-anguka	『倒れる木』
M/Mi(複数)	mi-ti i-na-yo-anguka	『倒れる木(複数)』
Ji/Ma(単数)	tunda li-na-lo-anguka	『落ちる果物』
Ji/Ma(複数)	ma-tunda ya-na-yo-anguka	『落ちる果物(複数)』
Ki/Vi(単数)	ki-tabu ki-na-cho-anguka	『落ちる本』
Ki/Vi(複数)	vi-tabu vi-na-vyo-anguka	『落ちる本(複数)』
N(単数)	nazi i-na-yo-anguka	『落ちるやしの実』
N(複数)	nazi zi-na-zo-anguka	『落ちるやしの実(複数)』
U/N(単数)	u-kuta u-na-o-anguka	『倒れる壁』
U/N(複数)	kuta zi-na-zo-anguka	『倒れる壁(複数)』
Ku (不定詞)	kutaka ku-na-ko-leta ma-tata	『災難をもたらす望むこと』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-na-po-lala simba	『ライオンが寝てる森で』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-na-ko-lala simba	『ライオンが寝てる森で』
Mu (場所)	mwitu-ni m-na-mo-lala simba	『ライオンが寝てる森の中で』

表 183 時制関係節（M/W a [単数]）

肯定現在継続時制	m-tu a-na-ye-soma ki-tabu	『本を読む人』
肯定過去時制	m-tu a-li-ye-soma ki-tabu	『本を読んだ人』
肯定未来時制	m-tu a-taka-ye-soma ki-tabu	『本を読むだろう人』
否定時制	m-tu a-si-ye-soma ki-tabu	『本を読まない人』

Hu-yu ni mw-anamke a-na-ye-pika ch-akula.

『この』『です』『女性』『料理する』『食べ物』 = 『これは食べ物を料理する女性です』

Hu-yu ni mw-anamke.

『この』『です』『女性』 = 『これは女性です』

Mw-anamke a-na-pika ch-akula.

『女性』『料理する』『食べ物』 = 『女性は食べ物を料理する』

Hu-yu ni mw-anafunzi a-li-ye-jifunza Ki-swahili.

『この』『です』『生徒』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『これはスワヒリ語を学んだ生徒です』

Hu-yu ni mw-anafunzi.

『この』『です』『生徒』 = 『これは生徒です』

Mw-anafunzi a-li-jifunza Ki-swahili.

『生徒』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒はスワヒリ語を学んだ』

Baba a-ta-kata m-ti u-taka-o-anguka kesho.

『お父さん』『切る』『木』『倒れる』『明日』 = 『お父さんは明日倒れる木を切るだろう』

Baba a-ta-kata m-ti.

『お父さん』『切る』『木』 = 『お父さんは木を切るでしょう』

M-ti u-ta-anguka kesho.

『木』『倒れる』『明日』 = 『木は明日倒れるでしょう』

Mw-alimu a-li-wa-piga w-anafunzi wa-si-o-fanya ma-zoezi ya nyumba-ni.

『先生』『打つ』『生徒たち』『する』『練習』『の』『家で』 = 『先生は宿題をしない生徒たちを打った』

Mw-alimu a-li-wa-piga w-anafunzi.

『先生』『打つ』『生徒たち』 = 『先生は生徒たちを打った』

W-anafunzi hawa-ku-fanya ma-zoezi ya nyumba-ni.

『生徒たち』『する』『練習』『の』『家で』 = 『生徒たちは宿題をしなかった』

(もとの関係節を使った文では、生徒たちが宿題をしないのが過去なのか、いつもなのか不明である。なぜなら、否定時制標識は時間を指定できない。)

上の例では、埋め込み文の主語が関係節化されている。埋め込み文の目的語を関係節化することも可能である。関係節標識は、時制標識の直後の位置におかれる。関係節標識と動詞語幹のあいだに、目的語接辞は挿入される。下の例は、文中の目的語の位置にある名詞を関係節化している。例えば、1つめの文は、3番目の文の目的語 *ki-tabu* 『本』を関係節化して、2番目の文に埋めこんでつくられる。

Hi-ki ni ki-tabu ni-li-cho-ki-nunua jana.

『この』『です』『本』『買う』『昨日』 = 『これは私が昨日買った本です』

Hi-ki ni ki-tabu.

『この』『です』『本』 = 『これは本です』

Ni-li-ki-nunua ki-tabu jana.

『買う』『本』『昨日』 = 『私は本を昨日買った』

Hu-yu ni m-toto ni-li-ye-mw-ona mji-ni.

『この』『です』『見る』『町で』 = 『これは私が町で見た子供です』

Hu-yu ni m-toto.

『この』『です』『子供』 = 『これは子供です』

Ni-li-mw-ona m-toto mji-ni.

『見る』『子供』『町で』 = 『私は子供を町で見た』

目的語接辞は、既に言及されたもの、あるいは、話し手と聞き手のあいだで特定のものであると了解されたものを表すために用いられる。関係節においては、先行詞が文において関係節より前の位置に現れることから、埋め込み文内の目的語を関係節化されたときは、関係節よりはやく目的語が既に言及されることになるため、目的語接辞が付加される。しかし、下の例のように、口語においては、関係節標識のあとの目的語接辞は、脱落することがある。

Hi-ki ni ki-tabu ni-li-cho-nunua jana.

『この』『です』『本』『買う』『昨日』 = 『これは私が昨日買った本です』

Hu-yu ni m-toto ni-li-ye-ona mji-ni.

『この』『です』『見る』『町で』 = 『これは私が町で見た子供です』

スワヒリ語の関係節で重要なポイントは、関係節標識を含む動詞複合体と先行詞のあいだに、どんな要素も存在することができないことである。上の例では動詞複合体に先行する位置に主語として独立した名詞が存在しない。独立した名詞が主語として存在するとき、独立した名詞は、動詞複合体に後続する位置へ後置される。

例えば、下の例で、3番目の文から分かるように、主語 **mama** 『お母さん』は、埋め込まれる文において動詞複合体に先行する位置に存在する。しかし、1番目の関係節をもつ文において、先行詞 **ki-tabu** 『本』と時制関係節をつくる動詞複合体 **alichokinunua** 『買う』のあいだに、なにも要素がはいることができないために、主語 **mama** 『お母さん』は、動詞複合体に後続する位置へと移される。

2つ目の例においても、同様に、主語 **mw-alimu** 『先生』は、埋め込み文においては本来動詞複合体に先行する位置に存在する。しかし、先行詞と動詞複合体のあいだになにも要素がはいることができないため、主語 **mw-alimu** 『先生』は、動詞複合体に後置される。

**Hi-ki ni ki-tabu a-li-cho-ki-nunua mama jana.**

『この』『です』『本』『買う』『お母さん』『昨日』 = 『これはお母さんが昨日買った本です』

**Hi-ki ni ki-tabu .**

『この』『です』『本』 = 『これは本です』

**Mama a-li-ki-nunua ki-tabu jana.**

『お母さん』『買う』『本』『昨日』 = 『お母さんは本を昨日買った』

**Hu-yu ni m-toto a-li-ye-mw-ona mw-alimu mji-ni.**

『この』『です』『子供』『見る』『先生』『町で』 = 『これは先生が町で見た子供です』

**Hu-yu ni m-toto.**

『この』『です』『子供』 = 『これは子供です』

**Mw-alimu a-li-mw-ona m-toto mji-ni.**

『先生』『見る』『子供』『町で』 = 『先生は子供を町で見た』

主語の後置は、アンバ関係節においては必要ない。なぜなら、関係節をつくる形式 **amba-**と関係節標識が結合した形式（例えば、**amba-cho**）は、つねに先行詞に後続する位置におかれる。関係節をつくる形式 **amba-**と関係節標識が結合した形式と先行詞のあいだには常にどんな要素も存在することはないからである。

埋め込み文の前置詞の後に位置する名詞を、時制関係節においても関係節化することが可能である。そのとき承前辞を、名詞がもとあった場所におかなければならない。例えば、下の文は、埋め込まれた文における前置詞句から名詞 **ki-su** 『ナイフ』を関係節化して、主節に埋めこんでつくられる。そのとき、名詞 **ki-su** 『ナイフ』がもとあった場所、つまり、前置詞 **kwa** 『で』に、承前辞として3人称単数の所有代名詞-**ake** が付加される。

**Hi-ki ni ki-su ni-li-cho-kata nyama kw-ake.**

『この』『です』『ナイフ』『切る』『肉』『で-それ』 = 『これは私が肉を切ったナイフです』  
Hi-ki ni ki-su.

『この』『です』『ナイフ』 = 『これはナイフです』

Ni-li-kata nyama kwa ki-su.

『きる』『肉』『で』『ナイフ』 = 『私はナイフで肉を切る』

上の文のような、埋め込まれた文における前置詞句から名詞を関係節化することは、可能ではあるが、関係節化されて生じた文は、不自然な文である。そのような不自然な文は、めったに使用されない。

既に言及されたものは、後続する動詞複合体内に目的語接辞をともなうなどして、既に言及されたものであることが指示される。ところが、上の例では動詞複合体内に目的語接辞をとることができない。指示の問題を解消するやり方がスワヒリ語にはある。このことについては動詞の拡張で説明する。

#### [単音節動詞]

単音節動詞が時制関係節で用いられるとき、アクセントを調整するために、動詞語幹と関係節標識のあいだに、不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入される。なぜなら、関係節標識は、アクセントをもつことができない形式であるからである。もしも、目的語接辞が、動詞語幹と関係節標識のあいだに付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入しない。

下の1番目の文は、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、動詞語幹 ja-『来る』と関係節標識 ye-のあいだに挿入されている。2番目の例は、関係節内の動詞複合体が目的語接辞 m-をもっている、目的語接辞があるときには、単音節動詞であっても、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入することはない。

M-toto a-na-ye-kuja shule-ni a-na-taka ch-akula.

『子供』『来る』『学校から』『望む』『食べ物』 = 『学校から帰る子供は食べ物が欲しい』

M-ke a-na-ye-m-pa m-toto w-ake ch-akula a-mesha-pika.

『妻』『与える』『子供』『彼女の』『食べ物』『料理する』 = 『彼女の子供に食べ物を与える妻は料理をし終えている』

時制関係節を慣用的に用いる言い方がある。

mw-ezi u-li-o-pita 『先月』

mw-aka u-li-o-pita 『昨年』

wiki i-li-o-pita 『先週』



[時の副詞節『～とき』]

時の副詞節『～とき』は、時制関係節を用いて形づくられる。P a（場所）名詞クラスと照応する関係節標識 po-が用いられる。スワヒリ語において、時間の表現と場所の表現は、共通している。関係節標識の直前の位置に時制標識がおかれるが、時制関係節で使われることが可能な、現在継続時制標識 na-、過去時制標識 li-、未来時制標識 taka-（未来時制標識 ta-は、関係節標識が後続するとき、taka-になる）のみが用いられる。

Baba a-na-po-soma ki-tabu, m-ke w-ake a-na-pika ch-akula.

『お父さん』『読む』『本』『妻』『彼の』『料理する』『食べ物』 = 『お父さんが本を読むとき、彼の妻は食べ物を料理する』

Ni-li-po-kwenda soko-ni, ni-li-nunua ma-tunda.

『いく』『マーケットへ』『買う』『果物』 = 『私はマーケットへ行ったとき、果物を買った』

W-anafunzi wa-li-po-jifunza Ki-swahili darasa-ni, mw-alimu a-li-tengeneza m-tihani.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『教室で』『先生』『つくる』『試験』 = 『生徒たちがスワヒリ語を教室で学んだとき、先生は試験をつくった』

[時の副詞節『とき』における単音節動詞]

単音節動詞が時制関係節を用いて、時の副詞節を形づくるとき、アクセントを調整するために、不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と時制関係節のあいだに挿入される。なぜなら、時制関係節標識はアクセントをもてない形式だからである。もしも、目的語接辞が動詞語幹と関係節のあいだに付加されるなら、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-を挿入することはない。下の1つ目の時制関係節を使った時の副詞節は、その動詞複合体内に、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と時制関係節標識のあいだに挿入されている。2つ目の文では、時の副詞節をつくる時制関係節の動詞複合体内に目的語接辞が付加されているため、アクセント調整は必要ない。

Ni-li-po-kuja shule-ni, ni-li-mw-ona mama w-angu a-ki-pika ch-akula.

『来る』『学校から』『見る』『お母さん』『私の』『料理する』『食べ物』 = 『私が学校から帰った時、私のお母さんが食べ物を料理するのを見た』

Ni-li-kuja shule-ni.

『帰る』『学校から』 = 『私は学校から帰った』

Ni-li-mw-ona mama w-angu a-ki-pika ch-akula.

『見る』『お母さん』『私の』『料理する』『食べ物』 = 『私は私のお母さんが食べ物を料理するのを見た』

Mama a-li-po-m-pa ch-akula, m-toto w-ake a-li-furahi.

『お母さん』『与える』『食べ物』『子供』『彼女の』『喜ぶ』 = 『お母さんが彼に食べ物を与えたとき、彼女の子供は喜んだ』

Mama a-li-m-pa ch-akula.

『お母さん』『与える』『食べ物』 = 『お母さんは彼に食べ物を与えた』

M-toto w-ake a-li-furahi.

『子供』『彼女の』『喜ぶ』 = 『彼女の子供は喜んだ』

[様態の副詞節『ように』]

K i / V i 名詞クラスに所属する名詞には、様態を表す名詞がある。様態を表す名詞は、さらに、文中において副詞として働くことができる。下の例では、K i / V i クラス名詞 vi-zuri 『よく』、ki-dogo 『ちょっと』が文中で副詞の働きをしている。

Ni-na-sema Ki-swahili vi-zuri.

『話す』『スワヒリ語』『よく』 = 『私はスワヒリ語をよく話す』

M-geni a-li-kunywa pombe ki-dogo.

『客』『飲む』『ビール』『ちょっと』 = 『客はビールをちょっと飲んだ』

K i / V i クラスに所属する名詞が副詞として文中で働くことができるように、K i / V i クラスと照応する関係節標識を用いた関係節は、様態を表す名詞節をつくり、そして、様態を表す名詞節は、K i / V i クラスの名詞と同じように、文中で副詞節として働くことができる。下の例では、K i / V i [複数] と照応する関係節標識を用いた関係節は、様態を表す名詞節として主文の目的語になっている。

N-a-jua a-li-vyo-pika ch-akula.

『知る』『料理する』『食べ物』 = 『私は彼女がどのように料理したかを知っている』

Mw-anafunzi a-li-uliza ni-li-vyo-kuja hapa.

『生徒』『尋ねる』『来る』『ここ』 = 『生徒は私がどのようにここへ来たのかをたずねた』

下の例では、K i / V i クラスと照応する関係節標識を用いた関係節が、文中で副詞節の働きをしている。

Lazima u-fanye kazi ni-na-vyo-fanya.

『義務』『する』『仕事』『する』 = 『あなたは私がするように仕事をしなければならない』

Afadhali u-jifunze Ki-swahili ni-na-vyo-sema.

『好ましい』『学ぶ』『スワヒリ語』『言う』 = 『あなたは私が言うようにスワヒリ語を学

ぶのが良い』

K i / V i クラスと照応する関係節標識を用いた関係節は、しばしば、先行詞として様態を表す名詞を関係節に先行する位置にもつ。下の例では *jinsi* 『様態』が先行詞として関係節に先行する位置におかれる。

Ni-na-jua jinsi a-li-vyo-pika ch-akula.

『知る』『様態』『料理する』『食べ物』 = 『私は彼女が食べ物を料理した様を知っている』

Mw-anafunzi a-li-ni-uliza jinsi ni-li-vyo-kuja hapa.

『生徒』『尋ねる』『様態』『来る』『ここ』 = 『生徒は私がここへ来た様を私に尋ねた』

K i / V i クラスと照応する関係節標識を用いた関係節が文中で副詞節としての働きをするとき、関係節に先行する位置に、接続詞をともなうことがある。下の例では接続詞 *kama* 『ように』、*kadri* 『だけ』が関係節に先行する位置におかれる。

Ha-fany-i kazi kama ni-na-vyo-fanya.

『する』『仕事』『ように』『する』 = 『彼は私がするように仕事をしない』

Ni-ta-fanya kazi kwa bidii kadri ni-taka-vyo-weza.

『する』『仕事』『一生懸命』『だけ』『できる』 = 『私はできるだけ一生懸命仕事をするだろう』

[一般関係節]

一般関係節の特徴は、関係節標識を含む動詞複合体が時制標識をもたないか、時制標識としてゼロ形態素を用いることである。関係節標識は、動詞複合体の末尾の位置、終母音の後ろに付加される。主語接辞が動詞語幹に先行する位置に付加される。例えば、下の例では、動詞語幹 *pika* 『料理する』は、終母音 *-a* が付加されており、関係節標識は、終母音 *-a* の後ろに付加される。時制標識は、動詞語幹に先行する位置にない。主語接辞が、動詞語幹に直接付加されている。

*mw-anamke a-pika-ye*

『女性』『料理する』 = 『料理する女性』

関係節標識は、アクセントの位置をきめるために数えられる音節を形成する。スワヒリ語において、語の末尾から2つ目の音節に、つねにアクセントの位置がある。上の例で関係節標識 *ye* が動詞複合体の末尾の位置に付加されると、それに先行する動詞語幹 *pika* の末尾の音節 *ka* が語の末尾から2番目の位置になり、それがアクセントの位置になる。

一般関係節は、関係節内の動詞複合体に時制標識を含まないため、時間を指定しない出

来事や行為を表す。つまり、一般的事実などを表す。

表 184 一般関係節

1 人称単数	mimi ni-soma-ye ki-tabu	『本を読む私』
2 人称単数	wewe u-soma-ye ki-tabu	『本を読むあなた』
3 人称単数	yeye a-soma-ye ki-tabu	『本を読む彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-soma-o ki-tabu	『本を読む私たち』
2 人称複数	ninyi m-soma-o ki-tabu	『本を読むあなたたち』
3 人称複数	wao wa-soma-o ki-tabu	『本を読む彼ら』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-soma-ye ki-tabu	『本を読む子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-soma-o ki-tabu	『本を読む子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-anguka-o	『倒れる木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-anguka-yo	『倒れる木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-anguka-lo	『落ちる果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-anguka-yo	『落ちる果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-anguka-cho	『落ちる本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-anguka-vyo	『落ちる本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi i-anguka-yo	『落ちるやしの実』
N〔複数〕	nazi zi-anguka-zo	『落ちるやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta u-anguka-o	『倒れる壁』
U/N〔複数〕	kuta zi-anguka-zo	『倒れる壁〔複数〕』
Ku (不定詞)	ku-taka ku-leta-ko ma-tata	『災難をもたらす望むこと』
Pa (場所)	mwitu-ni pa-lala-po simba	『ライオンが寝る森に』
Ku (場所)	mwitu-ni ku-lala-ko simba	『ライオンが寝る森に』
Mu (場所)	mwitu-ni m-lala-mo simba	『ライオンが寝る森の中に』

上の表は、埋め込み文の主語が関係節化される例であるが、埋め込み文の目的語を関係節化することも可能である。

表 185 一般関係節

M/Wa〔単数〕	m-toto ni-penda-ye	『私が好きな子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto ni-penda-o	『私が好きな子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti ni-penda-o	『私が好きな木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti ni-penda-yo	『私が好きな木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda ni-penda-lo	『私が好きな果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ni-penda-yo	『私が好きな果物〔複数〕』

Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ni-penda-cho	『私が好きな本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu ni-penda-vyo	『私が好きな本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi ni-penda-yo	『私が好きなやしの実』
N〔複数〕	nazi ni-penda-zo	『私が好きなやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta ni-penda-o	『私が好きな壁』
U/N〔複数〕	kuta ni-penda-zo	『私が好きな壁〔複数〕』
Ku（不定詞）	ku-taka ni-penda-ko	『私が好きな望むこと』
Pa（場所）	mahali ni-penda-po	『私が好きな場所』
Ku（場所）	mahali ni-penda-ko	『私が好きな場所』
Mu（場所）	mahali ni-penda-mo	『私が好きな場所』

#### [単音節動詞]

単音節動詞が一般関係節をつくるために用いられるとき、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 *ku-*は、動詞語幹と主語接辞のあいだに挿入されない。なぜなら、関係節標識が動詞複合体の語末の位置に付加され、また、関係節標識は、アクセントの位置を決定する音節の数に数えられるため、アクセントの位置は、単音節動詞の音節にあたるからである。動詞語幹はアクセントをもつことのできる形式である。例えば、表 186 の例では、動詞語幹-*ja*『来る』がつくる音節にアクセントがある。

表 186 一般関係節（単音節動詞）

1 人称単数	mini ni- <i>ja</i> -ye shule-ni	『学校から帰る私』
2 人称単数	wewe u- <i>ja</i> -ye shule-ni	『学校から帰るあなた』
3 人称単数	yeye a- <i>ja</i> -ye shule-ni	『学校から帰る彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu- <i>ja</i> -o shule-ni	『学校から帰る私たち』
2 人称複数	ninyi m- <i>ja</i> -o shule-ni	『学校から帰るあなたたち』
3 人称複数	wao wa- <i>ja</i> -o shule-ni	『学校から帰る彼ら』

一般関係節を慣用的に用いる言い方がある。

<i>mw-ezi</i> u- <i>ja</i> -o	『来月』
<i>mw-aka</i> u- <i>ja</i> -o	『来年』
<i>wiki</i> i- <i>ja</i> -yo	『来週』

#### [動詞-*wa*『である』の関係節]

動詞-*wa*『である』を中心とする動詞複合体を用いて関係節をつくる時、現在時制以

外では、動詞-wa『である』が用いられるが、現在時制では動詞-wa『である』は、用いられない。動詞-wa『である』のかわりに、古形である動詞-li『である』が用いられる（古形とは、過去には一般的に用いられたであろうが、今では、あまり使われなくなった形式である）。

古形の動詞-li『である』が用いられるのは、肯定現在時制の関係節においてである。否定現在時制の関係節では、否定時制標識 si が動詞のように振る舞う。動詞-li『である』と否定時制標識-si を用いた現在時制の関係節は、時制関係節の構造ではなく、一般関係節の構造をもつ。一般関係節の構造をもつから、現在時制というよりも、時間を指定せず、一般的真実や事実を述べると考えるのが妥当であろうが、慣用的に現在時制に使われる。

一般関係節の構造をもつので、主語接辞は、動詞-li、あるいは、否定時制標識-si に先行する位置に付加され、また、関係節標識が、動詞-li、あるいは、否定時制標識-si に後続する位置に付加される。例えば、下の例で、動詞語幹-li『である』に主語接辞 a- が付加され、関係節標識-ye は、動詞複合体の末尾の位置におかれている。また、動詞語幹として働く否定時制標識-si に主語接辞 a- が付加され、関係節標識-ye は、動詞複合体の末尾の位置におかれる。

m-toto a-li-ye mw-anafunzi

『子供』『である』『生徒』 = 『生徒である子供』

m-toto a-si-ye mw-anafunzi

『子供』『でない』『生徒』 = 『生徒でない子供』

また、アンバ関係節であれば、現在時制であっても、動詞-li『である』や動詞-wa『である』を用いることなく、同時に、時制標識を用いることなく、繫辞 ni『です』や否定の繫辞 si『でない』をつかって関係節をつくることができる。

m-toto amba-ye ni mw-anafunzi

『子供』アンバ-関係節標識『です』『生徒』 = 『生徒である子供』

m-toto amba-ye si mw-anafunzi

『子供』アンバ-関係節標識『でない』『生徒』 = 『生徒でない子供』

動詞-wa『である』が現在継続時制以外の時制で関係節において用いられるとき、単音節動詞として振る舞う。現在継続時制をのぞく、時制関係節をつくれる時制は、肯定過去時制、肯定未来時制、否定時制である。時制によっては、時制標識と動詞語幹のあいだに、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku- が挿入される。主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。

また、アンバ関係節であれば、あらゆる時制の関係節を、動詞-wa『である』を使って

つくることができる。

表 187 は、動詞-li『である』を用いた一般関係節とアンバ関係節である。表 188 は、否定時制標識-si を動詞語幹として用いた一般関係節とアンバ関係節である。

表 187 動詞-li『である』の一般関係節（現在時制）とアンバ関係節

	一般関係節	アンバ関係節
1 人称単数	mini ni-li-ye mw-anafunzi	mimi amba-ye ni mw-anafunzi 『生徒である私』
2 人称単数	wewe u-li-ye mw-anafunzi	wewe amba-ye ni mw-anafunzi 『生徒であるあなた』
3 人称単数	yeye a-li-ye mw-anafunzi	yeye amba-ye ni mw-anafunzi 『生徒である彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-li-o w-anafunzi	sisi amba-o ni w-anafunzi 『生徒である私たち』
2 人称複数	ninyi m-li-o w-anafunzi	ninyi amba-o ni w-anafunzi 『生徒であるあなたたち』
3 人称複数	wao wa-li-o w-anafunzi	wao amba-o ni w-anafunzi 『生徒である彼ら』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-li-ye mw-anafunzi	m-toto amba-ye ni mw-anafunzi 『生徒である子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-li-o w-anafunzi	wa-toto amba-o ni w-anafunzi 『生徒である子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-li-o m-zuri	m-ti amba-o ni m-zuri 『良い木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-li-yo mi-zuri	mi-ti amba-yo ni mi-zuri 『良い木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-li-lo zuri	tunda amba-lo ni zuri 『良い果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-li-yo ma-zuri	ma-tunda amba-yo ni ma-zuri 『良い果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-li-cho ki-zuri	ki-tabu amba-cho ni ki-zuri 『良い本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-li-cyo vi-zuri	vi-tabu amba-vyo ni vi-zuri 『良い本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi i-li-yo n-zuri	nazi amba-yo ni n-zuri 『良いやしの実』
N〔複数〕	nazi zi-li-zo n-zuri	nazi amba-zo ni n-zuri 『良いやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta u-li-o m-zuri	u-kuta amba-o ni m-zuri 『良い壁』
U/N〔複数〕	kuta zili-zo n-zuri	kuta amba-zo ni n-zuri 『良い壁〔複数〕』
Ku（不定詞）	ku-taka ku-li-ko ku-zuri	ku-taka amba-ko ni ku-zuri 『良い望むこと』
Pa（場所）	mahali pa-li-po pa-zuri	mahali amba-po ni pa-zuri 『良い場所』
Ku（場所）	mahali ku-li-ko ku-zuri	mahali amba-ko ni ku-zuri 『良い場所』
Mu（場所）	mahali m-li-mo m-zuri	mahali amba-mo ni m-zuri 『良い場所』

表 188 否定時制標識-si の一般関係節（現在時制）とアンバ関係節

一般関係節                      アンバ関係節

1 人称単数	mimi ni-si-ye mw-anafunzi	mimi amba-ye si mw-anafunzi	『生徒ではない私』
2 人称単数	wewe u-si-ye mw-anafunzi	wewe amba-ye si mw-anafunzi	『生徒ではないあなた』
3 人称単数	yeye a-si-ye mw-anafunzi	yeye amba-ye si mw-anafunzi	『生徒ではない彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-si-ye w-anafunzi	sisi amba-o si w-anafunzi	『生徒ではない私たち』
2 人称複数	ninyi m-si-ye w-anafunzi	ninyi amba-o si w-anafunzi	『生徒ではないあなたたち』
3 人称複数	wao wa-si-ye w-anafunzi	wao amba-o si w-anafunzi	『生徒ではない彼ら』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-si-o mw-anafunzi	m-toto amba-ye si mw-anafunzi	『生徒ではない子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-si-ye w-anafunzi	wa-toto amba-o si w-anafunzi	『生徒ではない子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-si-o m-zuri	m-ti amba-o si m-zuri	『良くない木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-si-yo mi-zuri	mi-ti amba-yo si mi-zuri	『良くない木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-si-lo zuri	tunda amba-lo si zuri	『良くない果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-si-yo ma-zuri	ma-tunda amba-yo si ma-zuri	『良くない果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-si-cho ki-zuri	ki-tabu amba-cho si ki-zuri	『良くない本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-si-vyo vi-zuri	vi-tabu amba-vyo si vi-zuri	『良くない本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi i-si-yo n-zuri	nazi amba-yo si n-zuri	『良くないやしの実』
N〔複数〕	nazi zi-si-zo n-zuri	nazi amba-zo si n-zuri	『良くないやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta u-si-o m-zuri	u-kuta amba-o si m-zuri	『良くない壁』
U/N〔複数〕	kuta zi-si-zo n-zuri	kuta amba-zo si n-zuri	『良くない壁〔複数〕』
Ku (不定詞)	ku-taka ku-si-ko ku-zuri	ku-taka amba-ko si ku-zuri	『良くない望むこと』
Pa (場所)	mahali pa-si-po pa-zuri	mahali amba-po si pa-zuri	『良くない場所』
Ku (場所)	mahali ku-si-ko ku-zuri	mahali amba-ko si ku-zuri	『良くない場所』
Mu (場所)	mahali m-si-mo m-zuri	mahali amba-mo si m-zuri	『良くない場所』

肯定現在継続時制、肯定過去時制、肯定未来時制、否定時制であれば、動詞-wa『である』を用いて時制関係節をつくることができる。時制関係節をつくる時、動詞-wa『である』は単音節動詞なので、時制により、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 ku-が、関係節標識と動詞語幹のあいだに挿入される。肯定過去時制では、アクセント調整のための不定詞をつくる接頭辞 ku-が挿入される。

表 189 動詞-wa『である』の時制関係節（肯定過去）とアンバ関係節

時制関係節

アンバ関係節



1 人称単数	mimi ni-li-ye-kuwa mw-anafunzi	mimi amba-ye ni-li-kuwa mw-anafunzi	『生徒だった私』
2 人称単数	wewe u-li-ye-kuwa mw-anafunzi	wewe amba-ye u-li-kuwa mw-anafunzi	『生徒だったあなた』
3 人称単数	yeye a-li-ye-kuwa mw-anafunzi	yeye amba-ye a-li-kuwa mw-anafunzi	『生徒だった彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-li-o-kuwa w-anafunzi	sisi amba-o tu-li-kuwa w-anafunzi	『生徒だった私たち』
2 人称複数	ninyi m-li-o-kuwa w-anafunzi	ninyi amba-o m-li-kuwa w-anafunzi	『生徒だったあなたたち』
3 人称複数	wao wa-li-o-kuwa w-anafunzi	wao amba-o wa-li-kuwa w-anafunzi	『生徒だった彼ら』
M/Wa〔単数〕	m-toto a-li-ye-kuwa mw-anafunzi	m-toto amba-ye a-li-kuwa mw-anafunzi	『生徒だった子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-li-o-kuwa w-anafunzi	wa-toto amba-o wa-li-kuwa w-anafunzi	『生徒だった子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-li-o-kuwa m-zuri	m-ti amba-o u-li-kuwa m-zuri	『良かった木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-li-yo-kuwa mi-zuri	mi-ti amba-yo i-li-kuwa mi-zuri	『良かった木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-li-lo-kuwa zuri	tunda amba-lo li-li-kuwa zuri	『良かった果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-li-yo-kuwa ma-zuri	ma-tunda amba-yo ya-li-kuwa ma-zuri	『良かった果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-li-cho-kuwa ki-zuri	ki-tabu amba-cho ki-li-kuwa ki-zuri	『良かった本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-li-vyo-kuwa vi-zuri	vi-tabu amba-vyo vi-li-kuwa vi-zuri	『良かった本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi i-li-yo-kuwa n-zuri	nazi amba-yo i-li-kuwa n-zuri	『良かったやしの実』
N〔複数〕	nazi zi-li-zo-kuwa n-zuri	nazi amba-zo zi-li-kuwa n-zuri	『良かったやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta u-li-o-kuwa m-zuri	u-kuta amba-o u-li-kuwa m-zuri	『良かった壁』
U/N〔複数〕	kuta zi-li-zo-kuwa n-zuri	kuta amba-zo zi-li-kuwa n-zuri	『良かった壁〔複数〕』
Ku (不定詞)	ku-taka ku-li-ko-kuwa ku-zuri	ku-taka amba-ko ku-li-kuwa ku-zuri	『良かった望むこと』
Pa (場所)	mahali pa-li-po-kuwa pa-zuri	mahali amba-po pa-li-kuwa pa-zuri	『良かった』

場所』

Ku (場所) mahali ku-li-ko-kuwa ku-zuri mahali amba-ko ku-li-kuwa ku-zuri 『良かった場所』

Mu (場所) mahali m-li-mo-kuwa m-zuri mahali amba-mo m-li-kuwa m-zuri 『良かった場所』

肯定現在継続時制標識 na-をとともなう、動詞-wa『である』を用いた時制関係節は、あまり使用されないけれど、つくることは可能である。そのとき、文は、『である』ではなくて、『になる』という意味をもつ。否定時制標識 si-をとともなう、動詞-wa『である』を用いた時制関係節も、めったに使用されないけれど、つくることは可能である。

表 190 動詞-wa『である』の時制関係節

肯定現在継続時制	ni-na-ye-kuwa mw-anafunzi	『生徒になる私』
肯定過去時制	ni-li-ye-kuwa mw-anafunzi	『生徒だった私』
肯定未来時制	ni-taka-ye-kuwa mw-anafunzi	『生徒になるだろう私』
否定時制	ni-si-ye-kuwa mw-anafunzi	『生徒にならない私』

[動詞-wa na『もつ』の関係節]

動詞-wa na『もつ』は、動詞-wa『である』と前置詞、あるいは、接続詞 na『と』の組み合わせから構成される。したがって、動詞-wa na『もつ』を用いて関係節をつくる時、動詞-wa『である』と同じ振る舞いをする。

肯定現在時制においては、古形の動詞-li『である』を使った一般関係節が用いられる。否定現在時制においては、否定時制標識 si-が動詞のように振る舞う一般関係節が用いられる。どんな時制でもつくることのできるアンバ関係節であれば、現在時制においては、動詞-wa『である』と時制標識を用いずに、主語接辞を前置詞、あるいは、接続詞 na『と』に直接付加して関係節をつくる。表 191 は、現在時制における、動詞-liを使った一般関係節と、アンバ関係節である。

表 191 動詞-li na『もつ』の一般関係節（現在時制）とアンバ関係節

	一般関係節	アンバ関係節	
1 人称単数	mini ni-li-ye na ki-tabu	mimi amba-ye ni-na ki-tabu	『本をもつ私』
2 人称単数	wewe u-li-ye na ki-tabu	wewe amba-ye u-na ki-tabu	『本をもつあなた』
3 人称単数	yeye a-li-ye na ki-tabu	yeye amba-ye a-na ki-tabu	『本をもつ彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-li-o na ki-tabu	sisi amba-o tu-na ki-tabu	『本をもつ私たち』
2 人称複数	ninyi m-li-o na ki-tabu	ninyi amba-o m-na ki-tabu	『本をもつあなたたち』
3 人称複数	wao wa-li-o na ki-tabu	wao amba-o wa-na ki-tabu	『本をもつ彼ら』

M/Wa〔単数〕	m-toto a-li-ye na ki-tabu	m-toto amba-ye a-na ki-tabu	『本をもつ子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto wa-li-o na ki-tabu	wa-toto amba-o wa-na ki-tabu	『本をもつ子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti u-li-o na ma-jani	m-ti amba-o u-na ma-jani	『葉をもつ木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti i-li-yo na ma-jani	mi-ti amba-yo i-na ma-jani	『葉をもつ木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda li-li-lo na mbegu	tunda amba-lo li-na mbegu	『種をもつ果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ya-li-yo na mbegu	ma-tunda amba-yo ya-na mbegu	『種をもつ果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ki-li-cho na karatasi	ki-tabu amba-cho ki-na karatasi	『紙をもつ本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu vi-li-vyo na karatasi	vi-tabu amba-vyo vi-na karatasi	『紙をもつ本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi i-li-yo na maji	nazi amba-yo i-na maji	『水をもつやしの実』
N〔複数〕	nazi zi-li-zo na maji	nazi amba-zo zi-na maji	『水をもつやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta u-li-o na tundu	u-kuta amba-o u-na tundu	『穴をもつ壁』
U/N〔複数〕	kuta zi-li-zo na tundu	kuta amba-zo zi-na tundu	『穴をもつ壁〔複数〕』
Ku(不定詞)	ku-taka ku-li-ko na ma-tata	ku-taka amba-ko ku-na ma-tata	『災難をもつ望むこと』
Pa(場所)	mahali pa-li-po na upana	mahali amba-po pa-na upana	『広さをもつ場所』
Ku(場所)	mahali ku-li-ko na upana	mahali amba-ko ku-na upana	『広さをもつ場所』
Mu(場所)	mahali m-li-mo na upana	mahali amba-mo m-na upana	『広さをもつ場所』

否定現在時制においては、否定時制標識 si-が動詞のように振る舞う一般関係節を形づくる。主語接辞が否定時制標識 si-に付加され、関係節標識が動詞複合体の末尾の位置に付加される。主語接辞は、肯定の主語接辞が用いられる。前置詞 na『と』が主語接辞と否定時制標識と関係節標識からなる結合体に後続する位置におかれる。正書法では、前置詞 na『と』は、その結合体と切り離して書くことになっている。

どんな時制でも用いることができるアンバ関係節であれば、否定現在時制において動詞や時制標識のない関係節をつくる。否定の主語接辞を前置詞、あるいは、接続詞 na『と』に付加して、アンバ関係節標識に後続させる。

表 192 否定時制標識 si- na『もたない』の一般関係節とアンバ関係節

	一般関係節	アンバ関係節	
1 人称単数	mini ni-si-ye na ki-tabu	mimi amba-ye si-na ki-tabu	『本をもたない私』
2 人称単数	wewe u-si-ye na ki-tabu	wewe amba-ye hu-na ki-tabu	『本をもたないあなた』
3 人称単数	yeye a-si-ye na ki-tabu	yeye amba-ye ha-na ki-tabu	『本をもたない彼女、彼』
1 人称複数	sisi tu-si-o na ki-tabu	sisi amba-o hatu-na ki-tabu	『本をもたない私たち』

- 2 人称複数 ninyi m-si-o na ki-tabu ninyi amba-o ham-na ki-tabu 『本をもたないあなたたち』
- 3 人称複数 wao wa-si-o na ki-tabu wao amba-o hawa-na ki-tabu 『本をもたない彼ら』
- M/Wa〔単数〕 m-toto a-si-ye na ki-tabu m-toto amba-ye ha-na ki-tabu 『本をもたない子供』
- M/Wa〔複数〕 wa-toto wa-si-o na ki-tabu wa-toto amba-o hawa-na ki-tabu 『本をもたない子供たち』
- M/Mi〔単数〕 m-ti u-si-o na ma-jani m-ti amba-o hu-na ma-jani 『葉をもたない木』
- M/Mi〔複数〕 mi-ti i-si-yo na ma-jani mi-ti amba-yo hai-na ma-jani 『葉をもたない木〔複数〕』
- Ji/Ma〔単数〕 tunda li-si-lo na mbegu tunda amba-lo hali-na mbegu 『種をもたない果物』
- Ji/Ma〔複数〕 ma-tunda ya-si-yo na mbegu ma-tunda amba-yo haya-na mbegu 『種をもたない果物〔複数〕』
- Ki/Vi〔単数〕 ki-tabu ki-si-cho na karatasi ki-tabu amba-cho haki-na karatasi 『紙をもたない本』
- Ki/Vi〔複数〕 vi-tabu vi-si-vyo na karatasi vi-tabu amba-vyo havi-na karatasi 『紙をもたない本〔複数〕』
- N〔単数〕 nazi i-si-yo na mbegu nazi amba-yo hai-na mbegu 『種をもたないやしの実』
- N〔複数〕 nazi zi-si-zo na mbegu nazi amba-zo hazi-na mbegu 『種をもたないやしの実〔複数〕』
- U/N〔単数〕 u-kuta u-si-o na tundu u-kuta amba-o hau-na tundu 『穴をもたない壁』
- U/N〔複数〕 kuta zi-si-zo na tundu kuta amba-zo hazi-na tundu 『穴をもたない壁〔複数〕』
- Ku(不定詞) ku-taka ku-si-ko na ma-tata ku-taka amba-ko haku-na ma-tata 『災難をもたない望むこと』
- Pa(場所) mahali pa-si-po na upana mahali amba-po hapa-na upana 『広さをもたない場所』
- Ku(場所) mahali ku-si-ko na upana mahali amba-ko haku-na upana 『広さをもたない場所』
- Mu(場所) mahali m-si-mo na upana mahali amba-mo ham-na upana 『広さを持たない場所』

動詞-wa na『もつ』を用いた時制関係節は、論理的には、肯定現在継続時制標識 na-、肯定過去時制標識 li-、肯定未来時制標識 taka-（関係標識をともなうとき、未来時制標識 ta-は、taka-になる）、否定時制標識 si-をともなうときに形づくられる。しかし、現実には、動詞-wa na『もつ』は、肯定現在継続時制標識 na-をともなって用いられることはない。

否定時制標識 si-をともなって動詞-wa na『もつ』が時制関係節をつくるとき、過去、現在、未来か、時間を指定しない出来事や行為を表す。表 193 は、肯定過去時制標識 li-、肯

定未来時制標識 *taka-*、否定時制標識 *si-*をともなう動詞-*wa na* 『もつ』の時制関係節とアンバ関係節である。

表 193 動詞-*wa na* 『もつ』の時制関係節とアンバ関係節

	時制関係節	アンバ関係節	
肯定過去時制	<i>mimi ni-li-ye-kuwa na ki-tabu</i>	<i>mimi amba-ye ni-li-kuwa na ki-tabu</i>	『本をもった私』
肯定未来時制	<i>mimi ni-taka-ye-kuwa na ki-tabu</i>	<i>mimi amba-ye ni-ta-kuwa na ki-tabu</i>	『本をもつだろう私』
否定時制	<i>mimi ni-si-ye-kuwa na kitabu</i>	<i>mimi amba-ye si-na ki-tabu</i>	『本をもつことのない私』

動詞-*wa na* 『もつ』を用いた埋め込み文の目的語を関係節化することも可能である。このとき、関係節化される名詞は、前置詞、あるいは、接続詞 *na* 『と』に後続する位置から関係節化をうける。したがって、動詞-*wa na* 『もつ』を用いた埋め込み文の目的語を関係節化するには、「前置詞に後続する位置から名詞が関係節化される時、名詞がもともとあった場所に、つまり、前置詞に後続する位置に、承前辞を置かなければならない」という規則に従わなければならない。

動詞-*wa na* 『もつ』を用いた埋め込み文の目的語を関係節化することは、肯定現在時制においては、古形の動詞-*li* 『である』と前置詞 *na* を用いた一般関係節で可能である。主語接辞を動詞-*li* 『である』に付加する。時制標識はゼロ形態素か、あるいは、時制標識を付加しないことが特徴である。一般関係節であるから、動詞-*li* 『である』に後続する位置に関係節標識を付加する。前置詞 *na* 『と』は、動詞-*li* を中心とする動詞複合体に後続する位置におかれる。前置詞 *na* 『と』に、承前辞として、先行詞の名詞クラスに照応する指示関係標識を付加する。指示関係標識は、代名詞タイプ照応形式と指示関係を表す形式-*o* が結合して形づくられる。指示関係標識については、この後で解説する。

下の例で埋め込み文の目的語 *ki-tabu* 『本』が関係節化されている。関係節内の動詞複合体は、主語接辞 *ni-* 『私』、動詞-*li* 『である』と関係節標識-*cho* から成り立っている。後続する前置詞 *na* 『と』には承前辞として指示関係標識-*cho* が付加されている。

*Hi-ki ni ki-tabu ni-li-cho na-cho.*

『この』『です』『本』『もつ』 = 『これは私がもつ本です』

*Hi-ki ni ki-tabu.*

『この』『です』『本』 = 『これは本です』

*Ni-na ki-tabu.*

『もつ』『本』 = 『私は本をもつ』

前置詞に後続する位置にある名詞が関係節化される時、名詞がもともと存在した位置、すなわち、前置詞に後続する位置に承前辞が付加される。前置詞 *kwa* 『で』に後続する位置から名詞が関係節化される時、承前辞は、所有代名詞である。それは、前置詞 *kwa* 『で』が、所有表現-*a* 『の』が *Ku* クラス（場所）名詞と照応する形式に由来することによる。つまり、前置詞 *kwa* 『で』は、*Ku* クラスの照応形式 *ku-*と所有表現-*a* 『の』が結合して形成されている。したがって、承前辞として前置詞 *kw-*に付加することのできる形式は、所有表現-*a* 『の』と同じ文法的機能や分布をもつ形式でなければならない。所有代名詞-*ake* 『彼女、彼の』は、所有表現-*a* 『の』と同じ文法機能と分布をもつ形式である。

前置詞 *na* 『と』に後続する名詞が関係節化される時、前置詞 *na* 『と』に付加される承前辞は、指示関係を示す形式-*o* である。前置詞 *na* 『と』に後続することができるのは、独立した名詞か、代名詞である。あるいは、前置詞 *na* 『と』に付加されることが可能な形式は、代名詞の縮小形である。代名詞の縮小形として用いられる、指示関係を示す形式-*o* は、前置詞 *na* 『と』に付加されることが可能な形式と同じ文法機能と分布をもつ。

前置詞として同じ文法カテゴリーとして扱うものであっても、*kwa* 『で』と *na* 『と』は、その由来が異なるため、承前辞として付加される形式に違いが生じる。

否定現在時制においては、否定時制標識-*si* と前置詞 *na* を用いた一般関係節が可能である。否定時制標識-*si* が動詞のように振る舞う。主語接辞は、否定時制標識-*si* に先行する位置に付加される。関係節標識は、否定時制標識-*si* に後続する位置に付加される。前置詞 *na* 『と』に承前辞を付加して、否定時制標識を中心とする動詞複合体に後続させる。承前辞は、先行詞の名詞クラスに照応する指示関係標識を用いる。下の例では、先行詞 *ki-tabu* 『本』と照応する指示関係標識は、-*cho* である。正書法では前置詞 *na* 『と』と先行する動詞複合体は、切り離して書く。

*Hi-ki ni ki-tabu ni-si-cho na-cho.*

『この』『です』『本』『もつ』 = 『これは私がもたない本です』

*Hi-ki ni ki-tabu.*

『この』『です』『本』 = 『これは本です』

*Si-na ki-tabu.*

『もつ』『本』 = 『私は本をもたない』

現在時制以外の時制では、肯定過去時制標識 *li-*、肯定未来時制標識-*taka* をともなう、時制関係節をつかって、動詞-*wa na* 『もつ』を用いた埋め込み文の目的語を関係節化することができる。また、アンバ関係節をつかって、動詞-*wa na* 『もつ』を用いた埋め込み文の目的語を関係節化することも可能である。

時制関係節は、主語接辞を時制標識に先行する位置に付加する。関係節標識は、時制標

識の直後の位置に付加される。動詞-wa na 『もつ』は、単音節動詞なので、時制によってアクセントを調整するため、不定詞をつくる接頭辞 ku-が動詞語幹と関係節標識のあいだに挿入される。下の例は、肯定過去時制標識 li-をともなう動詞-wa na 『もつ』を用いた時制関係節である。先行詞 ki-tabu 『本』に照応する指示関係節標識-cho が承前辞として、前置詞 na 『と』に付加される。

Hiki ni ki-tabu ni-li-cho-kuwa na-cho.

『この』『です』『本』『もつ』 = 『これは私がもっていた本です』

Hi-ki ni ki-tabu.

『この』『です』『本』 = 『これは本です』

Ni-li-kuwa na ki-tabu.

『もつ』『本』 = 『私は本をもっていた』

埋め込み文における前置詞 na 『と』に後続する位置から名詞を関係節化するため、アンバ関係節においても、前置詞 na 『と』に承前辞-cho が付加される。下の文は、3 番目の文における前置詞 na 『と』の目的語の位置から、名詞 ki-tabu 『本』を関係節化して、2 番目の文に埋めこまれている。

Hi-ki ni ki-tabu amba-cho ni-li-kuwa na-cho.

『この』『です』『本』アンバ関係節標識『もつ』 = 『これは私がもっていた本です』

Hiki ni ki-tabu.

『この』『です』『本』 = 『これは本です』

Ni-li-kuwa na ki-tabu.

『もつ』『本』 = 『私は本をもっていた』

表 194 動詞-wa na 『もつ』の目的語の関係節化（肯定現在時制）

M/Wa [単数]	m-toto ni-li-ye na-ye	『私のもつ子供』
M/Wa [複数]	wa-toto ni-li-o na-o	『私のもつ子供たち』
M/Mi [単数]	m-ti ni-li-o na-o	『私のもつ木』
M/Mi [複数]	mi-ti ni-li-yo na-yo	『私のもつ木 [複数]』
Ji/Ma [単数]	tunda ni-li-lo na-lo	『私のもつ果物』
Ji/Ma [複数]	ma-tunda ni-li-yo na-yo	『私のもつ果物 [複数]』
Ki/Vi [単数]	ki-tabu ni-li-cho na-cho	『私のもつ本』
Ki/Vi [複数]	vi-tabu ni-li-vyo na-vyo	『私のもつ本 [複数]』
N [単数]	nazi ni-li-yo na-yo	『私のもつやしの実』
N [複数]	nazi ni-li-zo na-zo	『私のもつやしの実 [複数]』

U/N〔単数〕	u-kuta ni-li-o na-o	『私のもつ壁』
U/N〔複数〕	kuta ni-li-zo na-zo	『私のもつ壁〔複数〕』
Ku（不定詞）	ku-taka ni-li-ko na-ko	『私のもつ望むこと』
Pa（場所）	mahali ni-li-po na-po	『私のもつ場所』
Ku（場所）	mahali ni-li-ko na-ko	『私のもつ場所』
Mu（場所）	mahali ni-li-mo na-mo	『私のもつ場所』

表 194 動詞-wa na『もつ』の目的語の関係節化（否定現在時制）

M/Wa〔単数〕	m-toto ni-si-ye na-ye	『私にもたない子供』
M/Wa〔複数〕	wa-toto ni-si-o na-o	『私にもたない子供たち』
M/Mi〔単数〕	m-ti ni-si-o na-o	『私にもたない木』
M/Mi〔複数〕	mi-ti ni-si-yo na-yo	『私にもたない木〔複数〕』
Ji/Ma〔単数〕	tunda ni-si-lo na-lo	『私にもたない果物』
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ni-si-yo na-yo	『私にもたない果物〔複数〕』
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ni-si-cho na-cho	『私にもたない本』
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu ni-si-vyo na-vyo	『私にもたない本〔複数〕』
N〔単数〕	nazi ni-si-yo na-yo	『私にもたないやしの実』
N〔複数〕	nazi ni-si-zo na-zo	『私にもたないやしの実〔複数〕』
U/N〔単数〕	u-kuta ni-si-o na-o	『私にもたない壁』
U/N〔複数〕	kuta ni-si-zo na-zo	『私にもたない壁〔複数〕』
Ku（不定詞）	ku-taka ni-si-ko na-ko	『私にもたない望むこと』
Pa（場所）	mahali ni-si-po na-po	『私にもたない場所』
Ku（場所）	mahali ni-si-ko na-ko	『私にもたない場所』
Mu（場所）	mahali ni-si-mo na-mo	『私にもたない場所』

時制関係節は、現在継続時制標識 na-、肯定過去時制標識 li-、肯定未来時制標識 taka-（未来時制標識 ta-は、関係節標識をとまなうとき、taka-になる）、否定時制標識 si-を動詞複合体がもつときに可能である。しかし、動詞-wa na『もつ』を用いた埋め込み文の目的語を関係節化した時制関係節は、肯定過去時制標識 li-と肯定未来時制標識 taka-を動詞複合体がもつときに可能である。時制関係節において、動詞-wa『である』が現在継続時制標識 na-とともに用いられるとき、『になる』という意味になる。動詞-wa na『もつ』が現在継続時制標識 na-とともに用いられて『もつことを継続する』という意味になるのは、『もつ』という行為がもともと継続的な行為であることから、『もつ』という行為を継続時制で用いることは、不自然であろう。

表 196 動詞-wa na『もつ』の目的語の関係節（肯定過去）とアンバ関係節



	時制関係節	アンバ関係節
M/Wa〔単数〕	m-toto ni-li-ye-kuwa na-ye 『私がもっていた子供』	m-toto amba-ye ni-li-kuwa na-ye
M/Wa〔複数〕	wa-toto ni-li-o-kuwa na-o 『私がもっていた子供たち』	wa-toto amba-o ni-li-kuwa na-o
M/Mi〔単数〕	m-ti ni-li-o-kuwa na-o 『私がもっていた木』	m-ti amba-o ni-li-kuwa na-o
M/Mi〔複数〕	mi-ti ni-li-yo-kuwa na-yo 『私がもっていた木〔複数〕』	mi-ti amba-yo ni-li-kuwa na-yo
Ji/Ma〔単数〕	tunda ni-li-lo-kuwa na-lo 『私がもっていた果物』	tunda amba-lo ni-li-kuwa na-lo
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ni-li-yo-kuwa na-yo 『私がもっていた果物〔複数〕』	ma-tunda amba-yo ni-li-kuwa na-yo
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ni-li-cho-kuwa na-cho 『私がもっていた本』	ki-tabu amba-cho ni-li-kuwa na-cho
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu ni-li-vyo-kuwa na-vyo 『私がもっていた本〔複数〕』	vi-tabu amba-vyo ni-li-kuwa na-vyo
N〔単数〕	nazi ni-li-yo-kuwa na-yo 『私がもっていたやしの実』	nazi amba-yo ni-li-kuwa na-yo
N〔複数〕	nazi ni-li-zo-kuwa na-zo 『私がもっていたやしの実〔複数〕』	nazi amba-zo ni-li-kuwa na-zo
U/N〔単数〕	u-kuta ni-li-o-kuwa na-o 『私がもっていた壁』	u-kuta amba-o ni-li-kuwa na-o
U/N〔複数〕	kuta ni-li-zo-kuwa na-zo 『私がもっていた壁〔複数〕』	kuta amba-zo ni-li-kuwa na-zo
Ku (不定詞)	ku-taka ni-li-ko-kuwa na-ko 『私がもっていた望むこと』	ku-taka amba-ko ni-li-kuwa na-ko
Pa (場所)	mahali ni-li-po-kuwa na-po 『私がもっていた場所』	mahali amba-po ni-li-kuwa na-po
Ku (場所)	mahali ni-li-ko-kuwa na-ko 『私がもっていた場所』	mahali amba-ko ni-li-kuwa na-ko
Mu (場所)	mahali ni-li-mo-kuwa na-mo 『私がもっていた場所』	mahali amba-mo ni-li-kuwa na-mo

表 197 動詞-wa na 『もつ』の目的語の時制関係節（肯定未来）とアンバ関係節

	時制関係節	アンバ関係節
M/Wa〔単数〕	m-toto ni-taka-ye-kuwa na-ye 『私がもつだろう子供』	m-toto amba-ye ni-ta-kuwa na-ye
M/Wa〔複数〕	wa-toto ni-taka-o-kuwa na-o 『私がもつだろう子供たち』	wa-toto amba-o ni-ta-kuwa na-o
M/Mi〔単数〕	m-ti ni-taka-o-kuwa na-o 『私がもつだろう木』	m-ti amba-o ni-ta-kuwa na-o
M/Mi〔複数〕	mi-ti ni-taka-yo-kuwa na-yo 『私がもつだろう木〔複数〕』	mi-ti amba-yo ni-ta-kuwa na-yo
Ji/Ma〔単数〕	tunda ni-taka-lo-kuwa na-lo 『私がもつだろう果物』	tunda amba-lo ni-ta-kuwa na-lo
Ji/Ma〔複数〕	ma-tunda ni-taka-yo-kuwa na-yo 『私がもつだろう果物〔複数〕』	ma-tunda amba-yo ni-ta-kuwa na-yo
Ki/Vi〔単数〕	ki-tabu ni-taka-cho-kuwa na-cho 『私がもつだろう本』	ki-tabu amba-cho ni-ta-kuwa na-cho
Ki/Vi〔複数〕	vi-tabu ni-taka-vyo-kuwa na-vyo 『私がもつだろう本〔複数〕』	vi-tabu amba-vyo ni-ta-kuwa na-vyo
N〔単数〕	nazi ni-taka-yo-kuwa na-yo 『私がもつだろうやしの実』	nazi amba-yo ni-ta-kuwa na-yo
N〔複数〕	nazi ni-taka-zo-kuwa na-zo 『私がもつだろうやしの実〔複数〕』	nazi amba-zo ni-ta-kuwa na-zo
U/N〔単数〕	u-kuta ni-taka-o-kuwa na-o 『私がもつだろう壁』	u-kuta amba-o ni-ta-kuwa na-o
U/N〔複数〕	kuta ni-taka-zo-kuwa na-zo 『私がもつだろう壁〔複数〕』	kuta amba-zo ni-ta-kuwa na-zo
Ku（不定詞）	ku-taka ni-taka-ko-kuwa na-ko 『私がもつだろう望むこと』	ku-taka amba-ko ni-ta-kuwa na-ko
Pa（場所）	mahali ni-taka-po-kuwa na-po 『私がもつだろう場所』	mahali amba-po ni-ta-kuwa na-po
Ku（場所）	mahali ni-taka-ko-kuwa na-ko 『私がもつだろう場所』	mahali amba-ko ni-ta-kuwa na-ko
Mu（場所）	mahali ni-taka-mo-kuwa na-mo 『私がもつだろう場所』	mahali amba-mo ni-ta-kuwa na-mo

[指示関係標識]

指示関係標識は、関係節標識と同じ形をしているが、使い方は、関係節標識と異なる。指示関係標識は、指示対象の名詞のクラスにしたがって形をかえる。指示関係標識の形式は、代名詞タイプの照応形式に、指示関係を表示する形式-o が結合して形づくられる。ただし、M/W a [単数] クラスの指示関係標識は、不規則な形になっている。

表 198 指示関係標識

M/Wa [単数]	-ye
M/Wa [複数]	-o
M/Mi [単数]	-o
M/Mi [複数]	-yo
Ji/Ma [単数]	-lo
Ji/Ma [複数]	-yo
Ki/Vi [単数]	-cho
Ki/Vi [複数]	-vyo
N [単数]	-yo
N [複数]	-zo
U/N [単数]	-o
U/N [複数]	-zo
Ku (不定詞)	-ko
Pa (場所)	-po
Ku (場所)	-ko
Mu (場所)	-mo

指示関係標識は、動詞-wa na 『もつ』に後続する位置に用いられる。あるいは、現在時制においては、主語接辞と前置詞 na- 『と』からなる形式に後続する位置に用いられる。そして、既に言及された対象物を指す代名詞として用いられる。

U-na ki-tabu? Ni-na-cho.

『もつ』『本』『もつ』 = 『あなたは本をもっていますか?』『私はもっています』

U-na nazi? Ni-na-zo.

『もつ』『やしの実』『もつ』 = 『あなたはやしの実をもっていますか?』『私はもっています [複数]』

上の例は、疑問文に指示関係標識が用いられていない。このことは、対象物が話し手と聞き手のあいだで未知のものであることを示している。したがって、答えが否定であるときは、指示関係標識が指示する対象物が存在しないので、指示関係標識は用いられない。

例えば、下の例で、話し手は、聞き手に、話し手と聞き手のあいだに了解のない『本』について、具体的には、不特定のどんな『本』でも『もっているか』と尋ねている。答えが否定であるときは、指示する対象物は存在しない。

U-na ki-tabu? Si-na.

『もつ』『本』『もつ』 = 『あなたは本をもっていますか?』『私はもっていません』

指示関係標識は、動詞-wa na『もつ』に後続する位置に用いられ、既に言及されたか、話し手と聞き手のあいだに既知のものであると了解があることを表す。下の例では、疑問文で既に指示関係標識が使われている。

U-na-zo nazi? Ni-na-zo

『もつ』『やしの実』『もつ』 = 『あなたはやしの実（既に述べた）をもっていますか?』『私はもっています』

M-na-vyo vi-tabu vya Ki-swahili? Tu-na-vyo.

『もつ』『本』『の』『スワヒリ語』『もつ』 = 『あなたたちは（例の）スワヒリ語の本をもっていますか?』『私たちはもっています』

A-li-kuwa na-yo ma-tunda? A-li-kuwa-yo.

『もつ』『果物〔複数〕』『もつ』 = 『彼女、彼は（例の）果物〔複数〕をもっていましたか?』『彼女、彼はもっていました』

U-na-zo nazi? Si-na-zo.

『もつ』『やしの実』『もたない』 = 『あなたはやしの実（既に述べた）をもっていますか?』『私はもっていません』

上の例で動詞-wa na『もつ』の目的語の位置にある名詞が、既に言及されたもの、あるいは、話し手と聞き手のあいだに既知のものであるとの了解があることを表すために、疑問文に既に動詞-wa na『もつ』に指示関係標識が付加されている。

動詞の目的語の位置にある名詞が既に言及されたもの、あるいは、話し手と聞き手のあいだに既知のものであるとの了解があることを表すために、動詞-wa na『もつ』以外の動詞であれば、目的語接辞を付加した。しかし、動詞-wa na『もつ』の場合、目的語接辞を動詞語幹に先行する位置に付加することができない。したがって、動詞-wa na『もつ』の目的語の位置にある名詞が既に言及されたもの、あるいは、話し手と聞き手のあいだに既知のものであることを表すために指示関係標識が用いられる。

上の例で、動詞-wa na『もつ』の目的語の位置にある名詞が、既に言及されたもの、あるいは、話し手と聞き手のあいだに既知のものであるとの了解があることを表すために、疑問文に指示関係標識が用いられている。その疑問文に対する答えとして、否定文場用い

られるとき、否定文で言及される対象物は、既に言及されたものか、話し手と聞き手に既知のものでなければならない。したがって、上の最後の例文のように、疑問文に対する答えとしての否定文には、指示関係標識が付加されなければならない。

[分裂文（強調構文）]

指示関係標識-o を用いた分裂文（強調構文）が存在する。分裂文（強調構文）は、繫辞の強調形に指示関係標識-o が結合した形式が用いられる。指示関係標識-o は、指示する名詞が所属する名詞クラスに照応して形をかえる。

Hi-ki ndi-cho ki-tabu ni-li-cho-ki-nunua jana.

『この』強調繫辞-指示関係標識『買う』『昨日』 = 『これはまさしく私が昨日買った本です』

上の例で繫辞の強調形 ndi-と指示関係標識-cho が結合した形式 ndi-cho は、指示する名詞 ki-tabu と照応して、K i / V i クラスに照応する形式になっている。繫辞の強調形 ndi-と指示関係標識が結合した形式は、繫辞と同じ分布をもち、繫辞と同じ働きをする。ただし、強調の意味が含まれる。繫辞の強調形 ndi-と指示関係標識が結合した形式は、主語 ki-tabu hi-ki と、その補語の位置にある、関係節が後続する名詞 ki-tabu をつないでいる。

表 199 強調繫辞と指示関係標識の結合

1 人称単数	ndi-mi
2 人称単数	ndi-we
3 人称単数	ndi-ye
1 人称複数	ndi-o
2 人称複数	ndi-o
3 人称複数	ndi-o
M/Wa [単数]	ndi-ye
M/Wa [複数]	ndi-o
M/Mi [単数]	ndi-o
M/Mi [複数]	ndi-yo
Ji/Ma [単数]	ndi-lo
Ji/Ma [複数]	ndi-yo
Ki/Vi [単数]	ndi-cho
Ki/Vi [複数]	ndi-vyo
N [単数]	ndi-yo

N〔複数〕	ndi-zo
U/N〔単数〕	ndi-o
U/N〔複数〕	ndi-zo
Ku（不定詞）	ndi-ko
Pa（場所）	ndi-po
Ku（場所）	ndi-ko
Mu（場所）	ndi-mo

繫辞の強調形 ndi-と指示関係標識が結合した形式は、繫辞と同じ分布をもつ。したがって、繫辞の代わりに用いることができる。

Ki-tabu hi-ki ndi-cho ki-zuri sana.

『本』『この』繫辞-指示関係標識『良い』『大層』 = 『この本は実際大層良い』

Ki-tabu hi-ki ni ki-zuri sana.

『本』『この』『です』『良い』『大層』 = 『この本は大層良い』

上の1番目の文における繫辞の強調形 ndi-と指示関係標識が結合した形式 ndi-cho は、2番目の文における繫辞 ni『です』と同じ分布を示している。

Mw-anafunzi hu-yu ndi-ye hodari sana.

『生徒』『この』繫辞強調形-指示関係標識『優秀である』『大層』 = 『この生徒はまことに大層優秀である』

Mimi ndi-mi mw-anafunzi hodari.

『私』繫辞強調形-指示関係標識『生徒』『優秀である』 = 『私こそ優秀な生徒である』

Mw-alimu hu-yu ndi-ye m-tu ni-li-ye-mw-ona jana mji-ni.

『先生』『この』繫辞強調形-指示関係標識『見る』『昨日』『町で』 = 『この先生こそが私が昨日町で見た人です』

## 9. 7 動詞の拡張

動詞は、基本的な語幹に接尾辞を付加することによって、意味を拡張した動詞語幹を形成することができる。拡張された動詞語幹は、主語や目的語など動詞を取り巻く要素に、基本的な語幹が与える文法関係とは異なる文法関係を与えることになる。

例えば、基本的な語幹に受動の接尾辞を付加して動詞を受動拡張語幹にすると、動詞は、受動の意味をもつことになる。また、動詞が与える文法関係については、基本的動詞語幹の目的語であったものが動詞受動形の主語になり、基本的動詞語幹の主語であったものが

動詞受動語幹がつくる文では前置詞により導かれる名詞になる。基本的動詞語幹の主語であった名詞句は、前置詞の目的語の位置におかれる。

スワヒリ語の動詞拡張には、基本的なものとして、「相互形」、「状態形」、「受動形」、「適用形」、「使役形」、「反意形」がある。基本的な動詞拡張は、接尾辞を広範囲に基本語幹に、しかも、規則的に付加することができる。さらに、周辺的な動詞拡張に、「静態形」、「接触形」がある。周辺的な動詞拡張は、限られた動詞に用いられ、規則的に接尾辞が付加されるのではなく、拡張された形式が既に基本的語幹として固定化されていることが多い。

また、1つの基本的動詞語幹に複数の動詞拡張の接尾辞を付加することができる。例えば、基本動詞語幹に「適用形」の接尾辞を付加し、さらに、「受動形」の接尾辞を付加することによって、「適用形」の「受動形」拡張語幹をつくることができる。

#### 「相互形」(拡張接尾辞: -an)

「相互形」は、動詞の基本語幹に、接尾辞-an を付加することにより形づくられる。接尾辞-an に後続する位置には、終母音-a が付加される。接尾辞-an が付加された「相互形」は、動詞が表す出来事や行為が関与者(動詞が表す出来事や行為を行う者や、動詞が表す出来事や行為がふりかかる者)に相互にふりかかることを表す。

基本語幹	相互形	
piga	-pig-an-a	『打ち合う』
penda	-pend-an-a	『愛し合う』
ona	-on-an-a	『互いに会う』
kuta	-kut-an-a	『互いに会う』
jua	-ju-an-a	『知り合う』
pata	-pat-an-a	『手に入れあう』
ngoja	-ngoj-an-a	『待ちあう』
fuata	-fuat-an-a	『従いあう、一緒に行く』
shinda	-shind-an-a	『勝ちあう、競う』
saidia	-saidi-an-a	『助け合う』
ua	-u-an-a	『殺しあう』

複数の動詞拡張の接尾辞を付加することができる。複数の動詞拡張語幹が付加されるとき、動詞拡張語幹の付加される順序に規則があると思われるが、その順序はいまだに明らかにされていない。

拡張語幹	相互形	
sik-iliz-a	-siki-liz-an-a	『聞きあう』 「使役」 + 「相互」

pend-ez-a	-pend-ez-an-a	『喜ばせあう』	「使役」 + 「相互」
fund-ish-a	-fund-ish-an-a	『教えあう』	「使役」 + 「相互」
ngoj-e-a	-ngoj-e-an-a	『待ちあう』	「適用」 + 「相互」
andik-i-a	-andik-i-an-a	『書きあう』	「適用」 + 「相互」
amb-i-a	-amb-i-an-a	『言い合う』	「適用」 + 「相互」

本来他動詞であっても、「相互形」に拡張された動詞は、自動詞となる。したがって、目的語をとることはできない。主語以外の関与者を文中において表現したいときは、主語以外の関与者は、前置詞句を形成する。主語以外の関与者は、前置詞 na『と』に後続する位置におかなければならない。下の3番目の例において、主語の位置は、Juma『ジュマ』が占めているが、主語以外の関与者 m-ke w-ake『彼の妻』は、前置詞 na『と』に後続する位置におかれる。

Tu-na-pig-an-a.

『打ち合う』 = 『私たちは互いに打ち合う』

Juma na m-ke w-ake wa-na-pend-an-a.

『ジュマ』『と』『妻』『彼の』『愛し合う』 = 『ジュマと彼の妻は愛し合っている』

Juma a-na-pend-an-a na m-ke w-ake.

『ジュマ』『愛し合う』『と』『妻』『彼の』 = 『ジュマは彼の妻と愛し合っている』

Wa-li-gomb-an-a na wa-geni.

『けんかする』『と』『客たち』 = 『彼らは客たちとけんかした』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっている。アラビア語起源動詞が語幹末の位置に母音 i、あるいは、e をもっているとき、その母音 i、あるいは、e をそのまま保存し、その母音に後続する位置に接尾辞-an を付加する。接尾辞-an を付加すれば、他のバントゥ起源の動詞と同じように終母音-a を接尾辞-an のあとに付加する。

基本語幹	相互形	
rudi	-rudi-an-a	『戻りあう』
samehe	-samehe-an-a	『許しあう』

アラビア語起源動詞が語幹末尾の位置に母音 u をもっているとき、その母音 u を母音 i にかえて、そのあとに接尾辞-an を付加する。終母音-a は、接尾辞-an のあとの位置に付加する。



基本語幹            相互形  
jibu                -jib-i-an-a 『答えあう』

Tu-li-jib-i-an-a.

『答えあう』 = 『私たちは答えあった』

Lazima tu-samehe-an-e.

『義務』『許しあう』 = 『私たちは許しあわなければならない』

動詞拡張の接尾辞-an が付加されると、バントゥ起源の動詞と同じく、終母音-a が最後の動詞拡張の接尾辞-an に後続する位置に付加される。アラビア語起源動詞であっても、動詞拡張の接尾辞-an が付加され、さらに、終母音-a が付加されると、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。例えば、バントゥ起源の動詞は、接続法をつくる時、終母音-a を母音 e にかえる。上の例で、アラビア語起源の動詞 samehe『許す』に動詞拡張の接尾辞-an が付加され、さらに、終母音-a が付加されている。拡張された動詞語幹 samehe-an-a は、接続法をつくる時、その終母音-a を母音 e にかえる。

「状態形」(拡張接尾辞: -ik/-ek)

「状態形」は、動詞の基本語幹に拡張の接尾辞-ik、あるいは、-ek を付加して形づくられる。接尾辞-ik を付加するか、接尾辞-ek を付加するかは、基本語幹を構成する母音が決定的。基本語幹が母音 i, a, u から構成されれば、接尾辞-ik を付加し、母音 e, o から構成される基本語幹には接尾辞-ek が付加される。終母音-a が拡張の接尾辞-ik、あるいは、-ek のあとに付加される。

スワヒリ語は、本来、母音調和という現象をもっていた。きわめて簡単に定義すると、母音調和は、語を構成する母音に制限があることである。語を構成する母音が i, a, u からなる語と、語を構成する母音が e, o からなる語に分かれていた。1語の中に含まれる母音は、i, a, u のいずれかでなければならなかった。あるいは、1語の中に含まれる母音は、e, o、あるいは、a のいずれかでなければならなかった(母音 a はどちらのグループにも属していたかもしれない)。しかし、歴史の中でスワヒリ語の母音調和は、曖昧なものになってしまった。

動詞の拡張においてはいまだに母音調和を、スワヒリ語は保持している。

「状態形」の拡張語幹をつくるために、基本語幹の母音が i, a, u からなる場合には、接尾辞-ik を付加する。接尾辞-ik のあとに終母音-a を付加する。

基本語幹            状態形  
funga               -fung-ik-a 『閉じている』

kata	-kat-ik-a	『切れている』
vunja	-vunj-ik-a	『壊れている』
fanya	-fany-ik-a	『なしえる』

基本語幹の母音が e、o からなる場合には、接尾辞-ek を付加する。接尾辞-ek のあとに終母音-a を付加する。

基本語幹	状態形	
tosha	-tosh-ek-a	『十分である』
choma	-chom-ek-a	『焼けている』
soma	-som-ek-a	『読める』

## [2 重母音で終わる動詞]

バントゥ起源の動詞に 2 重母音で終わる動詞がある（正確には、語幹末尾の位置が母音で終わり、そのために、語幹末尾の母音が終母音-a と 2 重母音を形成する。正確には、語幹が母音で終わる動詞と呼ぶべきであろう。しかし、従来のスワヒリ語文法ではこれを 2 重母音で終わる動詞と呼んできた。従来のスワヒリ語文法の伝統にのっとり 2 重母音で終わる動詞と呼んでおく。）

動詞が 2 重母音で終わるとき、拡張の接尾辞-ik、あるいは、-ek の前に側面音 1 が挿入されることがある。また、動詞によっては、拡張の接尾辞-ik、あるいは、-ek の前に側面音 1 が挿入される形式と、挿入されない形式が自由変種として共存していることがある。ただし、接尾辞-ik が付加されるか、接尾辞-ek が付加されるかは、母音調和の規則に従う。

動詞が 2 重母音 aa、ia、あるいは、ua で終わるとき、ある動詞は、必ず、拡張の接尾辞-ik のまえに側面音 1 が挿入される。別の動詞は、拡張の接尾辞-ik のまえに側面音 1 が挿入される形式と、側面音 1 が挿入されずに拡張の接尾辞-ik が直接動詞語幹に付加される形式の両方をもつ。また、動詞によっては、側面音 1 が拡張の接尾辞-ik のまえに挿入されない形式のみをもつ。側面音 1 が挿入されないとき、拡張の接尾辞-ik は、母音 i が脱落して、接尾辞-k になる。

### 1) 側面音 1 が挿入される語幹だけの動詞

基本語幹	状態形	
twaa	twa-l-ik-a	『取れる』
kaa	ka-l-ik-a	『住める』
fua	fu-l-ik-a	『洗っている』

### 2) 側面音 1 が挿入される語幹と挿入されない語幹の両方をもつ動詞

基本語幹	状態形	
------	-----	--

sikia            siki-l-ik-a   siki-k-a   『聞こえる』  
 rarua            raru-l-ik-a   raru-k-a   『裂けている』  
 pasua            pasu-l-ik-a   pasu-k-a   『裂けている』    (pasu-l-ik-a には、『裂けやすい』  
 の意味もある)

3) 側面音1を挿入しない語幹だけの動詞

基本語幹        状態形

fungua        fungu-k-a   『開いている』    (-funga から拡張による「反意形」である)

pindua        pindu-k-a   『ひっくり返っている』

(辞書では上のように記録されているが、実際にどの動詞が変種をもつのか、あるいは、もたないか、あらためて調査する必要があるだろう)

動詞が2重母音 ea, oa で終わるとき、側面音1を拡張の接尾辞-ek のまえに挿入する形式だけをもつ動詞がある。また、別の動詞は、側面音1を拡張の接尾辞-ek のまえに挿入する形式と、側面音1を拡張の接尾辞-ek のまえに挿入しない形式の両方をもつ。側面音1を挿入しないとき、拡張の接尾辞-ek は、母音 e が脱落する。

1) 側面音1を挿入する語幹だけの動詞

基本語幹        状態形

tembea        tembe-l-ek-a   『歩ける』

2) 側面音1を挿入する語幹と、挿入しない語幹の両方をもつ動詞

基本語幹        状態形

ng'oa        ng'o-l-ek-a   ng'o-k-a   『引き抜ける』

「状態形」の拡張接尾辞は、他の拡張接尾辞とともに付加することができる。

拡張語幹        状態形

pend-ez-a        pend-ez-ek-a   『気に入っている』    「使役」+「状態」

動詞の「状態形」は、出来事や行為の状態を、その出来事や行為をなす行為者に言及することなく、述べるために用いられる。動詞の「状態形」拡張語幹を用いた文は、出来事や行為がふりかかる関与者が主語の位置を占める点で、動詞の「受動形」語幹を用いた文と似ている。異なる点は、動詞の「状態形」語幹が、出来事や行為をなす行為者に言及しないことである。一方、動詞の「受動形」語幹は、出来事や行為をなす行為者に言及する。動詞の「受動形」は、『誰によって行為がなされたか』を述べるために用いられる。動詞の「状態形」は、『不特定の誰かによって行為がなされた』か、さもなければ、『誰の関与

もなく、出来事や行為が生じた』ことを述べるために用いられる。

どんな動詞も、意味的に許されれば、「状態形」を拡張の接尾辞を付加することによって、「状態形」拡張語幹をつくることができる。

動詞の「状態形」は、出来事や行為の状態に言及する。あるいは、出来事や行為の実現可能性に言及する。動詞の「状態形」が、出来事や行為の状態を表すのか、あるいは、出来事や行為の実現可能性を表すのか、どちらの意味をもつかは、動詞がもつ意味と文脈によって決定される。

動詞の「状態形」は、出来事や行為の状態に言及するので、出来事や行為の状態アスペクトを表すのに用いられる現在完了時制標識 *me-*とともに頻繁に用いられる。また、動詞の「状態形」は、出来事や行為の実現可能性に言及することができる。動詞の「状態形」が現在完了時制標識 *me-*以外の時制標識とともに用いられるとき、動詞の「状態形」は、出来事や行為の実現可能性に言及する。例えば、下の例で1番目と2番目の文は、現在完了時制で「状態形」拡張語幹が用いられており、出来事や行為の状態を表現している。3番目と4番目の文は、現在完了時制以外の時制で「状態形」拡張語幹が用いられており、出来事や行為の実現可能性を表現している。

*Ki-kombe hi-ki ki-me-vunj-ik-a.*

『コップ』『この』『壊れる』 = 『このコップは壊れている』

*M-lango u-me-fungu-k-a.*

『ドア』『開いている』 = 『ドアはあいている』

*Kazi hii i-ta-fany-ik-a.*

『仕事』『この』『する』 = 『この仕事はやれるだろう』

*Nguo hi-zi zi-na-pasu-l-ik-a.*

『服』『この』『裂ける』 = 『この服は裂けやすい』

動詞の「状態形」がとくに出来事や行為の実現可能性に言及するとき、拡張の接尾辞 *-ikan*、あるいは、*-ekan* が用いられる。接尾辞 *-ikan* が用いられるか、接尾辞 *-ekan* が用いられるかは、動詞語幹の母音との母音調和により決定される。動詞語幹が母音 *i*、*u*、*a* からなるとき、拡張の接尾辞 *-ikan* が、動詞語幹が母音 *e*、*o* からなるとき、*-ekan* が用いられる。拡張の接尾辞に後続する位置には終母音 *-a* が付加される

2重母音で終わる動詞は、側面音 *l* が拡張の接尾辞のまえに挿入される。

基本語幹	状態形
<i>pata</i>	<i>pat-ikan-a</i> 『手に入る』
<i>taka</i>	<i>tak-ikan-a</i> 『望まれる』
<i>ona</i>	<i>on-ekan-a</i> 『見える』

weza           wez-ekan-a 『可能である』  
jua            ju-l-ikan-a 『知られる』

Ma-tunda ma-zuri ya-na-pat-ikan-a soko-ni.

『果物』『良い』『手に入る』『マーケットで』 = 『良い果物がマーケットで手に入る』

Mi-lima mi-refu i-na-on-ekan-a.

『山〔複数〕』『高い』『見える』 = 『高い山〔複数〕が見える』

[単音節動詞]

単音節動詞の数はもともと多くないので、意味的に「状態形」の拡張接尾辞を付加することが可能な単音節動詞は、さらに少ない。単音節動詞は、語幹が子音だけでなりたっているため、母音調和を決定することができない。語幹が母音をもたないため、拡張の接尾辞-ik が付加されるのか、あるいは、-ek が付加されるのか、決定できない。どちらの拡張の接尾辞が付加されるのかは、歴史的、慣習的に決定されると考えられる。

動詞 la 『食べる』の状態形は接尾辞-ik が付加されている。

基本語幹       状態形  
la              l-ik-a 『食べれる』

Ch-akula hi-ki haki-l-ik-i.

『食べ物』『この』『食べれる』 = 『この食べ物は食べれない』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞が語幹末尾の位置に母音 i をもてば、拡張の接尾辞-ik を付加すると考えられるが、そのとき、連続する 2 つの母音 i の一方が脱落する。拡張の接尾辞-ik に後続する位置に終母音-a を付加する。

下の例では、語幹末尾の位置の母音 i が脱落するとしているが、語幹末尾の母音が脱落するのか、拡張の接尾辞の母音が脱落するのか、決定できない。母音 u を語幹末尾の位置にもつアラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置の母音を脱落するので、アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置の母音が拡張接尾辞のまえで脱落するとするのが良いであろう。

基本語幹       状態形  
rudi            rud-ik-a 『戻れる』  
badili          badil-ik-a 『変われる』

アラビア語起源動詞がその語幹末尾の位置に母音 u をもてば、拡張の接尾辞-ik を付加するが、そのとき、語幹末尾の位置の母音 u が脱落する。拡張の接尾辞-ik のあとに終母音-a を付加する。

基本語幹	状態形
jibu	jib-ik-a 『答えられる』

アラビア語起源動詞がその語幹末尾の位置に母音 e をもてば、拡張の接尾辞-ek を付加するが、そのとき、連続する 2 つの母音 e の一方が脱落する。拡張の接尾辞の後に終母音 -a を付加する。

基本語幹	状態形
samehe	sameh-ek-a 『許される』

アラビア語起源動詞が 2 重母音で終わるとき、拡張の接尾辞のまえに側面音 l を挿入する。接尾辞-ik を付加するか、接尾辞-ek を付加するかは、2 重母音の末尾の位置の母音が、母音調和により決定する。拡張の接尾辞のあとに終母音-a を付加する。

基本語幹	状態形
sahau	sahau-l-ik-a 『忘れられる』

「受動形」(拡張接尾辞: -w)

「受動形」は、基本語幹に拡張の接尾辞-w を付加することによって形づくられる。接尾辞-w に母音が含まれないので、母音調和は、なんら関与しない。終母音-a が拡張の接尾辞 -w のあとに付加される。

基本語幹	受動形
pika	pik-w-a 『料理される』
sema	sem-w-a 『話される』
pata	pat-w-a 『手に入れられる』
soma	som-w-a 『読まれる』
vuta	vut-w-a 『引っ張られる』
shinda	shind-w-a 『負ける』
uza	uz-w-a 『売られる』
funga	fung-w-a 『閉じられる』
andika	andik-w-a 『書かれる』
cheza	chez-w-a 『遊ばれる』
kata	kat-w-a 『切られる』
penda	pend-w-a 『愛される』
safisha	safish-w-a 『きれいにされる』

lipa	lip-w-a	『支払われる』
lima	lim-w-a	『耕される』
panda	pand-w-a	『植えられる』
taka	tak-w-a	『望まれる』
tafuta	tafut-w-a	『探される』
leta	let-w-a	『もたらされる』

## [2 重母音で終わる動詞]

バントゥ起源の動詞には2重母音で終わる動詞がある。2重母音 aa、あるいは、ia で動詞が終わるとき、拡張の接尾辞-w のかわりに、拡張の接尾辞-iw が付加されることがある（母音 i が選ばれるのは、動詞語幹が a, i をもっているために母音調和にしたがっている）。さらに接尾辞-iw が接辞されると、接尾辞-iw のまえに側面音 1 が挿入される。

動詞が2重母音 aa、ia で終わるとき、拡張の接尾辞-l-iw が付加される形式と、接尾辞-w が付加される形式を自由変種としてもつ動詞がある。あるいは、拡張の接尾辞-w が付加される形式だけをもつ動詞がある。さらに、拡張の接尾辞-l-iw が付加される形式だけをもつ動詞がある。

下の例で、動詞 tia 『おく』は、接尾辞-l-iw が付加される拡張語幹と、接尾辞-w が付加される拡張語幹の両方をもつ動詞である。動詞 tunia 『使う』は、接尾辞-w が付加される拡張語幹だけをもつ動詞である。動詞 zaa 『生む』は、接尾辞-l-iw が付加される拡張語幹だけをもつ動詞である。

### 1) -l-iw が付加される語幹と-w が付加される語幹の両方をもつ動詞

基本語幹      受動形  
tia              ti-l-iw-a    ti-w-a      『置かれる』

### 2) -w が付加される語幹だけの動詞

基本語幹      受動形  
tumia           tumi-w-a           『使われる』

### 3) -l-iw が付加される語幹だけの動詞

基本語幹      受動形  
zaa              za-l-iw-a      『生まれる』  
kataa           kata-l-iw-a      『拒否される』  
fua              fu-l-iw-a      『洗われる』  
nunua           nunu-l-iw-a      『買われる』

動詞が2重母音 ea で終わるとき、拡張の接尾辞-ew が付加されることがある（母音 e が選ばれるのは、動詞語幹が e、o をもっているため、母音調和にしたがっている）。拡張の

接尾辞-ew が付加されると、接尾辞-ew のまえに側面音 l が挿入される。

1 つの動詞が、接尾辞-w を付加する拡張語幹と、接尾辞-l-ew を付加する拡張語幹の両方をもつ動詞がある。動詞 pokea 『受け取る』は、接尾辞-l-ew を付加する拡張語幹と接尾辞-w を付加する拡張語幹の両方をもつ。

基本語幹	受動形
pokea	poke-l-ew-a poke-w-a 『受け取られる』

動詞が 2 重母音 ua で終わるときは、つねに拡張の接尾辞-iw が付加される。接尾辞-iw が付加されると、接尾辞-iw のまえに側面音 l が挿入される。2 重母音 ua で終わる動詞は、拡張の接尾辞-w が付加されることはない。

基本語幹	受動形
nunua	nunu-l-iw-a 『買われる』
chukua	chuku-l-iw-a 『運ばれる』
chagua	chagu-l-iw-a 『選ばれる』
jua	ju-l-iw-a 『知られる』

動詞が 2 重母音 oa で終わるときは、つねに拡張の接尾辞-ew が付加される、接尾辞-ew が付加されると、接尾辞-ew のまえに側面音 l が挿入される。

基本語幹	受動形
ondoa	ondo-l-ew-a 『取り去られる』
oa	o-l-ew-a 『結婚する』
toa	to-l-ew-a 『取り出す』

#### [単音節動詞]

単音節動詞の「受動形」拡張語幹をつくるためには、拡張の接尾辞-iw か、-ew が付加される。単音節動詞は、語幹が子音だけで構成されているために、母音調和を決定することができない。したがって、拡張の接尾辞-iw を付加するか、-ew を付加するかは、歴史的に、慣習的に決定されていると考えられる。また、単音節動詞の場合、拡張の接尾辞-iw や-ew が付加されても、接尾辞-iw や-ew のまえに側面音 l は挿入されない（母音が連続するときのみ側面音 l が挿入される。単音節動詞の場合、接尾辞-iw、-ew のまえには子音が先行するため、側面音 l を挿入する必要はない）。

動詞-la 『食べる』は、拡張の接尾辞-iw が付加され、動詞-pa 『与える』、動詞-nywa 『飲む』は、拡張の接尾辞-ew が付加される。



基本語幹	受動形	
la	l-iw-a	『食べられる』
pa	p-ew-a	『与えられる』
nywa	nyw-ew-a	『飲まれる』

動詞の「受動形」拡張語幹は、受動文に用いられる。受動文では出来事や行為がふりかかる関与者を主語にする。出来事や行為をおこなう行為者は、前置詞 na『と、により』、あるいは、前置詞 kwa『により』が導く前置詞句をつくる。行為者が人間の場合には前置詞 na『により』が用いられ、行為者が人間以外のものである場合には、前置詞 kwa『により』が用いられる（ただし、前置詞 kwa『により』が導く前置詞句は、行為者なのか道具なのか、曖昧なときがある）。

Ch-akula ki-li-pik-w-a na mama w-angu.

『食べ物』『料理する』『により』『お母さん』『私の』 = 『食べ物は私のお母さんによって料理された』

Ma-tunda ya-li-nunu-l-iw-a na baba soko-ni.

『果物』『買う』『により』『お父さん』『マーケットで』 = 『果物はお父さんによりマーケットで買われた』

W-anafunzi wa-na-fundish-w-a Ki-swahili na mw-alimu.

『生徒たち』『教える』『スワヒリ語』『により』『先生』 = 『生徒たちはスワヒリ語を先生により教えられる』

Nyama zi-li-kat-w-a kwa ki-su.

『肉』『切る』『により』『ナイフ』 = 『肉はナイフで切られた』

「受動形」拡張語幹を用いた文も、「状態形」拡張語幹を用いた文も、出来事や行為がふりかかる関与者を主語にする点が共通する。「受動形」拡張語幹と「状態形」拡張語幹がつくる文の違いは、「受動形」がつくる文には前置詞に導かれる行為者が存在するのに対して、「状態形」がつくる文には行為者が言及されないことである。「状態形」拡張語幹がつくる文には、前置詞に導かれる行為者が存在しない。

動詞は、複数の拡張の接尾辞を付加されることが可能である。既に説明した「相互形」や「状態形」は、基本的に接尾辞により拡張された動詞が自動詞であるので、自動詞を「受動形」にするのは不自然である（「状態形」に拡張された動詞には他動詞も、若干、存在する）。なぜなら、受動文をつくるためには、出来事や行為がふりかかる関与者と出来事や行為をおこなう行為者の少なくとも2つ以上の関与者が必要である。したがって受動文と対応する能動文は、他動詞文になる。

一方、以下で説明する「適用形」や「使役形」は、拡張された動詞が他動詞であるので、

それらに「受動形」拡張語幹をつくる接尾辞を付加して「受動形」語幹をつくるのは、自然であり、容易である。

既になんらかの拡張の接尾辞が付加されて、拡張を受けた拡張語幹には、「受動形」語幹をつくる拡張の接尾辞-iw や-ew は、付加されない。既になんらかの拡張を受けた拡張語幹には、つねに、「受動形」をつくる拡張接尾辞-w が付加される。

例えば、以下で説明する「適用形」の拡張を受けた動詞は、2重母音 ia、あるいは、ea で終わる。たとえ動詞が2重母音 ia、あるいは、ea で終わろうとも、「受動形」の拡張接尾辞-w がつねに付加される。

拡張語幹	受動形	
pik-i-a	piki-w-a	『料理される』
pig-i-a	pig-i-w-a	『打たれる』
lim-i-a	lim-i-w-a	『耕される』
kat-i-a	kat-i-w-a	『切られる』
sem-a	sem-e-w-a	『言われる』
let-a	let-e-w-a	『もたらされる』

ただし、「適用形」の拡張に関しては、「適用形」に拡張された語幹に、さらに「適用形」をつくる拡張接尾辞を付加して、いわゆる、「2重の適用形」をつくることができる。そのとき、「受動形」の拡張接尾辞なのか、「適用形」の接尾辞なのかあいまいな事態が生じる。

拡張語幹	受動形	
pig-i-l-i-a	pigili-w-a	『打たれる』

上の例は、「適用形」pig-i-a に、さらに、「適用形」をつくる拡張接尾辞-l-i を付加された「2重の適用形」語幹に、「受動形」をつくる拡張接尾辞-w が付加されていると考えている。しかし、「適用形」pig-i-a に、「受動形」をつくる接尾辞-l-iw が接辞しているとも考えることも可能である。そこで、「適用形」pig-i-l-i-a が存在するという事実と、\*pig-i-l-i-l-iw-a のような側面音が2つ以上挿入される形式は存在しないという事実から、既に拡張を受けた動詞には、「受動形」の接尾辞-w が付加されると考える。

また、「反意形」の拡張を受けた動詞に「受動形」をつくる接尾辞を付加するとき、拡張の接尾辞-iw が用いられることがある。そして、接尾辞-iw のまえに側面音 l が挿入される。これは、「反意形」の拡張を受けた語幹が、基本語幹として固定化された結果であろう。

したがって、いったんなんらかの拡張がおこなわれた語幹を「受動形」に拡張するとき、拡張の接尾辞は、つねに、-w が付加されると考える。

拡張語幹	受動形	
Fungu-a	fungu-l-iw-a	『開けられる』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞が語幹末尾の位置に母音 *i*、あるいは、*u* をもつとき、「受動形」をつくる接尾辞-*iw* が付加される。語幹末尾の位置の母音 *i* は、「受動形」拡張接尾辞-*iw* のまえで脱落する。また、アラビア語起源動詞が語幹末の位置に母音 *u* をもつときには、母音 *u* は「受動形」接尾辞-*iw* のまえで脱落する。終母音-*a* が「受動形」拡張接尾辞-*iw* の後続する位置に付加される。

基本語幹	受動形	
fikiri	fikir-iw-a	『考えられる』
badili	badil-iw-a	『変えられる』
hitaji	hitaj-iw-a	『必要とされる』
haribu	harib-iw-a	『壊される』
jibu	jib-iw-a	『答えられる』

アラビア語起源動詞が語幹末の位置に母音 *e* をもつとき、「受動形」をつくる接尾辞-*w* が付加される。

基本語幹	受動形	
samehe	samehe-w-a	『許される』

アラビア語起源動詞が語幹末の位置に2重母音 *au* をもつとき、「受動形」をつくる接尾辞-*liw* が付加される。

基本語幹	受動形	
sahau	sahau-liw-a	『忘れられる』

アラビア語起源動詞であっても、いったん拡張の接尾辞が付加されると、バントゥ起源の動詞と同じ振る舞いをする。例えば、バントゥ起源の動詞であれば、接続法において終母音-*a* は、母音 *e* にかわる。拡張の接尾辞を付加されたアラビア語起源動詞も、接続法で終母音-*a* を *e* にかえる。

Lazima u-samehe-w-e.

『義務』『許される』 = 『あなたは許されなくてはならない』

単音節動詞であっても、いったん拡張の接尾辞が付加されると、もはや単音節動詞として扱われない。例えば、単音節動詞は、肯定過去時制において、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**が、動詞語幹と時制標識のあいだに挿入される。いったん拡張の接尾辞が付加されると、単音節動詞であってもアクセントを調整する必要はない。

下の例で、単音節動詞 **pa**『与える』は、能動文では、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**が挿入される。しかし、「受動形」の接尾辞が付加されると、アクセントを調整するための不定詞をつくる接頭辞 **ku-**は、動詞語幹と時制標識のあいだに挿入されない。

Ni-li-kupa ch-akula.

『与える』『食べ物』 = 『私は食べ物を与えた』

M-toto a-li-p-ew-a ch-akula.

『子供』『与えられる』『食べ物』 = 『子供は食べ物を与えられた』

「適用形」(拡張接尾辞: **-i/-e**)

「適用形」と呼ばれる動詞の拡張形式がある。過去のスワヒリ語文法において「前置詞形」とよばれていた。英語に翻訳したときに、動詞に前置詞 **for** や **with** や **to** を補って翻訳されたのでそのように呼ばれた。

「適用形」は、母音調和の規則に従い、動詞語幹が母音 **i**、**a**、**u** をもてば、拡張の接尾辞 **-i** を動詞語幹に付加して形づくられる。動詞語幹が母音 **e**、**o** をもてば、拡張の接尾辞 **-e** を動詞語幹に付加する。拡張の接尾辞 **-i**、**-e** のあとに、終母音 **-a** が付加される。

基本語幹	適用形
piga	pig-i-a 『ために打つ』
pika	pik-i-a 『ために料理する』
andika	andik-i-a 『ために書く』
kata	kat-i-a 『つかってくる』
pata	pat-i-a 『ために手に入れる』
fanya	fany-i-a 『ためにする』
funga	fung-i-a 『ために閉じる』
uza	uz-i-a 『に売る』
anguka	anguk-i-a 『にむかって倒れる』
vuta	vut-i-a 『にむかって引く』

語幹に母音 e、o をもつ動詞の「適用形」語幹は、拡張の接尾辞-e が付加され形成される。

基本語幹	適用形
leta	let-e-a 『にもたらず』
sema	sem-e-a 『に言う』
soma	som-e-a 『ために読む』
choma	chom-e-a 『ために焼く』

複数の拡張の接尾辞を付加することができる。

拡張語幹	適用形
fund-ish-a	fund-ish-i-a 『ために教える』 「使役」 + 「適用」
saf-ish-a	saf-ish-i-a 『ためにきれいにする』 「使役」 + 「適用」
on-esh-a	on-esh-e-a 『ために示す』 「使役」 + 「適用」
pasha	pash-i-a 『ために手に入れさせる』 「使役」 + 「適用」
fung-u-a	fung-u-l-i-a 『ために開ける』 「反意」 + 「適用」
tengen-ez-a	tengen-ez-e-a 『ためにつくる』 「使役」 + 「適用」

## [2 重母音で終わる動詞]

2 重母音で終わる動詞は、「適用形」をつくる拡張の接尾辞-i、あるいは、-e のまえに、必ず、側面音 l を挿入する。「受動形」語幹の拡張の場合に生じるような、1つの動詞が側面音を挿入する形式と側面音を挿入しない形式の2つの形式をもつことはない。

動詞が2重母音 ia、aa、ua で終わるとき、拡張の接尾辞-i のまえに側面音 l を挿入する。

基本形	適用形
kimbia	kimbi-l-i-a 『に向かって走る』
tia	ti-l-i-a 『に置く』
fagia	fagi-l-i-a 『ために掃く』
kataa	kata-l-i-a 『ために拒否する』
zaa	za-l-i-a 『に生む』
twaa	twa-l-i-a 『から取る』
chukua	chuku-l-i-a 『に運ぶ』
nunua	nunu-l-i-a 『ために買う』

動詞が2重母音 ea, oa で終わるとき、拡張の接尾辞-e のまえに側面音 l を挿入する。

基本語幹	適用形	
pokea	poke-l-e-a	『ために受け取る』
jongea	jonge-l-e-a	『へむかって動く』
ondoa	ondo-l-e-a	『へ追い払う』

2重母音で終わる動詞に「適用形」語幹をつくる拡張の接尾辞が付加されるとき、側面音 l が動詞語幹と拡張の接尾辞-i、あるいは、-e のあいだに挿入される理由は、2重母音で終わる動詞語幹がもともと側面音 l を末尾の位置にもっていたと考えられている。動詞語幹の末尾の位置にあった側面音 l は、歴史的に、母音のあいだで脱落した。その結果、現在、2重母音で終わる動詞になった。拡張の接尾辞が付加されるとき、過去に動詞語幹がもっていた側面音 l が現れる。

しかし、もともと側面音 l をもたず、本来、語幹が母音で終わる動詞も存在した。それら側面音 l をもたない動詞にまで、「適用形」の拡張の接尾辞が付加されると、側面音 l が規則的に語幹と拡張の接尾辞のあいだに挿入されるようになったと考えられる。

#### [単音節動詞]

単音節動詞の「適用形」語幹は、拡張の接尾辞-i か、接尾辞-e が付加され形成される。単音節動詞は、語幹内に母音をもっていないため、母音調和を決定することができない。どの動詞に接尾辞-i が付加されるのか、どの動詞に接尾辞-e が付加されるのかは、歴史的に、慣習的に決定されると考えられる。

単音節動詞 la 『食べる』や ja 『来る』には、接尾辞-i が付加され、動詞 nywa 『飲む』には、接尾辞-e が付加されることになっている。単音節動詞 pa 『与える』や単音節動詞-wa 『である』には、接尾辞-e を付加されることも、接尾辞-i が付加されることもある。

基本語幹	適用形	
la	l-i-a	『ために食べる』
ja	j-i-a	『に来る』
wa	w-e-a/w-i-a	『ためにある』
pa	p-e-a/p-i-a	『ために与える』
nywa	nyw-e-a	『ために飲む』

#### [アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞が母音 i、あるいは、u で終わるとき、拡張の接尾辞-i が付加される。さらに、拡張の接尾辞-i のあとに、終母音-a が付加される。このときアラビア語起源動詞

の末尾の母音 i、u は、脱落する。

基本語幹	適用形
rudi	rud-i-a 『へ戻る』
fikiri	fikir-i-a 『ために考える』
jaribu	jarib-i-a 『ために試みる』
haribu	harib-i-a 『ために壊す』
jibu	jib-i-a 『に答える』

アラビア語起源動詞が母音 e で終わるとき、拡張の接尾辞-e が付加される。さらに、終母音-a が拡張の接尾辞-e の後に付加される。このとき、アラビア語起源動詞の末尾の母音 e は、脱落する。

基本語幹	適用形
samehe	sameh-e-a 『ために許す』

アラビア語起源動詞が 2 重母音 au で終わるとき、拡張の接尾辞-li が付加される。さらに、終母音-a が拡張の接尾辞-li のあとに付加される。

基本語幹	適用形
sahau	sahau-li-a 『ために忘れる』

動詞「適用形」語幹の主な使い方には、1) 受益、2) 与格、3) 道具、場所、4) 方向、5) 完遂がある。

#### 1) 受益

動詞の「適用形」語幹は、受益者を目的語にとることができる。「適用形」語幹に拡張しない、基本語幹を用いて受益者に文中で言及すると、受益者は、前置詞 kwa 『ために』に導かれる前置詞句で表現される。

Mama a-li-m-pik-i-a m-toto w-ake ch-akula.

『お母さん』『料理する』『子供』『彼女の』『食べ物』 = 『お母さんは彼女の子供のために食べ物を料理した』

Mama a-li-pik-a ch-akula kwa m-toto w-ake.

『お母さん』『料理する』『食べ物』『ために』『子供』『彼女の』 = 『お母さんは彼女の子

供に食べ物を料理した』

上の例の1番目の文は、動詞の「適用形」語幹を用いている。受益者 **m-toto w-ake** 『彼女の子供』は、動詞の「適用形」語幹を用いた文において目的語の位置を占めている。すなわち、動詞の「適用形」**pik-i-a** 『ために料理する』が文法的格を与える位置を、受益者 **m-toto w-ake** 『彼女の子供』が占める。

動詞が文法的格を与える位置にある名詞句が既に言及されたものであるか、あるいは、既知のものであるとの了解が話し手と聞き手のあいだにあれば、動詞により文法的格を与えられる位置にある名詞と照応する目的語接辞が、動詞複合体に付加される。「人間」は、通常の会話においては、たいていの場合、既に言及されたものであるか、話し手と聞き手により既知のものであると了解されている存在であることが多い。したがって、人間のクラスに所属する名詞が動詞により文法的格を与えられる位置を占めるとき、たいてい、動詞複合体に目的語接辞が付加される。

動詞の「適用形」語幹は、受益者を目的語にとる。受益者は、たいてい、「人間」である。受益者をとる「適用形」語幹は、その複合体内に人間の名詞クラス (M/W a クラス) と照応する目的語接辞が付加されることが多い。

上の2番目の文は、「適用形」語幹ではない、いわゆる、基本語幹を用いた文である。動詞が文法的格を与える位置を目的語 **ch-akula** が占めている。もしも目的語 **ch-akula** が既に言及されたもの、あるいは、既知のものであるとの了解が話し手と聞き手のあいだにあれば、動詞複合体内に目的語接辞を付加しなければならない。しかし、既知のものでないことから、目的語接辞は付加されていない。一方、受益者は、前置詞 **kwa** 『ために』により導かれる前置詞句をつくっている。動詞が文法格を与える位置に名詞句が位置すれば、その名詞句が既知のものであるかを表現するための手段として、目的語接辞を使うことができる。しかし、前置詞句をつくっている名詞句が既知のものであるかを表現する手段は、スワヒリ語にはない(英語であれば、定冠詞がその手段として用いられる)。

しかも、受益者は、普通、人間であり、そして、話し手と聞き手のあいだで既知のものであることが、通常の会話では自然である。受益者 **m-toto w-ake** 『彼女の子供』が所有代名詞-**ake** 『彼女の』により限定されているので、いくらかは軽減されてはいるけれど、既知のものである受益者 **m-toto w-ake** 『彼女の子供』が、既知のものであることを文法的に表現されていないことが、文を少々不自然にしている。

**W-anafunzi wa-na-tu-imb-i-a nyimbo.**

『生徒たち』『ために歌う』『歌』 = 『生徒たちは私たちのために歌を歌う』

**Baba a-na-wa-fany-i-a wa-tu kazi.**

『お父さん』『ためにする』『人々』『仕事』 = 『お父さんは人々のために仕事をする』

**Wa-toto wa-na-som-e-a wa-zazi ki-tabu.**



『子供たち』『ために読む』『両親』『本』 = 『子供たちは両親のために本を読む』

Mw-anamke a-li-m-poke-l-e-a m-ume w-ake barua.

『女性』『ために受け取る』『夫』『彼女の』『手紙』 = 『女性は彼女の夫のために手紙を受け取った』

M-kulima a-li-wa-lim-i-a rafike z-ake shamba.

『農民』『ために耕す』『友達たち』『畑』 = 『農民は友達たちのために畑を耕した』

Baba a-ta-m-nunu-l-i-a m-toto w-ake ki-tabu.

『お父さん』『ために買う』『子供』『彼の』『本』 = 『お父さんは彼の子供のために本を買うでしょう』

## 2) 与格

動詞の「適用形」語幹が目的語にとる名詞句が与格名詞であるか、受益者であるか、両者の区別ははっきりしないことが多い。与格名詞であるか、受益者であるかの区別は文脈で決定される。

例えば、下の例では、動詞の「適用形」が目的語にとる名詞句は、与格名詞である可能性も、受益者である可能性もある。

Ni-li-m-let-e-a m-ke w-angu nyama.

『にもってくる』『妻』『私の』『肉』 = 『私は妻に肉をもってきた』、あるいは、『私は妻のために肉をもってきた』

Ni-li-leta nyama kwa m-ke w-angu.

『もってくる』『肉』『に』『妻』『私の』 = 『私は私の妻に肉をもってきた』

Mama a-li-wa-chuku-l-i-a wa-toto m-kate.

『お母さん』『運ぶ』『子供たち』『パン』 = 『お母さんは子供たちにパンを運んだ』、あるいは、『お母さんは子供たちのためにパンを運んだ』

Mama a-li-chukua m-kate kwa wa-toto.

『お母さん』『運ぶ』『パン』『に』『子供たち』 = 『お母さんは子供たちにパンを運んだ』

## 3) 道具、場所

動詞の「適用形」語幹は、道具格や場所格などの名詞を目的語にとる。「適用形」を用いない、いわゆる、基本語幹の動詞を用いた文において、道具格や場所格の名詞は、前置詞 *kwa* 『を用いて、において』や *katika* 『において』に導かれる前置詞句をつくる。基本語幹を使った文において前置詞句をつくっている名詞句が、「適用形」語幹を使った文では目的語の位置を占める。

Ni-na-kat-i-a ki-su nyama.

『を用いて切る』『ナイフ』『肉』 = 『私はナイフで肉を切る』

Ni-na-kata nyama kwa ki-su.

『切る』『肉』『を用いて』『ナイフ』 = 『私は肉をナイフで切る』

Ni-na-l-i-a ch-umba ch-akula.

『において食べる』『部屋』『食べ物』 = 『私は部屋で食べ物を食べる』

Ni-na-kula ch-akula katika ch-umba.

『食べる』『食べ物』『において』『部屋』 = 『私は食べ物を部屋で食べる』

上の例で 1 番目の文は、動詞が「適用形」語幹 *kat-i-*『を用いて切る』を使っている。道具格の名詞 *ki-su*『ナイフ』が動詞の目的語の位置を占めている。2 番目の文は、動詞が「適用形」ではないいわゆる基本語幹を用いている。道具格の名詞は、前置詞 *kwa*『を用いて』に導かれる前置詞句をつくっている。

スワヒリ語の文は、焦点の位置が動詞の直後にある。1 番目の文は、道具格の名詞 *ki-su*『ナイフ』に焦点があり、2 番目の文は、被動作者の名詞 *nyama*『肉』に焦点がある。したがって、1 番目の文で、話し手は、新情報として道具『ナイフ』を使うことを聞き手に伝える。おそらく話し手と聞き手のあいだに『話し手が肉を切ろうとしている』ことは、了解されている。2 番目の文で、話し手は、新情報として被動作者『肉』を切ることを聞き手に伝えようとしている。おそらく、聞き手は、『話し手が肉を切ろうとしている』ことを、はじめて知ったに違いない。

「適用形」の動詞拡張の役割は、動詞の基本語幹を用いた文で目的語の位置を占めない名詞句を、目的語の位置を占めるようにすることである。時制関係節では、関係節化できる名詞句は、主語の位置を占める名詞句か、目的語の位置を占める名詞句である。前置詞句から名詞をとりだして関係節化することはできない。したがって、いったん「適用形」動詞拡張を用いて、前置詞句をつくっていた名詞句が目的語の位置を占めるようにする。そうすれば、基本語幹を用いた文で前置詞句をつくっていた名詞句を、関係節化することができる。

Hi-ki ni ki-su ni-li-cho-ki-kat-i-a nyama.

『この』『です』『ナイフ』『を用いて切る』『肉』 = 『これは私が肉を切るのに使ったナイフです』

Hi-ki ni ki-su.

『この』『です』『ナイフ』 = 『これはナイフです』

Ni-li-kat-i-a ki-su nyama.

『を用いて切る』『ナイフ』『肉』 = 『私はナイフで肉を切った』

Ni-li-kat-a nyama kwa ki-su.

『切る』『肉』『で』『ナイフ』 = 『私はナイフで肉を切った』

埋め込み文の目的語の位置にある名詞句を主文に繰り上げることは可能であるが、埋め込み文の前置詞句の中から名詞句を主文に繰り上げることはできない。埋め込み文の前置詞句の中から名詞句を主文に繰り上げるためには、いったん、動詞の「適用形」を用いて、前置詞句の中の名詞句が埋め込み文の目的語の位置を占めるようにする。

例えば、上の3番目の文で、目的語の位置を道具格の名詞 **ki-su** 『ナイフ』が占めている。目的語の位置にある名詞句は、時制関係節において関係節化することが可能である。したがって、3番目の文の目的語の位置を占めている **ki-su** 『ナイフ』を関係節化して、2番目の文に埋めこんだのが、1番目の文である。4番目の文では道具格の名詞 **ki-su** 『ナイフ』は、目的語の位置にない。目的語の位置にない名詞句を時制関係節において関係節化することはできない。

**Ni-na-taka ki-su ch-a ku-kat-i-a nyama.**

『欲しい』『ナイフ』『の』『を用いて切る』『肉』 = 『私は肉を切るナイフが欲しい』

上の文では、動詞「適用形」の不定詞 **ku-kat-i-a** 『を用いて切る』がつくる埋め込み文において、道具格の名詞 **ki-su** 『ナイフ』が本来、目的語の位置を占めている。目的語の位置を占める名詞は、主文に繰り上げる事が可能である。

**Hi-ki ni ch-umba ku-l-i-a ch-akula.**

『この』『です』『において食べる』『部屋』 = 『これは食べ物を食べる部屋です』

上の文では場所格の名詞が、埋め込み文の目的語の位置から主文に繰り上げられている。

#### 4) 方向

動詞の「適用形」語幹は、出来事や行為が、目的語に位置を占める名詞句へ向かうことを表現する。

例えば、下の文で「適用形」語幹の目的語の位置を占める名詞句 **mama y-ake** 『彼のお母さん』に向かって『子供が走る』という出来事や行為が生じる。

**M-toto a-li-m-kimbi-l-i-a mama y-ake.**

『子供』『へ向かって走る』『お母さん』『彼の』 = 『子供は彼のお母さんへ向かって走った』

**M-toto a-li-m-tup-i-a rafiki y-ake m-pira.**

『子供』『へ向かって投げる』『友達』『彼の』『ボール』 = 『子供は彼の友達に向かってボ

ールを投げた』

Nazi i-li-mw-anguk-i-a mw-anafunzi ki-chwani.

『やしの実』『へ向かって落ちる』『生徒』『頭に』 = 『やしの実は生徒の頭に向かって落ちた』

「適用形」の拡張により生じた、出来事や行為が向かう先を表す名詞句は、「適用形」語幹が文法的格を与える位置、すなわち、目的語の位置を占める。したがって、本来自動詞であっても、拡張の接尾辞を付加されて「適用形」語幹になると、目的語をとることができる。「適用形」語幹は、他動詞として振る舞う。目的語の位置を占める名詞句は、関係節化を受けることができる。

Hu-yu ni mama y-ake a-li-m-kimbi-l-i-a m-toto.

『この』『です』『お母さん』『彼の』『へ向かって走る』『子供』 = 『これは子供が向かって走った彼のお母さんです』

「適用形」語幹が、出来事や行為が向かう先を表現する。その反対に、出来事や行為が生じるもとなる場所『から』を表現するときは、動詞の基本語幹と前置詞句を用いる。

M-toto a-li-kimbia kutoka mama y-ake.

『子供』『走る』『から』『お母さん』『彼の』 = 『子供はお母さんから走った』

#### 5) 完遂

動詞の「適用形」語幹は、出来事や行為がすっかりなしとげられることを表現する。動詞拡張は、動詞の意味を変化させる。「適用形」語幹への拡張は、出来事や行為をすっかりなしとげるという意味をもった動詞語幹をつくる。

M-toto a-li-tup-i-a ji-we mbali.

『子供』『すっかり投げる』『石』『遠くへ』 = 『子供は石をすっかり遠くへ投げた』

Baba a-li-fany-i-a kazi.

『お父さん』『する』『仕事』 = 『お父さんはすっかり仕事をした』

動詞の「適用形」語幹が出来事や行為の完遂を表現するとき、「適用形」の接尾辞をくりかえして、付加することがある。このとき既に「適用形」をつくる接尾辞が付加されて、動詞は、2重母音 ia、あるいは、ea で終わるので、2重の「適用形」接尾辞が付加される動詞は、2重母音で終わる動詞と同じ「適用形」のつくり方に従う。すなわち、「適用形」語幹をつくる拡張の接尾辞-i、-eの前に側面音 l を挿入する。

M-toto a-li-tup-i-l-i-a ji-we mbali.

『子供』『すっかり投げる』『石』『遠くへ』 = 『子供は石をすっかり遠くへ投げた』

「使役形」(-ish/-esh、-iz/-ez、末尾子音の音変化)

「使役形」をつくるやり方には、大きく 2 つのやり方がある。1 つは、「使役形」をつくる拡張の接尾辞を基本語幹に付加することである。もう 1 つのやり方は、基本語幹の末尾の位置にある子音を音変化させることである。

まず、動詞拡張の接尾辞を付加するやり方から解説する。「使役形」をつくる拡張の接尾辞には、2 つの形式がある。1 つは、「使役形」をつくる拡張の接尾辞-ish、あるいは、-esh である。「使役形」拡張の接尾辞は、母音調和にしたがう。動詞語幹が母音 i、a、u をもてば、接尾辞-ish が付加される。動詞語幹が母音 e、o をもてば、接尾辞-esh が付加される。拡張の接尾辞のあとには、終母音-a が付加される。

もう 1 つの「使役形」をつくる拡張の接尾辞は、接尾辞-iz、あるいは、-ez である。拡張の接尾辞は、母音調和にしたがう。動詞語幹が母音 i、a、u をもてば、接尾辞-iz が、母音 e、o をもてば、接尾辞-ez が付加される。拡張の接尾辞のあとには、終母音-a が付加される。

どの動詞に接尾辞-ish、-esh が付加されるか、あるいは、接尾辞-iz、-ez が付加されるかは、予測できない。しかし、接尾辞-ish、-esh が付加される動詞が多い。接尾辞-iz、-ez が付加される動詞は多くない。また、接尾辞-ish、-esh が付加される形式と、接尾辞-iz、-ez が付加される形式の両方をもつ動詞もある。

接尾辞-ish/-esh を付加する動詞

基本語幹	使役形	
pika	pik-ish-a	『料理させる』
piga	pig-ish-a	『打たせる』
andika	andik-ish-a	『書かせる』
funga	fung-ish-a	『閉めさせる』
vuta	vut-ish-a	『ひかせる』
sema	sem-esh-a	『話させる』
soma	som-esh-a	『読ませる』
weza	wez-esh-a	『可能にする』

接尾辞-iz/-ez を付加する動詞

基本語幹	使役形	
kata	kat-iz-a	『切らせる』
fanya	fany-iz-a	『させる』
uma	um-iz-a	『痛がらせる』

penda	pend-ez-a	『愛させる』
tengenea	tengen-ez-a	『つくる』

接尾辞-**ish** を付加する形式と接尾辞-**iz** を付加する形式の両方をもつ動詞

基本語幹	使役形	
pata	pat-ish-a pat-iz-a	(pash-a) 『手に入れさせる』

## [2 重母音で終わる動詞]

2 重母音で終わる動詞は、2 つのグループに分かれる。1 つは、2 重母音のあいだに拡張の接尾辞-**z** を挿入するだけの動詞と、拡張の接尾辞-**ish** と動詞語幹のあいだに側面音を挿入する動詞である。

2 重母音のあいだに挿入される拡張の接尾辞-**z** は、本来、基本語幹の末尾の子音であったものが、後で説明する拡張の接尾辞\*-**i** によって音変化したものであると考えられる。2 重母音で終わる動詞は、過去には、母音のあいだに、今では失われてしまった子音があった。失われた子音が、音変化により **z** で出現していると考えている。

また、わずかな動詞が、拡張の接尾辞-**z** のかわりに接尾辞-**sh** を挿入することがある。

## -z を挿入する動詞

基本語幹	使役形	
kimbia	kimbi-z-a	『走らせる』
kataa	kata-z-a	『禁止する』
twaa	twaa-z-a	『とらせる』
chukua	chuku-z-a	『運ばせる』
nunua	nunu-z-a	『買わせる』
jaa	ja-z-a	『満たす』
elea	ele-z-a	『説明する』
pungua	pungu-z-a	『減らす』
jongea	jonge-z-a	『動かす』
ondoa	ondo-sh-a	『立ち去らせる』

## -ish を挿入する動詞

基本語幹	使役形	
tia	ti-l-ish-a	『置かせる』
zaa	za-l-ish-a	『生ませる』
kaa	ka-l-ish-a	『座らせる』
jua	ju-l-ish-a	『知らせる』

2重母音で終わる動詞の中で、たんに2重母音のあいだに拡張の接尾辞-z(ごくたまに-sh)を挿入するだけの動詞は、歴史的に、本来、語幹が側面音1で終わっていたと考えられる。そして、時間のながれの中で側面音1は、母音のあいだで脱落した。そして、後で説明する「使役形」をつくる拡張の接尾辞\*-iが付加されたときに、本来、語幹の末尾の位置にあった側面音1が子音zに音変化した。このことから、拡張の接尾辞-zを2重母音のあいだに挿入する「使役形」は、本来は、後で説明する語幹末尾の位置の子音が音変化する「使役形」と考えられる。しかし、現在では、語幹の末尾の位置に側面音1が存在したことは、スワヒリ語の話し手は意識しない。また、もともと基本語幹がその語幹末尾の位置に側面音1をもたず、母音で終わっていた動詞も、現在は、「使役形」をつくる接尾辞-zが付加されている可能性がある。

拡張の接尾辞-ishを付加するとき、2重母音で終わる動詞は、動詞語幹と拡張の接尾辞のあいだに側面音1を挿入する。この側面音1は、本来、語幹末尾の位置の子音であったと考えられる。

「適用形」の拡張の接尾辞が付加されるときには、本来、側面音1を語幹の末尾の位置にもたない動詞までもが、規則的に「適用形」の拡張の接尾辞のまえに側面音1を挿入する。しかし、「使役形」をつくる拡張の接尾辞が付加される時、動詞がもともと語幹末尾の位置に側面音1をもつ動詞だけが、本来、もっていた側面音1を拡張の接尾辞のまえに挿入する。もともと、語幹末尾が母音で終わっていたと考えられる動詞は、たんに拡張の接尾辞-zが付加される。

[単音節動詞]

単音節動詞の「使役形」は、「使役形」をつくる拡張の接尾辞-ish、あるいは、-eshが付加されて形づくられる。単音節動詞は、母音調和を決定する母音をもたないので、接尾辞-ishが付加されるか、接尾辞-eshが付加されるか予測できない。

基本語幹	使役形	
la	l-ish-a	『食事を与える』
fa	f-ish-a	『死なせる』
nywa	nyw-esh-a	『飲ませる』

[アラビア語起源動詞]

アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもつ。アラビア語起源動詞は、母音 i、あるいは、u で終わるとき、拡張の接尾辞-ish が付加される。そのとき、語幹末尾の母音は、脱落する。さらに、拡張の接尾辞のあとには、終母音-a が付加される。

母音 e で終わるアラビア語起源動詞は、接尾辞-esh が付加される。そのとき、語幹末尾の母音は、脱落する。さらに拡張の接尾辞のあとに終母音-a が付加される。

2 重母音 au で終わるアラビア語起源動詞は、拡張の接尾辞-lish が付加され、さらにそのあとに終母音-a が付加される。

基本語幹	使役形	
rudi	rud-ish-a	『戻らせる』
fikiri	fikir-ish-a	『考えさせる』
jaribu	jarib-ish-a	『試みさせる』
jibu	jib-ish-a	『答えさせる』
samehe	sameh-esh-a	『許させる』
sahau	sahau-lish-a	『忘れさせる』

動詞のいわゆる基本語幹の末尾の子音を音変化させて、「使役形」をつくる。動詞の基本語幹が末尾の位置に子音 p をもてば、子音 p を fy にかえる。そして、その末尾の子音のあとに終母音-a を付加する。基本語幹が末尾の位置に子音 t をもつとき、その子音 t を子音 sh にかえる。末尾の位置に子音 l をもつとき、その子音 l を子音 z にかえる。末尾の位置に子音 n をもてば、その子音 n を子音 ny にかえる。末尾の位置に子音 w をもてば、その子音 w を子音 vy にかえる。

表 200 「使役形」語幹末尾の子音の音変化

p	→	fy
t	→	sh
k	→	sh
l	→	z
n	→	ny
w	→	vy

おそらく、歴史的には「使役形」をつくる拡張の接尾辞\*-i が存在したであろう。拡張の接尾辞\*-i が、先行する基本語幹の末尾の子音を表 199 のように音変化させる原因となった。現在では、その拡張の接尾辞\*-i の存在の証拠はない。

基本語幹	使役形	
ogopa	ogofy-a	(ogofisha もある) 『恐れさせる』
pata	pash-a	『手に入れさせる』
pita	pish-a	『通り過ぎさせる』



waka	wash-a	『燃やす』
anguka	angush-a	『倒す』
amka	amsh-a	『起こす』
chemka	chemsh-a	『沸かす』
lala	laz-a	『寝かす』 (唯一、側面音 l が母音間で保持されている)
ona	ony-a	『警告する』
gawana	gawany-a	『分ける』
kana	kany-a	『禁止する』
pona	pony-a	『救う』
lewa	levy-a	『酔わせる』
nawa	navy-a	(naw-ish-a もある) 『洗濯させるために水を運ぶ』

動詞の「使役形」の基本的意味は、出来事や行為が生じるように、出来事や行為をおこなう対象物に働きかける行為を表す。

例えば、下の例で 3 番目の文は、出来事を意味する動詞-jaa『満ちる』の「使役形」語幹-jaza『満たす』を用いている。「使役形」語幹-jaza『満たす』は、被使役者（水）の-jaa『満ちる』という出来事が生じるように、使役者（お母さん）が被使役者（水）などに働きかける行為を表す。

下の最後の文は、行為を意味する動詞-imba『歌う』の「使役形」語幹-imbisha『歌わせる』を用いている。「使役形」語幹-imbisha『歌わせる』は、被使役者（生徒）が imba『歌う』という行為をおこなうように、使役者（先生）が被使役者（生徒）に働きかける行為を表す。

1 番目、2 番目、4 番目、6 番目の文のように、基本語幹を用いた文で主語の位置を占める名詞句は、「使役形」を用いた典型的な「使役」文では目的語の位置を占めている。

Maji ya-me-jaa mtungi-ni.

『水』『満ちる』『水がめに』 = 『水は水がめに満ちている』

M-tingi u-me-jaa.

『水がめ』『満ちる』 = 『水がめは満ちている』

Mama a-li-u-ja-z-a m-tungi.

『お母さん』『満たす』『水がめ』 = 『お母さんは水がめを満たした』

Maji ya-me-chemka.

『水』『沸く』 = 『水が沸いている』

Mama a-li-chemsh-a maji.

『お母さん』『沸かす』『水』 = 『お母さんは水を沸かした』

W-anafunzi wa-na-imba.

『生徒たち』『歌う』 = 『生徒たちは歌う』

Mw-alimu a-na-wa-imb-ish-a w-anafunzi.

『先生』『歌わせる』『生徒たち』 = 『先生は生徒たちを歌わせた』

動詞の「使役形」語幹は、上記の基本的な「使役」の意味から派生する様々なニュアンス、例えば、「許可」や「勇気づけ」や「強迫」などの意味をもつ。

Moto u-li-wa-kimbi-z-a wa-nyama mwitu-ni.

『火』『走らせる』『動物たち』『森に』 = 『火は森の動物たちを走らせた（強迫して）』

Mw-alimu a-li-mw-ingi-z-a mw-anafunzi ofisi-ni.

『先生』『入らせる』『生徒』『部屋へ』 = 『先生は生徒を部屋へ入れた（許可して）』

Mw-alimu a-li-mw-ony-a mw-anafunzi.

『先生』『警告する』『生徒』 = 『先生は生徒に警告した』

動詞の「使役形」には、「使役」の意味では全く説明できない使い方があり、「使役形」をつくる拡張の接尾辞が付加された派生動詞は、基本語幹の意味を「強調」する意味をもつことがある。けっして「使役」の意味をもたない。また、基本語幹を用いた文の主語が、「使役形」語幹を用いた文の目的語の位置を占めることもない。

W-anafunzi wa-na-jib-ish-a ma-swali.

『生徒たち』『詳しく答える』『質問』 = 『生徒たちは質問に詳しく答えた』

Wa-toto wa-li-nyama-z-a.

『子供たち』『とても静かにする』 = 『子供たちはとても静かにしていた』

Wa-tu wa-li-m-sikiliz-a ki-ongozi.

『人々』『聞く』『指導者』 = 『人々は指導者に耳を傾けた』

また、動詞の「使役形」語幹を用いずに、従属文を用いて使役文をつくることができる。主文は、動詞-fanya『する』を中心にした動詞複合体を用い、従属文に接続法を用いることにより使役節をつくることができる。この使役文は、使役者が主節の主語となり、被使役者が従属節をつくる動詞複合体の主語になる。従属節については、文のなりたちの箇所解説する。

下の文で主節は動詞-fanya『する』を中心にする動詞複合体を用いている。従属節 w-anafunzi wa-imb-e ny-imbo ny-ingi『生徒たちは多くの歌を歌うように』は、動詞-imba『歌う』からなる動詞複合体に接続法が用いられている。

Mw-alimu a-li-wa-fanya w-anafunzi wa-imb-e ny-imbo ny-ingi.

『先生』『する』『生徒たち』『歌う』『歌』『多くの』 = 『先生は生徒たちに多くの歌を歌わせた』

[周辺の動詞拡張]

スワヒリ語には、上で説明した動詞拡張のほかに、あまり生産性の高くない周辺のとも呼べる動詞拡張が存在する。周辺の動詞拡張には、「反意形」、「静態形」、「接触形」がある。

「反意形」

「反意形」は、基本語幹が母音 i、e、a、u をもつとき、「反意形」をつくる接尾辞-u が付加される。また、基本語幹が母音 o からなるとき、「反意形」をつくる接尾辞-o が付加されて、形づくられる。「反意形」の接尾辞のあとに終母音-a が付加される。基本語幹と「反意形」が規則的に対になっていないこともある。

基本語幹		反意形	
funga	『閉じる』	fung-u-a	『開く』
kunja	『折りたたむ』	kunj-u-a	『折っているものを開く』
fuma	『織る』	fum-u-a	『ほどく』
vaa	『着る』	v-u-a	『脱ぐ』
funika	『ふたをする』	fun-u-a	『ふたをとる』
fundika	『結ぶ』	fund-u-a	『結び目をほどく』
choma	『突き刺す』	chom-o-a	『引っこ抜く』

動詞の「反意形」は、基本語幹の反対の意味をもつ。例えば、動詞 funga 『閉じる』に、「反意形」をつくる接尾辞-u を付加すると、反対の意味をもつ動詞 fung-u-a 『開く』になる。動詞の「反意形」は、基本語幹の意味を反対にするだけである。「受動形」、「状態形」、「適用形」、「使役形」がはたす統語論的な役割をもたない。例えば、「受動形」を用いた文では、基本語幹を用いた文の目的語の位置を占めていた名詞句が「受動形」の文の主語の位置を占める。「反意形」は、そのような統語論的な役割をもたない。「反意形」を用いた文の主語は、基本語幹を用いた文の主語の位置を占める。

Baba a-li-fung-u-a m-lango.

『お父さん』『開ける』『ドア』 = 『お父さんはドアを開けた』

Baba a-li-funga m-lango.

『お父さん』『閉める』『ドア』 = 『お父さんはドアを閉めた』

### 「静態形」

「静態形」は、基本語幹に、「静態形」をつくる拡張接尾辞-am が付加されて形づくられる。「静態形」をつくる拡張接尾辞のあとに終母音-a が付加される。「静態形」が由来する基本語幹が既に使われなくなったり、古形として保存されている場合がある。

基本語幹	静態形
funga	fung-am-a 『固定している』
ficha	fich-am-a 『隠されている』
	in-am-a 『腰が曲がっている』
	sim-am-a 『立つ』
	taz-am-a 『じっと見る』

「静態形」は、出来事や行為が静止した状態を意味する。

W-anafunzi wa-na-m-taz-am-a mw-alimu.

『生徒たち』『じっと見る』『先生』 = 『生徒たちは先生をじっと見ている』

Mw-embe m-kubwa u-me-simama mbele ya nyumba.

『マンゴーの木』『大きな』『立つ』『まえ』『の』『家』 = 『大きなマンゴーの木が家の前に立っている』

### 「接触形」

「接触形」は、基本語幹が母音 i、e、a、u をもつとき、基本語幹に拡張の接尾辞-at を付加する。また、基本語幹が母音 o からなるときは、基本語幹に接尾辞-ot を付加する。終母音-a が拡張の接尾辞の後に付加される。拡張のもとになった基本語幹が失われてしまっていることがある。

基本語幹	接触形
kama	kam-at-a 『握る』
fumba	fumb-at-a 『手でかこう』
okoa	ok-ot-a 『つまみあげる』(語幹末尾の母音は脱落する)
	sok-ot-a 『振る』

「接触形」は、出来事や行為が一過性でなく、しかも、出来事や行為を引き起こす動作者が出来事や行為が生じる対象物と接触していることを意味する。

Mw-anafunzi a-na-kam-at-a ki-tabu.

『生徒』『握る』『本』 = 『生徒は本を握っている』

Mama a-li-sok-ot-a kamba.

『お母さん』『縊る』『ひも』 = 『お母さんは紐を振った』

#### [動詞の拡張と焦点化]

動詞の拡張は、スワヒリ語文法の中で重要な役割をもつ。しかも、スワヒリ語において、動詞の拡張と焦点化は、密接な関係をもつ。

スワヒリ語の節において、動詞に後続する位置に焦点がある。普通、新情報が焦点の位置で述べられる。なんら強調のない節においては、自然な情報構造は、旧情報が新情報に先行する位置におかれる。例えば、なんら強調のない場合、スワヒリ語の単純な他動詞からなる節は、主語、動詞複合体、目的語という語順をとるので、動詞複合体をはさんで、旧情報がおかれる位置と主語の位置が一致し、新情報がおかれる位置と目的語の位置が一致することになる。

拡張を受けない単純な他動詞からなる動詞複合体は、その後続する位置を占める名詞句に、目的語として文法的格を与える。

Mama a-li-pika ch-akula.

『お母さん』『料理する』『食べ物』 = 『お母さんは食べ物を料理した』

例えば、上の文で、拡張を受けない単純な他動詞からなる動詞複合体 a-li-pika 『料理する』は、受動者 ch-akula 『食べ物』を動詞が文法格を与える関与者として動詞複合体に後続する位置にもつ。受動者 ch-akula 『食べ物』は、動詞複合体に後続する位置に、すなわち、焦点の位置を占めている。受動者 ch-akula 『食べ物』は、新情報として話し手が聞き手に伝えたい情報である。話し手と聞き手のあいだでは、動詞複合体に先行する位置を占めている主語 mama 『お母さん』については、既知の情報である。話し手は、既知のものである主語 mama 『お母さん』が『料理する』行為について、なにか新しい情報を、聞き手に与えたいと考える。そのことが、話し手に、拡張を受けない他動詞からなる動詞複合体 a-li-pika を使った節を用いさせる。

つぎに、「適用形」の拡張を受けた拡張語幹からなる動詞複合体を使った節について考える。

「適用形」の拡張を受けた拡張語幹からなる動詞複合体は、その後続する位置、すなわち、焦点の位置を占める関与者が受益者、あるいは、道具、方向などであることを要求する。

Mama a-li-m-pik-i-a m-toto ch-akula.

『お母さん』『ために料理する』『子供』『食べ物』 = 『お母さんは子供のために食べ物を

料理した』

例えば、上の文で、「適用形」の拡張を受けた動詞複合体 a-li-m-pik-i-a『ために料理した』は、受益者 m-toto『子供』を動詞が文法格を与える関与者として動詞複合体に後続する位置にもつ。受益者 m-toto『子供』は、動詞複合体に後続する位置を、すなわち、焦点の位置を占めている。受益者 m-toto『子供』は、新情報として話し手が聞き手に伝えたい情報である。話し手と聞き手には、動詞複合体に先行する位置を占めている主語 mama『お母さん』は、既知の情報である。話し手は、既知のものである主語 mama『お母さん』が『誰かのために料理する』行為について、なにか新しい情報を、聞き手に与えたいと考える。そのことが、話し手に「適用形」の拡張を受けた語幹からなる動詞複合体 a-li-pik-i-a『ために料理する』をつかわせる。そして、その『誰か』は、焦点の位置を占めている m-toto『子供』である。

つぎに、「使役形」の拡張を受けた語幹からなる動詞複合体を使った節について考える。

「使役形」の拡張語幹からなる動詞複合体は、それに後続する位置を、すなわち、焦点の位置を、被使役者が占めるように要求する。

Mama a-li-m-pik-ish-a m-toto ch-akula.

『お母さん』『料理させる』『子供』『食べ物』 = 『お母さんは子供に食べ物を料理させた』

例えば、上の文で、「使役形」の拡張を受けた語幹からなる動詞複合体 a-li-m-pik-ish-a『料理させた』は、その後続する位置に被使役者 m-toto『子供』を動詞が文法格を与える関与者として動詞複合体に後続する位置にもつ。被使役者 m-toto『子供』は、動詞複合体に後続する位置を、すなわち、焦点の位置を占めている。被使役者 m-toto『子供』は、話し手が聞き手に伝えたい新情報である。話し手と聞き手にとっては、動詞複合体に先行する位置を占めている主語 mama『お母さん』は、既知の情報である。話し手は、既知の情報 mama『お母さん』が『誰かに料理させる』行為について、なにか新しい情報を聞き手に与えたいと考える。その『誰か』は、焦点の位置を占める m-toto『子供』である。これが、話し手に「使役形」の拡張を受けた語幹からなる動詞複合体 a-li-m-pik-ish-a『料理させる』を選択させる。

つぎに、「受動形」の拡張を受けた語幹からなる動詞複合体を使った節について考える。

「受動形」の拡張語幹からなる動詞複合体は、それに後続する位置を、すなわち、焦点の位置を、動作者が占めるように決定する。

Ch-kula ki-li-pik-w-a na mama.

『食べ物』『料理される』『によって』『お母さん』

『食べ物はお母さんによって料理された』

例えば、上の文で、「受動形」の拡張を受けた語幹からなる動詞複合体 *ki-li-pik-w-a* 『料理された』は、その後続する位置に動作者 *mama* 『お母さん』を動詞複合体に後続する位置にもつ。「受動形」の拡張を受けた語幹は、自動詞であるので、後続する関与者に文法格を与える能力をもたない。そのために動作者 *mama* 『お母さん』は、文法格をもつために前置詞をそれに先行する位置にもたなければならない。前置詞は、後続する名詞に目的語という文法格を与える能力をもち、また、前置詞句全体は、節内で文法関係を明示する能力をもっている。

動作者 *mama* 『お母さん』は、動詞複合体に後続する位置を、すなわち、焦点の位置を占めている。動作者 *mama* 『お母さん』は、話し手が聞き手に伝えたい新情報である。話し手と聞き手にとって、動詞複合体に先行する位置を占める主語 *ch-akula* 『食べ物』は、旧情報である。話し手は、旧情報 *ch-akula* 『食べ物』が『料理される』行為、あるいは、出来事について、新しい情報『誰によってなされるか』を伝えたいと考える。その『誰によって』かは、焦点の位置を占める *mama* 『お母さん』である。これが、話し手に「受動形」の拡張を受けた語幹を選択させる。

つぎに、「状態形」の拡張を受けた動詞語幹からなる動詞複合体を使った節を考えよう。

「状態形」の拡張された語幹を使った動詞複合体は、動詞複合体に後続する位置に、すなわち、焦点の位置に、「不特定の経験者」が占めるように決定する。「不特定の経験者」は、言語形式としては表わされない。

#### M-toto a-na-on-ekan-a.

『子供』『見える』 = 『子供が見える』

上の例において、「状態形」の拡張された語幹を使った動詞複合体 *a-na-on-ekan-a* 『見える』は、動詞複合体に後続する位置に「不特定の経験者」をとる。刺激物 *m-toto* 『子供』が刺激を与える経験者が特定できないために、言語形式では現れない。刺激物 *m-toto* 『子供』から刺激をうける経験者がだれであるか特定されるなら、スワヒリ語は、「受動形」の拡張を受けた動詞語幹からなる動詞複合体を用いなければならない。

「不特定の経験者」は、言語形式によって表されないけれど、動詞複合体に後続する位置を、すなわち、焦点の位置を占めている。「不特定の経験者」は、話し手が聞き手に伝えたい新情報である。話し手と聞き手にとって、動詞複合体に先行する主語 *m-toto* 『子供』は、旧情報である。話し手は、旧情報 *m-toto* 『子供』が『見える』行為、あるいは、出来事について、新しい情報「不特定の経験者」を聞き手に伝えたいと考える。それが、話し手に「状態形」の拡張を受けた動詞語幹からなる動詞複合体を使った節を選択させる。

動詞の拡張がもたらす重要な結果は、動詞複合体に後続する位置を占める関与者の変更を引き起こすことである。つまり、動詞の拡張は、どんな関与者が動詞複合体に後続する

位置、すなわち、焦点の位置を占めるかを決定する。この動詞拡張の役割を利用して、話し手がどんな関与者を焦点の位置におこうとするかによって、動詞のどの拡張語幹が用いられるかが決定する。

例えば、話し手が受益者を焦点の位置におきたいと考えると、「適用形」の拡張語幹が選択される。話し手が被使役者を焦点の位置におきたいと考えると、「使役形」の拡張語幹が選択される。話し手が動作者を焦点の位置におきたいと考えると、「受動形」の拡張語幹が選択される。話し手が「不特定の経験者」を焦点の位置におきたいと考えると、「状態形」の拡張語幹が選択される。話し手が受動者を焦点の位置におきたいと考えると、拡張を受けない他動詞語幹が選択される。

#### [焦点化と場所クラス主語文]

焦点化と節の構造との関係から、場所クラス主語文が説明できる。

場所クラス名詞 (Pa/Ku/Muクラス) と照応する主語接辞を用いて、スワヒリ語は、『存在』文を形づくる。

#### Ku-na ki-tabu meza-ni.

『ある』『本』『テーブル』 = 『テーブルの上に本はある』

場所名詞クラス (Pa/Ku/Muクラス) と照応する主語接辞に接続詞、あるいは、前置詞 na『と』が後続して、『存在』文が形成される。この『存在』文は、『場所がもつ』とでも言い換えることができる、場所クラスを主語とする文と考えられる。

『存在』文以外にも、場所クラスを主語とする文を形成することが可能である。

#### Mwitu-ni m-me-lala simba.

『森に』『寝る』『ライオン』 = 『森の中にライオンは寝ている』

動詞複合体 m-me-lala『寝ている』において、動詞 lala『寝る』に付加されている主語接辞 m-は、場所名詞クラス (Muクラス) と照応する主語接辞である。したがって、動詞複合体の主語が場所の名詞クラスに所属する名詞 Mwitu-ni『森に』であることは、明確である。しかし、『寝ている』のは『森』ではなく、『ライオン』であることも明らかである。

この文の焦点は、名詞 simba『ライオン』にある。名詞 simba『ライオン』は、動詞複合体に後続する位置を、すなわち、焦点の位置を占めている。動詞複合体は、必ず、主語接辞が付加されなければならない。主語接辞が照応しているのは、場所クラス名詞 mwitu-ni『森に』である。また、場所クラス名詞 mwitu-ni『森に』は、動詞複合体に先行する位置を占めている。したがって、名詞 simba『ライオン』は、話し手と聞き手のあいだで既知のものである。



ただし、場所クラス主語文を形成するのは、自動詞のみである。

Ku-le mji-ni ku-me-kufa wa-tu w-engi. (Ashton: 128)

『あそこ』『町で』『死ぬ』『人々』『多くの』 = 『あの町で多くの人が死んだ』

Mji-ni ku-me-wekwa askari. (Ashton: 130)

『町で』『置かれる』『警官』 = 『町に警官が配置されている』

Nyumba-ni m-me-jaa wa-tu. (Ashton: 130)

『家で』『満ちる』『人』 = 『家は人で満ちている』

Pa-le mlima-ni pa-me-simama wa-tu. (Ashton: 130)

『あそこ』『山で』『たつ』『人』 = 『あの山に人々が立っている』

もし、動詞複合体の中心となる動詞が他動詞であれば、動作者を焦点の位置におくべき関与者として選択すると、動詞複合体の中心となる語幹は、「受動形」の拡張語幹となる。実際、上の 2 番目の例文は、「受動形」の拡張語幹を中心とする動詞複合体が節を作っている。ただし、動作者は、特定化されておらず、動作者を表す前置詞句が欠けている。そして、話し手と聞き手のあいだで既知のものである場所 *mji-ni* 『町で』が動詞複合体に先行する位置を占めて、その結果、場所 *mji-ni* 『場所で』を主語にする場所クラス主語文になる。

場所クラス主語文は、英語の *there* で始まる文と似ていると考えられる。英語の *there* で始まる文をつくる動詞は、やはり、存在・出現・生起などの自動詞である（プログレッシブ英和中辞典: 1914 ページ）。

There may come a time when we shall meet again. (プログレッシブ英和中辞典:1914)

動詞複合体の中心となる動詞が他動詞であり、動作者を焦点の位置において、しかも、「受動形」の拡張語幹をつかわずに節を形づくることは、全く不可能というわけではない。しかし、そのときは、厳格な制限がある。動作者が生物名詞でなければならない。また、同時に被動作者が非生物でなければならない。

Vy-akula vi-li-kula wa-toto.

『食べ物 [複数]』『食べる』『子供たち』 = 『食べ物を子供たちが食べた』

生物名詞である動作者 *wa-toto* 『子供たち』が動詞複合体に後続する位置を、すなわち、焦点の位置を占める。このとき、動作者 *wa-toto* 『子供たち』は、目的語として動詞から文法格を与えられない。動作者 *wa-toto* 『子供たち』は、付加詞となっている。動詞複合体内に動作者 *wa-toto* 『子供たち』と照応する目的語接辞がけっして付加されない。もしも動詞

複合体に後続する位置を占める名詞 **wa-toto**『子供たち』に動詞が目的語としての文法格を与えると、『子どもたちを食べる』の意味になってしまう。

動作者 **wa-toto**『子供たち』が動詞複合体に後続する位置を占めているため、動詞複合体に先行する位置を占めるのは、関与者の1つである被動作者 **vy-akula**『食べ物』である。関与者の1つである被動作者が、主語として動詞複合体の主語接辞と照応する。なぜなら、スワヒリ語の動詞複合体は、目的語接辞は付加されなくても大丈夫だけれど、主語接辞が付加されないことは許されない。上の文は、動作者を節の焦点にした節と考えられる。同様に、場所クラス主語文も、動作者を節の焦点にした節である。

## 10 名詞の派生

動詞語幹から名詞を派生するやり方がある。基本的な名詞を派生するやり方は、動詞語幹に名詞を派生するための名詞派生接尾辞を付加する。派生された名詞の意味にしたがって、意味に適合した名詞クラス接頭辞を語幹の先頭の位置に付加する。

### [名詞派生接尾辞-a]

名詞派生接尾辞-aを動詞語幹に後続する位置に付加する。派生された名詞の意味に適合する名詞クラス接頭辞を、語幹に先行する位置に付加する。

アラビア語起源動詞は、語幹末尾の位置に母音 i、e、u をもっている。名詞派生接尾辞-aがアラビア語起源動詞に付加されるとき、動詞語幹末尾の位置の母音が脱落することがある。

動詞基本語幹	派生名詞
fanya	m-fany-a 『する人』
fanya	m-fany-a kazi 『労働者』
enda	mw-end-a 『行く人』

ja	m-j-a	『来る人』
ja	m-j-a maji	『海を越えてきた人』
la	m-l-a	『食べる人』
teka	m-teka maji	『水を汲む人』
ganga	m-gang-a	『伝統医』
sema	m-sem-a	『言う人』
saka	m-saka	『猟師』
shika	m-shik-a	『握る人』
faa	ki-faa	『役に立つもの』
nywa	ki-nyw-a	『口』
tata	ma-tata	『災難』
taka	ma-taka	『欲望』
samehe	ma-sameha	『許し』

アラビア語起源動詞は、語末の位置に母音をもっている。アラビア語起源動詞は、名詞派生接尾辞-a が接辞されないことがある。語幹末尾の位置の母音で終わる名詞を派生することができる。語幹に先行する位置に名詞クラス接頭辞を付加する。

基本語幹	派生名詞	
samehe	m-samehe	『許す人』
rudi	ma-rudi	『戻ること』
jaribu	jaribu	『試み』

アラビア語起源動詞から派生された名詞がもつ末尾の母音が、スワヒリ語の派生のやり方によるものなのか、あるいは、アラビア語の本来の母音を反映しているものなのか、明らかではない。

名詞派生接尾辞-a を用いて派生される名詞は、『する者』、『する物』を意味する。

#### [名詞派生接尾辞-i]

名詞派生接尾辞-i を動詞語幹に後続する位置に付加する。名詞派生接尾辞-i が語幹に付加されるとき、語幹末尾の位置にある子音は音変化する。

語幹末尾の位置の子音は、名詞派生接尾辞-i のまえで以下のように音変化する。子音 p は、f に、子音 t は、s に、子音 k は、sh、あるいは、s に、子音 b は、v、あるいは、w、あるいは、z に、子音 d は、z に、子音 g は、z に、子音 l は、z に、子音 w は、v に音変

化する。また、2重母音で終わる動詞は、名詞派生接尾辞-iのまえに子音 z が挿入される。これは、歴史的に2重母音のあいだに側面音 l が存在したと考えられる。側面音 l が名詞派生接尾辞-iのまえで子音 z に音変化すると考える。

これら以外の子音は、名詞派生接尾辞-iのまえで音変化しない。

また、これらの子音でも、必ず、名詞派生接尾辞-iのまえで音変化するわけではない。音変化しない場合がある。

語幹に先行する位置には、派生された名詞の意味により、その意味に適合する名詞クラス接頭辞が付加される。

表 201 名詞派生接尾辞-iによる語幹末尾子音の音変化

p	→	f
t	→	s
k	→	sh, s
b	→	v, w, z
d	→	z
g	→	z
l	→	z
(VV	→	VzV)
w	→	v

基本語幹	派生名詞
lipa	m-lif-i 『払う人』
fuata	m-fuas-i 『従う人』
pika	m-pish-i 『料理人』
tumika	m-tumish-i 『働き手』
taka	m-tash-i 『一生懸命な人』
suka	m-sus-i 『髪を結う人』
saka	m-sas-i 『猟師』
gomba	u-bomv-i 『けんか』
iba	mw-iv-i, mw-iz-i 『泥棒』
ziba	ki-ziw-i 『話の不自由な人』
chimba	m-chimv-i 『不運な人』
linda	m-linz-i 『ガードマン』
panda	m-panz-i 『種まく人』
jenga	m-jenz-i 『建てる人』
lala	ma-laz-i 『寝具』

lewa	m-lev-i	『酔っ払い』
jaa	u-jaz-i	『いっぱいであること』
nyoa	ki-nyoz-i	『理容師』

(音変化しない子音)

sema	m-sem-i	『言う人』
shona	m-shon-i	『仕立て屋』
fanya	m-fany-i kazi	『労働者』
ongoza	ki-ongoz-i	『指導者』
funza	mw-anafunz-i	『生徒』

(音変化したり、しなかつたりする子音)

shika	m-shik-i	『握る人』
toka	m-tok-i	『痛みをとまなう腫れ物』
chimba	m-chimb-i	『不運な人』
funda	fund-i	『技能者』

名詞派生接尾辞-i を付加して形づくられる名詞は、『する人』、『する物』、『すること』を意味する。

#### [名詞派生接尾辞-ji]

名詞派生接尾辞-ji は、語幹末尾の位置ではなく、動詞の末尾の位置に付加される。すなわち、終母音-a に後続する位置に付加される。アラビア語起源動詞は、動詞語幹の末尾の位置に母音をもっているため、名詞派生接尾辞-ji は、語幹末尾の母音に後続する位置に付加される。

名詞派生接尾辞-ji が付加されて形づくられる名詞は、『する人』を意味することが多い。『する人』を意味する派生名詞には、M/W a クラスの名詞クラス接頭辞が語幹に先行する位置に付加される。

基本語幹	派生名詞	
saka	m-saka-ji	『猟師』
sema	m-sema-ji	『言う人』
shona	m-shona-ji	『仕立て屋』
imba	mw-imba-ji	『歌手』
lipa	m-lipa-ji	『払う人』
ficha	m-ficha-ji	『隠し事の多い人』

shinda	m-shinda-ji	『勝者』
hama	m-hama-ji	『移住者』
la	ma-la-ji	『食べ物』
samehe	m-samehe-ji	『許す人』

#### [名詞派生接尾辞-o]

名詞派生接尾辞-o が動詞語幹に付加される。派生された名詞の意味にしたがって、その意味に適合する名詞クラス接頭辞が語幹に先行する位置に付加される。

基本語幹	派生名詞	
tega	m-teg-o	『わな』
shinda	m-shind-o	『ショック』
fika	m-fik-o	『到着』
cheza	m-chez-o	『遊び』
funika	ki-funik-o	『ふた』
ziba	ki-zibo	『とめ具』
ficha	ki-fich-o	『隠し場所』
nen	nen-o	『言葉』
eleza	ma-elez-o	『説明』
endelea	ma-endele-o	『進歩』
shindana	ma-shindan-o	『競争』
ota	ndot-o	『夢』
fagia	u-fagi-o	『箒』
fungua	u-fungu-o	『鍵』
imba	w-imb-o	『歌』

名詞派生接尾辞-o が付加されて形づくられる派生名詞は、『する手段』、『した結果』を意味する。

#### [名詞派生接尾辞-vu/-fu]

名詞派生接尾辞-vu/-fu が動詞語幹に付加される。名詞派生接尾辞-vu/-fu が接辞されて形づくられる名詞は、『状態の人』、あるいは、『状態』を意味する。したがって、派生接尾辞-vu/-fu が接辞される動詞は、状態を表す動詞か、あるいは、「状態形」をつくる拡張の接尾辞をもつ動詞が多い。

「状態形」をつくる拡張の接尾辞をもつ動詞は、拡張した語幹が子音 k で終わる。子音 k に後続する位置に名詞派生接尾辞-vu/-fu が付加されるとき、拡張語幹末尾の位置の子音

k は脱落する。同時に、名詞派生接尾辞は子音 f で始まることが多い。

「適用形」を由来とする動詞語幹に名詞派生接尾辞-vu/-fu が付加されることがある。「適用形」を由来とする動詞は、2重母音で終わる。2重母音で終わる動詞に付加されるとき、名詞派生接尾辞-vu/-fu は子音 v で始まることが多い。また、2重母音で終わる動詞 sahou 『忘れる』には、派生接尾辞-lifu、あるいは、-livu が付加される。

基本語幹	派生名詞	
kunjuka	m-kunju-fu	『愉快な人』
kunjuka	u-kunju-fu	『社交』
sikia	m-siki-vu	『よく話を聞く人』
choka	m-cho-fu, m-cho-vu	『疲れやすい人』
oko	w-oko-vu, w-oko-fu	『開放』
sahau	m-sahau-lifu, m-sahau-livu	『忘れやすい人』
sahau	u-sahau-lifu	『物忘れ』

#### [名詞派生接尾辞-e]

名詞派生接尾辞-e が動詞語幹に付加される。派生された名詞の意味にしたがい、その意味に適合する名詞クラス接頭辞が、語幹に先行する位置に付加される。

基本語幹	派生名詞	
kata	m-kat-e	『パン』
shinda	m-shind-e	『敗者』
tuma	m-tum-e	『使徒』
hama	ki-ham-e	『捨てられた村』
umba	ki-umb-e	『被創造物』
peta	pet-e	『指輪』
shinda	u-shind-e	『敗北』

名詞派生接尾辞-e が付加されて形づくられる派生名詞は、『される者』、『される物』を意味する。

## 1 1 文のなりたち

### [繋辞節]

繋辞節は、繋辞によって主語と補語がつながれる節である。肯定現在時制においては、繋辞 ni『です』が、否定現在時制においては、否定の繋辞 si『ではない』が用いられる。補語は、名詞であっても、形容詞であってもかまわない。

Mimi ni mw-anafunzi.

『私』『です』『生徒』 = 『私は生徒です』

Mimi si mw-alimu.

『私』『ではない』『先生』 = 『私は先生ではありません』

Ramadhani ni m-zuri.

『ラマザニ』『です』『良い』 = 『ラマザニは良い』

Vi-ti hi-vi si vi-zuri.

『椅子〔複数〕』『この』『ではない』『良い』 = 『これらの椅子は良くない』

繋辞 ni『です』は省略可能であるが、否定の繋辞 si『ではない』は省略できない。



繫辞節をつくるために、繫辞のかわりに主語接辞を用いることができる(3人称単数は、主語接辞 *yu-* が用いられる)。現代スワヒリ語においては、主語接辞を用いた繫辞節は、常用的な表現をのぞいて、文語体において用いられる。主語接辞を用いた繫辞節は、普通、主語の位置を名詞や独立代名詞が占めることはない。名詞や独立代名詞が主語の位置を占めるときは、繫辞 *ni* 『です』を用いた繫辞節を用いる。

U hari gani?

2人称単数『状態』『どんな』 = 『お元気ですか?』

Yu m-zuri.

3人称単数『良い』 = 『彼は良い』

現在時制以外の時制においては、繫辞節をつくるために、動詞-*wa* 『である』が主語接辞と時制標識をともなって用いられる。動詞-*wa* 『である』は、単音節動詞である。繫辞 *ni* 『です』は、動詞-*wa* 『である』を中心とする動詞複合体に後続する位置におかれても、おかれなくても良い。一方、現在時制以外の時制の繫辞節で用いられる動詞-*wa* 『である』を中心とする動詞複合体は、省略できない。

Ni-li-kuwa (ni) mw-anafunzi.

『である』(『です』)『生徒』 = 『私は生徒でした』

Si-ta-kuwa mw-anafunzi.

『である』『生徒』 = 『私は生徒にならないでしょう』

Ki-su ki-li-kuwa ki-baya.

『ナイフ』『である』『悪い』 = 『ナイフは悪かった』

繫辞節と考えられるもうひとつの節構造は、接続詞、あるいは、前置詞 *na* 『と』を用いた節、いわゆる、『もつ』を意味する節である。

現在時制における『もつ』を意味する節は、主語接辞と主語接辞に後続する接続詞、あるいは、前置詞 *na* 『と』に後続する目的語からなる。接続詞、あるいは、前置詞 *na* 『と』は、正書法では主語接辞と連結して書くことになっている。

Ni-na ki-tabu.

『もつ』『本』 = 『私は本をもつ』

U-na wa-toto.

『もつ』『子供たち』 = 『あなたは子供たちをもつ』

Ki-ti hi-ki ki-na mi-guu mi-tatu.

『椅子』『この』『もつ』『脚』『3』 = 『この椅子は3本の脚をもつ』

スワヒリ語の正書法によると、主語接辞と接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』が1つの語を形成しているかのように、つないで書くことになっている。もしも主語接辞が接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』と1つの語を形成しているなら、アクセントは、末尾から2番目の音節に存在しなければならない。しかし、アクセントは、必ずしも末尾から2番目の音節に存在しない。

主語接辞が繫辞のはたらきをする繫辞節が存在することは既に解説した。下の例では、主語接辞が単独で用いられ、その主語接辞に補語が後続する。

U m-zuri.

2人称単数『良い』 = 『あなたは良い』

『もつ』を意味する節を、主語接辞に、前置詞 na 『と』と前置詞の目的語からなる前置詞句が後続する繫辞節と考えることが可能である。正書法に従わずに書くと下のようになるだろう。名詞 m-toto 『子供』は、前置詞 na 『と』の目的語になっている。

U na m-toto. (正書法では正しくない)

2人称単数『と』『子供』 = 『あなたは子供をもつ』

否定現在時制において『もつ』を意味する節は、否定主語接辞に前置詞 na 『と』と前置詞に後続する目的語から成り立っていると考えられる。

Ha-tu na m-toto. (正書法では正しくない)

否定1人称複数『と』『子供』 = 『私たちは子供をもたない』

現在時制以外の時制において、『もつ』を意味する節は、動詞-wa 『である』を中心に主語接辞と時制標識からなる動詞複合体に接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』が後続する。この場合は、正書法では、動詞複合体と接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』は、分離して書くことになっている。

Ni-li-kuwa na ki-tabu.

『である』『と』『本』 = 『私は本をもっていた』

U-li-kuwa na wa-toto wa-wili.

『である』『と』『子供たち』 = 『あなたは子供たちを2人もっていた』

Ki-ti hi-ki ki-li-kuwa na mi-guu mi-nne.

『椅子』『この』『である』『と』『脚』『4』 = 『この椅子は4本脚をもっていた』

Ha-tu-ku-wa na m-toto.

『である』『と』『子供』 = 『私たちは子供をもっていなかった』

現在時制以外の時制においても、『もつ』を意味する節は、主語と補語を形成する前置詞句を動詞-wa を中心とする動詞複合体からなる繫辞がつなぐ繫辞節であると考えられる。

存在文、すなわち、『なにかがある』を意味する節は、『もつ』を意味する節の1部であると考えられる。『もつ』を意味する節をつくる主語接辞が場所の名詞と照応する名詞クラス主語接辞であるのが、『なにかある』を意味する節である。

現在時制においては、場所の名詞クラス主語接辞 pa-/ku-/m-と、接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』は、つないで書くことになっている。

否定現在時制においては、否定の主語接辞 hapa-/haku-/ham-が接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』に先行する位置におかれる。正書法では、否定の主語接辞 hapa-/haku-/ham-と、接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』は、つないで書くことになっている。

Ku-na ki-tabu meza-ni.

『ある』『本』『テーブルに』 = 『テーブルに本がある』

Pa-na ny-umba kubwa hapa.

『ある』『家』『大きな』『ここに』 = 『ここに大きな家がある』

M-na meza nyumba-ni.

『ある』『テーブル』『家に』 = 『家の中にテーブルがある』

Haku-na ki-tabu meza-ni.

『ある』『本』『テーブルに』 = 『テーブルに本がない』

Hapa-na ny-umba kubwa hapa.

『ある』『家』『大きな』『ここに』 = 『ここに大きな家がない』

Ham-na meza nyumba-ni.

『ある』『テーブル』『家に』 = 『家の中にテーブルはない』

現在時制以外の時制においては、動詞-wa 『である』を中心に場所名詞クラス主語接辞 pa-/ku-/m-と時制標識からなる動詞複合体に、接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』が後続する。この場合、正書法では、動詞複合体と接続詞、あるいは、前置詞 na 『と』は、分離して書くことになっている。

Ku-li-kuwa na ki-tabu meza-ni.

『である』『と』『本』『テーブルに』 = 『テーブルに本があった』

Pa-ta-kuwa na ny-umba kubwa hapa.

『である』『と』『家』『大きな』『ここに』 = 『ここに大きな家があるだろう』

M-li-kuwa na meza nyumba-ni.

『である』『と』『テーブル』『家に』 = 『家の中にテーブルがあった』

Haku-ku-wa na ki-tabu meza-ni.

『である』『と』『本』『テーブルに』 = 『テーブルに本はなかった』

Hapa-ta-kuwa na ny-umba kubwa hapa.

『である』『と』『家』『大きな』『ここに』 = 『ここに大きな家がないだろう』

Ham-ku-wa na meza nyumba-ni.

『である』『と』『テーブル』『家に』 = 『家の中にテーブルがなかった』

[自動詞節]

自動詞節は、関与者を1つのみとることができる動詞、いわゆる、自動詞と1つの関与者からなる。関与者は、自動詞節の主語の位置を占める。主語は、普通、動詞複合体に先行する位置におかれる。

M-toto a-na-kwenda mji-ni.

『子供』『行く』『町へ』 = 『子供は町へ行く』

上の文では動詞-enda『行く』は、関与者を1つのみとることができる動詞である。関与者 m-toto『子供』が主語の位置を占めている。場所の名詞クラスに所属する名詞 mji-ni『町へ』は、場所を表す副詞的要素である。動詞から文法格を付与されない場所や時間を表す前置詞句や副詞的要素は、自動詞節の1部を構成することができる。

Ni-li-kaa Nairobi zamani.

『すむ』『ナイロビ』『昔』 = 『私はナイロビに昔住んでいました』

固有名詞の地名は、場所名詞クラスをつくる接尾辞が付加されない。場所名詞クラスをつくる接尾辞が付加されなくとも、場所を表す副詞的要素となる。

Wa-toto wa-ta-rudi shule-ni jioni.

『子供たち』『戻る』『学校から』『夕方』 = 『子供たちは学校から夕方戻るでしょう』

M-lango hu-u u-me-harib-ik-a.

『ドア』『この』『壊れている』 = 『このドアは壊れています』

Ki-tabu ch-angu ki-me-potea.

『本』『私の』『失せる』 = 『私の本がなくなりました』

M-toto mchanga a-na-lia sana.

『子供』『砂』『泣く』『大層』 = 『幼子が大層泣いています』

Nyama zi-me-chom-ek-a.

『肉』『焦げる』 = 『肉が焦げている』

動詞-enda『行く』、-kaa『住む』、-rudi『戻る』、-potea『失せる』、-lia『泣く』などは、本来、関与者を1つのみとる自動詞である。動詞-harib-ik-a『壊れる』、-chom-ek-a『焦げる』は、他動詞である基本語幹-haribu『壊す』、-choma『焼く』に「状態形」をつくる拡張接尾辞が付加されて、自動詞になっている。

動詞拡張により派生された動詞が関与者をただ1つしかとらないことがある。その反対に、本来、自動詞であり関与者をただ1つだけとる動詞が、その語幹に拡張の接尾辞が付加されて、関与者を2つとることができるようになる。

Mw-anafunzi a-li-end-e-a m-ji.

『生徒』『向かって行く』『町』 = 『生徒は町へ向かって行った』

Mw-anafunzi a-li-kwenda kwa m-ji.

『生徒』『行く』『へ』『町』 = 『生徒は町へ行った』

例えば、上の例において、動詞-enda『行く』は、本来、自動詞であり、関与者を1つだけとることができる。動詞-enda『行く』の語幹に「適用形」拡張の接尾辞-eを付加すると、「適用形」-end-e-a『向かって行く』は、関与者を2つとることができる。関与者の1つmw-anafunzi『生徒』は、主語の位置を占め、もう1つの関与者m-ji『町』は、目的語の位置を占める。関与者m-ji『町』は、目的語として動詞複合体から文法格を付与される。副詞的要素ではない。したがって、場所の副詞をつくるための場所名詞クラスをつくる接尾辞-niが付加される必要はない。

上の例の2番目の文において、動詞-enda『行く』は、関与者を1つだけとる。関与者mw-anafunzi『生徒』は、節の主語の位置を占める。「適用形」-end-e-a『向かって走る』がとっていたもう1つの関与者m-ji『町』は、動詞enda『行く』を用いた節では、場所を表す副詞的要素として前置詞句kwa m-ji『町へ』となる。

M-toto a-na-m-kimbi-l-i-a mama y-ake.

『子供』『向かって走る』『お母さん』『彼の』 = 『子供は彼のお母さんに向かって走る』

M-toto a-na-kimbia kwa mama y-ake.

『子供』『走る』『へ』『お母さん』『彼の』 = 『子供は彼のお母さんに向かって走る』

動詞kimbia『走る』は、本来、自動詞であり、関与者を1つだけとる。しかし、動詞kimbia

『走る』に「適用形」をつくる接尾辞-l-i が付加されると、「適用形」-kimbi-l-i-a『向かって走る』は、関与者を2つとることができる。関与者の1つ m-toto『子供』は、主語の位置を占める。もう1つの関与者 mama y-ake『彼のお母さん』は、目的語の位置を占める。関与者 mama y-ake『彼のお母さん』が目的語の位置を占めるので、目的語接辞 m-が動詞複合体内に付加される。

これらのことから分かるのは、拡張された動詞語幹からなる動詞複合体が関与者にどのような分法格を付与するかを決定するのは、動詞の基本語幹がもともともっていた機能とは無関係である。拡張の接尾辞が関与者に文法格を付与する機能をもっていると考えられる。

#### [他動詞節]

他動詞は、2つの関与者をとる。1つの関与者は、主語の位置を占め、もう1つの関与者は、目的語の位置を占める。基本的な語順は、主語が動詞複合体に先行する位置におかれ、目的語は、動詞複合体に後続する位置におかれる。ただし、スワヒリ語は、動詞複合体内に主語と照応する主語接辞が義務的に付加されること、また、目的語と照応する目的語接辞が付加されることが可能であることから、語順は、必ずしも主語や目的語など、文法関係を表示するために重要な働きをもたない。スワヒリ語は、かなり自由な語順をもつといえる。

主語と動詞複合体と目的語の語順は、全ての組み合わせが可能である。

表 202 他動詞節の語順

		m-toto a-na-soma ki-tabu
		『子供』『読む』『本』 = 『子供は本を読む』
主語	動詞複合体	目的語
		m-toto a-na-soma ki-tabu
目的語	動詞複合体	主語
		ki-tabu a-na-ki-soma m-toto
主語	目的語	動詞複合体
		m-toto ki-tabu a-na-ki-soma
目的語	主語	動詞複合体
		ki-tabu m-toto a-na-ki-soma
動詞複合体	主語	目的語
		a-na-soma m-toto ki-tabu
動詞複合体	目的語	主語
		a-na-soma ki-tabu m-toto

目的語が動詞複合体に先行する位置におかれたとき、動詞複合体内に目的語接辞を付加しなければならない。目的語接辞が承前辞であるからである。

#### Mama a-na-pika ch-akula.

『お母さん』『料理する』『食べ物』 = 『お母さんは食べ物を料理する』

上の文で、動詞-pika『料理する』は、2つの関与者をとることができる。2つの関与者は、行為者 mama『お母さん』と受動者 ch-akula『食べ物』である。動詞-pika『料理する』は、行為者が受動者に働きかけて、動作『料理』するという意味をもつ。普通、行為することが可能なもの、人間や生物が行為者に選ばれ、受動者には、行為が及ぶものが選ばれる。

スワヒリ語において、動詞複合体の直後の位置に、節の焦点がある。焦点の位置には節で言及される新情報がおかれる。上の文では受動者 ch-akula『食べ物』が焦点の位置におかれている。受動者 ch-akula『食べ物』が新情報である。話し手と聞き手のあいだに既に、行為者 mama『お母さん』が、既知のもの、あるいは、既に言及されたものと認識されており、行為者 mama『お母さん』は、旧情報に属している。上の文は、旧情報が新情報よりさきに与えられるという自然な情報構造をもっている。

#### Ch-akula a-na-ki-pika mama.

『食べ物』『料理する』『お母さん』 = 『食べ物をお母さんが料理する』

この文は目的語が動詞複合体に先行し、主語が動詞複合体に後続する位置におかれる。主語接辞が3人称単数の人間と照応しているので、主語は、mama『お母さん』であることが明らかになっている。主語 mama『お母さん』が節の焦点の位置を占めている。主語 mama『お母さん』が新情報をになっており、動詞複合体に先行する位置におかれる目的語 ch-akula『食べ物』が旧情報に属している。話し手と聞き手のあいだに、目的語 ch-akula『食べ物』について既に話題にしていることは了解されており、誰が行為者なのか为新情報として与えられる。目的語接辞が承前辞の働きをもつことから、目的語が動詞複合体に先行する位置におかれると、普通、動詞複合体には目的語接辞が付加される。この文も、旧情報が新情報よりまえにおかれており、自然な情報構造をもつ。

本来、自動詞であり、関与者を1つのみとる動詞であっても、例えば、「適用形」の拡張の接尾辞が付加されると、関与者を2つとれることについては既に説明した。本来、他動詞であり関与者をもともと2つとることができる動詞に、「適用形」の拡張の接尾辞が付加されると、3つの関与者をとることが可能になる。3つの関与者のうち1つの関与者は、行為者であり、もう1つの関与者は受動者である。さらに動詞拡張によりとることになった関与者は、「適用形」の意味により決定され、受益者、道具、方向などの1つになる。動詞拡張によりとることになった関与者が、動詞複合体の目的語の位置を占める。したがって、動詞複合体内に付加される目的語接辞は、動詞拡張によりとることになった関与者と照応する。動詞が拡張される以前に目的語の位置を占めていた受動者は、付加詞の位置におかれる。付加詞となった名詞句に、動詞は文法格を与えない。付加詞となった受動者と、動詞複合体内の目的語接辞は照応しない。

Mama a-na-m-pik-i-a m-toto ch-akula.

『お母さん』『ために料理する』『子供』『食べ物』 = 『お母さんは子供のために食べ物を料理する』

上の文で、行為者 mama 『お母さん』が主語の位置を、受益者 m-toto 『子供』が目的語の位置を、受動者 ch-akula 『食べ物』が付加詞の位置を、占めている。受益者 m-toto 『子供』が目的語の位置を占めていることは、受益者 m-toto 『子供』と動詞複合体内の目的語接辞が照応していることから分かる。

さらに、受益者 m-toto 『子供』が目的語の位置を占めていることは、時制関係節において受益者 m-toto 『子供』が関係節化されることから証明できる。時制関係節においては、主語と目的語のみが関係節化されることが可能であることがわかっている（アンバ関係節であれば、付加詞であろうと、前置詞の目的語であろうと、関係節化できる）。

Hu-yu ni m-toto a-na-ye-m-pik-i-a mama ch-akula.

『この』『です』『子供』『ために料理する』『お母さん』『食べ物』 = 『これはお母さんが食べ物を料理をしてあげる子供です』

受益者 m-toto 『子供』が関係節化されている上の文は、文法的に適格な文である。

付加詞の位置にある受動者 ch-akula 『食べ物』を関係節化した下の文は、非文である（非文法的な文には、星印をつける）。

\*Hi-ki ni ch-akula a-na-cho-ki-pik-i-a mama m-toto.

『この』『です』『食べ物』『ために料理する』『お母さん』『子供』 = 『これはお母さんが子供のために料理する食べ物です』

「適用形」に拡張された動詞は、道具を関与者の1つとしてとることもできる。関与者としての道具は、目的語の位置を占める。目的語の位置を占める道具は、時制関係節においても、関係節化されることが可能である。

Hi-ki ni ki-su a-na-cho-ki-kat-i-a mama nyama.

『この』『です』『ナイフ』『で切る』『お母さん』『肉』 = 『これはお母さんが肉を切るナイフです』

Hi-ki ni ki-su.

『この』『です』『ナイフ』 = 『これはナイフです』

Mama a-na-kat-i-a ki-su nyama.

『お母さん』『で切る』『ナイフ』『肉』 = 『お母さんはナイフで肉を切る』



上の3番目の文において、「適用形」に拡張された動詞がとることになった関与者 *ki-su* 『ナイフ』は、目的語の位置を占める。目的語の位置は、なんら強調などないときは、動詞複合体 *a-na-kat-i-a* 『で切る』の直後の位置である。

「適用形」に拡張された動詞は、方向に関与者の1つとしてとることもできる。関与者としての方向は、目的語の位置を占める。目的語の位置を占める方向は、時制関係節においても、関係節化されることが可能である。

*Hu-yu ni mama y-ake a a-li-ye-m-kimbi-l-i-a m-toto.*

『この』『です』『お母さん』『向かって走る』『子供』 = 『これは子供が向かって走った彼のお母さんです』

目的語の位置を占めている関与者を関係節化するとき、関係節化された名詞句は、動詞複合体に先行する位置にあるために、承前辞である目的語接辞が動詞複体内に、普通、付加される。上の文で、動詞複体内に関係節化された名詞句 *mama y-ake* 『彼のお母さん』と照応する目的語接辞 *m-*が付加されている。

「適用形」に拡張された動詞がとることになった関与者が目的語の位置を占めることは、「適用形」に拡張された動詞がとることになった関与者が受動化されることから証明できる。なぜなら、受動化が可能なのは、目的語の位置にある名詞句である。

*Mama a-na-kata nyama.*

『お母さん』『切る』『肉』 = 『お母さんは肉を切る』

*Nyama i-na-kat-w-a na mama.*

『肉』『切る』『によって』『お母さん』 = 『肉はお母さんによって切られる』

1番目の文は、*nyama* 『肉』が目的語の位置を占めている。目的語は、受動化できる。2番目の受動文で *nyama* 『肉』は、受動文の主語の位置を占めている。

例えば、下の例において、「適用形」に拡張された動詞 *kat-i-a* 『のために切る』がとることになった関与者 *m-toto* 『子供』が目的語の位置を占めるので、「適用形」に拡張された動詞がとることになった関与者 *m-toto* 『子供』が受動化される。

*Mama a-na-m-kat-i-a m-toto nyama.*

『お母さん』『ために切る』『子供』『肉』 = 『お母さんは子供のために肉を切る』

*M-toto a-na-kat-i-li-w-a nyama na mama.*

『子供』『切る』『肉』『によって』『お母さん』 = 『子供は肉をお母さんによって切ってもらう』

「適用形」に拡張されない節においては目的語の位置を占めていた関与者 *nyama* 『肉』が、「適用形」に拡張された結果、付加詞になったとき、受動化されることはない。付加詞は、受動化をゆるぎされないからである。したがって、下の例のように「適用形」に拡張された動詞の付加詞 *nyama* 『肉』が受動化された文は、非文である。

\**Nyama i-na-kat-i-li-w-a m-toto na mama.*

『肉』『切る』『子供』『によって』『お母さん』

[話題 (トピック)]

節内での主語、動詞複合体、目的語の語順は、きわめて自由である。自由な語順のなかから適切な語順を決定するのは、話題 (トピック) と焦点の関係である。

節のトピックは、節の先頭の位置におかれる。節内の名詞句が話題化される時、話題化された名詞句は、節の先頭の位置におかれる。節内の名詞句が話題化がされないときは、主語が、話題の位置、すなわち、節の先頭の位置におかれることになる。

スワヒリ語は、多様な話題化をおこなうことが可能である。その結果、節内でのきわめて自由な語順がもたらされる。下の例は、目的語の位置にある名詞句を話題化した節である。

*Ma-tunda baba a-li-ya-nunua soko-ni.*

『果物』『お父さん』『買う』『マーケットで』 = 『果物をお父さんはマーケットで買った』

上の文で、トピック *ma-tunda* 『果物 [複数]』が節の先頭の位置におかれる。トピック *ma-tunda* 『果物 [複数]』が動詞複合体の目的語になっていることは、動詞複合体内に付加された目的語接辞 *ya-* がトピック *ma-tunda* 『果物 [複数]』と照応していることから明らかである。トピックが動詞複合体に先行する位置におかれることから、承前辞である目的語接辞は、目的語がトピックの位置を占めるとき、普通、動詞複合体内に付加される。

話題化は、目的語の位置にある名詞句だけが可能なわけではない。前置詞句全体であれば、前置詞句も話題化することができる。例えば、下の文では、前置詞句 *kwa shule* 『学校へ』が、話題化されて、節の先頭の位置におかれる。

*Kwa shule w-anafunzi wa-li-kwenda jana.*

『へ』『学校』『生徒たち』『行く』『昨日』 = 『学校へ生徒たちは昨日行った』

前置詞句が主語の一部をなして、その主語が節の先頭の位置にあるときは、前置詞

句内の目的語の位置から名詞句を話題化することができる。前置詞句の中から名詞句を話題化するとき、名詞がもとあったところに承前辞が付加される。

Yu-le m-sichana pete y-ake i-m-potea.

『あの』『少女』『指輪』『彼女の』『なくなる』 = 『あの少女の指輪はなくなった』

Pete ya m-sichana yu-le i-me-potea.

『指輪』『の』『少女』『あの』『なくなる』 = 『あの少女の指輪はなくなった』

所有表現をつくる前置詞 -a 『の』の目的語の位置にある名詞句 m-sichana yu-le 『あの少女』を話題化した文が1番目の文である。名詞句 m-sichana yu-le 『あの少女』がもとあった場所に、承前辞として3人称単数の所有代名詞語幹 -ake 『彼女の』が付加される。

前置詞句が主語の一部をなしていない場合には、前置詞句から前置詞の目的語の位置にある名詞をとりだすことはできない。前置詞句内から前置詞の目的語の位置にある名詞を話題化するには、分裂文を用いなければならない。上の例のように前置詞句から名詞をとりだすことができるのは、前置詞句が主語の一部として既に話題の位置にあるからである。

[肯定文]

文が肯定文であることは、現在時制の繫辞節からなる文をのぞいて、肯定の主語接辞が用いられること、また、肯定の時制標識を用いることで明らかにされる。現在時制の繫辞節からなる肯定文は、繫辞 ni 『です』が用いられることで明らかにされる。肯定文は、肯定文のイントネーションで発音される。それ以外に肯定文であることを示すための特別な標識はない。

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学んでいます』

Mimi ni mw-anafunzi.

『私』『です』『生徒』 = 『私は生徒です』

[否定文]

文が否定文であることは、現在時制の繫辞節からなる文をのぞいて、否定の主語接辞が用いられること、否定の時制標識を用いることで明らかにされる。現在時制の繫辞節からなる否定文は、否定の繫辞 si 『でない』が用いられることで明らかにされる。肯定文と同じイントネーションで発音される。それ以外に否定文であることを示すための特別な標識はない。

W-anafunzi hawa-jifunzi Ki-swahili.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学ばない』

Mimi si mw-anafunzi.

『私』『出ない』『生徒』 = 『私は生徒ではありません』

[疑問文]

疑問文をつくるための特別な標識や、特別な語順はない。イントネーションだけで疑問文であることを表す。正書法では、文の末尾に疑問符をつけることで疑問文であることを示す。『はい』『いいえ』の答えを要求する疑問文のイントネーションは、文の末尾を高く発音する。

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili?

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学んでいますか』

W-anafunzi hawa-jifunzi Ki-swahili?

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学んでいませんか』

疑問文に対する肯定の答えは、Ndiyo 『はい』を用いる。否定の答えは、La 『いいえ』、あるいは、Hapana 『いいえ』を用いる。

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili?

Ndiyo, wa-na-jifunza Ki-swahili.

『はい』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『はい、彼らはスワヒリ語を学んでいます』

La/Hapana, hawa-jifunzi Ki-swahili, wa-na-jifunza Ki-japani.

『いいえ』『学ぶ』『スワヒリ語』『学ぶ』『日本語』 = 『いいえ、彼らはスワヒリ語を学んでいません。彼らは日本語を学んでいます』

否定疑問文に対する答えも、否定疑問文に対して肯定する場合は、Ndiyo 『はい』を、否定疑問文に対して否定する場合は、La 『いいえ』、あるいは、Hapana 『いいえ』を用いる。

W-anafunzi hawa-jifunzi Ki-swahili?

Ndiyo, hawa-jifunzi Ki-swahili.

『はい』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『はい、彼らはスワヒリ語を学んでいません』

W-anafunzi hawa-jifunzi Ki-swahili?

La/Hapana, wa-na-jifunza Ki-swahili. = 『いいえ、彼らはスワヒリ語を学んでいます』

疑問詞を用いた疑問文は、疑問文のイントネーションで発音されない。正書法では疑問

符を文の末尾の位置につけることになっている。

W-anafunzi wa-na-jifunza nini?

『生徒たち』『学ぶ』『何』 = 『生徒たちは何を学んでいますか』

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学んでいます』

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili lini?

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『いつ』 = 『生徒たちはスワヒリ語をいつ学びますか』

W-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili leo asubuhi.

『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『今日』『朝』 = 『生徒たちはスワヒリ語を今朝学んでいます』

疑問詞 gani 『どんな?』と -ngapi 『いくつ?』は、形容詞と同じ分布を示す。疑問詞 Kwa nini 『なぜ?』と Mbona 『一体なぜ?』は、文の先頭の位置におかれる。疑問詞 lini 『いつ?』は、文の終わりか先頭におかれる。疑問詞 nani 『誰?』は、文の先頭か終わりの位置におかれるが、動詞の目的語として用いられるときは、動詞複合体に後続する位置、すなわち、目的語の位置におかれる。疑問詞 wapi 『どこ?』は、動詞複合体のあとにおかれる。疑問詞 nini 『何?』は、動詞の目的語としてのみ用いられる。どうしても主語として用いたいときは、ki-tu gani 『どんなもの?』を用いる。

Nani a-na-fundisha Ki-swahili?

『誰』『教える』『スワヒリ語』 = 『誰がスワヒリ語を教えますか』

Mw-alimu a-na-m-fundisha nani Ki-swahili?

『先生』『教える』『誰』『スワヒリ語』 = 『先生は誰にスワヒリ語を教えていますか』

U-na-taka nini?

『望む』『何』 = 『あなたはなにが欲しいですか』

Ki-tu gani ki-li-anguka chini?

『物』『どんな』『落ちる』『下に』 = 『何が下に落ちたか』

疑問文の先頭におかれて、疑問文であることを強調する語、je がある。

Je, w-anafunzi wa-na-jifunza Ki-swahili?

疑問の強調『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『生徒たちはスワヒリ語を学んでいますか』

疑問を強調する形式-je は、動詞複合体の末尾の位置に付加されることがある。終母音が

あるときは、終母音に後続する位置に付加される。そのときは、様態を尋ねる疑問文をつくる。

U-na-ona-je?

『見る』 = 『あなたはどのように思いますか』

U-na-sema-je?

『言う』 = 『あなたはなんと言うのですか』

疑問を強調する形式 je は、動詞を持たない疑問文において様態を尋ねることがある。

Ni-ta-kwanda Arusha. Na wewe, je?

『行く』『アルーシャ』『また』『あなた』 疑問の強調 = 『私はアルーシャへ行きます』『あなたはどうしますか』

[命令文]

命令文については、命令文・接続法の項で説明した。単純な命令文は、主語接辞や時制標識をもたない動詞語幹から形づくられる。丁寧な命令文は、肯定の接続法が用いられ、禁止には否定の接続法が用いられる。命令文をつくるための特別な標識や特別なイントネーションはない。

命令は、相手が 1 人の場合と 2 人以上に命令する場合が区別される。

Nunua ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買え [単数]』

Nunue-ni ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買え [複数]』

U-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買ってください [単数]』

M-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買ってください [複数]』

U-si-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買うな [単数]』

M-si-nunu-e ki-tabu.

『買う』『本』 = 『本を買うな [複数]』

[重文]

等位の関係にある 2 つ以上の節は、接続詞 na 『と』によってつながれ、1 つの文を形づく。2 つ以上の節が接続詞 na 『と』によってつながれて形づくられた 1 つの文は、重文

と呼ばれる。

Mama a-li-kwenda soko-ni na a-li-nunua nyama.

『お母さん』『行く』『マーケットへ』『と』『買う』『肉』 = 『お母さんはマーケットへ行き、そして、肉を買った』

等位の関係にある2つ以上の節は、「語り」過去時制が用いられるとき、接続詞 na 『と』を使わずに結ばれる。例えば、肯定の「語り」過去時制において、はじめの節は、過去時制標識 li-が用いられ、2番目以降の節は、「語り」過去時制標識 ka-が用いられる。1番目の節と2番目の節のあいだに接続詞 na 『と』は挿入されない。さらに、それらに後続する節の先頭に接続詞 na 『と』は、用いられない。

Mama a-li-kwenda soko-ni, a-ka-nunua nyama, a-ka-pika ch-akula.

『お母さん』『行く』『マーケットへ』『買う』『肉』『料理する』『食べ物』 = 『お母さんはマーケットへ行って、肉を買って、食べ物を料理した』

[複文・従属節]

複文は、主節と従属節からなりたっている。主節は、文法的には単独で1つの自立した文を形成することができる。しかし、複文において、主節は、従属節によって補完されなければ、意味的に完全な文とならない。一方、従属節は、文法的にも、意味的にも、単独で1つの自立した文を形成することはできない。

従属節は、動詞が接続法を用いられるものと、接続法以外の時制が用いられるものがある。主節と従属節のあいだの意味的關係により、従属節内の動詞が接続法が用いられるか、接続法以外の時制が用いられるかが決定される。

従属節には、主節内で補文を形成する従属節、原因を表す副詞的要素を形成する従属節、目的を表す副詞的要素を形成する従属節、場所を表す副詞的要素を形成する従属節、時間を表す副詞的要素を形成する従属節、条件を表す副詞的要素を形成する従属節、譲歩を表す副詞的要素を形成する従属節、様態や程度を表す副詞的要素を形成する従属節などがある。

#### 1) 補文を形成する従属節

主節内で補文を形成する従属節は、普通、主節の動詞複合体の直後の位置におかれる。補文を形成する従属節は、補文標識 kama 『であると』、(ya) kwamba 『であると』、(ya) kuwa 『であると』によって導かれる。

Baba a-li-fahamu kwamba m-toto w-ake a-li-faulu m-tihani.

『お父さん』『理解する』『であると』『子供』『彼の』『成功する』『試験で』 = 『お父さんは彼の子供が試験に通ったことが分かった』

**Mama a-li-mw-ambia m-toto w-ake kwamba baba y-ake a-ta-m-nunu-l-i-a ki-tabu.**

『お母さん』『言う』『子供』『彼女』『であると』『お父さん』『彼の』『ために買う』『本』 = 『お母さんは、彼のお父さんが彼のために本を買うだろうと、彼女の子供に言った』

主節内で補文を形成する従属節が主節の主語の「希望」や「期待」の内容を表すとき、従属節内の動詞は、接続法が用いられる。このとき、従属節を導く補文標識は省略することが可能である。

**Mw-alimu a-na-taka w-anafunzi wa-jifunz-e Ki-swahili kwa bidii.**

『先生』『望む』『生徒たち』『学ぶ』『スワヒリ語』『一生懸命』 = 『先生は生徒たちがスワヒリ語を一生懸命学ぶことを望む』

**Baba a-li-mw-ambia m-toto (kama) a-fany-e ma-zoezi ya nyumba-ni.**

『お父さん』『言う』『子供』(『であると』)『する』『練習』『の』『家で』 = 『お父さんは子供に宿題をするようにと言った』

**Mama a-na-taka ni-jifunz-e Ki-swahili.**

『お母さん』『望む』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『お母さんは私がスワヒリ語を学ぶことを望む』

上の例では、主節の主語と従属節の主語が異なっている。例えば、1 番目の文において、主節の主語は、mw-alimu 『先生』であり、従属節の主語は、w-anafunzi 『生徒たち』である。主節の主語と補文の主語が異なっている場合は、必ず、従属節を用いなければならない。もしも、主節内で補文の主語が主文の主語と同じであれば、従属節を使わずに、補文に動詞の不定詞を使うことができる。下の文において、主節の主語も従属節の主語も、1 人称単数『私』である。

**Ni-li-taka ku-jifunza Ki-swahili.**

『望む』『学ぶ』『スワヒリ語』 = 『私はスワヒリ語を学びたかった』

## 2) 原因を表す従属節

原因の従属節は、補文標識 kwa sababu 『なぜなら』、kwani 『なぜなら』、(kwa) maana 『なぜなら』、kwa kuwa 『なぜなら』などによって導かれる。原因の従属節は、主節に先行する位置にも、主節に後続する位置にもおくことができる。下の例では、1 番目の文は、原因の従属節が主節に後続する位置に、2 番目の文は、原因の従属節を主節に先行する位置においている。



Mw-alimu a-li-kasirika sana kwa sababu w-anafunzi hawa-ku-fanya ma-zoezi ya nyumba-ni.

『先生』『怒る』『大層』『なぜなら』『生徒たち』『する』『練習』『の』『家で』 = 『先生は大層怒った。なぜなら、生徒たちが宿題をしなかった』

Kwa sababu mama ha-ku-wa na pesa za ku-tosha, ha-ku-weza ku-nunua mboga.

『なぜなら』『お母さん』『もつ』『お金』『の』『十分』『できる』『買う』『野菜』 = 『お母さんは十分なお金を持たなかったので、野菜を買うことができなかった』

### 3) 目的を表す従属節

目的の従属節は、主節の主語の「希望」や「期待」の内容を表すので、従属節内の動詞は、接続法が用いられる。目的の従属節は、主文に後続する位置におかれる。目的の従属節は、補文標識 ili 『ために』、kusudi 『を目的に』によって導かれる。ただし、目的の従属節は、補文標識を省略することができる。

Baba a-li-m-pa m-ke w-ake pesa za ku-tosha ili a-nunu-e mboga.

『お父さん』『与える』『妻』『彼の』『お金』『の』『十分』『ために』『買う』『野菜』 = 『お父さんは彼の妻に彼女が野菜を買うために十分なお金を与えた』

Ni-ta-ku-pa pesa u-pat-e ku-nunua ki-tabu.

『与える』『お金』『できる』『買う』『本』 = 『私はあなたにあなたが本を買うことができるようにお金を与えるでしょう』

Ni-ta-amka mapema ili ni-pat-e basi ya kwenda mji-ni.

『起きる』『早く』『ために』『得る』『バス』『の』『行く』『町へ』 = 『私は町へ行くバスをつかまえるために朝早く起きるでしょう』

補文の主語が主文の主語と異なるときは、従属節を用いなければならない。もしも、補文の主語が主節の主語と同じであるときは、従属節を用いず、動詞の不定詞を用いることができる。例えば、下の文では、主節の主語も従属節の主語も 1 人称単数であり、同じものである。

Ni-ta-jifunza sana ili ku-faulu m-tihani.

『学ぶ』『大層』『ために』『成功する』『試験』 = 『私は試験に通るために大層学ぶ』

目的の従属節の一種と考えられる使役の従属節がある。主節は、動詞 fanya 『する』を中心とする動詞複合体が用いられる。従属節は接続法が用いられる。

Mw-alimu a-li-wa-fanya w-anafunzi wa-imb-e ny-imbo.

『先生』『する』『生徒たち』『歌う』『歌』 = 『先生は生徒たちに歌を歌わせた』

#### 4) 場所を表す従属節

場所を表す従属節は、場所の名詞クラス (Ku/Muクラス) と照応する関係節標識が用いられる関係節で形成される。場所名詞クラス (Ku/Muクラス) に照応する関係節標識 ko-、あるいは、mo-が動詞複合体内に付加されて、関係節が形成される。主文に従属節で用いられる場所の名詞クラスと照応する指示詞を挿入してもかまわない。場所の従属節は、主節に先行することも、主節に後続することも可能である。関係節は、時制関係節も、アンバ関係節も可能である。下の1番目の文は、時制関係節を用いた場所を表す従属節の例であり、2番目の文は、アンバ関係節を用いた場所を表す従属節の例である。

Ku-le Unguja ni-li-ko-kaa ni-li-ona bahari m-zuri.

『あの』『ザンジバル』『滞在する』『見る』『海』『美しい』 = 『私が滞在したザンジバルで美しい海を見た』

Ni-ta-kwenda Ujerumani, amba-ko ni-ta-kuwa na m-kutano.

『行く』『ドイツ』『アンバ関係節-指示関係節標識』『もつ』『会議』 = 『私はドイツへ行くでしょう。そこで私は会議があります』

#### 5) 時間を表す従属節

時間を表す従属節をつくるには、いくつかのやり方がある。まず第一に、場所名詞クラス (Paクラス) と照応する関係節が用いられる。場所名詞クラス (Paクラス) と照応する関係節標識 po-が動詞複合体に付加され、関係節が形成される。場所名詞クラス (Paクラス) と照応する関係節が用いられる時間の従属節は、補文標識 wakati 『とき』によって導かれることが可能である。時間の従属節は、主文に先行することも、主文に後続することも可能である。

Wakati ni-li-po-kaa Unguja, ni-li-tembelea m-ji wa kale.

『とき』『滞在する』『ザンジバル』『訪れる』『町』『の』『古い』 = 『私がザンジバルに滞在したとき、オールドタウンを訪れた』

時間の起点と終点を表すとき、起点を表す接続詞 tangu 『時から』、終点を表す接続詞 mpaka 『時まで』によって、時間の従属節は導かれる。

Tangu tu-li-po-fika Unguja, wiki moja i-li-pita.

『時から』『着く』『ザンジバル』『週』『1』『過ぎる』 = 『私たちがザンジバルについてから1週間が過ぎた』

Tafadhali tu-ngoji-e-e mpaka tu-taka-po-kuja.

『親切』『待つ』『時まで』『来る』 = 『どうか私たちが来るまで待ってください』

起点と終点を表す接続詞 **tangu** 『時から』と **mpaka** 『時まで』によって導かれる、起点と終点を表す時間の従属節は、場所の名詞クラス（P a クラス）と照応する関係節を使わずにつくることができる。そのとき、従属節の動詞は、接続法が用いられる。

Tangu tu-fiki-e Uguja, wiki moja i-li-pita.

『時から』『着く』『ザンジバル』『週』『1』『過ぎる』 = 『私たちがザンジバルについてから 1 週間が過ぎた』

Tafadhali tu-ngoji-e-e mpaka tu-je.

『親切』『待つ』『時まで』『来る』 = 『どうか私たちが来るまで待ってください』

時間の基準点を表すとき、基準点を表す接続詞 **kabla** 『まえに』が従属節を導く。基準点を表す接続詞 **kabla** 『まえに』によって導かれる従属節は、動詞複合体内において否定現在完了時制標識 **ja-**が用いられる。

Kabla hatu-ja-anza ku-cheza mpira, tu-maliz-e ma-zoezi ya nyumba-ni.

『まえに』『はじめる』『遊ぶ』『ボール』『終える』『練習』『の』『家で』 = 『サッカーを始める前に、宿題を終えよう』

従属節の主語と主文の主語が同じであれば、従属節ではなく、動詞の不定詞を使うことができる。そのとき、基準点を表す接続詞は、**kabla ya** 『のまえに』が用いられる。

Kabla ya kw-anza m-chezo, tu-maliz-e ma-zoezi ya nyumba-ni.

『のまえに』『はじめる』『遊び』『終える』『練習』『の』『家で』 = 『遊びを始める前に、宿題を終えよう』

時間の基準点を表すとき、別の基準点を表す接続詞 **baada ya** 『の後に』は、動詞の不定詞を導く。

Baada ya ku-maliza ma-zoezi ya nyumba-ni, tu-ta-cheza mpira.

『の後に』『終える』『練習』『の』『家で』『遊ぶ』『ボール』 = 『宿題を終えた後で、私たちはサッカーをするでしょう』

## 6) 条件を表す従属節

条件を表す従属節は、2 つに分類できる。1 つは、仮定法を用いる条件節であり、もう 1

つは、仮定法を用いない条件節である。

仮定法を用いない条件節は、接続詞 *ikiwa* 『もしも』、*iwapo* 『もしも』、*kama* 『もしも』によって導かれる。どのような時制を用いても良いが、進行アスペクト・条件節時制標識 *ki-*を用いるときだけ、接続詞 *ikiwa* 『もしも』、*iwapo* 『もしも』、*kama* 『もしも』を省略することができる。それ以外の時制においては、接続詞の省略は許されない。

仮定法を用いない条件節は、現実起こりうる条件について言及する。

**Kama tu-na pesa ny-ingi, tu-ta-nunua khamisi hi-i.**

『もしも』『もつ』『お金』『多くの』『買う』『辞書』『この』 = 『もしたたくさんのお金をもっていたら、この辞書を買うだろう』

**Ikiwa u-na-taka ku-sema Ki-swahili vi-zuri, lazima u-jifunz-e kwa bidii.**

『もしも』『望む』『話す』『スワヒリ語』『上手に』『義務』『学ぶ』『一生懸命』 = 『もしもあなたがスワヒリ語を上手に話したければ、一生懸命学ばなければなりません』

**U-ki-jifunza sana, u-ta-sema Ki-swahili vi-zuri.**

『学ぶ』『大層』『話す』『スワヒリ語』『上手に』 = 『もしもしっかり学んだら、あなたはスワヒリ語を上手に話すだろう』

仮定法を用いる条件節には、仮定法現在時制標識 *nge-*を用いて形づくられる条件節と、仮定法過去時制標識 *ngali-*を用いた条件節がある。スワヒリ語の仮定法現在と仮定法過去のあいだの違いは、英語の仮定法現在と仮定法過去ほどは、はっきりしていない。どちらかといえば、スワヒリ語の仮定法過去は、仮定法現在より、言及される出来事や行為の実現性が低い。

仮定法現在時制標識 *nge-*が用いられた条件節をうける主節は、同じ仮定法現在時制標識 *nge-*を節内の動詞複合体に付加される。仮定法過去時制標識 *ngali-*が用いられた条件節をうける主節は、同じ仮定法過去時制標識 *ngali-*を節内の動詞複合体に付加される。

**Tu-nge-kuwa na pesa ny-ingi, tu-nge-nunua ny-umba hi-i.**

『もつ』『お金』『多くの』『買う』『家』『この』 = 『もしもたたくさんのお金をもっていたら、この家を買うだろう (もっていない)』

**U-ngali-jifunza sana, u-ngali-sema Ki-swahili vi-zuri.**

『学ぶ』『大層』『話す』『スワヒリ語』『上手に』 = 『もしもしっかり学んでいたら、あなたはスワヒリ語を上手に話しただろう (学ばなかった)』

## 7) 譲歩を表す従属節

譲歩を表す従属節は、接続詞 *ingawa* 『だけれど』によって導かれる。譲歩の従属節内では、どんな時制も用いることができる。譲歩の従属節は、普通、主節に先行する位置にお

かれる。

Ingawa ni-li-jaribu, si-ku-weza ku-maliza kazi

『だけれど』『試みる』『できる』『終える』『仕事』 = 『試みたけれど、私は仕事を終えることができなかった』

#### 8) 様態や程度を表す従属節

様態や程度を表す従属節は、K i / V i [複数] 名詞クラスと照応する関係節標識を用いた関係節で形づくられる。様態や程度を表す従属節内では、どんな時制も用いることができる。K i / V i 名詞クラスは、例えば、副詞的要素 ki-dogo 『少し』や vi-zuri 『うまく』が存在するように、様態を表現する名詞クラスでもある。

K i / V i [複数] 名詞と照応する関係節で形づくられる従属節は、接続詞 jinsi 『やり方』、kadiri 『程度』、kama 『ように』によって導かれることもある。

Lazima u-jifunz-e kwa bidii jinsi ni-na-vyo-ambia.

『義務』『学ぶ』『一生懸命』『やり方』『言う』 = 『あなたは私が言うように一生懸命学ばなければならない』

#### [名詞句]

2つ以上の異なる名詞クラスに所属する名詞が接続詞 na 『と』で結ばれ、動詞の主語の位置を占めるとき、動詞複合体内の主語接辞は、Nクラス [複数] の照応形式か、K i / V i クラス [複数] の照応形式が用いられる。例えば、下の例では、主語がNクラスに所属する名詞 nyama 『肉』、K i / V i クラス(複数)クラスに所属する名詞 vi-azi 『ジャガイモ』、vi-tunguu 『玉ねぎ』、J i / M a クラス(複数)に所属する ma-hindi 『とうもろこし』が接続詞 na 『と』によって結ばれている。動詞複合体は、Nクラス(複数)と照応する主語接辞が付加されている。

Nyama, vi-azi, ma-hindi na vi-tunguu zi-li-pikwa pamoja.

『肉』『ジャガイモ』『とうもろこし』『と』『たまねぎ』『料理する』『一緒に』 = 『肉、ジャガイモ、とうもろこしと玉ねぎは、一緒に料理された』

接続詞 na 『と』によって結ばれるものが同じ名詞クラスに所属するとき、その名詞クラスの複数に照応する主語接辞が用いられる。主語の名詞句を構成する名詞、vi-tunguu 『玉ねぎ』と vi-azi 『ジャガイモ』は、K i / V i クラス(複数)に所属する。そして、動詞複合

体は、K i / V i クラス(複数)と照応する主語接辞が付加される。

Vi-tunguu na vi-azi vi-li-pikwa.

『玉ねぎ』『と』『ジャガイモ』『料理する』 = 『玉ねぎとジャガイモは料理された』

接続詞 na 『と』によって結ばれるものが異なる名詞クラス接頭辞をもっている、「人間」を表す名詞であれば、M/W a クラス〔複数〕に照応する主語接辞が用いられる。例えば、下の文の主語を形成する名詞句は、wa-toto 『子供たち』は、M/W a クラス(複数)の名詞クラス接頭辞をもち、vi-jana 『若者たち』は、K i / V i クラス(複数)の名詞クラス接頭辞をもち、askari は、N クラスの名詞クラス接頭辞をもつ。動詞複合体は、M/W a クラス(複数)の主語接辞が付加される。

Wa-toto, vi-jana na askari wa-na-kimbia.

『子供たち』『若者たち』『と』『警官』『走る』 = 『子供たちと若者たちと警官は走る』

名詞を修飾する修飾語は、普通、名詞に後続する位置におかれる。名詞句内の修飾語の語順は、なんら強調がないときは、名詞に後続して、所有代名詞、形容詞、指示詞、数詞の順である。

ところが、名詞句内の末尾の位置が焦点の位置である。新情報は、焦点の位置におかれる。もしも、話し手が聞き手に新たに伝えたい情報があれば、新情報は、名詞句の末尾の位置におかれる。例えば、下の例において、話し手が聞き手に新情報として、-pya 『新しい』ことを聞き手に伝えたいときは、1 番目の語順が選択される。もし話し手が聞き手に、-ekundu 『赤い』ことを新情報として伝えたいなら、2 番目の語順が選択される。

nguo ny-ekundu m-pya

『服』『赤い』『新しい』 = 『新しい赤い服』

nguo m-pya ny-ekundu

『服』『新しい』『赤い』 = 『赤い新しい服』

## 付録

### 1. 名詞クラスと照応

名詞クラス	名詞クラス接頭辞	形容詞タイプ照応	代名詞タイプ照応	
			主語接辞	所有代名詞(私の)
M/Wa[単数]	m-	m-	a-/yu-	w-angu
M/Wa[複数]	wa-	wa-	wa-	w-angu
M/Mi[単数]	m-	m-	u-	w-angu
M/Mi[複数]	mi-	mi-	i-	y-angu
Ji/Ma[単数]	ji-/j-/φ	ji-/j-/φ	li-	l-angu
Ji/Ma[複数]	ma-	ma-	ya-	y-angu
Ki/Vi[単数]	ki-/ch-	ki-/ch-	ki-	ch-angu
Ki/Vi[複数]	vi-/vy-	vi-/vy-	vi-	vy-angu
N[単数]	N-	N-	i-	y-angu
N[複数]	N-	N-	zi-	z-angu
U/N[単数]	u-	m-	u-	w-angu
U/N[複数]	N-	N-	zi-	z-angu

Ku (不定詞)	ku-	ku-	ku-	kw-angu
Pa		pa-	pa-	p-angu
Ku		ku-	ku-	kw-angu
Mu		m-/m(w)-	m(w)-	mw-angu

## 2. 独立人称代名詞と人称主語接辞と所有代名詞

	独立人称代名詞	人称主語接辞 (肯定)	(否定)	所有代名詞
1 人称单数	mimi	ni-	si-	-angu
2 人称单数	wewe	u-	hu-	-ako
3 人称单数	yeye	a-/yu-	ha-/hayu-	-ake
1 人称複数	sisi	tu-	hatu-	-etu
2 人称複数	ninyi/nyinyi	m-	ham-	-enu
3 人称複数	wao	wa-	hawa-	-ao

## 3. 目的語接辞と関係節標識

	目的語接辞	関係節標識	指示関係標識	指示関係強調形式
M/Wa(单数)	m-	ye-	-ye	ndiye
M/Wa(複数)	wa-	o-	-o	ndio
M/Mi(单数)	u-	o-	-o	ndio
M/Mi(複数)	i-	yo-	-yo	ndiyo
Ji/Ma(单数)	li-	lo-	-lo	ndilo
Ji/Ma(複数)	ya-	yo-	-yo	ndiyo
Ki/Vi(单数)	ki-	cho-	-cho	ndicho
Ki/Vi(複数)	vi-	vyo-	-vyo	ndivyo
N(单数)	i-	yo-	-yo	ndiyo
N(複数)	zi-	zo-	-zo	ndizo
U/N(单数)	u-	o-	-o	ndio
U/N(複数)	zi-	zo-	-zo	ndizo
Ku(不定詞)	ku-	ko-	-ko	ndiko
Pa	pa-	po-	-po	ndipo



Ku	ku-	ko-	-ko	ndiko
Mu	m(w)-	mo-	-mo	ndimo
1 人称单数	ni-	ye-		ndimi
2 人称单数	ku-	ye-		ndiwe
3 人称单数	m-	ye-		ndiye
1 人称複数	tu-	o-		ndio
2 人称複数	wa-	o-		ndio
3 人称複数	wa-	o-		ndio

#### 4. 時制

肯定	否定
[ 1 ] 現在繼續	[ 2 ] 現在
肯定主語接辞-na-動詞-a	否定主語接辞-φ-動詞-i
[单音節] 肯定主語接辞-na-ku-動詞-a	[单音節] 否定主語接辞-φ-動詞-i
[ 3 ] 現在	[ 4 ] 現在 = [ 2 ]
肯定主語接辞-a-動詞-a	否定主語接辞-φ-動詞-i
[单音節] 肯定主語接辞-a-動詞-a	[单音節] 否定主語接辞-φ-動詞-i
[ 5 ] 現在完了	[ 6 ] 現在完了
肯定主語接辞-me-動詞-a	否定主語接辞-ja-動詞-a
[单音節] 肯定主語接辞-me-ku-動詞-a	[单音節] 否定主語接辞-ja-動詞-a
[ 7 ] 過去	[ 8 ] 過去
肯定主語接辞-li-動詞-a	否定主語接辞-ku-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-li-ku-動詞-a

[単音節] 否定主語接辞-ku-動詞-a

[ 9 ] 未来

肯定主語接辞-ta-動詞-a

[ 1 0 ] 未来

否定主語接辞-ta-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-ta-ku-動詞-a

[単音節] 否定主語接辞-ta-ku-動詞-a

[ 1 1 ] 進行アスペクト・条件節

肯定主語接辞-ki-動詞-a

[ 1 2 ] 進行アスペクト = [ 2 ]

否定主語接辞-φ-動詞-i

[単音節] 肯定主語接辞-ki-動詞-a

[単音節] 否定主語接辞-φ-動詞-i

[ 1 3 ] 条件節

肯定主語接辞-sipo-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-sipo-ku-動詞-a

[ 1 4 ] 「語り」過去

肯定主語接辞-ka-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-ka-動詞-a

[ 1 5 ] 「語り」過去

肯定主語接辞-si-動詞-e

[単音節] 否定主語接辞-φ-動詞-e

[ 1 6 ] 仮定法現在

肯定主語接辞-nge-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-nge-ku-動詞-a

[ 1 7 ] 仮定法現在

肯定主語接辞-singe-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-singe-ku-動詞-a

[ 1 8 ] 仮定法過去

肯定主語接辞-ngali-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-ngali-ku-動詞-a

[ 1 9 ] 仮定法過去

肯定主語接辞-singali-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-singali-動詞-a

[ 2 0 ] 讓歩時制

肯定主語接辞-nga-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-nga-動詞-a

[ 2 1 ] 讓歩時制の否定 = [ 2 6 ]

肯定主語接辞-nga-wa 否定主語接辞-動詞-i

[単音節] 肯定主語接辞-nga-wa 否定主語接辞-  
-動詞-i

肯定主語接辞-japo-動詞-a

肯定主語接辞-japo-kuwa 否定主語接辞-

[単音節] 肯定主語接辞 japo-ku-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-japo-kuwa 否定主語接辞-  
-動詞-i

[ 2 2 ] 完結時制

肯定主語接辞-me-kwisha ku-動詞

[ 2 3 ] 完結時制の否定 = [ 6 ]

否定主語接辞-ja-kwisha ku-動詞

肯定主語接辞-mesha ku-動詞

肯定主語接辞-mesha-動詞-a

[単音節] 肯定主語接辞-me-kwisha ku-動詞 [単音節] 否定主語接辞-ja-kwisha ku-動詞  
-mesha ku-動詞

[2 4] 習慣時制

hu-動詞-a

[2 5] 習慣時制の否定 = [2]

否定主語接辞-φ-動詞 -i

[2 6] 複合時制

表 138 と表 139 を参照。

[9. 5] 接続法

肯定主語接辞-φ-動詞-e

[単音節] 肯定主語接辞-φ 動詞-e

[9. 5] 接続法

肯定主語接辞-si-動詞-e

[単音節] 肯定主語接辞-si-動詞-e